松本市文化財調査報告No.81

松本市向畑遺跡II

— ほ場整備に伴う緊急発掘調査報告書 —

1989・3

松本市教育委員会

松本市向畑遺跡 II

— ほ場整備に伴う緊急発掘調査報告書 —

1989・3

松本市教育委員会

序

向畑遺跡は松本市の東部、中山地区にあり、この周辺の東山山麓は、古くは縄文時代から中・近世に至るまでの多くの遺跡が残され、隣接する内田地区、塩尻市片丘地区とともに、早くから識者の注目するところとなっていた場所であります。

今回の調査は、当遺跡一帯で県営ほ場整備が行われることになり、松本市教育委員会が長野県松本地方事務所の依頼を受け事業予定地内の遺跡の発掘調査を行ったものです。

発掘調査は市教育委員会を中心に地元考古学研究者の先生方等で組織した調査団により、昭和62年８月10日から12月23日にわたって実施され、多大な成果をおさめて無事終了いたしました。調査内容は本文で詳述してあるとおりですが、古墳時代の住居跡などと中世の墓址群やそれらに伴う遺物が多数発見され、この地が古くから人々の生活の根拠地となっていたことが証明されました。

今回の発掘は、記録保存と呼ばれ、開発のために遺跡を破壊するがその前に記録をとっておくという性格のもので、本書を残して遺跡は消え去る運命にあります。せめて、本書に記された調査結果が充分に活用され、郷土や先祖の歴史を探る一助となれば幸甚に存じます。

最後になりましたが、この調査にあたり多大なご理解とご協力をいただきました中山土地改良区、発掘に従事された地元の皆様に心から謝意を表して序といたします。

平成元年３月

松本市教育委員会

教育長　中島俊彦

例　　言

1．本書は昭和62年８月10日から12月23日にわたって実施された松本市中山向畑（むかいはた）に所在する中山向畑遺跡の緊急発掘調査に関する報告書である。

2．本調査は昭和62年度県営ほ場整備事業に伴う事前の発掘調査であり、長野県松本地方事務所より委託を受け、松本市教育委員会が行ったものである。

3．本書の執筆は下記の分担で行った。

第１章　事務局　第２章第１節　三村竜一　第２節―１　中村賢二・吉沢克彦・高野昌英・三村竜一　第２節―２～５　三村竜一　第２節―６　中村賢二　第３節(1)―(i)　竹原学　(1)―(ii)　臼居直之　(1)―(iii)　神沢昌二郎　(2)　関沢聰　(3)　神沢昌二郎　(4)　西沢寿晃　第４章　三村竜一　付編　竹原学

4．本書の編集は事務局が行い、滝沢智恵子の助力を得た。

5．本書の作成にあたっての作業分担は次のとおりである。

土器復元　滝沢智恵子　五十嵐周子　岩野公子

遺物実測　神沢昌二郎　直井雅尚　関沢　聰　竹原　学　臼居直之　中平智昭　望月　映　宮城孝之　岩野公子　土橋久子　赤羽包子

土器拓影　五十嵐周子　臼居直之

トレース　直井雅尚　関沢　聰　竹原　学　臼居直之　中平智昭　土橋久子　岩野公子　開嶋八重子　赤羽包子　金井ひろみ　町田庄司　宮城晴美　三村竜一

遺構写真　三村竜一

遺物写真　宮嶋洋一

一覧表作成　臼居直之　中村賢二　吉沢克彦　岩野公子　三村竜一

6．本書の作成にあたって次の方々に多大な協力を得た。

山田真一　高野昌英　高瀬典子

7．遺構図中のスクリーントーンは焼土・炭化物を表現したものである。第８・18図を参照されたい。

8．土壙の土層名は記号化した。第31図を参照されたい。

9．図面上の方位は磁北を用いた。

10．委託契約書、作業日誌等の事業経緯を示す書類は調査結果の記載を重視したために、本書から割愛したが、図類、出土遺物と共に松本市教育委員会が保管している。

目　　次

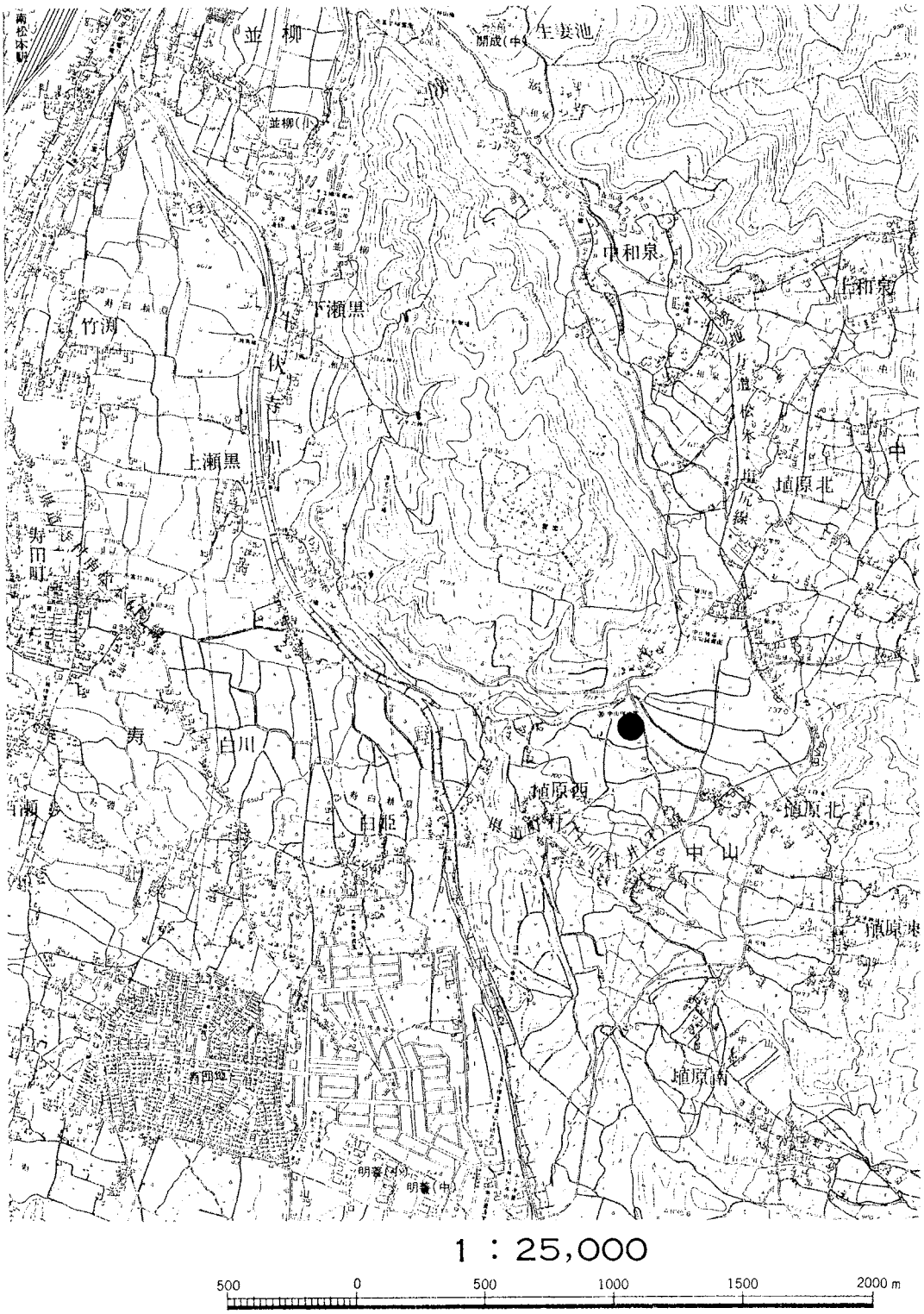
第１章　調査経過
　第１節　調査に至る経過……5
　第２節　調査体制……6
第２章　調査
　第１節　調査の概要……9
　第２節　遺構
　　1　住居址……10
　　2　古墳……41
　　3　方形周溝墓……42
　　4　土壙……43
　　5　溝……85
　　6　竪穴状遺構……86
　第３節　遺物
　　1　土器・陶磁器……88
　　(1)　縄文時代の土器……88
　　(2)　古墳時代の土器……103
　　(3)　陶磁器……137
　　2　石器・石製品……137
　　3　鉄器・銭貨……152
　　4　土壙353出土の人骨について……155
第４章　結語……157
付　編　松本平の縄文中期初頭土器……158

表　目　次

表１　住居址一覧表……37
表２　土壙一覧表……72
表３　古墳時代土器一覧表……120
表４　石器一覧表……142
表５　鉄器・銭貨一覧表……153

挿　図　目　次

第１図　遺跡の位置……4
第２図　遺跡範囲図……7
第３図　調査範囲図……8
第４図　第１号住居址……11
第５図　第２・３・５号住居址……12
第６図　第４号住居址……13
第７図　第11号住居址……14
第８図　第12号住居址……15
第９図　第13号住居址……17
第10図　第14・15号住居址……18
第11図　第16・18号住居址……20
第12図　第17・19・20・21号住居址……21
第13図　第22・23・29号住居址……23
第14図　第24号住居址……24
第15図　第25・26号住居址……26
第16図　第27・28号住居址……27
第17図　第30号住居址……28
第18図　第40号住居址……30
第19図　第40号住居址遺物出土図……31
第20図　第42号住居址……32
第21図　第44号住居址……33
第22図　第45号住居址……35
第23図　第47号住居址……36
第24図　向畑７号古墳……39
第25図　方形周溝墓……42
第26図　土壙配置図(1)……45
第27図　土壙配置図(2)……46
第28図　土壙配置図(3)……47
第29図　土壙配置図(4)……48
第30図　土壙(1)……49
〃　〃
第52図　土壙(23)……71
第53図　竪穴状遺構３……86
第54図　竪穴状遺構２・４……87
第55図　縄文時代出土土器(1)……92
〃　〃
第57図　縄文時代出土土器(3)……94
第58図　縄文時代出土土器拓影(1)……95
〃　〃
第65図　縄文時代出土土器拓影(8)……102
第66図　古墳時代出土土器(1)……106
〃　〃
第79図　古墳時代出土土器(14)……119
第80図　陶磁器……138
第81図　石器(1)……145
〃　〃
第87図　石器(7)……151
第88図　鉄器・銭貨……154
第89図　縄文時代中期初頭土器集成(1)……163
〃　〃
第92図　縄文時代中期初頭土器集成(4)……166
付図　全体図


並柳
生妻池
中和泉
上和泉
竹渕
下瀬黒
上瀬黒
寿田町
寿
白川
埴原西
埴原北
中山
埴原南
1：25,000
500
0
500
1000
1500
2000 m

第1図　遺跡の位置

第１章　調査経過

第１節　調査に至る経過

昭和61年８月29日　埋蔵文化財保護協議を市役所及び現地にて実施。出席者は長野県教育委員会、松本地方事務所、松本市教育委員会。

12月23日　昭和62年度補助事業計画書提出。

昭和62年４月27日　昭和62年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金内定。

５月16日　昭和62年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金（国庫）交付申請書提出。

６月１日　昭和62年度県営ほ場整備事業中山地区向畑遺跡埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託契約を結ぶ。

６月30日　昭和62年度文化財保護事業補助金（県費）内定。

７月11日　昭和62年度文化財保護事業補助金（県費）交付申請書提出。

７月20日　昭和62年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金（国庫）交付決定通知。

８月５日　昭和62年度文化財保護事業補助金（県費）交付決定通知。

８月６日　向畑遺跡埋蔵文化財発掘調査の通知提出。

９月７日　昭和63年度埋蔵文化財保護協議を市役所及び現地にて実施。出席者は長野県教育委員会、松本地方事務所、松本市教育委員会。

12月21日　昭和63年度補助事業計画書提出。

昭和63年１月28日　向畑遺跡埋蔵文化財取得届及び同保管証提出。

２月15日　向畑遺跡埋蔵物の文化財認定通知。

４月７日　昭和63年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金内定。

４月27日　昭和63年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金（国庫）交付申請書提出。

５月31日　昭和63年度文化財保護事業補助金（県費）内示。

６月14日　昭和63年度文化財保護事業補助金（県費）交付申請書提出。

６月21日　昭和63年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金（国庫）交付決定通知。

８月25日　昭和63年度文化財保護事業補助金（県費）交付決定通知。

９月６日　昭和63年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金（国庫）計画変更承認申請書提出。

９月19日　昭和63年度文化財保護事業補助金（県費）計画変更承認申請書提出。

11月21日　昭和63年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金（国庫）変更交付決定通知。

12月21日　昭和63年度文化財保護事業補助金（県費）変更交付決定通知。

第2節　調査体制

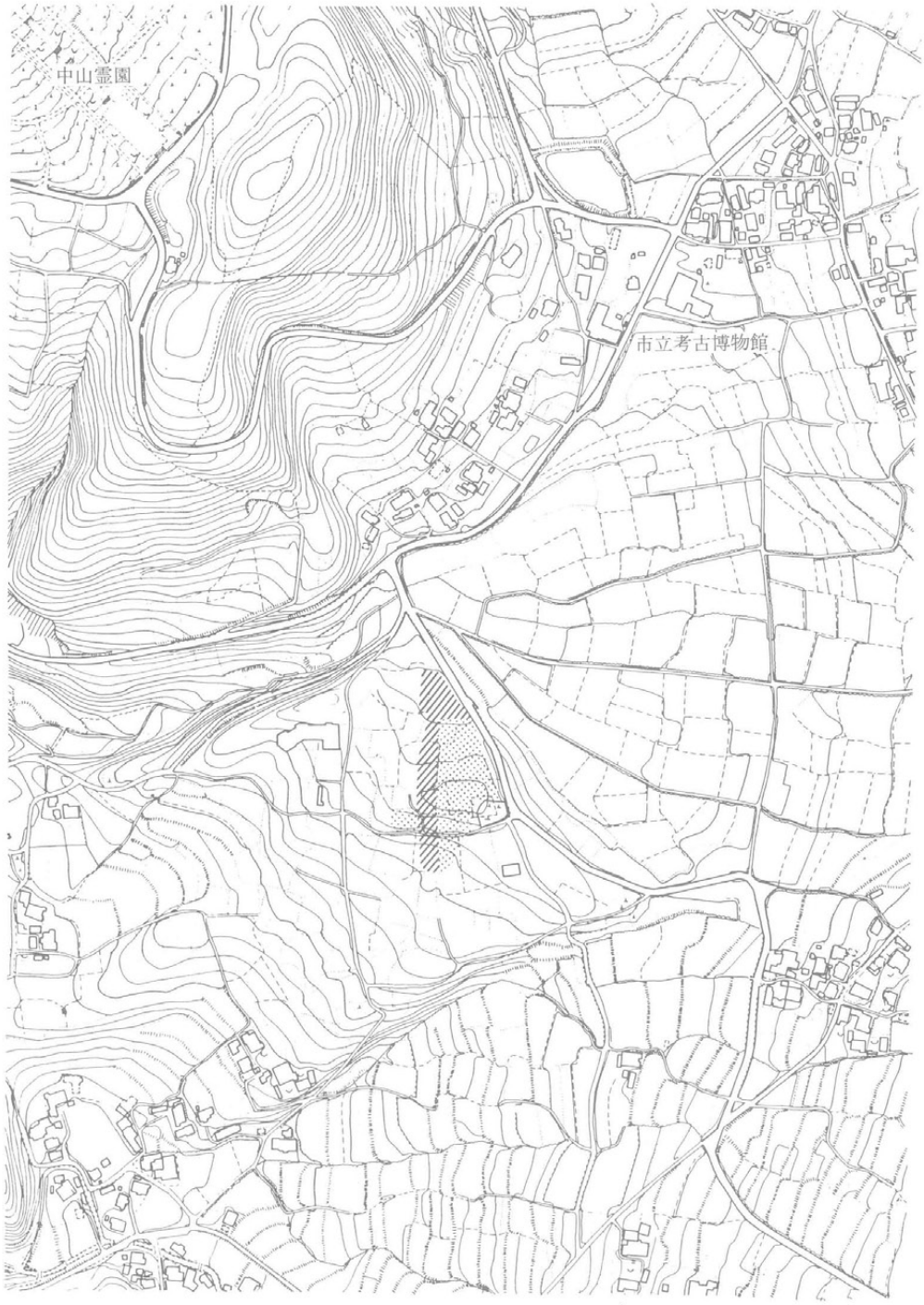
この調査に関する体制は、次のとおりである。

団長：中島俊彦（松本市教育長）　調査担当者：神沢昌二郎　現場担当者：三村竜一　調査員：太田守夫、西沢寿晃、森義直、三村肇、土橋久子、横田作重

発掘作業参加者：青柳洋子、赤羽章、赤羽包子、荒井唯邦、飯沼富夫、石井良子、五十嵐周子、伊丹早苗、岩野公子、臼井美枝子、大出六郎、太田千尋、大谷成嘉、奥原富蔵、小野光信、開嶋八重子、金井要二郎、金子富人、唐沢友子、小池直人、神戸巌、小岩井美津子、小林謙次、小林文子、小松啓吾、沢柳秀利、瀬川長広、仙石唯男、荘秀也、袖山勝美、田中泉造、田中正治郎、土橋幸子、土橋久美子、鶴川登、直井由加理、中島新嗣、中島督郎、中島直美、中島治子、中村文一、中村文子、中村恵子、中村喬頼、西原明子、西原いさ子、西原千代子、林昭雄、林伊和夫、林源吾、林佳孝、巾崎助治、藤本嘉平、丸山誠、丸山久司、丸山恵美、丸山よし子、丸山愛徳、丸山麻子、町田庄司、百瀬八江、牧田浩幸、村山正人、横山篤美、横山保子、横山倍七、若井七十郎、若井孝夫

整理作業協力者：永沢周子、吉沢克彦、海野洋子、綱島正道、石合英子、宮島俊行、開嶋八重子、赤羽包子、伊丹早苗、金井ひろみ、町田庄司、小松千寿子、横山保子、小松正子、中村恵子、五十嵐周子

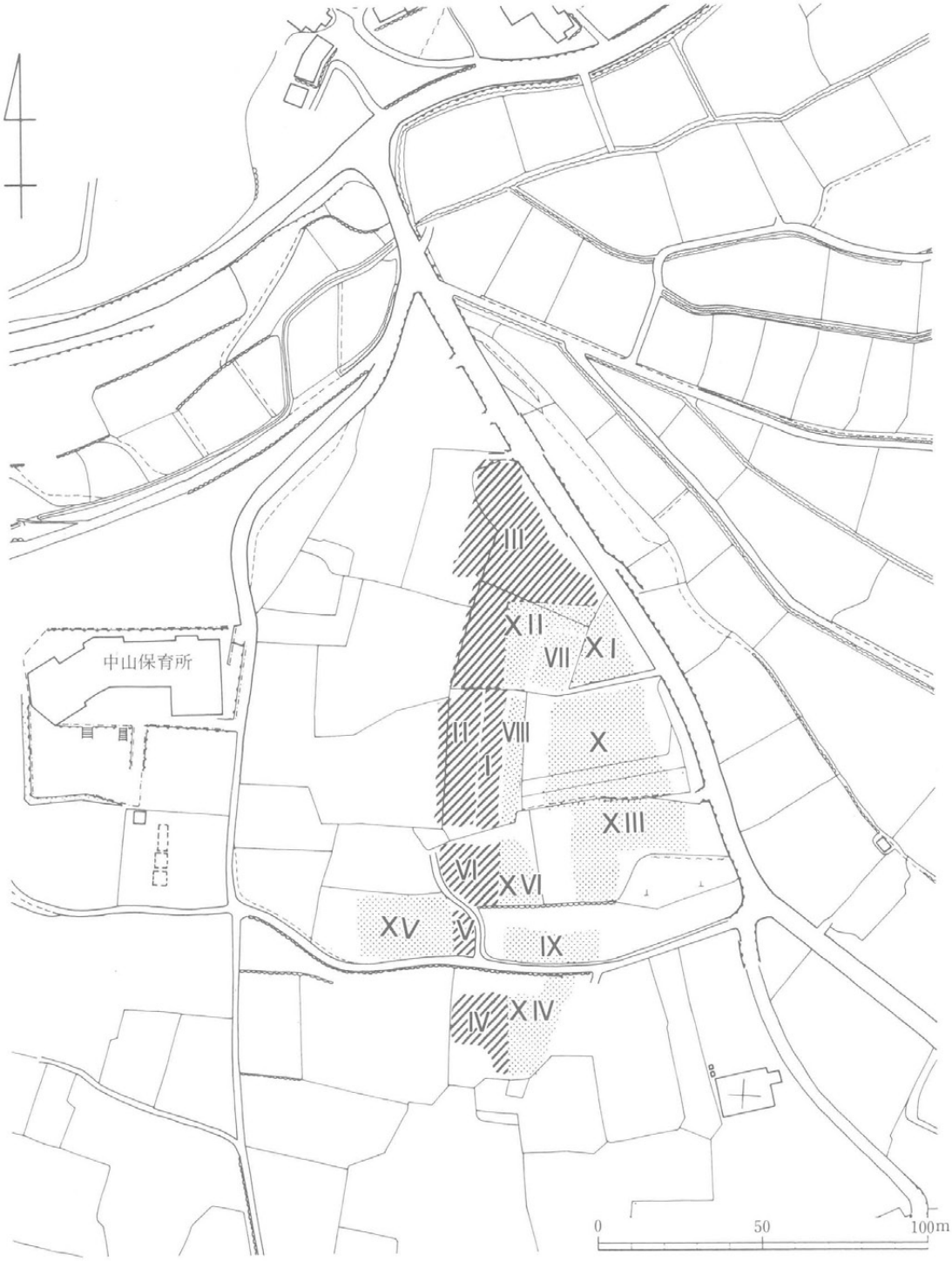
事務局：浅輪幸市（社会教育課長）　小松晃（文化係長）　柳沢忠博、大村敏博（主査）　熊谷康治、直井雅尚（主事）　洞田睦子



県道改良工事に伴う調査範囲

県営ほ場整備事業に伴う調査範囲

第 2 図　遺跡範囲図


中山保育所
III
XII
VII
XI
II
VIII
I
X
XIII
VI
XVI
XV
V
IX
IV
XIV
0
50
100m

第3図　調査範囲図

第2章　調　　査

第1節　調査の概要

発掘調査は遺跡の範囲内で県営ほ場整備事業にかかる畑地を調査地として設定し、県道建設事業による発掘調査と並行していった。このうち、ほ場整備事業に伴う調査については昭和62～63年に亘って実施された。今回の報告では62年度調査分についてのみ扱う。そのため遺跡の調査方法は全体の流れに従っているので、非能率な点もあるかも知れない。調査結果についても向畑遺跡全体の評価に基づいて行っているため、本調査範囲のみでは把握できない点についても言及することがあるかと思うが、予めご了承いただきたい。尚、県道建設事業報告書は63年度に既刊した。

a 調査の方法

・該当の畑9枚について、畑作の休耕に合わせて行った。

・畑の形状を損なわない事が前提であったので、掘り出した順に畑の区割りごとの番号7～16までをつけた。

・実質調査面積は7区235m²、8区190m²、9区310m²、10区1040m²、11区280m²、12区330m²、13区690m²、14区380m²、15区530m²、16区170m²、計4155m²である。

・発掘調査は県道の東側とし、西側は63年度に行った。

・調査は重機による表土除去後、人力により遺構の検出作業を行い、確認された遺構から掘り下げを開始した。

・測量については10、11区間に設定した基準点から南北、東西に基準点を振り出し、そこから3m間隔に直行する線を振り、調査地全体を3×3mのメッシュで覆い、調査地内の求める位置を基準点からの方向と距離との組合せ、N、S、E、Wを数字によって表現できる様にした。ただし、7．8．9区については平板測量を行い、後の遺構図整理の段階で平面上にメッシュを移し、他の調査区同様に標記出来る様にした。標高は調査区が南北に長く、高低差も大きいため5本の杭を埋設して基準とした。

・遺構の命名については各地区の検出が終了し、掘り下げが開始された時点でその性格を推定してつけた。尚、本調査と県道建設事業に伴う調査は開発起因が異なるため別々の調査報告書となるが、本来は一つの遺跡であるので遺構番号については一連のものを付した。

・竪穴住居址、竪穴状遺構は土層観察用の畔を十字に残して掘り下げた。土壙は2分割してまず半分を掘り下げ、土層観察を行ったあと全掘した。古墳については、既に墳丘部が削平されている

ため、周溝のみで主体部は検出されなかった。

b調査結果

・遺構　竪穴住居址　30軒（縄文時代中期１、古墳時代前期29軒）

古墳　　１基（７号古墳は周溝のみが残り、周溝から供献用の一括土器が出土した。直径22mの円墳である。）

方形周溝墓　１基（古墳時代前期）

土壙　　575基（縄文時代約150、古墳時代13、その他は中世～近世に属する。）

溝　　10基

竪穴状遺構　３基（平安時代３）

・遺物　竪穴住居址を中心として各種遺構から土器、石器、石製品、鉄器、銭貨などが出土した。

土器には縄文土器、土師器、陶磁器があり、石器、石製品には石鏃、石錐、石匙、スクレイパー、打製石斧、磨製石斧、凹石等がある。鉄器には、鉄鉗、釘、鏃等がある。

銭貨は、政和通宝、元祐通宝、至元通宝等がある。

c成果

・古墳時代前期の大集落の一部が検出されたこと

・古墳一基が検出されたこと

・中世の大墓址群を検出したこと

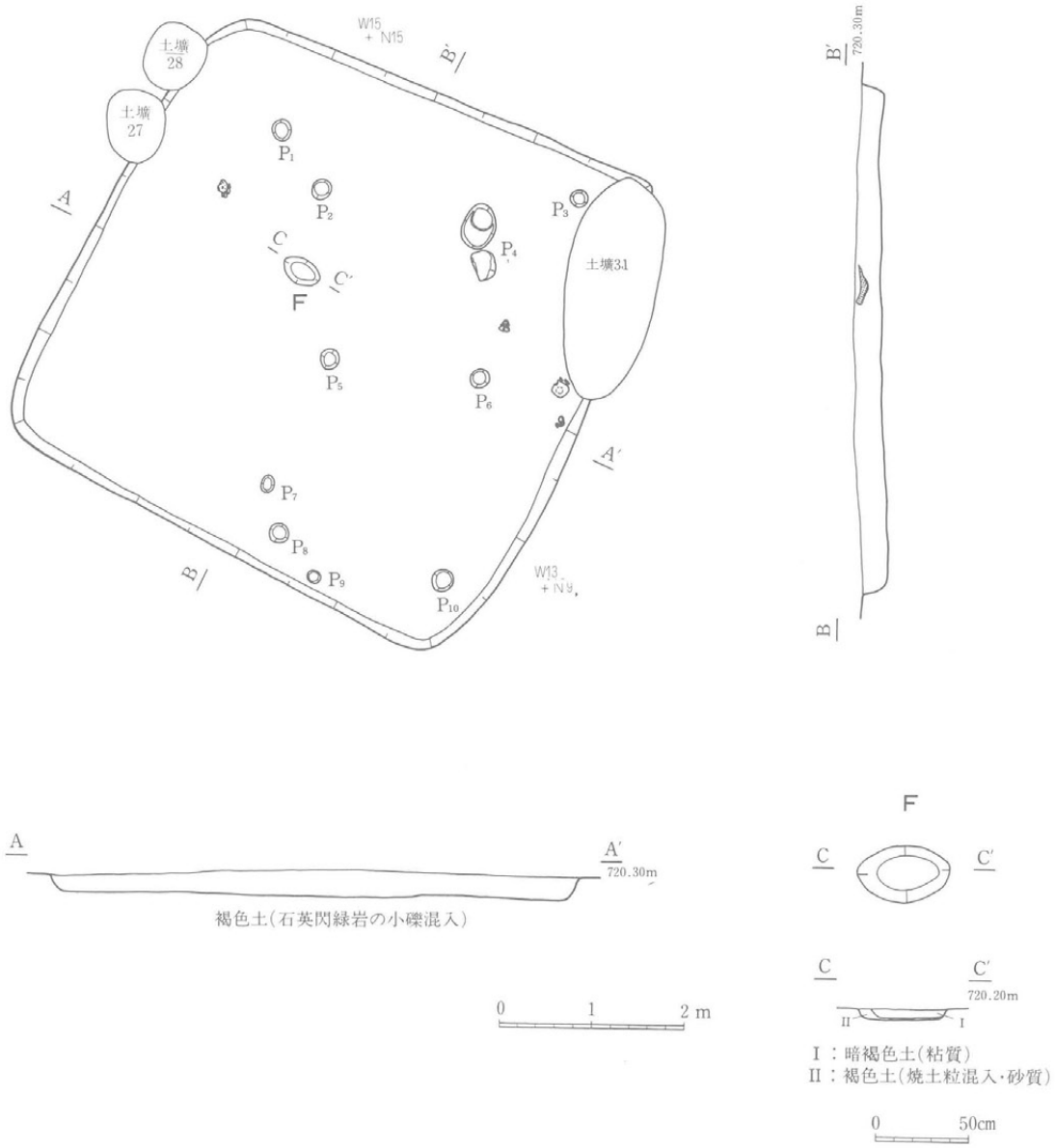
第２節　遺　構

１．住居址

第１号住居址（第４図）

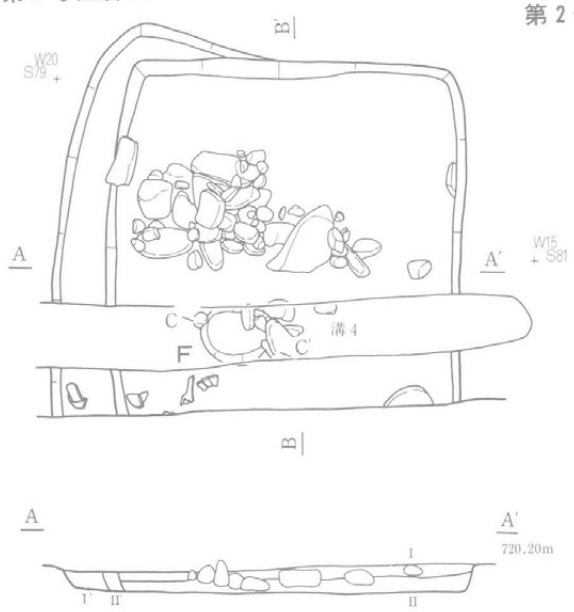
遺構　１区中央Ｎ８～Ｎ15、W12～W19に位置する。周囲の一部を土壙27、28、31に切られる。主軸方向はＮ―65°―W、5.76×5.66mと比較的規模の大きな住居址であるが、他の住居との切りあいもなく、隅丸方形の輪郭が明瞭である。二次堆積ロームの黄色土中に25cmの深さで掘り込まれていて石英閃緑岩を含むきわめて固い覆土をはげば、ゆるやかに外傾する壁面、平坦な床面とともに非常に堅固なものであった。中央西寄りには地床炉があり、100×60cmの範囲に10cm近い厚さの焼土が観察された。床面のピットのうちP_1は深さ30cm、はっきりした柱痕が認められ、位置からみても主柱穴の一つと考えられる。

遺物　土師器が多量に出土した（第66図）。器種は高坏、有段口縁壺、甕、台付甕があり、いずれも小片で器形の復元はできなかった。本址の時期は遺物より古墳時代前期と考えられる。

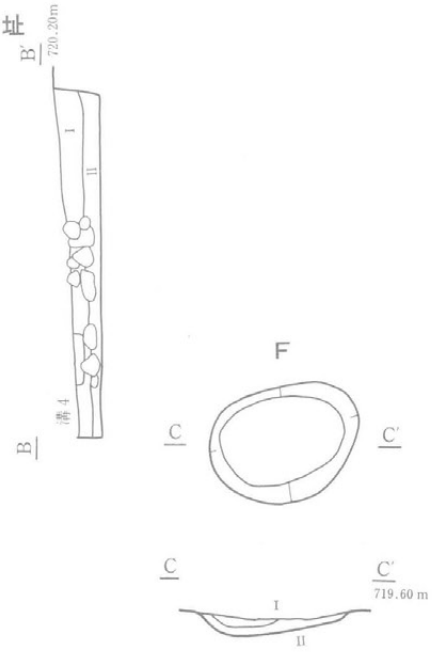

土壙28
土壙27
W15 + N15
B′
B
A
A′
C
C′
F
P1
P2
P3
P4
P5
P6
P7
P8
P9
P10
土壙31
W13 + N9
B′
720.30m
B
A
A′
720.30m
褐色土(石英閃緑岩の小礫混入)
0
1
2 m
F
C
C′
C
C′
720.20m
II
I
I：暗褐色土(粘質)
II：褐色土(焼土粒混入・砂質)
0
50cm

第4図　第1号住居址

第 5 号住居址



第 2 号住居址

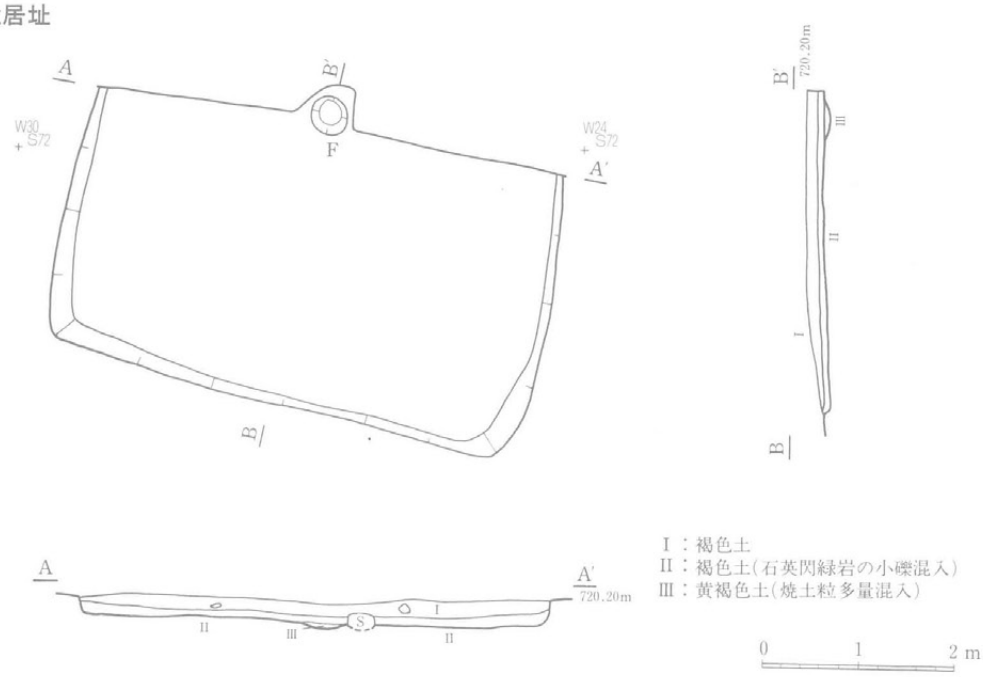


I′：黒褐色土(ローム粒微量・砂粒混入)
II′：暗褐色土(砂質)

I：暗褐色土(砂質)
II：暗褐色土(ローム粒微量，砂粒混入)

0 50cm

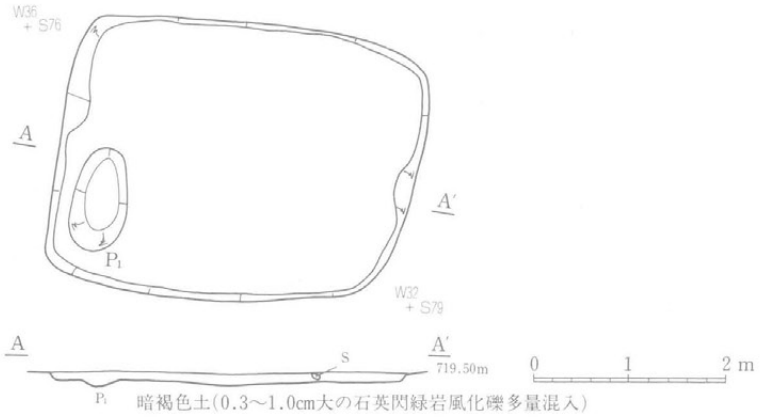
第 3 号住居址



I：褐色土
II：褐色土(石英閃緑岩の小礫混入)
III：黄褐色土(焼土粒多量混入)

0 1 2 m

第 5 図　第 2・3・5 号住居址



第6図　第4号住居址

第2号住居址（第5図）

遺構　9区南側S78～S83、W15～W20に位置する。溝4にきられ、5号住居址を切っている。主軸をN－O°にとり、南北3.8m、東西3.6mの隅丸方形のプランを呈する。壁はほぼ垂直に立ち上がり壁高25～50cmを測る。覆土中に80cm大の石が多量に投げ込まれていた。二次堆積ローム層に掘り込まれた床面は堅くたたきしめられ、少々起伏をもつものであった。中央部に炉(100×60×20cm)が検出された。

遺物　少量の土師器のみで図示できなかった。本址は遺物より古墳時代前期と考えられる。

第3号住居址（第5図）

遺構　9区北側S71～S76、W24～W30に位置し、主軸をN－11°－Eにとる（南北5m）東西3.8mの隅丸方形プランを呈する。北側を調査区域外に残す。壁はやや垂直に立ち上がり、高さ10～25cmを測る。床面は堅固で少々起伏をもち、ゆるやかに傾斜している。中央部に炉（40×40×16cm）が検出された。

遺物　少量で図示できたものはない。本址の時期は遺物より古墳時代前期と考えられる。

第4号住居址（第6図）

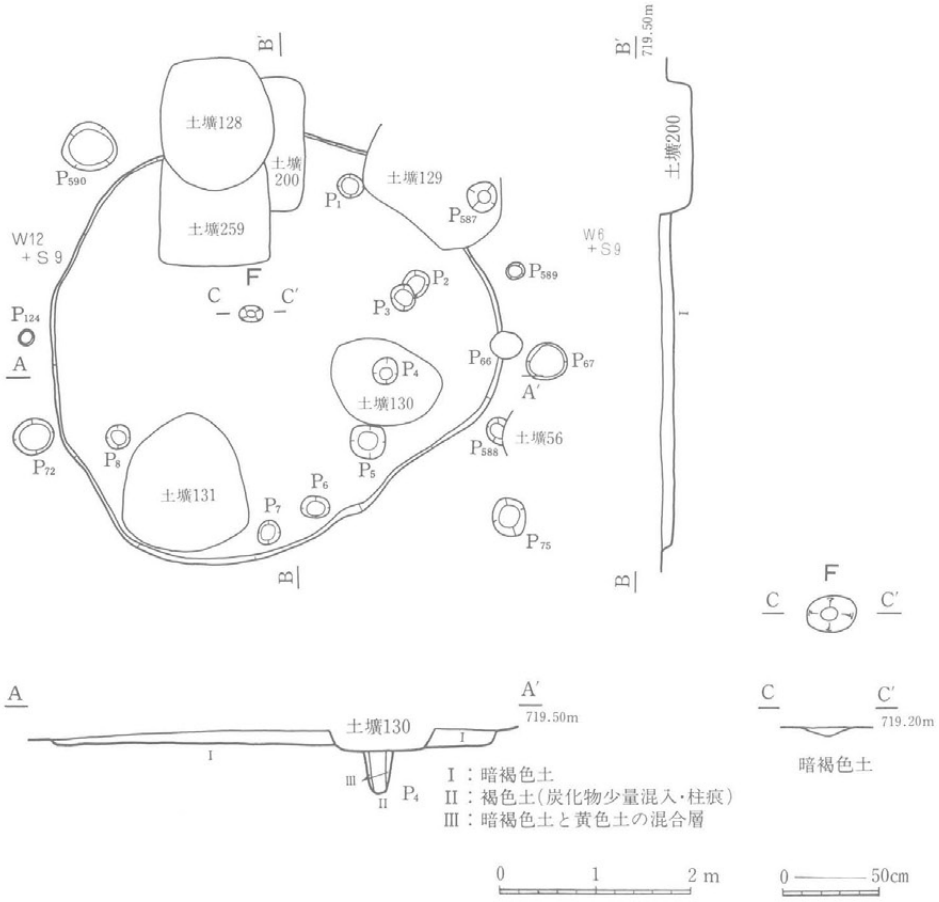
遺構　9区南側S75～S79、W32～W36に位置し、主軸をN－9°－Eにとり、南北3.8m、東西2.9mの隅丸方形のプランを呈する。壁はゆるやかに立ち上がり高さは8～12cmを測り、床は堅固で起伏をもつ。P(220×60×16cm）が検出されたが、その性格は不明である。

遺物　少量で図示できたものはない。本址の時期は遺物より古墳時代前期と考えられる。

第5号住居址（第5図）

遺構　本址は、大半を2号住居址、溝21にきられ、南端を調査区域外に残す。西側に帯状に検出された部分から、壁の状態は、壁高16cm程でほぼ垂直に立ち上がっている事がわかった。尚、ピット、周溝などの施設は発見されず、床面の状態も不明であった。

遺物　多量に出土したが図示できたものはない。本址は遺物より古墳時代前期と考えられる。



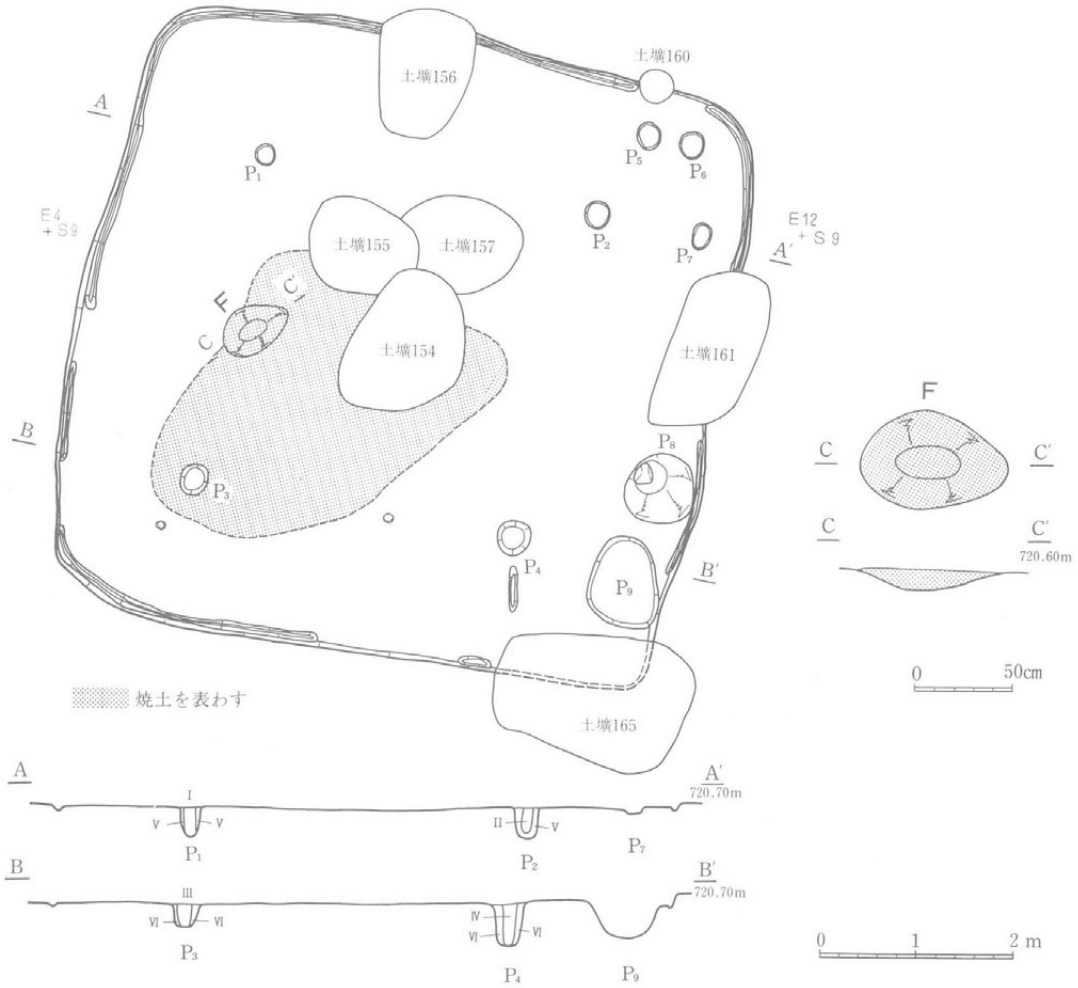
第７図　第11号住居址

第11号住居址（第７図）

遺構　６区北西Ｓ７～13、Ｗ７～12に位置し、周囲や床面を土壙124、259、128、129、130、131に切られる。東西4.9m、南北4.76mの不整円形の住居で、今回の調査では唯一の縄文時代の住居址であった。壁高は12mで壁はなだらかな立ち上がりをみせ、黄色土中に暗褐色土の落ち込みがあり、自然堆積の様相を呈していた。黄色の二次堆積ロームの床面は、やや起伏があるものの堅固で、地床炉がほぼ中央にあり、その下部の土は30×20cmの範囲にわたって約５cmの深さまで焼土の混入が認められた。P_1～P_8はそれぞれ柱痕を有し、位置、深さからしても主柱痕とみてほぼ間違いなく、また、本址の周囲を衛星状に取り巻くP_{67}、P_{72}、P_{75}、P_{124}、P_{587}、P_{588}、P_{589}、P_{590}は本址に伴わないピットとして扱ったが柱痕が明瞭に観察されることから、本址に関係する柱穴、恐らくは支柱痕と考えられる。

遺物　土器と石器が合わせて数十点出土している(第55、81～84図)。土器は小片が多く、器形を復元できたのは第55図３の１点のみである。

本址の時期は、出土遺物より、縄文時代中期初頭と考えられる。



Ⅰ：黒褐色土
Ⅱ：褐色土(暗褐色土粒混入)
Ⅲ：黄褐色土(0.5～1.0cm大のローム塊，0.5～0.6cm大の暗褐色土塊、焼土混入)
Ⅳ：暗褐色土(ローム粒，1～4.0cm大のローム塊，炭化物混入)
Ⅴ：暗褐色土
Ⅵ：黄色土(0.5～2.0cm大の暗褐色土塊焼土粒混入)

第8図　第12号住居址

第12号住居址（第８図）

遺構　５区北西Ｓ６～Ｓ14、Ｅ４～Ｅ12に位置する。本址は土壙157→155→154の順に切られ、また土壙161、156、165にも切られる。主軸方向はＮ―165°―Ｗ、隅丸方形をなすプランは明瞭で、6.8×6.7mの規模を有する。黄色土の地山にほぼ直の壁を以って掘り込まれており、壁の直下にほぼ全周にわたって周溝が巡らされている。南西の主柱穴の南にも溝があるが、間仕切りのものであろうと推測される。覆土は明褐色土で重機により削平され、非常に薄い。床面のピットのうちP_1～P_4はいずれも深さが25～40cmあり、明瞭な柱痕を有しており主柱穴と思料され、P_8（深さ30cm）P_9（深さ40cm）は、位置、規模から考え貯蔵穴とみて間違いないだろう。炉は東側の主柱穴間に地床炉が楕円形に存在し、その下部に約10cmの厚さの焼土が観察された。更に炉の東側に広範囲に10cmの厚さで焼土が堆積していることは、この住居が火災に遭ったことを物語る。

遺物　土師器の破片数点と土製勾玉１点が出土している（第68図）。土師器はいずれも小片で、器形を復元できるのは器台（第68図25）のみである。土製勾玉（第68図30）は東側の床面直上から出土した。大形で遺存状態は良好である。

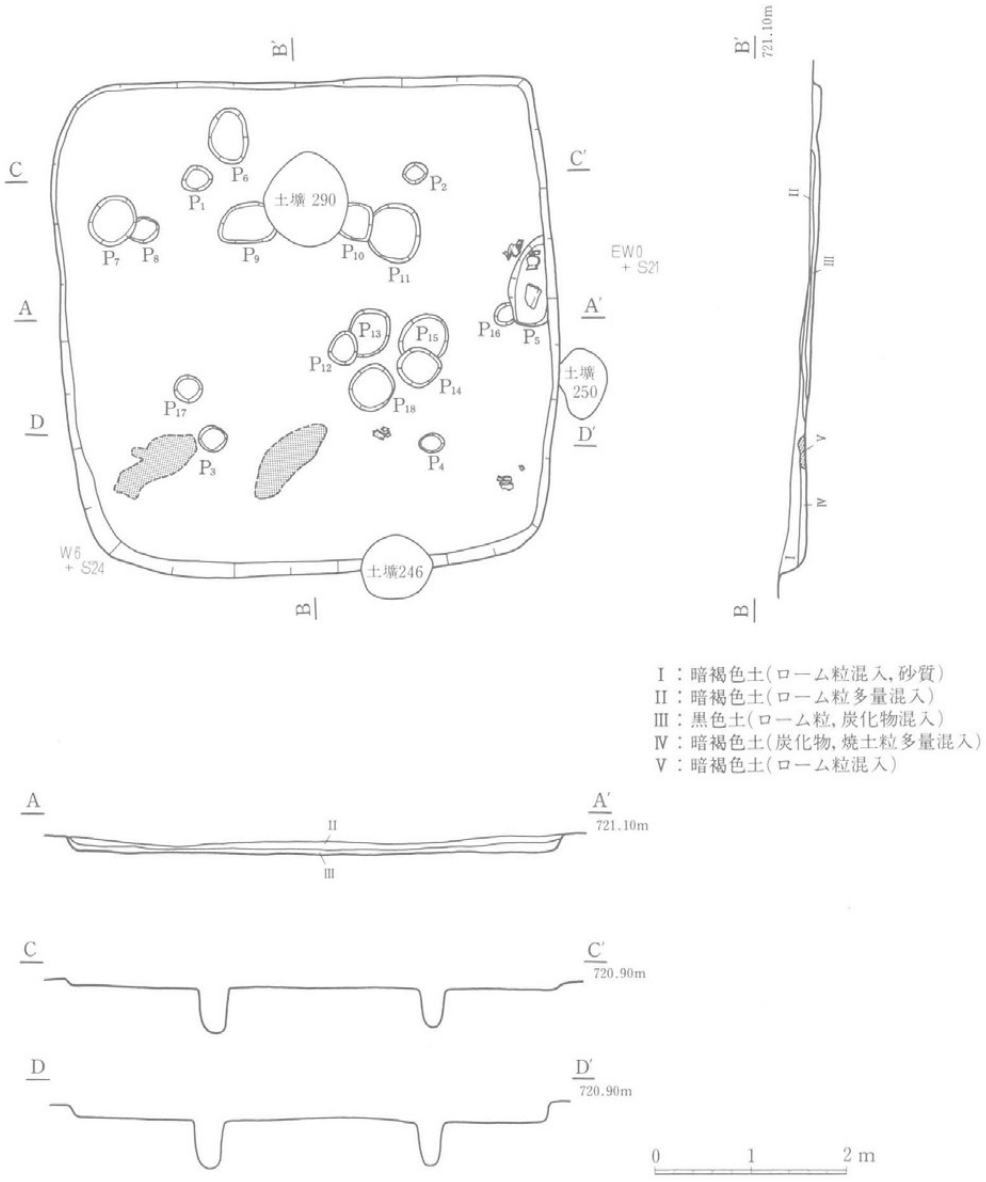
本址の時期は遺物より古墳時代前期と考えられる。

第13号住居址（第９図）

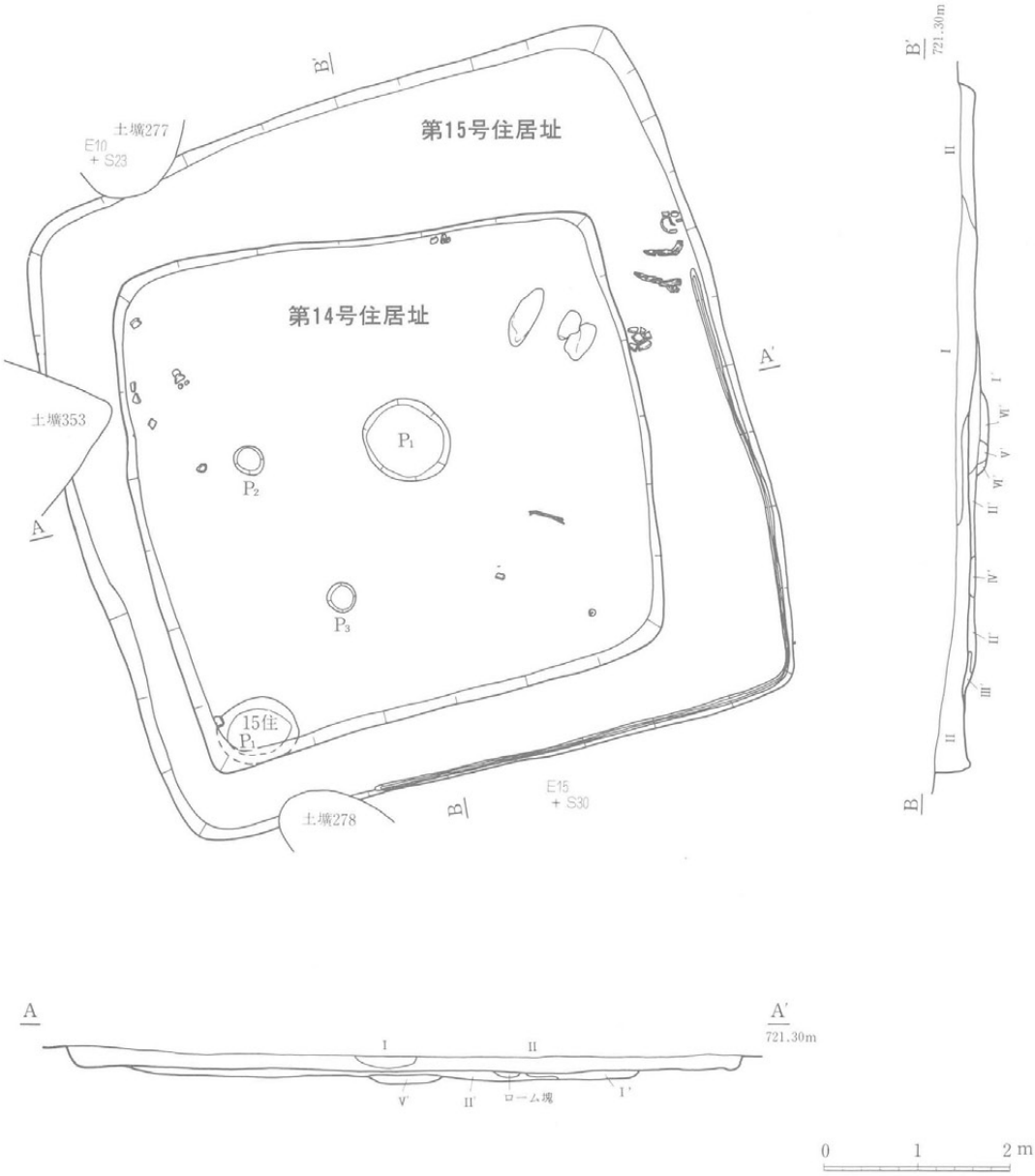
遺構　５区中央Ｓ19～Ｓ25、Ｗ６～０に位置する。土壙246、290に切られ、土壙250を切る。主軸をＮ－０°にとり、南北5.2m、東西5.7mの隅丸方形を呈する。壁はゆるやかに立ち上がり、壁高15～25cmを測る。床面は、南から北へ向かってなだらかな傾斜をもつ。全体的に多量のピットが検出されP_1（20×30×50cm）、P_2（24×24×40cm）、P_3（30×28×50cm）、P_4（28×22×50cm）は、位置、規模から主柱穴と思われる。また東壁面に沿って位置するP_5（90×30×34cm）は土器が出土しており、貯蔵穴の可能性がある。北側半分には粘質で黄色土の平坦な貼り床が確認された。この貼り床を取り除いてみたところ、同じ範囲で窪みがみられ、さらに北壁直下に壁面に沿って細長い落ち込みがみられた。この落ち込みの覆土によって、貼り床の設置過程がわかる。２通りの可能性が考えられ、１つは構築時に掘りすぎた窪みを埋めるための貼り床である。この場合、落ち込みの覆土は人為堆積となる。もう一方は、この落ち込みを周溝ととらえ住居址を改築したときにつくられた貼り床であるという考えである。この場合覆土は自然堆積を示す。このように２つの可能性を解明する糸口である落ち込みの覆土を確認できなかった事は残念である。炉の位置は特定できないが、南西部に焼土の広がりが確認された。

遺物　土師器の破片数点とミニチュアの高坏１点が出土している（第68図）。遺物のほとんどがP_5より出土した。土師器は壺、鉢、甕、高坏があるが器形を復元できるものは少い。ミニチュアの高坏（第68図37）の破片がある。

本址の時期は遺物より古墳時代前期に比定できる。


B'
C
C'
A
A'
D
D'
B
土壙 290
土壙 250
土壙246
EW0
+ S21
W6
+ S24
P1
P2
P3
P4
P5
P6
P7
P8
P9
P10
P11
P12
P13
P14
P15
P16
P17
P18
B'
721.10m
II
III
IV
V
I
B
I：暗褐色土(ローム粒混入,砂質)
II：暗褐色土(ローム粒多量混入)
III：黒色土(ローム粒,炭化物混入)
IV：暗褐色土(炭化物,焼土粒多量混入)
V：暗褐色土(ローム粒混入)
A
A'
721.10m
II
III
C
C'
720.90m
D
D'
720.90m
0
1
2 m

第 9 図　第13号住居址



Ⅰ：黒褐色土
Ⅱ：黒色土

Ⅰ′：暗褐色土(ローム粒混入)
Ⅱ′：黄褐色土(暗褐色土塊混入)
Ⅲ′：黄褐色土
Ⅳ′：黄褐色土(暗褐色土粒混入)
Ⅴ′：暗褐色土
Ⅵ′：茶褐色土

第10図　第14・15号住居址

第14号住居址（第10図）

遺構　10区南東S23～S30、E10～E17に位置する。本址は15号住居址に全体を貼られている。主軸方向は、N－169°－Eを示し、東西5.2m南北5.7mを測る隅丸方形プランを呈する。壁はほぼ垂直に立ち上がる。床面は二次堆積ロームまで掘り込まれ、堅固、平坦で15住の床面より4cm程深い。ピットは確認されたが、いずれも性格不明である。

遺物　多量の土師器及び、紡錘車と鉄鉗各1点が出土した。土師器（第69図）は坩、甕、台付甕、器台があるが、器形を復元できたものは少ない。紡錘車は北東隅の床上より鉄鉗（第88図）は南東部の覆土中より出土した。本址の時期は出土遺物より古墳時代前期と考えられる。

第15号住居址（第10図）

遺構　本址は、14号住居址をまるごと貼る位置にあり、土壙279、353、277にも切られる。南北7.54m、東西6.80mを測る大型の隅丸方形を呈する。壁はほとんど垂直に立ち上がり、壁高は15～25cmを測る。床面は二次堆積ロームで堅固、平坦である。南北壁直下に周溝が見られる。

遺物　土師器が多量に出土した（第70図）。器種は坩、甕、坏、高坏、壺があり、高坏の数が多い。いずれも小片で器形を復元できるものではない。本址の時期は古墳時代中期と考えられる。

第16号住居址（第11図）

遺構　10区南西部S26～S32、W14～W19に位置する。西側はわずかに調査区域外にかかっており土壙281に切られるが、全体として南北4.36m、東西4.50mの隅丸方形のプランは確認できる。壁は浅いため定かでないが、ゆるやかに落ち込む様相を呈する。床面は西側から東側へなだらかな傾斜をもつ。ピットは、11ケ確認され、P_1、P_3、P_6については位置と規模からして主柱穴と見られる。

遺物　土師器とミニチュアがある（第71図）。遺物より本址は古墳時代前期と考えられる。

第17号住居址（第12図）

遺構　10区南西部S30～S33、W18～W19に位置する本址は大半が区域外にかかり、平面形、規模など不明な点が多い。壁の立ち上がりは急で、壁高13cmを測る。床面は二次堆積ロームで平坦でありやや軟質であった。床面精査を行ったがピット等の施設は検出されなかった。

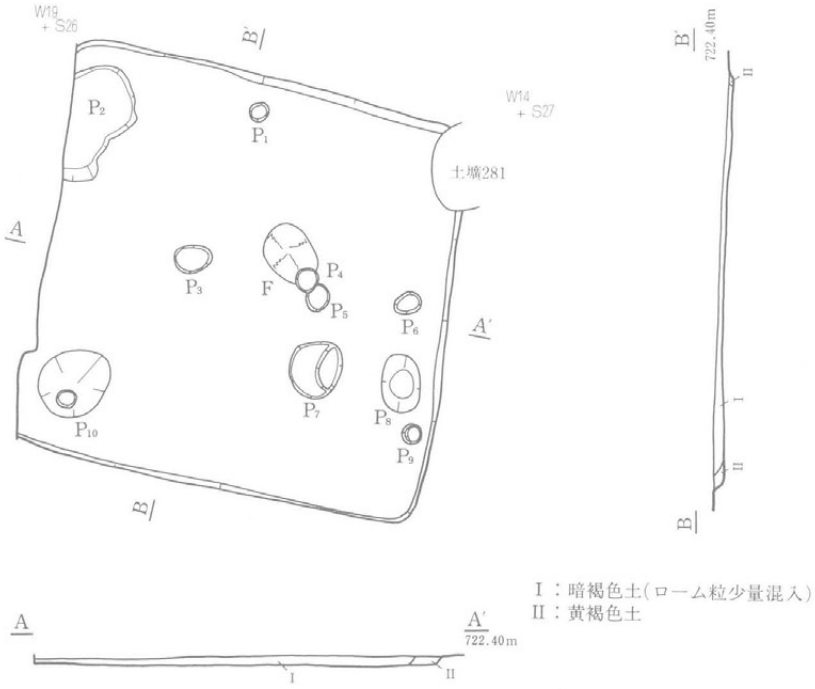
遺物　非常に少なく図示できたものはない。遺物より本址は古墳時代前期と考えられる。

第18号住居址（第11図）

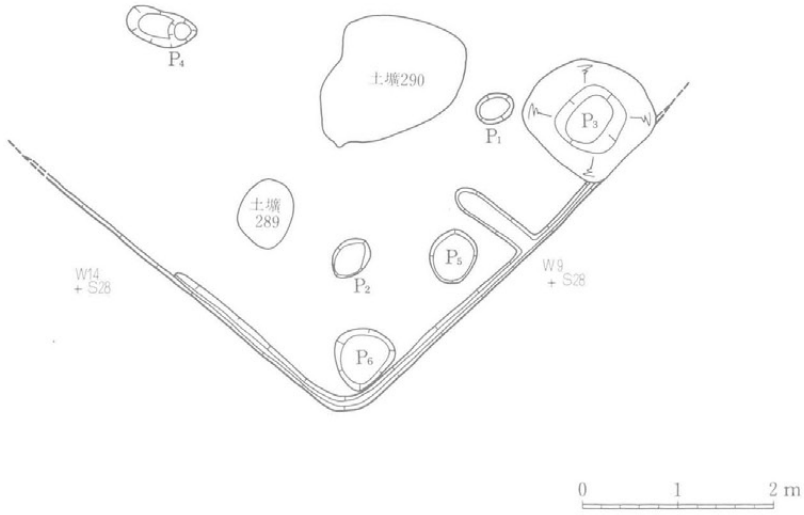
遺構　10区中央S26～S31、W7～W15に位置する。土壙213、214が、本址覆土中央部に掘り込まれている。主軸はN－49°－Eで、10区のほかの住居址とは異なった方向をもつ。重機の削平によって北側は床面下まで掘られているが、残存部ではやや起伏をもつ堅固な二次堆積ロームである。南西壁下に周溝がみられ、西側には間仕切りがある。P_1、P_2は位置と規模より主柱穴と断定する。

遺物　土師器とミニチュアがある（第71図）。遺物より本址の時期は古墳時代前期と考えられる。

第16号住居址

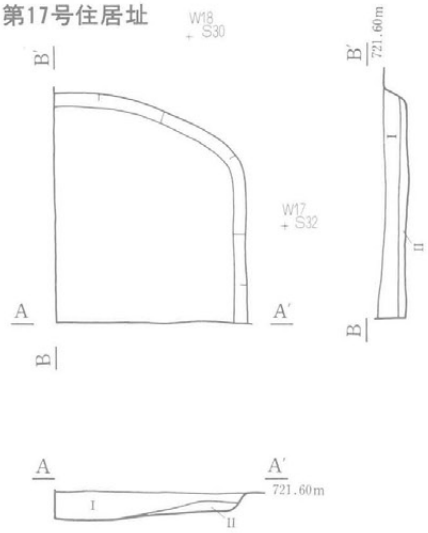


第18号住居址



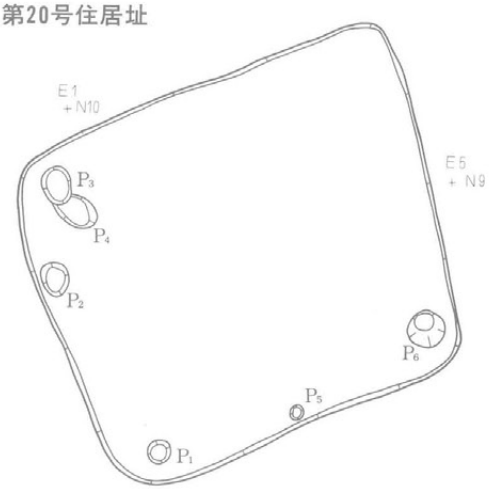
第11図　第16・18号住居址

第17号住居址

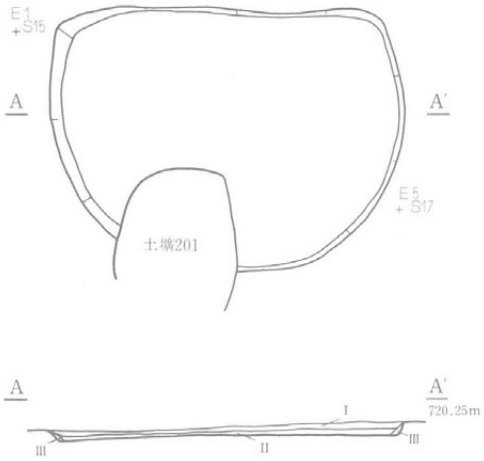


Ⅰ：暗褐色土（１～10cm大のローム塊多量混入）
Ⅱ：黄色土（１～２cm大の暗褐色土塊微量混入）

第20号住居址

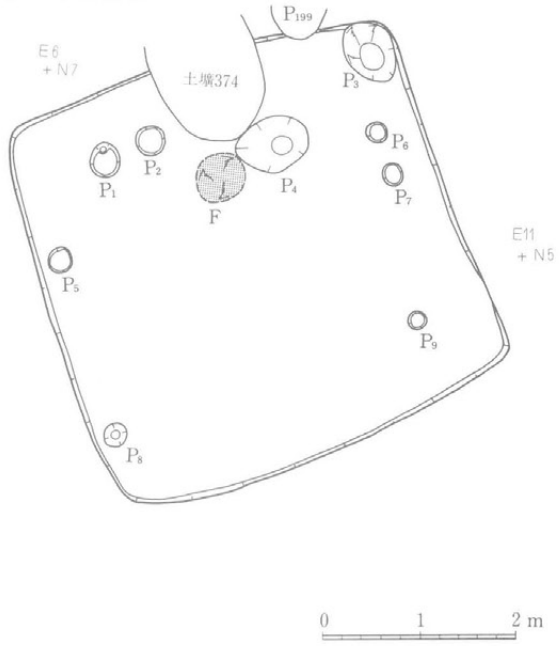


第19号住居址



Ⅰ：暗褐色土
Ⅱ：暗褐色土（ローム粒，0.3～0.5cm大の白色礫混入）
Ⅲ：黒褐色土

第21号住居址



第12図　第17・19・20・21号住居址

第19号住居址（第12図）

遺構　10区中央S14～S18、E1～E6に位置し、土壙20に切られる。主軸方向N－0°で、不整円形を呈し、南北3.54m、東西2.76mの規模をもつ。壁面の傾斜は、西がゆるやかで、東はほぼ垂直と対照的である。床面は、非常に堅固で、西壁を除き周溝が検出された。

遺物　わずかのみで図示できなかった。本址は遺物より古墳時代前期と考えられる。

第20号住居址（第12図）

遺構　11区中央部N6～N11、EW0～E11に位置し、主軸方向N－158°－Eをとり、南北4.3m、東西3.8mの隅丸方形を呈す。床面は、平坦で非常に堅固な二次堆積ロームであり、覆土は検出面より0～3cmと非常に浅いため詳細は不明であったが、わずかに暗褐色土が認められた。

遺物　少量の土器片のみで図示できない。本址は遺物より古墳時代前期と考えられる。

第21号住居址（第12図）

遺構　11区南東部N2～N7、S5～S11に位置し、土壙374に切られる。南北4.42m、東西4.40mの隅丸方形プランを呈する。検出面からの壁高は0～3cmと非常に浅いが、壁はほぼ垂直に立ち上がるようである。床面は、二次堆積ローム層に掘り込まれ、非常に堅固でやや起伏をもつ。また地山の傾斜に沿って北東から南東はゆるやかな傾斜を示す。

遺物　土師器が少量出土した(第71図)。器種は、壺、甕、S字甕がある。本址の時期は出土遺物より、古墳時代前期と考えられる。

第22号住居址（第13図）

遺構　13区北東隅にS37～S45、E20～E23と座標をとる。大半を調査区域外に残す住居址である。主軸はN－0°をとり、29住を切って立地している。規模、プランは定かではない。壁高40cm程度を測り、ほぼ直に立ち上がる。床面は二次堆積ローム中に掘り込まれ、平坦で堅緻なものになっている。2段に掘り込まれたP_2は2個体のつぼが出土した事から、貯蔵穴と推定できる。

遺物　土師器が多量に出土した(第72図)。器種には、高坏、甕、壺がある。本址の時期は出土遺物より古墳時代前期と考えられる。

第23号住居址（第13図）

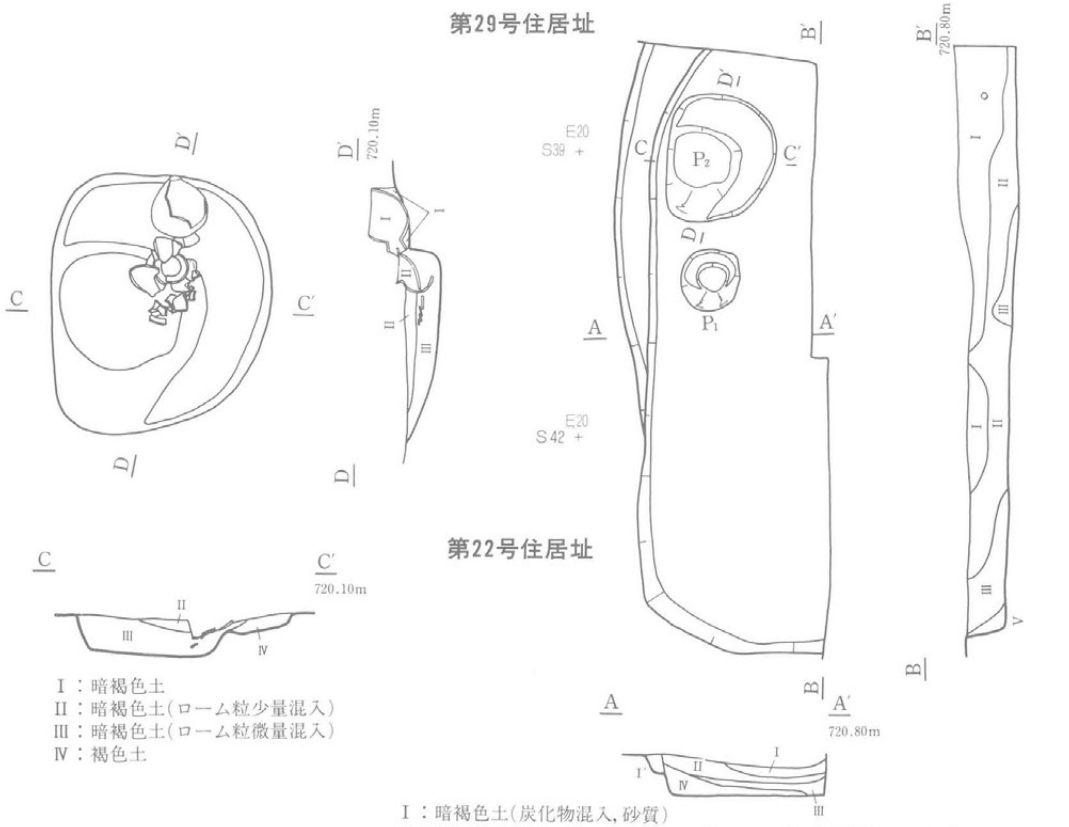
遺構　11区北側S37～S41、E10～E17に位置する。主軸はN－2°－Eを示す。南北5.56m、東北3.64mの隅丸方形を示す。検出面からの壁高が浅いため詳細は不明だが、壁は比較的ゆるやかに落ちる。床面は、軟質で起伏はないが東から西へ向い、地山に沿ってなだらかに傾斜する。西壁面直下に周溝が見られた。

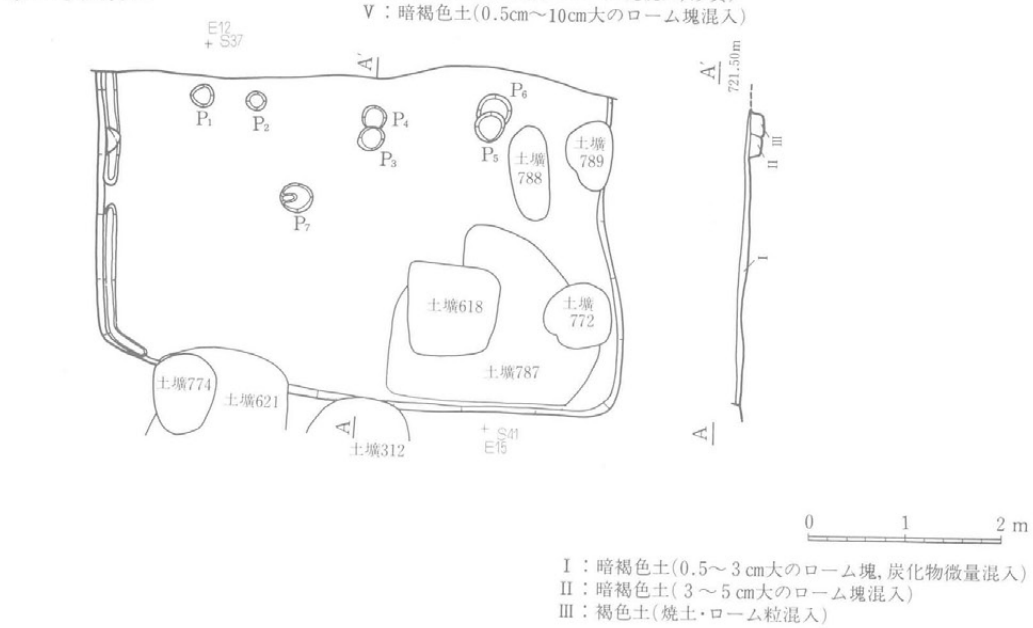
遺物　土師器の小片のみで図示できたものはない。本址は遺物より古墳時代前期と考えられる。

第29号住居址（第13図）

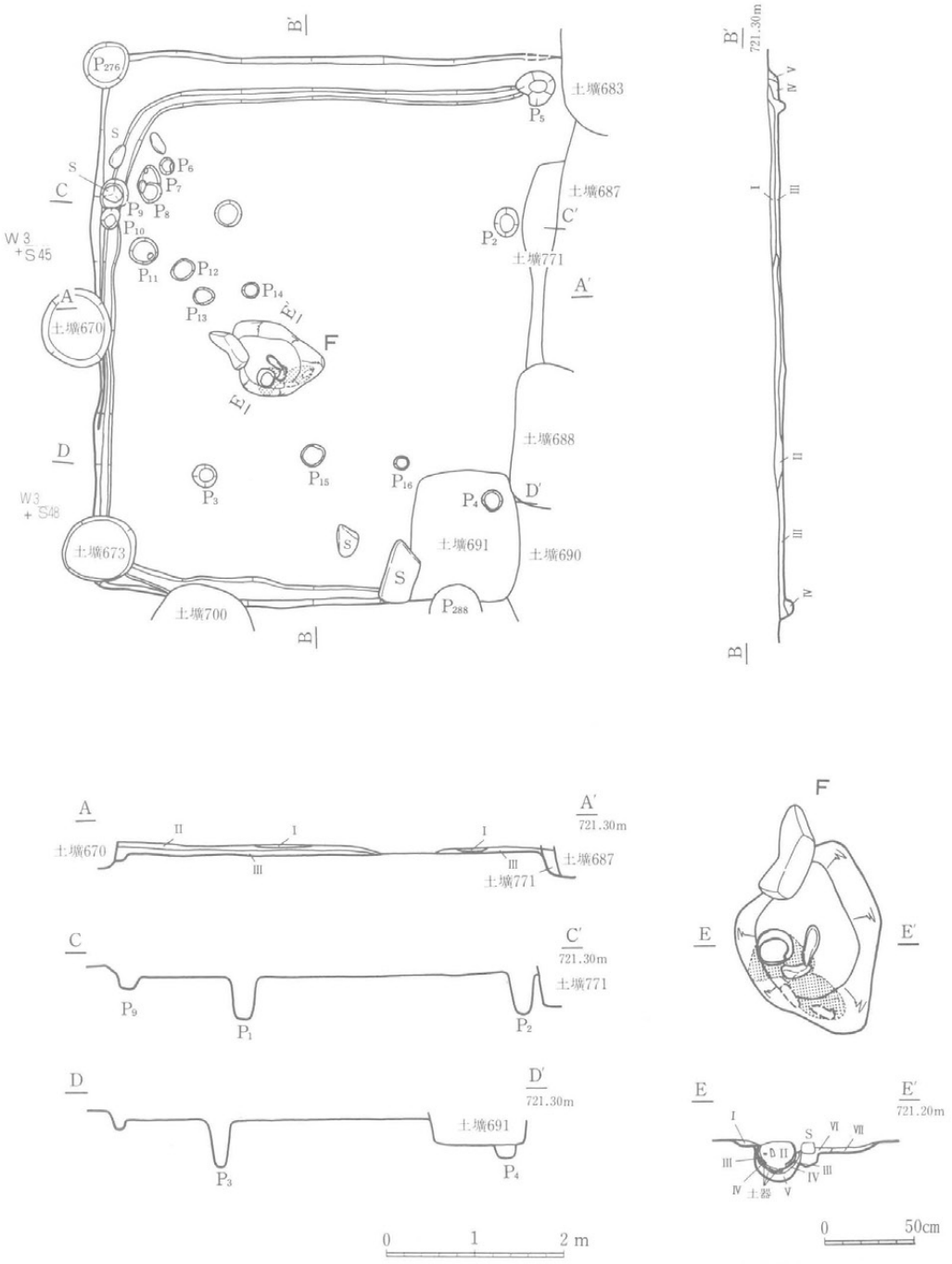
遺構　本址は、大半の部分を22号住居址に掘り込まれ、プラン、規模とも不明である。残された西側壁と床面より、壁高は20cm、二次堆積ロームの平坦でやや軟質な床であることがわかった。

遺物　多量の土師器片のみで図示できなかった。本址は遺物より古墳時代前期と考えられる。





第13図　第22・23・29号住居址



Ⅰ：黄褐色土(焼土粒,0.5cm大の暗褐色土塊微量混入)
Ⅱ：暗褐色土(焼土粒,炭化物微量混入)
Ⅲ：黒褐色土(焼土微量,炭化物多量混入)
Ⅳ：暗褐色土(炭化物,0.5～1.5cm大のローム塊微量混入)
Ⅴ：褐色土(暗褐色土粒混入)

Ⅰ：暗褐色土
Ⅱ：暗褐色土(焼土粒微量混入)
Ⅲ：褐色土(焼土粒微量混入)
Ⅳ：焼土
Ⅴ：暗褐色土(ローム粒混入)
Ⅵ：暗褐色土(焼土粒混入)
Ⅶ：暗褐色土(0.5～0.7cm大のローム塊混入)

第14図　第24号住居址

第24号住居址（第14図）

遺構　13区中央N43～N50、E６～W３に位置する。主軸をN－87°－Eにとり、南北6.20m、東西6.80mの方形プランを呈する。東側壁面は中世土壙によって切られており、全体の把握は難しかった。壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高は10cm～20cmと浅い。二次堆積ロームを掘り込んだ床面は平坦で堅緻であった。床面精査の結果、深さ10～20cm、幅15cm程度で壁面から60cm程内側をめぐる周溝、４本の主柱穴などが検出された。炉址は、炉$_1$、炉$_2$が検出された。南北100cm、東西90cmの窪みの中央部に位置する炉$_1$は、縁石をともなった埋甕炉であり、埋設された壺は胴部のみで、その下を高杯の杯部が受けており、杯部接合部の穴をさらにおおうように土器小片２枚が出土した。壺を中心として、周囲に不整円形を呈する焼土の広がりを示している。この焼土の広がりに切りとられるようにして、炉$_2$の焼土が、楕円形を呈して広がりを見せている。この中には抜き取られた縁石の痕だろうと思われる暗褐色土の落ち込みが確認され、この位置に炉$_2$が存在したことが推定される。

遺物　土師器の破片が少量出土したのみである（第73図）。器種は高坏と甕があるがいずれも小片で器形を復元できたものはない。遺物より本址の時期は古墳時代前期と考えられる。

第25号住居址（第15図）

遺構　13区南端N62～N67、W１～W３に位置する。主軸をN－14°－Eにとり、南北3.18m、東西2.10mの隅丸方形を呈する。土壙757、776に切られ、東壁と南壁は調査区域外にまでかかっている。壁の立ち上がりは比較的なだらかで、床面は二次堆積ロームに掘り込まれ、軟質で、ピット、炉などの施設は発見されなかった。

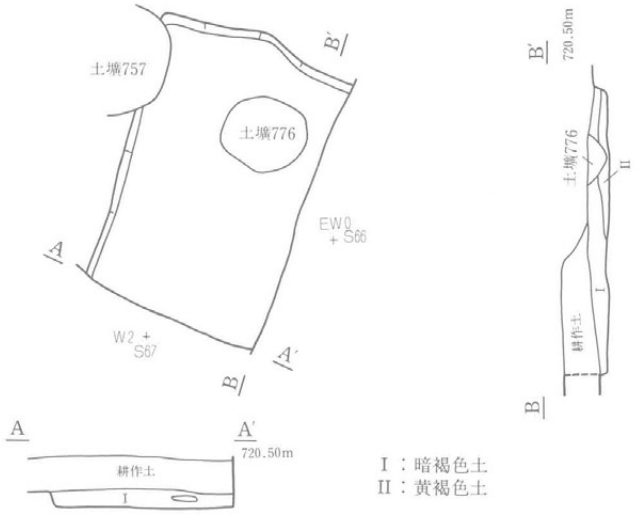
遺物　遺物の量は非常に少なく、またいずれも小片のため図示できたものはない。本址の時期は遺物より古墳時代前期と考えられる。

第26号住居址（第15図）

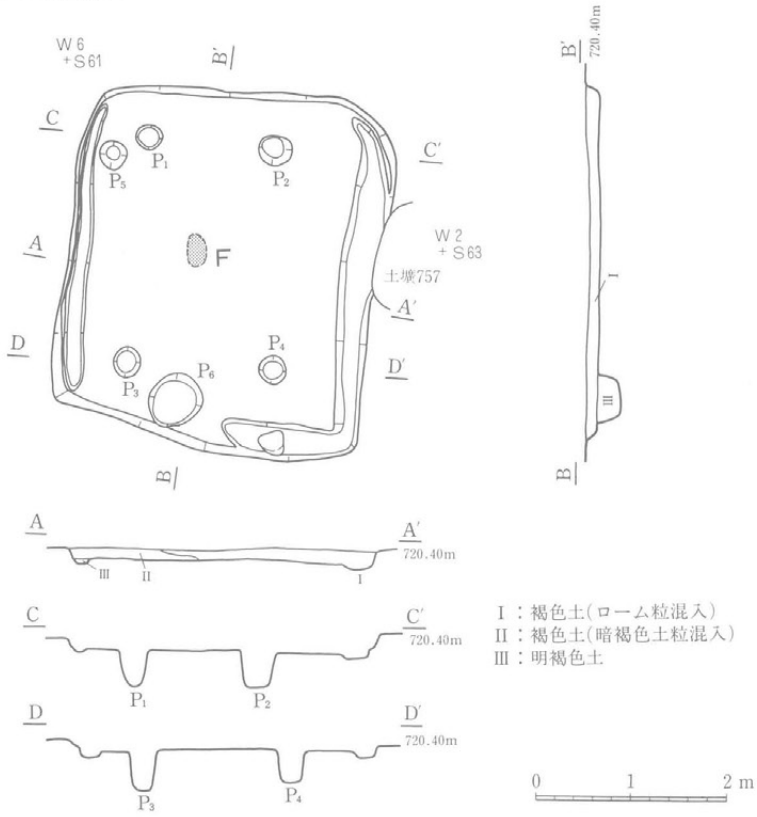
遺構　13区南端N61～N65、W３～W６に位置する。主軸はN－166°－Eをとり、南北3.30m、東西3.82mの隅丸方形を示し、北隅を土壙757に切られる。壁の立ち上がりはなだらかで高さは15cm前後を測る。二次堆積ロームに掘り込まれた床面を精査した結果、周溝、ピット、炉などが検出された。周溝は、北側を除いてみられ、幅20cm、深さ６cmと、住居址の規模に比べれば、大きいものであった。炉は地床炉で34×22cmの楕円形を呈し、３～９cmと浅く皿形に掘り込まれていた。

遺物　遺物の量は非常に少なく図示できたものはない。本址の時期は遺物より古墳時代前期と考えられる。

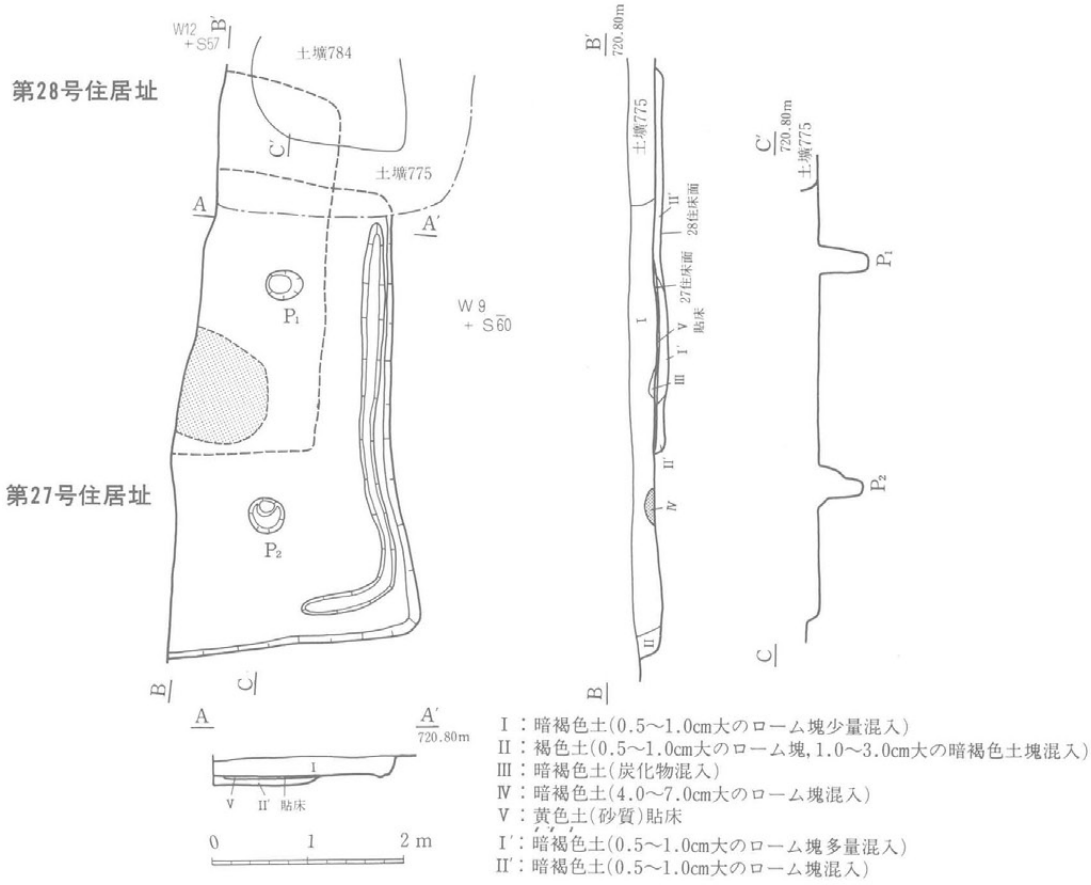
第25号住居址



第26号住居址



第15図　第25・26号住居址



第16図　第27・28号住居址

第27号住居址（第16図）

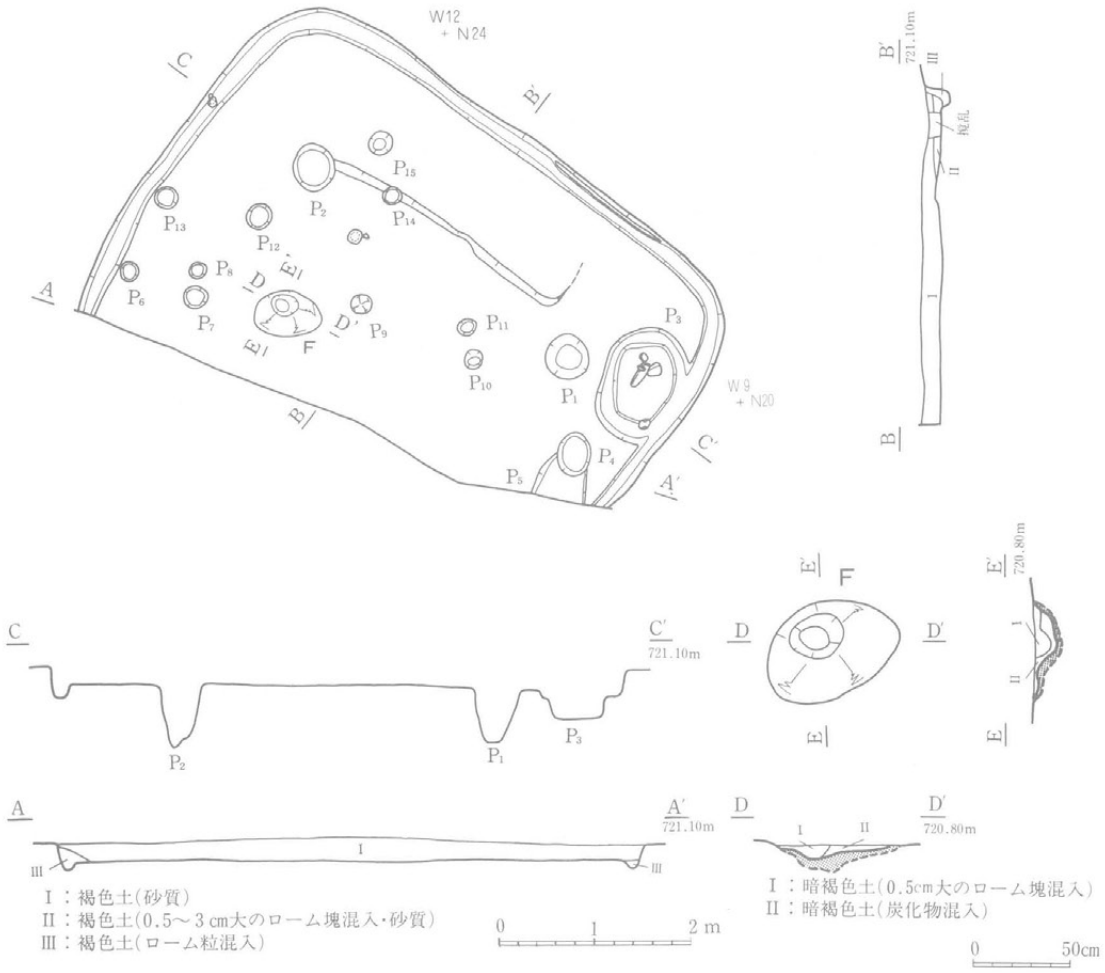
遺構　13区南端、N59～N63、W9～W12に位置し、主軸をN－3°－Eにとり、南北5.20m、東西2.70mの隅丸方形を呈する。28住を貼り、土壙783に切られ西側を調査区域外に残す。壁はなだらかな立ち上がりを示し、床は二次堆積ロームで非常に堅固、平坦であった。28住を切る部分の床面は砂質ローム土の貼り床が厚さ8cmで貼られていた。また貼り床に重なるように、厚さ2～3cm程度の灰の層が見られ、あるいは焼失住居の可能性も残される。東側床面には幅24cm、深さ20cmの周溝が見られた。また検出されたP_1、P_2は、位置と規模から主柱穴と見られる。

遺物　遺物の量は少なく、いずれも小片のため図示できなかった。本址の時期は遺物より古墳時代前期と考えられる。

第28号住居址（第18図）

遺構　27号住居址、土壙に切られ、大半を調査区域外に残す本址は、他の住居址に見られない人為堆積の覆土の特徴をもつ。床面は比較的固く、二次堆積ローム中に掘り込まれている。わずかに残る床面からは、ピット、炉などの施設は確認できなかった。

遺物　遺物はわずかにあるのみで、図示できたものはない。本址の時期は遺物より古墳時代前期と考えられる。



第17図　第30号住居址

第30号住居址（第17図）

遺構　12区東端N19～N25、W9～W16に位置するが、南側は区域外にかかり、全貌は明らかでない。本址は向畑7号古墳によって切られている。主軸方向はN－124°－Eを示す。南北6.20m、東西(4.60m)の隅丸方形のプランを呈する。壁はほぼ垂直に落ちている。床面は堅固であり、その傾斜は平坦である。

P_1、P_2はそれらの位置と規模より主柱穴であると断定できる。区域外にあると思われる西側主柱穴と北側主柱穴P_8間より北側主柱穴P_2寄りで、両主柱穴間より若干内側に炉が位置しており、炉底の被熱焼土化はこの炉の使用頻度の高さをよく顕している。P_3は貯蔵穴であると思われる。なお、本址北側にはベッド状の遺構があり、高さは床面より3～5cm、長さは280cmに及ぶ。

遺物　土師器が少量出土したのみである(第74図)。器種別では、小形甕、高坏、甕がある。本址の時期は出土遺物より古墳時代前期と考えられる。

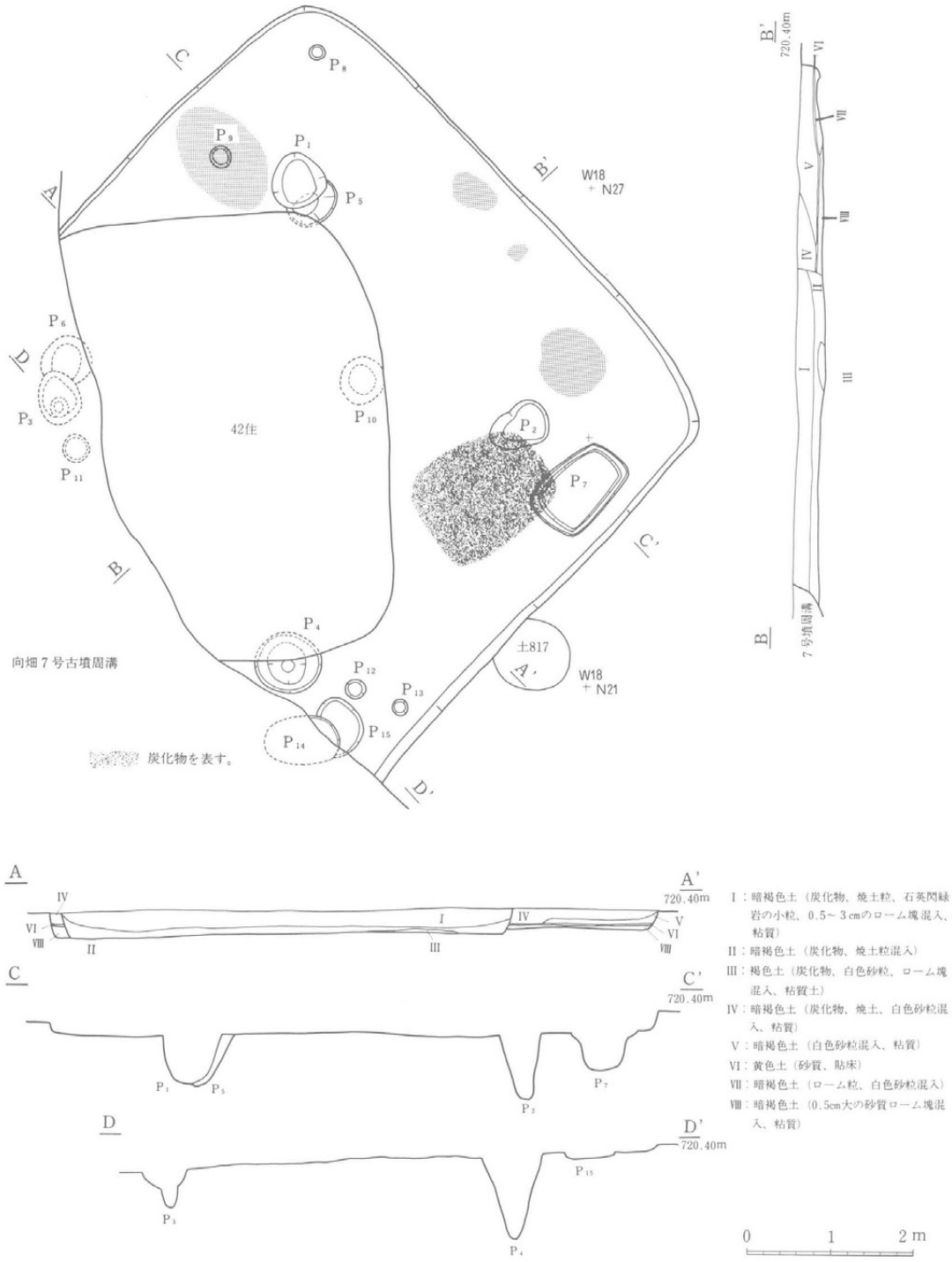
第40号住居址（第18図）

遺構　本址は３区中央東側N20～29、W17～24に位置する。土壙794を切り中央部を第42号住居址、南西側を向畑７号古墳周溝に切られる。表土除去作業の段階で焼土を伴う暗褐色土の落ち込みを確認した。規模は切り合いのため不明確の部分もあるが一辺が7.5mの隅丸方形を呈し、本遺跡の中では大形住居址に属するもので、２時期にわたって使用されたものである。壁は垂直に近い角度で立ち上がり、壁高は30cmを測る。住居址内には30本を越す炭化材が放射状に遺存しており焼失住居の跡を示していた。炭化材の最大幅は約12cmで、長さは直線上のものを同一個体としてみると最大180cmに及ぶ。東北側には170×140cmの範囲に４cmの厚さで炭化物が散乱し、北側に沿って３箇所に厚さ10cmあまり焼土があった。床面は砂質の黄色土でやや軟弱だが平坦な貼り床である。貼り床は厚さ10cm余りで上面の黄色土の下はローム粒・ローム塊の混入する暗褐色土が堆積していた。東側のP_2脇には120×80cmの炭化物が充満していた貯蔵穴と思われる穴がある。ピットは新旧15本が検出された。このうちP_1：円形（80×70×70cm）P_2：不整円形（72×52×78cm）P_3：円形（66×54×60cm）P_4：円形（84×74×92cm）はその位置・規模及びピット内の断面に炭化物が観察されたことなどから新住居址に伴う柱穴と考えられる。遺物は壁近くに沿って配置されていた。旧床面は新床面より10cm余り下にあり砂質ロームで堅緻だが僅かに起伏がみられる。住居址の大きさは上面の住居址とほぼ同一であり、柱穴もP_2、P_4は共通でP_1に切られたP_5：円形（60×？×75cm）P_6：円形（60×60×41cm）の４本が考えられる。

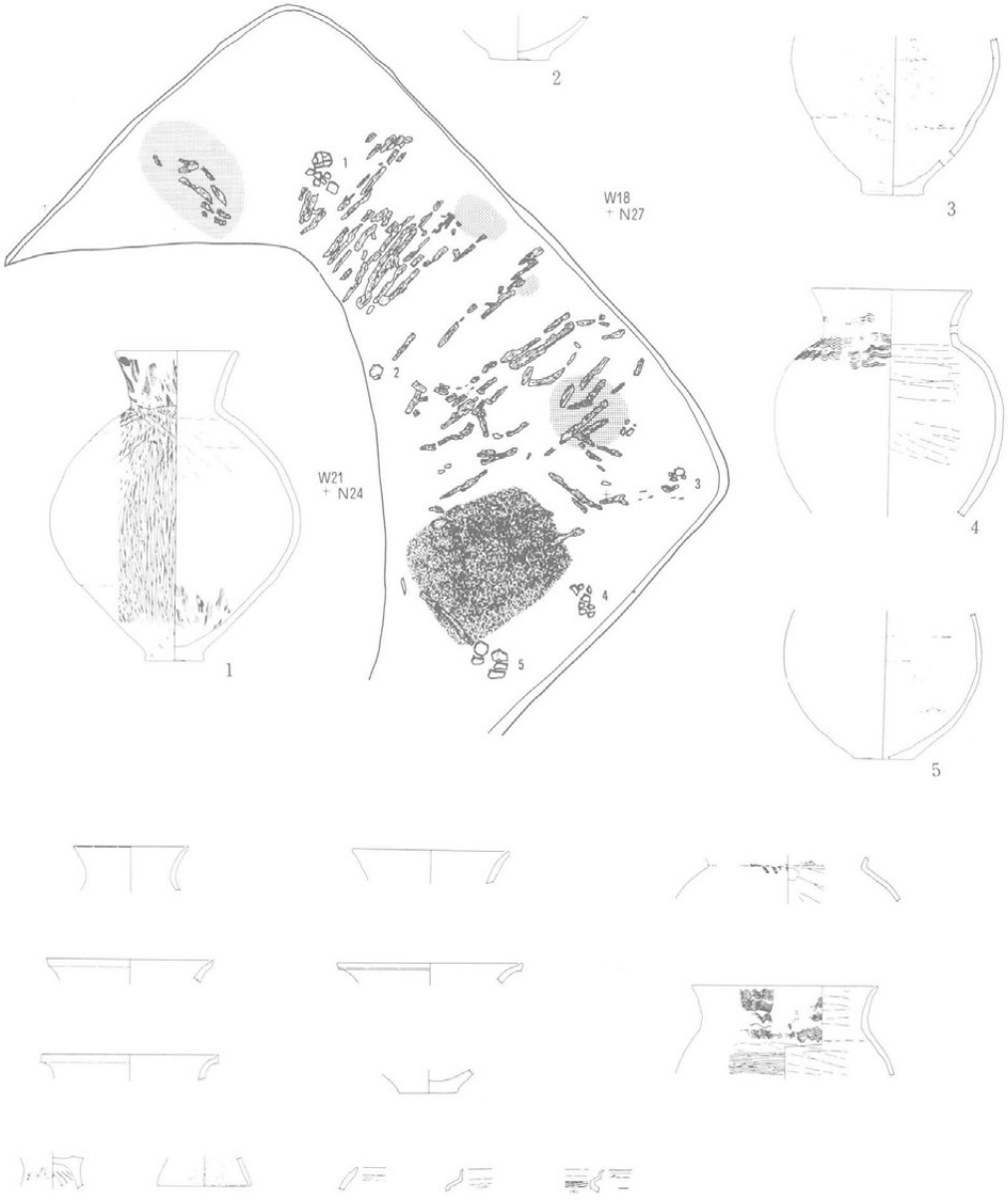
これらのことから下部の旧住居址とほぼ同一箇所に建て直して貼り床をした住居址であり、柱穴も殆ど同一箇所に掘られたものと判断したい。旧住居址から遺物の出土はない。

遺物　覆土中より土器・土製品が出土した他、上記のように新住居址から半完全形以上の壺が４点出土している。特にP_1脇には完形の壺があり、この壺は頸部以下に籠目がついており、籠で保護されていたものとおもわれる。覆土出土のものは小破片で器形の一部分しかわからないものが多い。これら出土土器から本址は古墳時代前期と比定できよう。ただ下部の旧住居址については直接時期決定となる資料はないが、第37号住居址の例もあり、新住居址との時間差は少ないものと思われる。

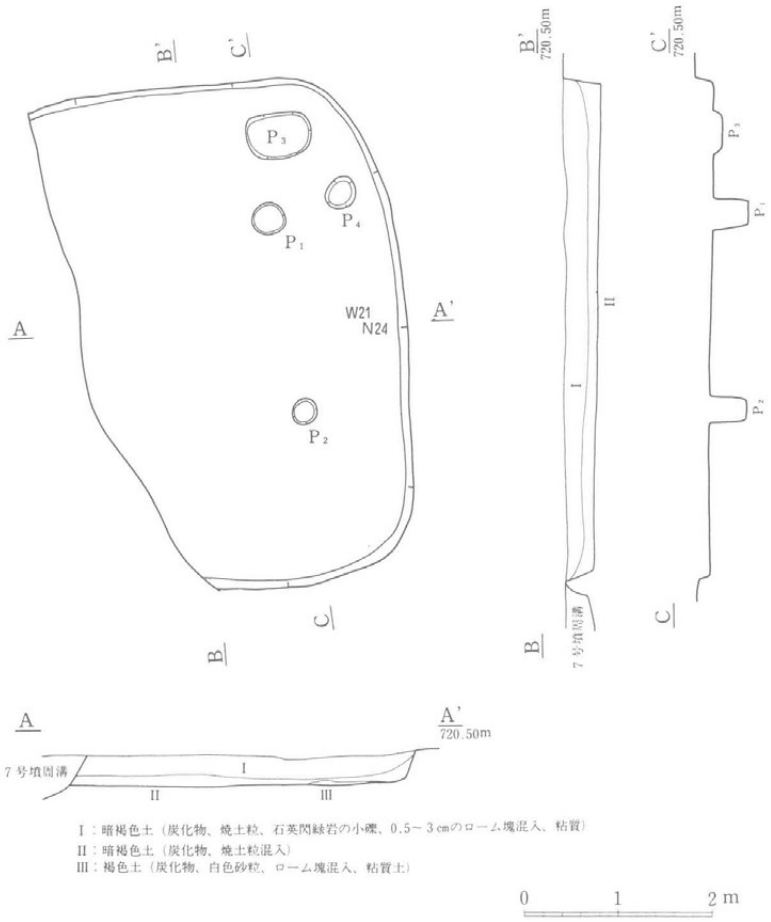
※炭化材の樹種については、本址の数ケ所からサンプルを採取して、大町高校森義直教諭に鑑定を依頼したところ、すべてがエノキとの結果を頂いた。



第18図　第40号住居址



第19図　第40号住居址遺物出土図

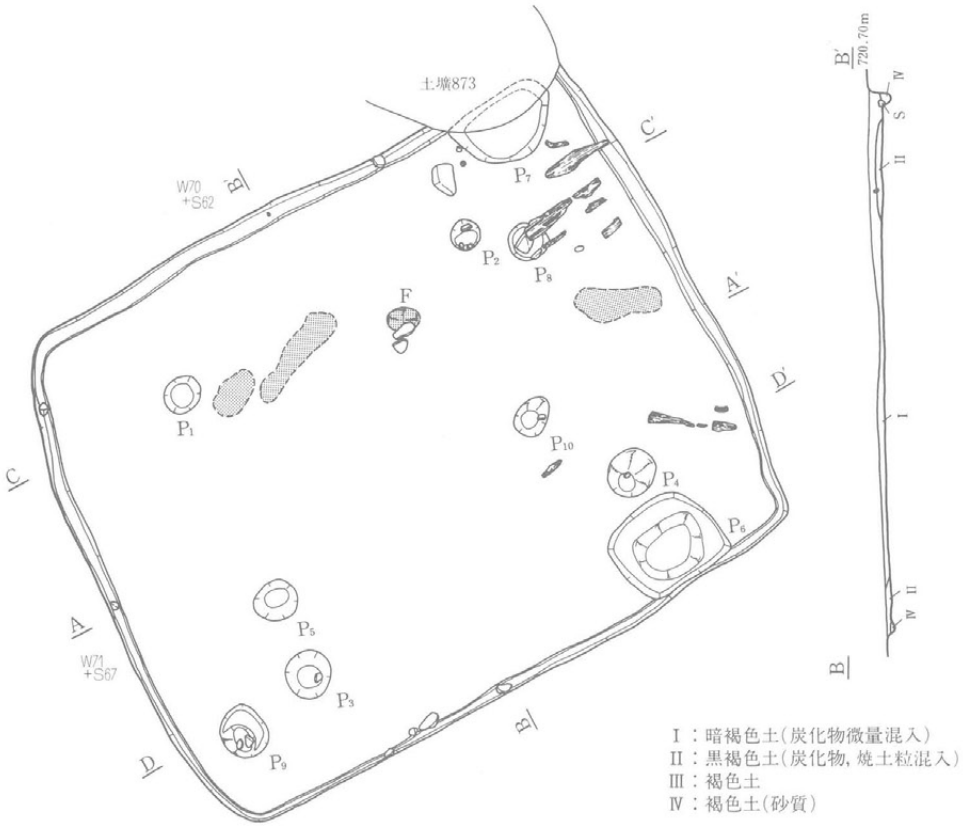


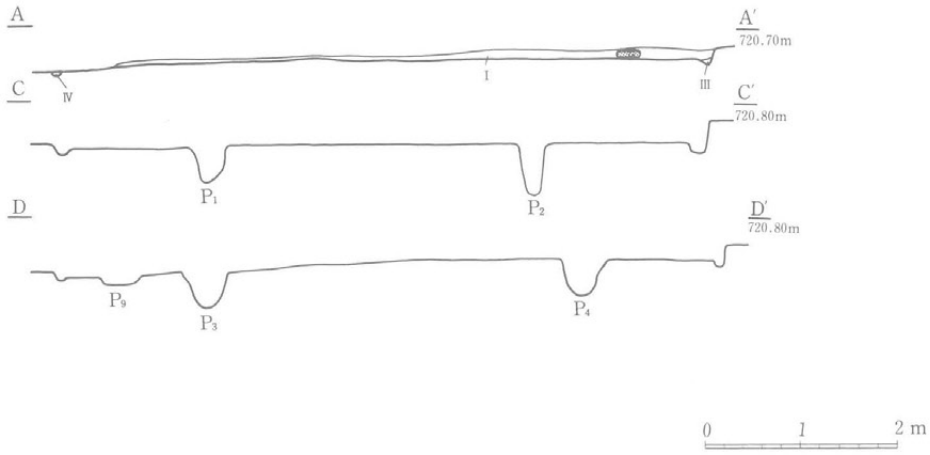
第20図　第42号住居址

(17) 第42号住居址（第20図）

遺構　3区中央東N21～27、W21～24に位置する。40号住居址を切り、西側½を向畑7号墳周溝に切られる。本址は40号住居址の覆土中に掘り込まれており、検出時に見落としてしまった。40住の掘り下げを開始した後、炭化物が見られない部分を確認し再検出を行なった結果、その存在が明らかになった。規模は南北で5.4mを測り、隅丸方形のプランが推定される。壁は外傾気味に立ち上がり、壁高は30～40cmを測る。床面は石英閃緑岩混入のローム層まで掘り込まれ、堅緻で平坦なものとなっており、40住のものより僅かに深い。ピットはP_1～P_4が検出され、このうちP_1、P_2は位置・深さから4本柱の主柱穴の2つと考えられる。

遺物　土師器小片が、少ないが出土している。遺物より、古墳時代前期の住居址と考えられる。





第21図　第44号住居址

第44号住居址（第21図）

遺構　15区中央S61～S69、W63～W72に位置する。主軸はN－152°－Eをとり、南北5.9m、東西7.1mの隅丸方形のプランで、土壙873に切られる。深い耕作によって削平されて、覆土が非常に浅く、壁の立ち上がりなどは確認できない状態であった。床面は二次堆積ローム層に掘り込まれ、非常に軟弱で緩やかな起伏をもつ。炭化材が東側に方向性をもってみられる事から、焼失住居の可能性も残されるが、焼土、炭化物の量が少なく、分布状態が東部に偏向しており、遺物の量も少ない事から断定はしかねる。

床面精査の結果、壁際を全周する幅16～20cm深さ10cmの周溝、炉、ピット10ケが検出された。炉は15×8cmの楕円形で、浅く皿状に掘り込まれていた。P_1（40×36×50cm）、P_2（34×30×50cm）、P_3（60×30×40cm）、P_4（60×50×30cm）は位置、深さから支柱穴の可能性がある。またP_5（70×56×74cm）、P_{10}（50×26×16cm）は、位置的に支柱穴の可能性がある。P_6は住居全体の位置から見て南側に壁に沿って設営されており、110×90×40cmの規模をもつ方形の施設でしかも二段に掘り込まれている事から貯蔵穴と断定できる。

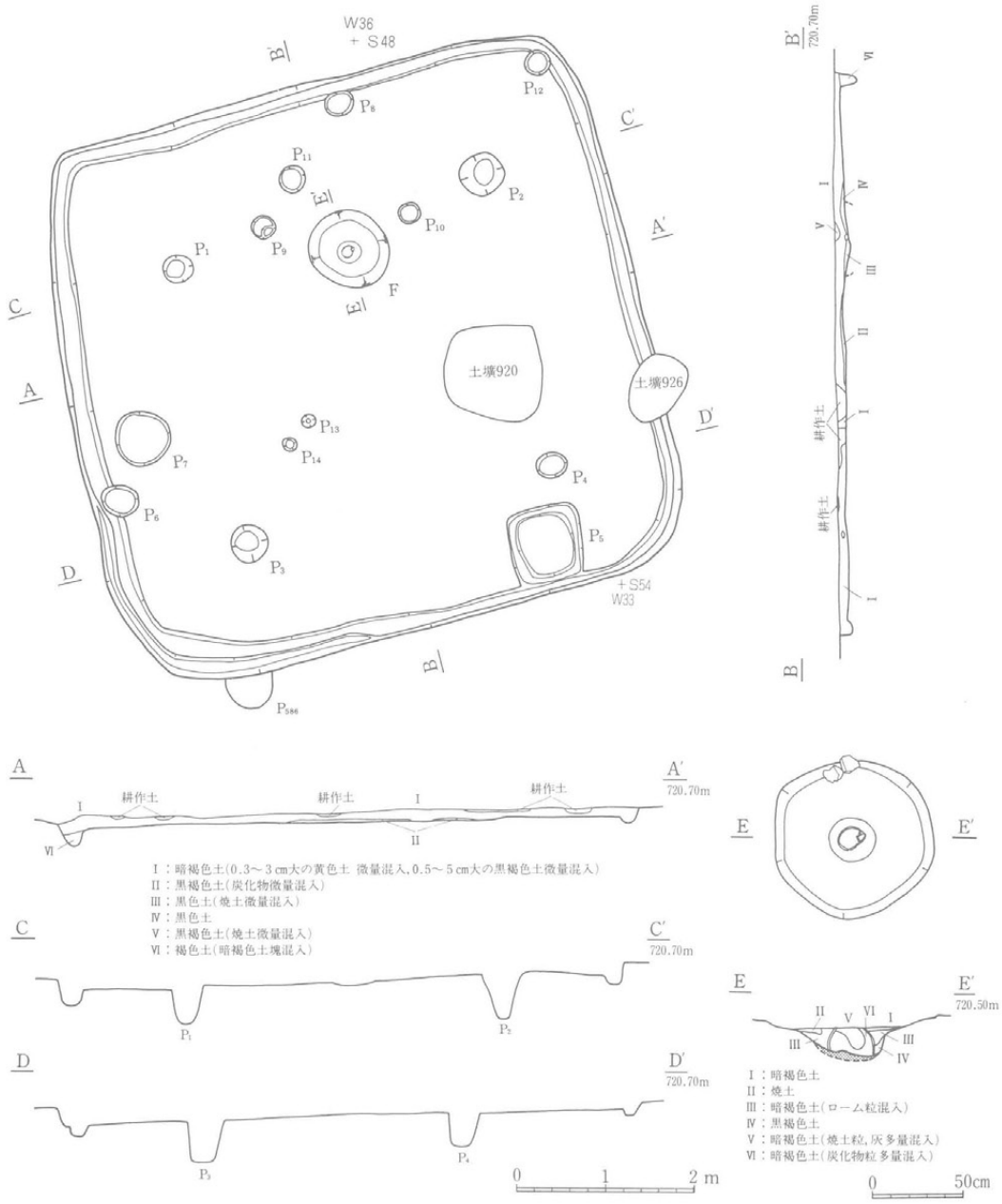
遺物　少量が出土したのみで、図示できたものは、ミニチュア土器2点と台付甕の3点のみである（第74図）。ミニチュア土器は共に遺存状態は良く、第74図119は完存、118は口縁を大きく欠くが器形の復元は可能である。台付甕（第74図120）は、胴と接合部がわずかに遺存するのみである。

本址の時期は遺物より古墳時代前期と考えられる。

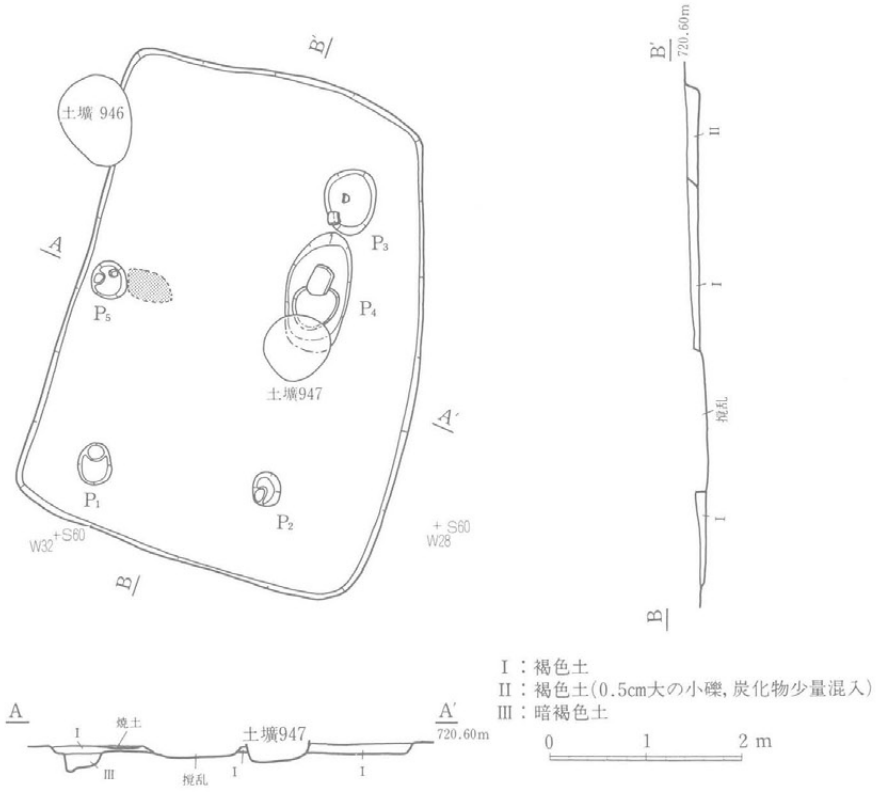
第45号住居址（第22図）

遺構　6区西端S48～53、W32～39に位置する。土壙930を貼り、土壙899、927、928に切られる。南北6.2m、東西6.4mの隅丸方形プランを呈し、炉址の位置からみて南側に出入口を想定でき、主軸方向はN－14°－Wを示す。壁は、ほぼ垂直に近く立ち上がり、壁高は10～20cmを測る。床面は二次堆積ローム中に掘り込まれ、平坦で堅緻なものになっている。床面精査の際に、周溝・ピット・炉址が確認された。周溝は深さ10～20cm程で、壁際を全周する。ピットは14ケ検出された。P_1～P_4は、いずれも50cm前後の深さで、方形に配列されており、主柱穴と考える。南壁直下東側にあるP_5は二段に掘り込まれており、貯蔵穴と考えられる。炉址は北側柱穴間に設けられ、直径45cmの円形を呈する埋甕炉であり、その掘り方の中に壺の胴部上半を正位に埋設している。底面の砂質黄色土は被熱層として残る。埋甕炉の周囲は浅く窪み、床面から6cm程掘り下げられている。

遺物　土師器と石器が出土している。土師器は古墳時代前期の様相をもつもので、床面北東部に集中して高坏・甕・手づくねなどが出土している。石器は砥石が3点確認されている。遺物よりみて本址は古墳時代前期に比定される。



第22図　第45号住居址



第23図　第47号住居址

第47号住居址（第23図）

遺構　16区S55～61、W28～33に位置し、主軸はN－20°－Eをとる。南北5.20m、東西3.78mの隅丸方形のプランを呈し、土壙946、947に切られる。深い耕作により覆土がけずられ、壁の状態は明確ではないが、比較的なだらかな立ち上がりであった。底面は、二次堆積ロームに掘り込まれ、軟弱で緩やかな起伏を持つ。住居址中央部に、深さ10cm程で広範囲に撹乱があり、本来あったであろう施設が破壊された可能性がある。P_1、P_2、P_3は規模、位置より主柱穴と思われる。P_1、P_2については、二段の落ち込みがみられ、柱痕ととらえる事ができる。またP_5にも柱痕がみられ、穴の配置から支柱穴と思われる。またこのP_5に関しては遺物も多少出土している。土壙947に切られるP_4は、二段に掘り込まれ位置と規模より、貯蔵穴ととらえることが自然かもしれない。

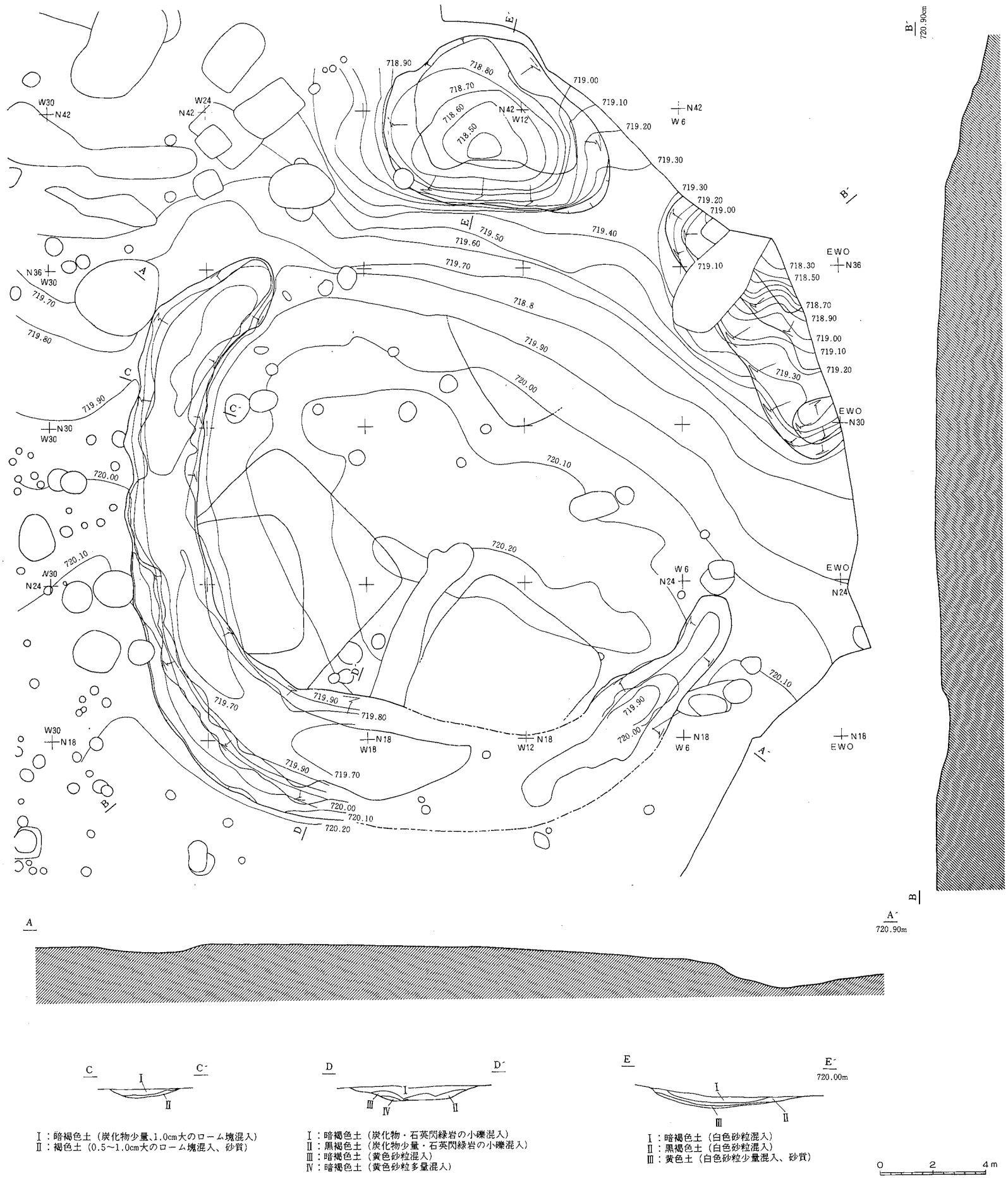
遺物　遺物の量はごくわずかであり、いずれも少片のため図示できたものはない。本址の時期は、遺物より古墳時代前期と考えられる。

表1

住居址一覧表

住居No.	図No.	主　軸	平面形(cm)	炉位置	炉形態規模(cm)	出土遺物	備　考
1	4	(N-65°-W)	隅丸方形 576×566	中央西より	地床炉 42×48	土師器高坏、壺	土壙27、28、31に切られる 土壙30を切る
2	5	(N-0°)	隅丸方形 376×(368)	柱穴間	地床炉 100×60	土師器壺、坩、甕	溝4に切られる 5住を切る
3	5	(N-11°-E)	隅丸方形 500×(380)	中央?	地床炉 400×40	土師器壺、甕	
4	6	(N-9°-E)	隅丸方形 378×(290)	なし	—	土師器壺、鉢、甕、坩	
5	5	?	?			土師器甕	溝4、2住に切られる
11	7	(N-0°)	不整円形 490×476	中央	地床炉 24×18	縄文土器、深鉢	土壙128、129、130、131、259、200に切られる 土壙364を切る
12	8	(N-65°-W)	隅丸方形 680×670	柱穴間	地床炉 44×48	土師器高坏、器台、坩、甕、土製勾玉	焼失住居、間仕切りの溝あり 土壙145に切られる 土壙154、155、156、157、161、165に切られる
13	9	(N-0°)	隅丸方形 523×522	不明	不明	土師器高坏、壺、坩、鉢、ミニチュア	土壙199、246に切られる 土壙250を切る
14	10	(N-169°-E)	隅丸方形 568×516	なし	—	土師器器台、甕、紡錘車、金坩	15住を切る
15	10	(N-162°-E)	隅丸方形 754×680	不明	不明	土師器高坏、壺、器台、甕、台付甕、S字甕	土壙216、354、353、14住に切られる
16	11	(N-14°-E)	方形 830×830	中央東より	地床炉 60×50	土師器甕、ミニチュア	土壙281に切られる 17住を切る
17	12	(N-0°)	460×400	不明	不明		16住に切られる
18	11	(N-49°-E)	? 42×46	不明	不明	土師器高坏、坩、小形壺、ミニチュア	土壙289、278、290に切られる 間仕切りあり
19	12	(N-0°)	隅丸方形 354×776	不明	不明		土壙201、202を切る
20	12	(N-158°-E)	隅丸方形 430×380	なし	—		
21	12	(N-162°-E)	隅丸方形 442×440	柱穴間	地床炉 54×50	土師器甕、S字甕	土壙374、P_{199}、P_{201}に切られる
22	13	(N-0°)	? 620×164	不明	不明	土師器高坏、壺、甕、台付甕	29住を切る
23	13	(N-2°-E)	隅丸方形 556×364	不明	不明	土師器高坏、壺、甕、S字甕、器台	土壙788、789、787、772、618、620、621に切られる
24	14	N-87°-E	方形 620×608	柱穴間 柱穴間	縁石埋甕炉 42×32新 新旧あり 35×22旧	土師器高坏、甕	土壙673、670、683、771、687、688、691、P_{276}、P_{27}に切られる 土壙700を切る

住居No.	図No.	主　軸	平面形(cm)	炉位置	炉形態規模(cm)	出土遺物	備　考
25	15	(N-14°-E)	隅丸方形 (318×210)	不明	不明		土壙776、757に切られる
26	15	N-166°-E	隅丸方形 330×382	中央	地床炉 34×22		土壙757に切られる
27	16	(N-3°-E)	隅丸方形 520×(270)	不明	不明		土壙783、775に切られる 土壙758、28住を切る
28	16	(N-4°-E)	隅丸方形 402×(140)	—	—		土壙783、775、27住に切られる
29	13	?	?	不明	不明	土師器小形甕、壺、台付甕	22住に切られる
30	17	(N-124°-E)	隅丸方形 620×(460)	柱穴間	地床炉 124×100	土師器高坏、甕、小形甕	北側にピット状遺構あり
40	18 19	(N-46°-E)	隅丸方形 750×(680)	不明	不明	土師器甕、台付甕、壺	焼失住居。土壙817を切る 42住に切られる
42	20	N-175°-E	隅丸方形	不明	不明		40住を切る。7号墳周溝に切られる。土壙549に切られる
44	21	N-152°-E	隅丸方形 590×706	柱穴間	縁石地床炉 30×28	土師器台付甕、ミニチュア	土壙873に切られる 焼失住居址か
45	22	N-14°-W	隅丸方形 640×620	柱穴間	埋甕炉 90×90	土師器高坏、甕、台付甕、手づくね	土壙920、926に切られる P_{586}を切る
47	23	N-20°-E	隅丸方形 520×378	不明	不明	土師器壺、ミニチュア	土壙946、947に切られる


A
A'
720.90m
B
B'
720.90cm
C
C'
D
D'
E
E'
720.00m
Ⅰ：暗褐色土（炭化物少量、1.0cm大のローム塊混入）
Ⅱ：褐色土（0.5～1.0cm大のローム塊混入、砂質）
Ⅰ：暗褐色土（炭化物・石英閃緑岩の小礫混入）
Ⅱ：黒褐色土（炭化物少量・石英閃緑岩の小礫混入）
Ⅲ：暗褐色土（黄色砂粒混入）
Ⅳ：暗褐色土（黄色砂粒多量混入）
Ⅰ：暗褐色土（白色砂粒混入）
Ⅱ：黒褐色土（白色砂粒混入）
Ⅲ：黄色土（白色砂粒少量混入、砂質）
0 2 4m

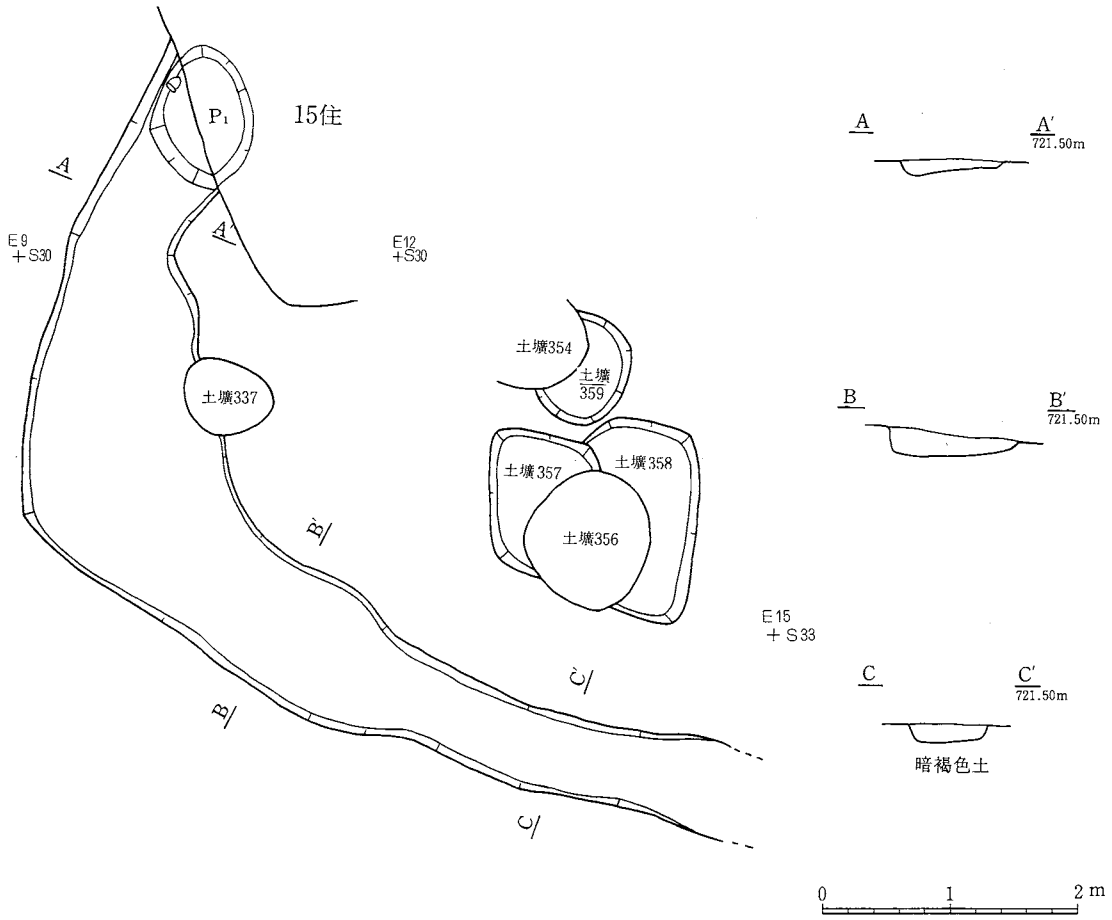
第24図　向畑７号古墳

2．古墳

向畑７号古墳（第24図）

Ⅲ区東側に位置する。丘陵上の台地の北はずれにあたり、６号古墳の南東に隣接する直径22mの円墳である。調査開始以前には墳丘と思われる顕著な高まりはなく、本古墳の存在は予想されていなかったが、Ⅲ区検出時に弧状に巡る周溝を確認し、古墳の存在が明らかになった。本古墳の墳丘は地山の二次堆積ロームまで完全に破壊され、周溝部分の他に本古墳を推測させるものはない。周溝は３ヶ所で途切れている。南側周溝は平坦な台地上を掘り込み、およそ半周を巡る。検出面での最大幅は480cm、最深部は52cmを測り、断面形はＵ字形を呈する。覆土は砂質の褐色土～暗褐色土が堆積しており、下層～底面には拳～人頭大の礫が僅かに見られた。これらが墳丘の葺石として利用されていたものか否かは明らかではない。底面は砂質の二次堆積ロームであった。周溝の両端は台地のはずれにあたり、ここから自然地形は北側に傾斜をまして下方に向っており、北側、東側の周溝部分では急激な傾斜となっている。北側周溝は、最大幅640cm、最深部90cmを測る。壁は急斜面を掘り込んでいる為、内側ではやや急に立ち上がるが外側では確認されなかった。東側周溝は東半が調査対象地外となるが北側周溝と類似すると考える。

遺物は周溝内、検出面から土師器・須恵器・石庖丁等が確認された。土師器では、南側周溝の東端から供献用土器10個体がまとまった状態で押し潰され出土している。須恵器は甕・壺が周溝から確認された。石庖丁は弥生時代のもので混入品と考えられる。遺物より本古墳は古墳時代中期に比定されるものである。



第25図　方形周溝墓

3．方形周溝墓（第25図）

遺構　N29～34、E８～13に位置し、土壙333を切り、15住、土壙339に切られる。自然地形はこれより東は傾斜を増して下方へ向かっている。15住による撹乱と深耕の為に僅か周溝の南西コーナーを検出するに止まった。周溝は二次堆積ローム中に掘り込まれ、最深部で20cmを測り、断面皿形を呈する。東辺にはP_1（114×84×50cm）が検出された。また主体部と断定できる落ち込みは検出できなかったが、土壙として扱った土壙357．358．359は位置、規模等の点で問題はあるが、いずれも人為堆積の状態を示しており、本址の主体部である可能性は捨てきれない。土壙357からは鉄（第88図）が出土している。遺物は少く周溝P_1の壁際から出土した坩（第74図）１点を含む古墳時代前期の土師器が少量出土している。

本遺構の所属時期もそこに求めたい。

4．土壙

今回の調査では多数の穴を検出した。このうち竪穴住居址に伴わないもので直径50cmを越すものを土壙とし、それ未満をピットとして扱った。その数は発見された各種遺構の中ではとりわけ多く、本遺跡を代表する遺構と言えよう。

① 分布　今回の調査で土壙575基が確認された。並行して行った県道改良工事に伴う調査を含めて土壙の分布を見ると、1・2・8・10・13区に集中しており、これらの地区の南北方向には拡がっていない。西側は本年度実施された圃場整備事業に伴う第2次調査で多数の土壙が確認された。土壙の分布集中地は地形的に見ると丘状の地形面の中央平坦地にあたる。(付図参照)14区の土壙については他のものとやや趣きが異なり、平面形、断面形、遺物の有無から、あるいは樹木の根痕または耕作による伐根の痕かも知れない。

② 規模　長径は最大713cm、最小50cmである。50cm単位でみると、50～100cmが245基と最も多く、約4割を占め、次いで101～150cm184基、151～200cm91基、201～250cm34基、250cm以上21基と規模が大きくなるにつれ減少している。

③ 平面形態　おおむね円形、楕円形、方形、長方形の4つに分けられるが、それぞれに不整形のものがある。円形、楕円形を呈するものは11区北西部、15区、16区に集中している。規模との関係をみると、100cm未満のものには円形をしたものが多く、大型のものは方形、長方形のものが多い。

④ 断面形

A方形、長方形を呈するもの

底面が平坦で垂直に近い角度（斜度が85°～90°）で立ち上がるもの。

B台形を呈するもの

底面が平坦で壁の斜度が85°以内で外傾して立ち上がるもの。浅いものはA類と近似性を持つ。

C半円形を呈するもの

底面が徐々に浅くなり、緩やかに立ち上がっていくもので、底面と壁面との区別が付きにくいもの。

Dフラスコ状を呈するもの

検出面より下に最大径を持ったもの。袋状をしたもの。

E二段底のもの

底面が二段になっているもの。

Fその他

上記A～Eに当てはまらないもの、底面の凹凸の激しいもの、三角形を呈するもの等。

また、A～Fの他にそれらの中間型があるが、いずれか一つの分類を行った。

⑤ 覆土

a　自然堆積を示すもの。各土層が土壙の形状に合わせて層的に重なり合って堆積しているもの。

b　一時的または短期的に重なりまとまった埋没状況を示すもの。かなり深い土層でも単層であるか、ないしは不規則な土層が観察されるもので、ローム粒、ローム塊が混入している例が多い。この様な覆土はかなり特殊な状況下で形成されたものである。人為的な埋め込みが考えられる。

c　土層の区分が不明瞭で漸移的に土色、土質が変化するもの。数は非常に少ない。中には土壙の壁と覆土の識別さえ困難なものもある。

⑥　特徴的な土壙

土壙744　13区南側に位置する。規模は123×89cmを測り、方形プランを呈する中世以降の墓址である。長軸方向はN—89°—Eを示している。壁はやや緩かに立ち上がり、覆土の暗褐色土中にはローム塊が混入していた。この覆土中には多量の人骨が確認された。人骨については詳しく後述している様に壮年期以降の男性のものと思われる。

土壙353　10区南側に位置し、規模は(238)×238cmを測る。平面プランは長方形を呈し、長軸方向はN—18°—Eを示している。壁は急に立ち上がり、覆土は人為堆積の様相を呈していた。底面は軟弱な2次堆積ロームで、平面形に合わせて中央に200×60×20cmを測る長方形の掘りこみが認められた。この段状の掘りこみは棺桶を設置した窪みかもしれないが人骨、釘等の遺物は確認できなかった。

土壙134　10区北側に位置する。規模は102×66cmの長方形プランを呈し、長軸方向はN—22°—Eを示す。深さは検出面より17cmと浅く、壁は緩やかに立ち上がっていた。底面は被熱しておりやや浮いた状態で角礫が敷かれていた。覆土の暗褐色土中には大量の焼土と共に焼けた骨片が認められ、底面から礫の上面に最も多くみられた。覆土の様子などからみて火葬墓と捉えられるが、短期間に何回かに亘って使用された可能性もある。

⑦　出土遺物と時期　多数の土壙からは土器、石器、銭等の遺物が出土した。土器は殆どが小破片である。他の遺構から混入したと思われるものも多い。土器には縄文時代早期、前期、中期、古墳時代前期、中期のものが見られる。石器は、石鏃、石錐、石匙、打製石斧、凹石、磨石、磨製石鏃等が出土している。中近世の遺物は陶磁器、宋銭等僅少である。これらの出土遺物と覆土の状況等から各土壙の所産時期を推定する手掛かりとした。

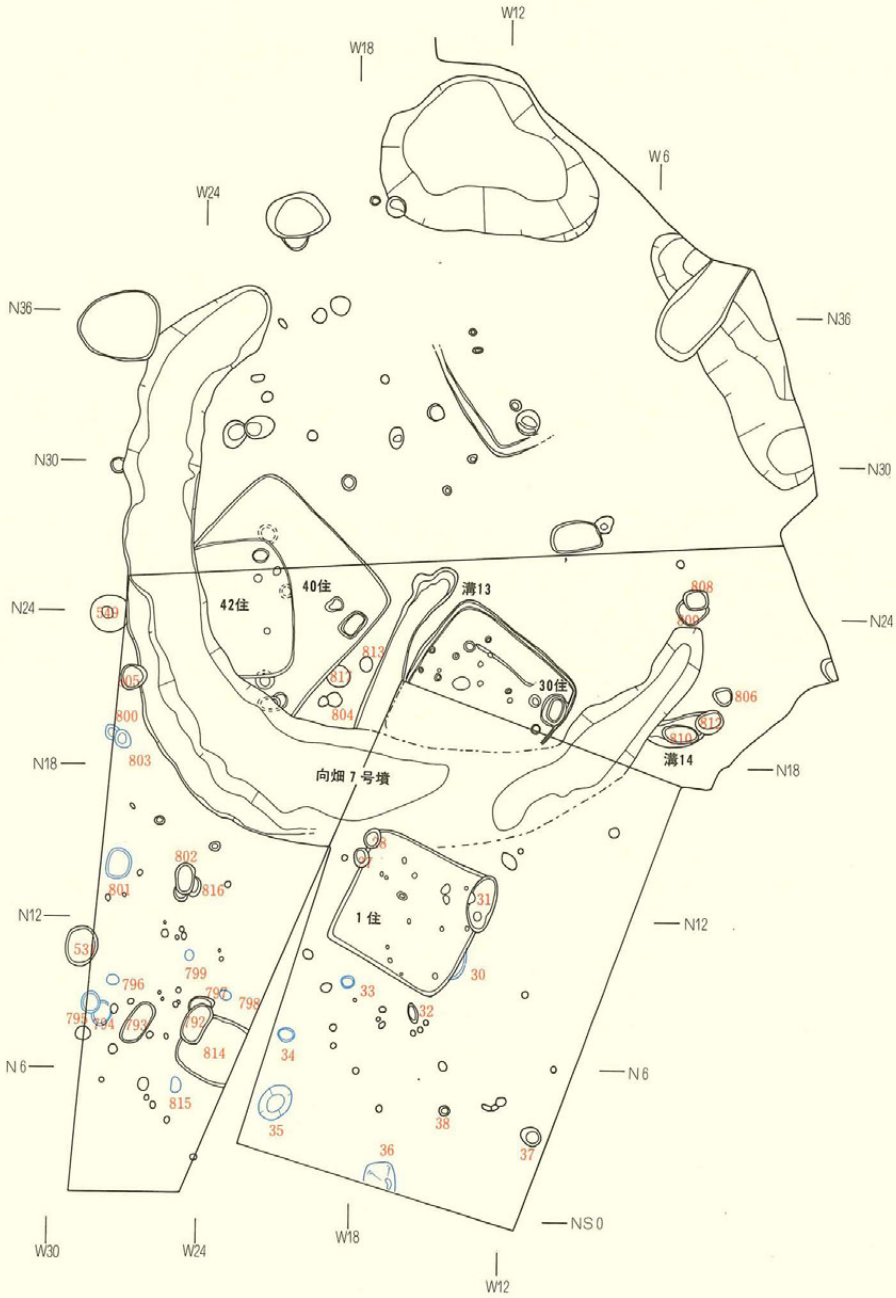
⑧　墓道について　中世以降の土壙は比較的規模が大きくて方形、長方形を呈するものが多く、数ヶ所に集中が見られる。その集中地区では、はっきりと土壙群と空地とが識別でき、空地は墓道と判断したい。しかし石敷き、踏み固め等の確認は出来なかった。

W36
W30
W24
W18
W12
W6
S72
S78
3住
4住
5住
2住
溝5
溝4
S27
S33
S21
S15
S9
S3
E18
E12
E6
EW0
W6
W12
W18
15住
14住
12住
19住
13住
11住
18住
16住
17住
方形周溝墓1
溝7

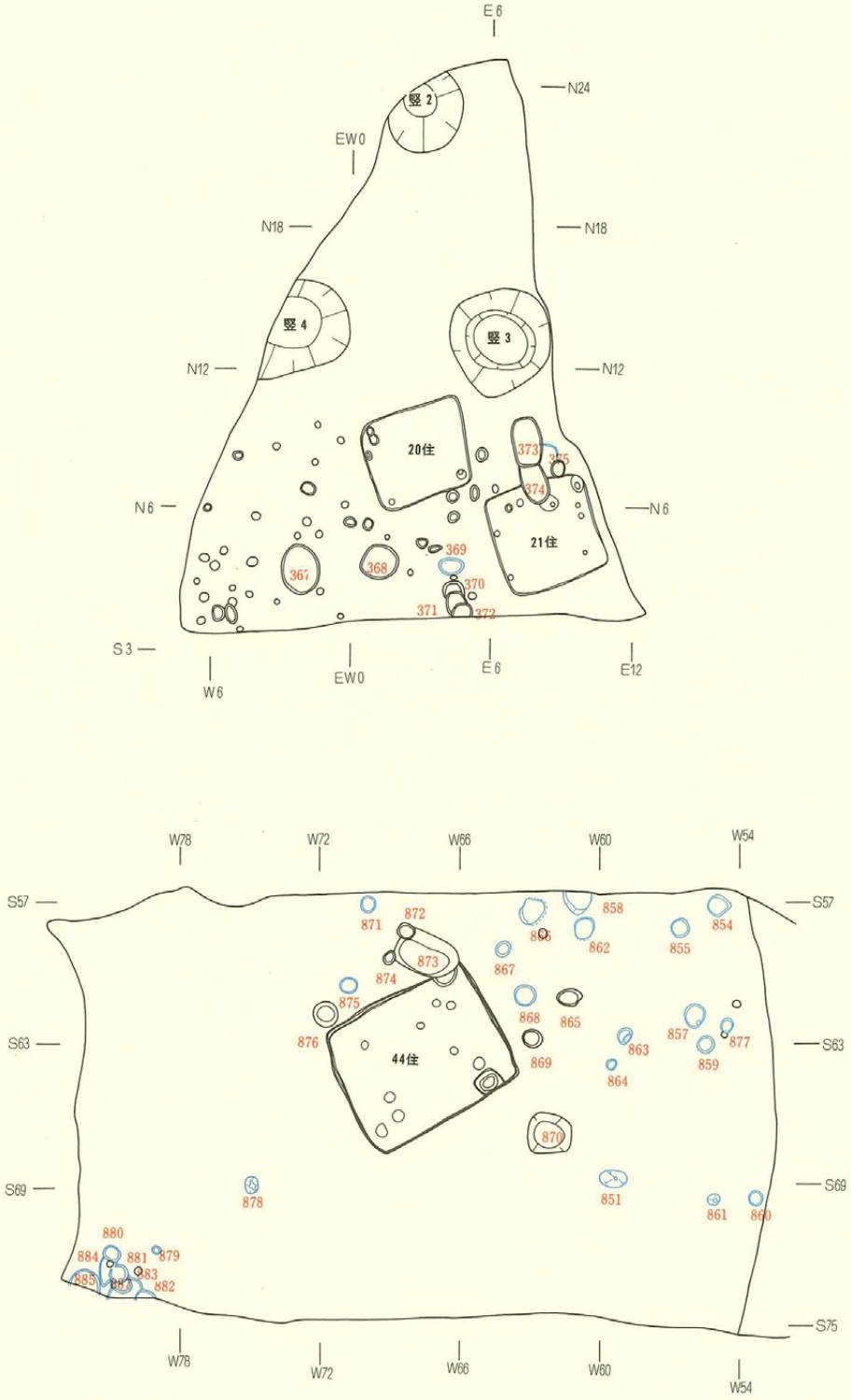
第26図　土壙配置図(1)

W9
W3
E3
E9
E15
E21
S39
S45
S51
S57
S63
29住
23住
22住
24住
28住
27住
26住
25住
W42
W36
S42
S48
S54
S60
47住
S3
S9
S15
S21
S27
S33
W24
W30
溝2

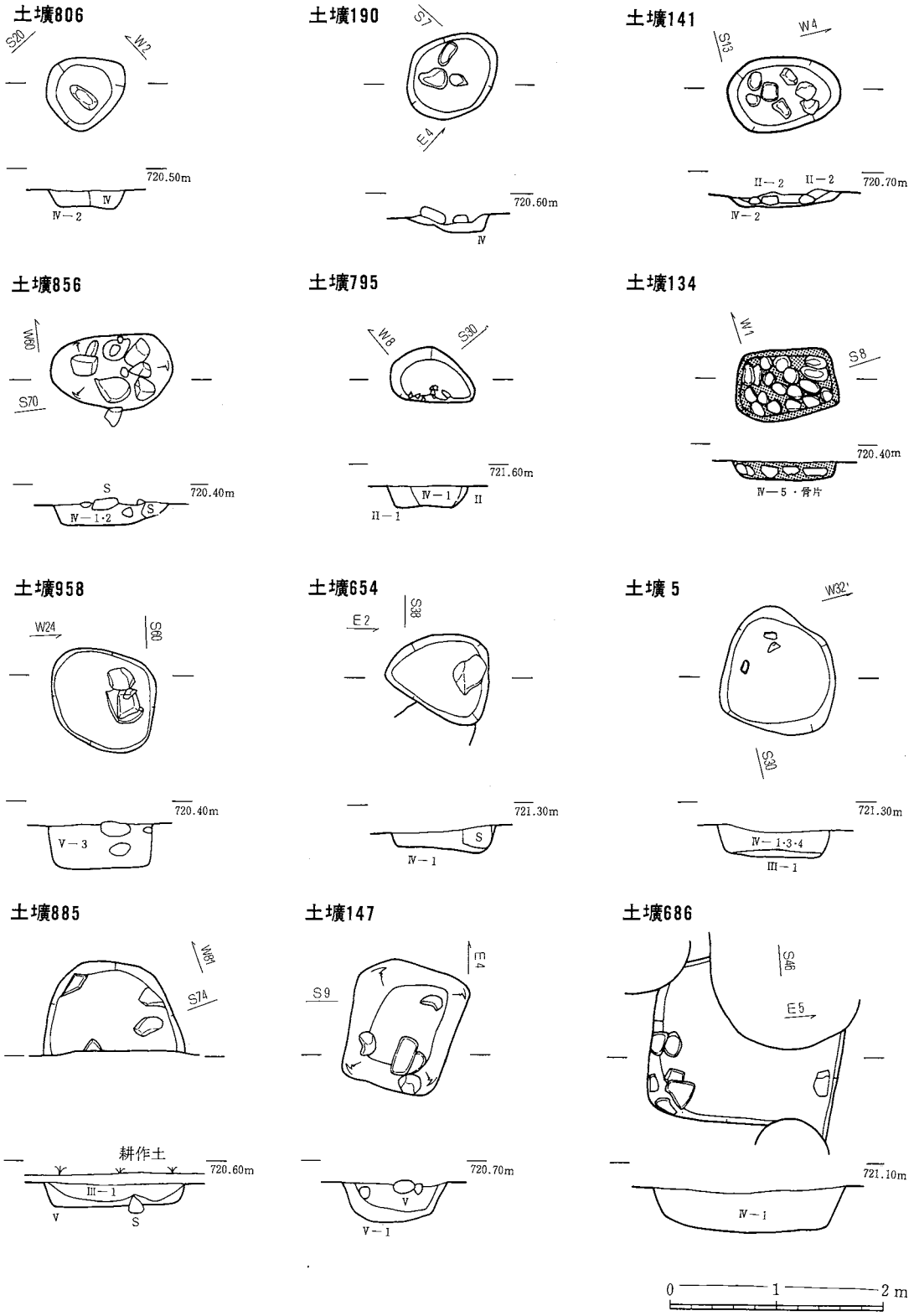
第27図　土壙配置図(2)


W12
W18
W6
W24
N36
N30
N24
N18
N12
N6
NS0
W30
42住
40住
溝13
30住
溝14
向畑7号墳
1住
808
809
806
812
810
813
817
804
805
800
803
802
801
816
53
799
796
797
798
795
794
793
792
814
815
31
30
33
32
34
35
38
36
37

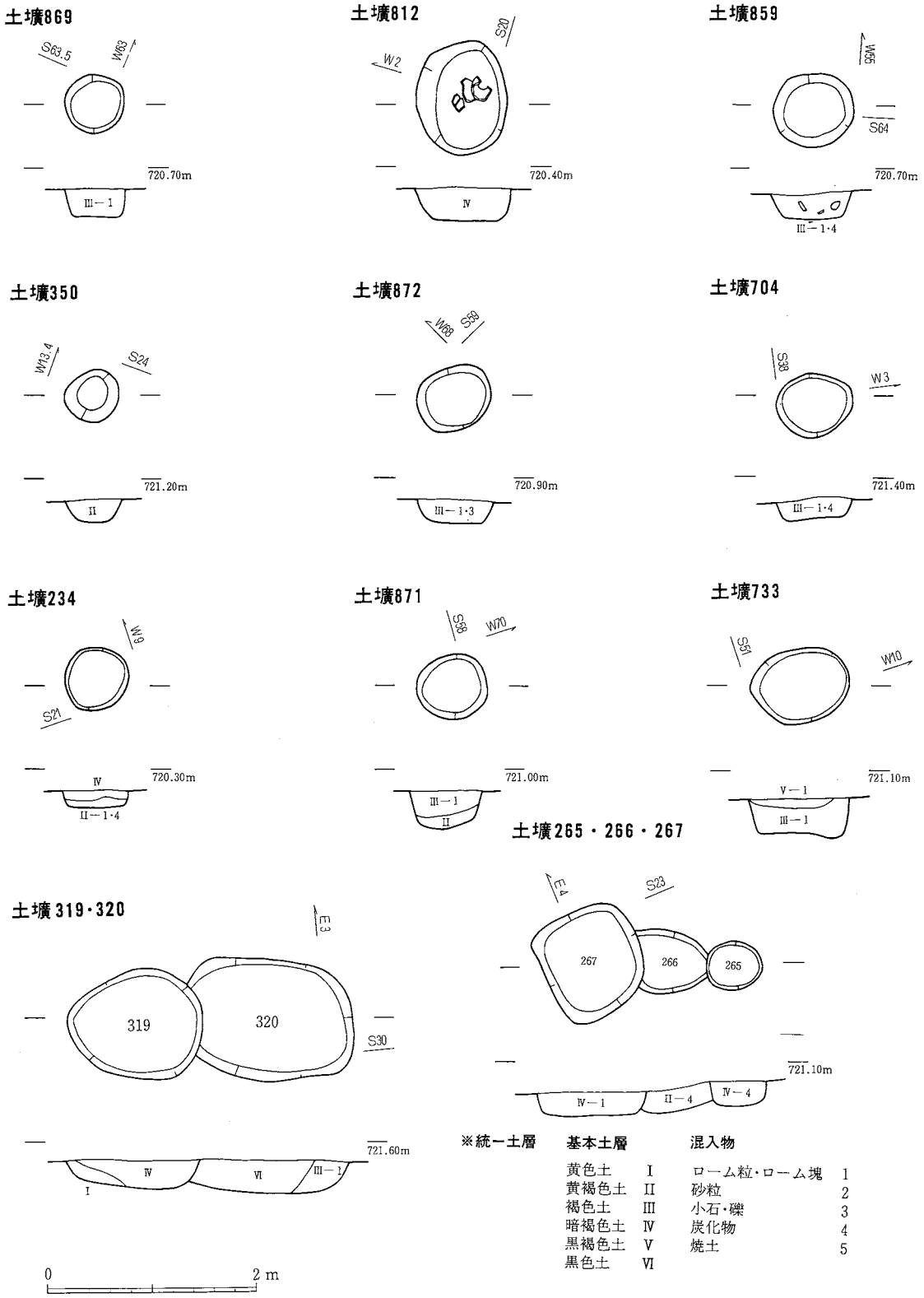
第28図　土壙配置図(3)


E6
N24
竪2
EW0
N18
N18
竪4
竪3
N12
N12
20住
373
375
374
N6
N6
21住
369
367
368
370
371
372
S3
W6
EW0
E6
E12
W78
W72
W66
W60
W54
S57
S57
871
872
858
854
805
862
855
873
867
874
875
868
865
876
44住
869
863
857
877
859
S63
S63
864
870
S69
S69
878
851
861
860
880
884
881
879
883
885
882
S75
W78
W72
W66
W60
W54

第29図　土壙配置図(4)


土壙806
S20
W2
720.50m
Ⅳ
Ⅳ－2
土壙190
S7
E4
720.60m
Ⅳ
土壙141
S13
W4
Ⅱ－2
Ⅱ－2
720.70m
Ⅳ－2
土壙856
W60
S70
S
720.40m
Ⅳ－1・2
S
土壙795
W8
S30
721.60m
Ⅳ－1
Ⅱ
Ⅱ－1
土壙134
W1
S8
720.40m
Ⅳ－5・骨片
土壙958
W24
S60
720.40m
Ⅴ－3
土壙654
S28
E2
721.30m
S
Ⅳ－1
土壙5
W32
S30
721.30m
Ⅳ－1・3・4
Ⅲ－1
土壙885
W69
S74
耕作土
720.60m
Ⅲ－1
Ⅴ
S
土壙147
E4
S9
720.70m
Ⅴ
Ⅴ－1
土壙686
S46
E5
721.10m
Ⅳ－1
0
1
2 m

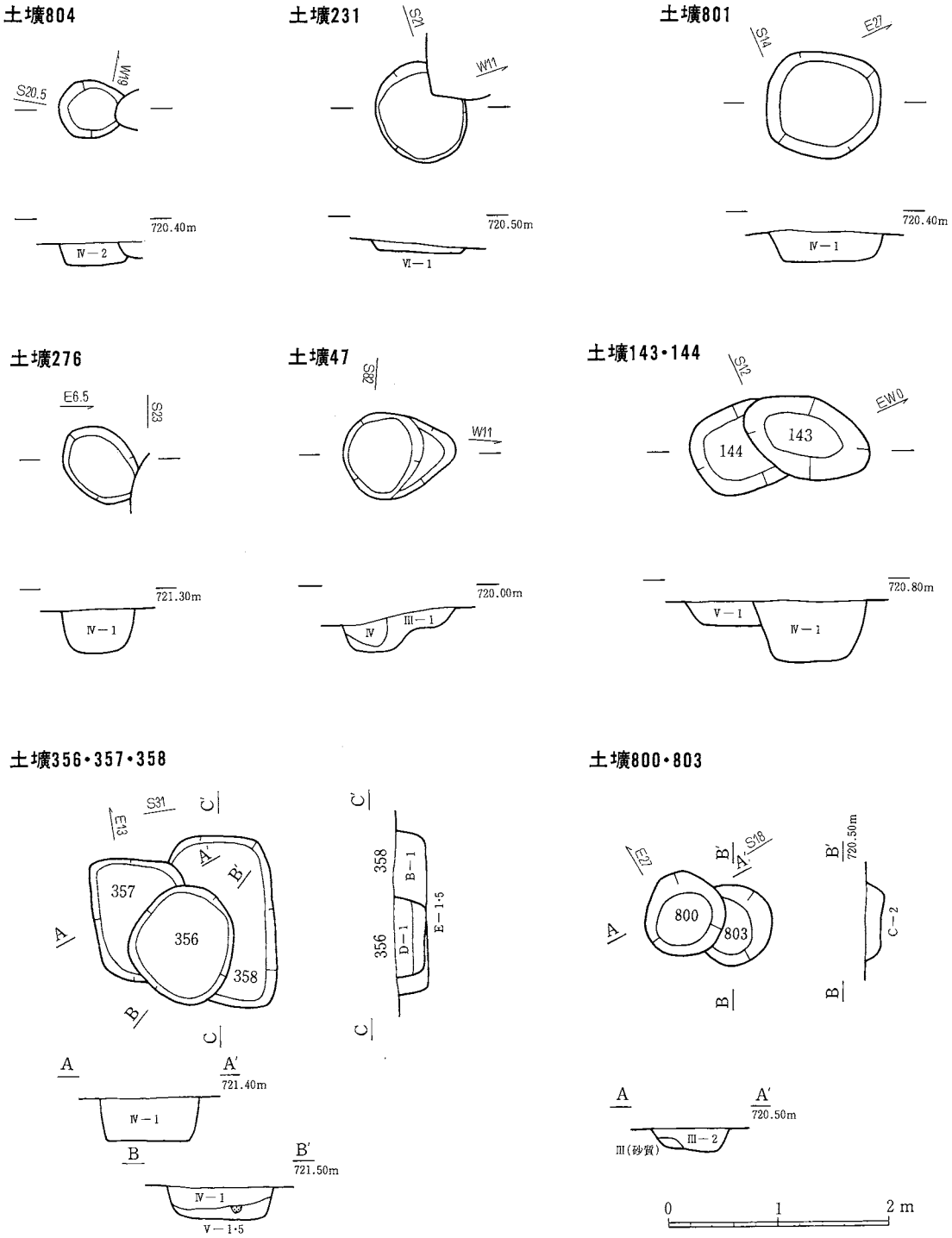
第30図　土壙(1)



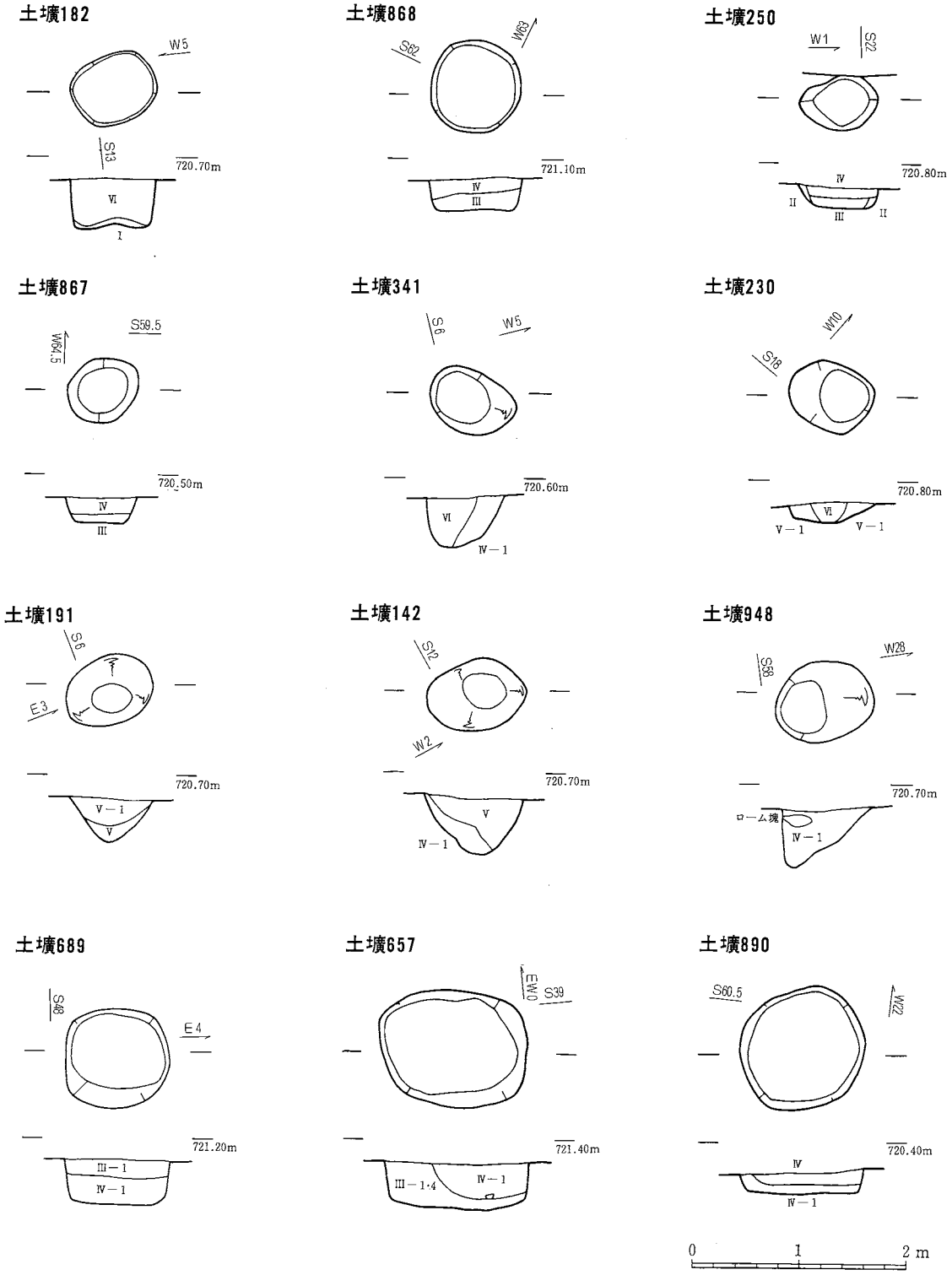
※統一土層

基本土層		混入物	
黄色土	I	ローム粒・ローム塊	1
黄褐色土	II	砂粒	2
褐色土	III	小石・礫	3
暗褐色土	IV	炭化物	4
黒褐色土	V	焼土	5
黒色土	VI		

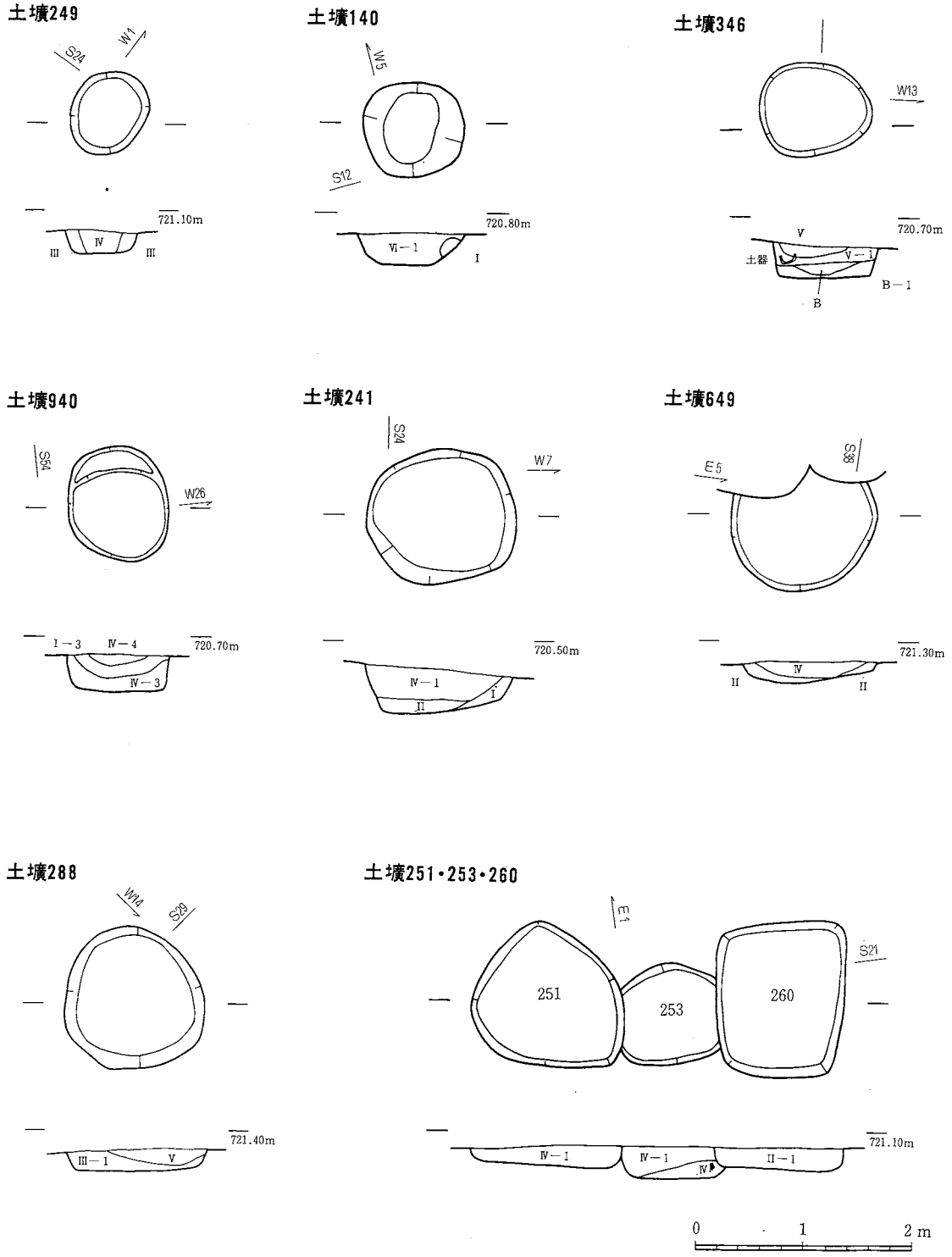
第31図　土壙(2)


土壙804
S20.5
W19
720.40m
Ⅳ－2
土壙231
S21
W11
720.50m
Ⅵ－1
土壙801
S14
E27
720.40m
Ⅳ－1
土壙276
E6.5
S23
721.30m
Ⅳ－1
土壙47
S32
W11
720.00m
Ⅳ
Ⅲ－1
土壙143・144
S12
EW0
143
144
720.80m
Ⅴ－1
Ⅳ－1
土壙356・357・358
S31
E13
357
356
358
A
A'
B
B'
C
C'
358
B－1
356
D－1
E－1・5
721.40m
Ⅳ－1
721.50m
Ⅳ－1
Ⅴ－1・5
土壙800・803
E27
S18
800
803
720.50m
C－2
720.50m
Ⅲ－2
Ⅲ(砂質)
0
1
2 m

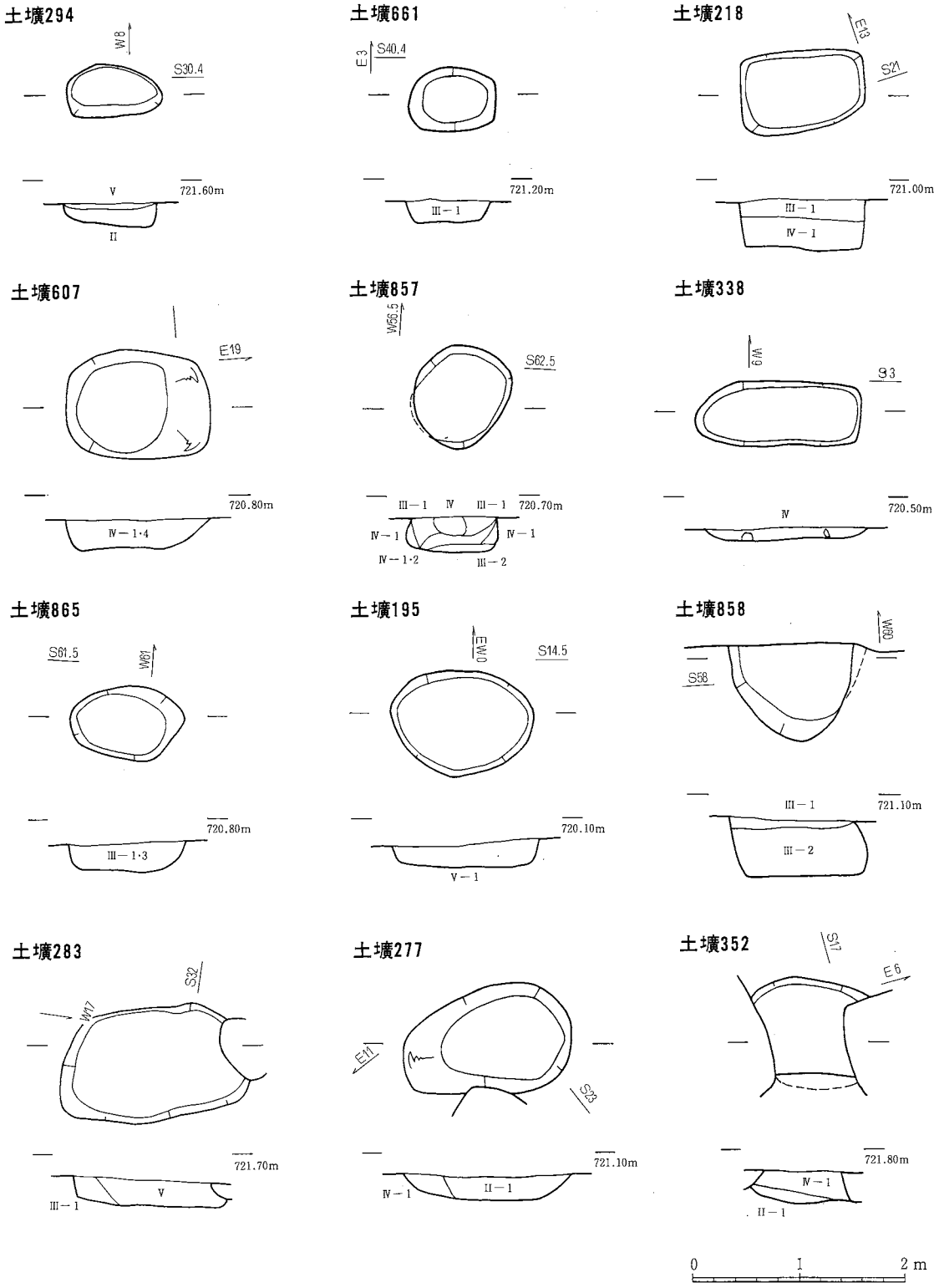
第32図　土壙(3)


土壙182
W5
S13
720.70m
VI
I
土壙868
S62
W63
721.10m
IV
III
土壙250
W1
S22
720.80m
IV
II
III
II
土壙867
S59.5
W64.5
720.50m
IV
III
土壙341
S6
W5
720.60m
VI
IV－1
土壙230
W10
S18
720.80m
VI
V－1
V－1
土壙191
S8
E3
720.70m
V－1
V
土壙142
S12
W2
720.70m
V
IV－1
土壙948
S68
W28
720.70m
ローム塊
IV－1
土壙689
S48
E4
721.20m
III－1
IV－1
土壙657
EW10
S39
721.40m
III－1·4
IV－1
土壙890
S60.5
W22
720.40m
IV
IV－1
0
1
2 m

第33図　土壙(4)

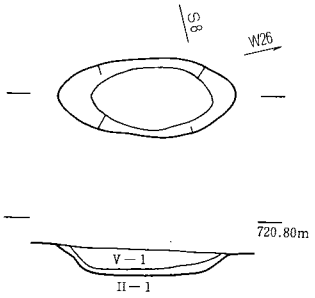

土壙249
S24
W1
721.10m
Ⅲ
Ⅳ
Ⅲ
土壙140
W5
S12
720.80m
Ⅵ－1
Ⅰ
土壙346
W13
720.70m
Ⅴ
土器
Ⅴ－1
B－1
B
土壙940
S54
W26
720.70m
Ⅰ－3
Ⅳ－4
Ⅳ－3
土壙241
S24
W7
720.50m
Ⅳ－1
Ⅰ
Ⅱ
土壙649
E5
S38
721.30m
Ⅳ
Ⅱ
Ⅱ
土壙288
W14
S28
721.40m
Ⅲ－1
Ⅴ
土壙251・253・260
E1
S21
251
253
260
721.10m
Ⅳ－1
Ⅳ－1
Ⅳ
Ⅱ－1
0
1
2 m

第34図　土壙(5)

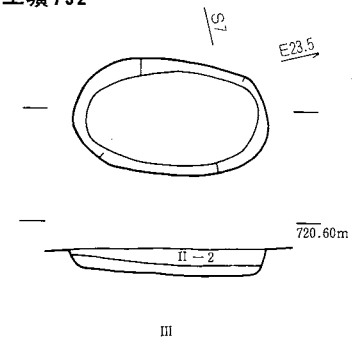

土壙294
W8
S30.4
V
721.60m
II
土壙661
E3
S40.4
721.20m
III－1
土壙218
E13
S21
721.00m
III－1
IV－1
土壙607
E19
720.80m
IV－1·4
土壙857
W56.5
S62.5
III－1
IV
III－1
720.70m
IV－1
IV－1
IV－1·2
III－2
土壙338
W9
S3
IV
720.50m
土壙865
S61.5
W61
720.80m
III－1·3
土壙195
E10
S14.5
720.10m
V－1
土壙858
W60
S58
III－1
721.10m
III－2
土壙283
S32
W17
721.70m
III－1
V
土壙277
E11
S23
721.10m
IV－1
II－1
土壙352
S17
E6
721.80m
IV－1
II－1
0
1
2 m

第35図　土壙(6)

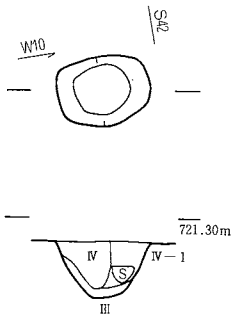
土壙23



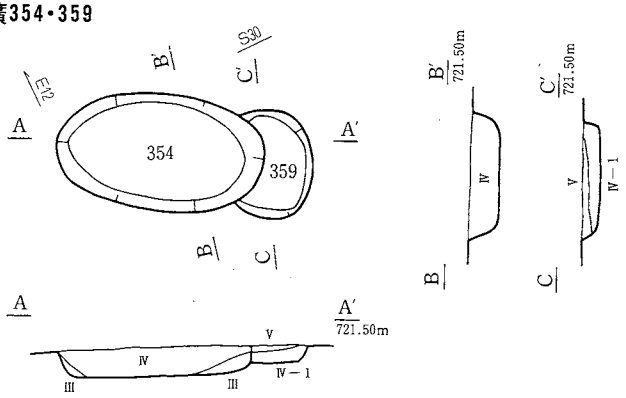
土壙792



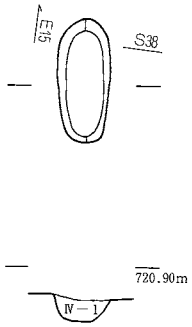
土壙725



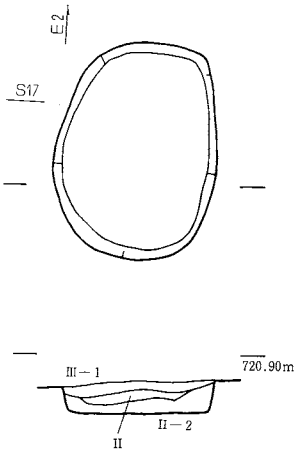
土壙354・359



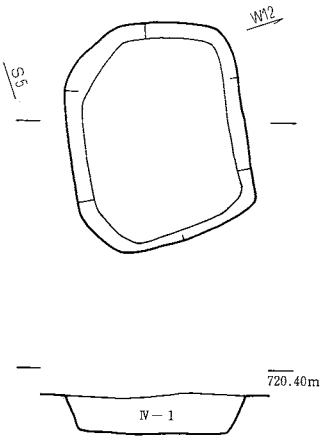
土壙788

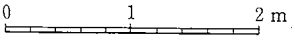


土壙201

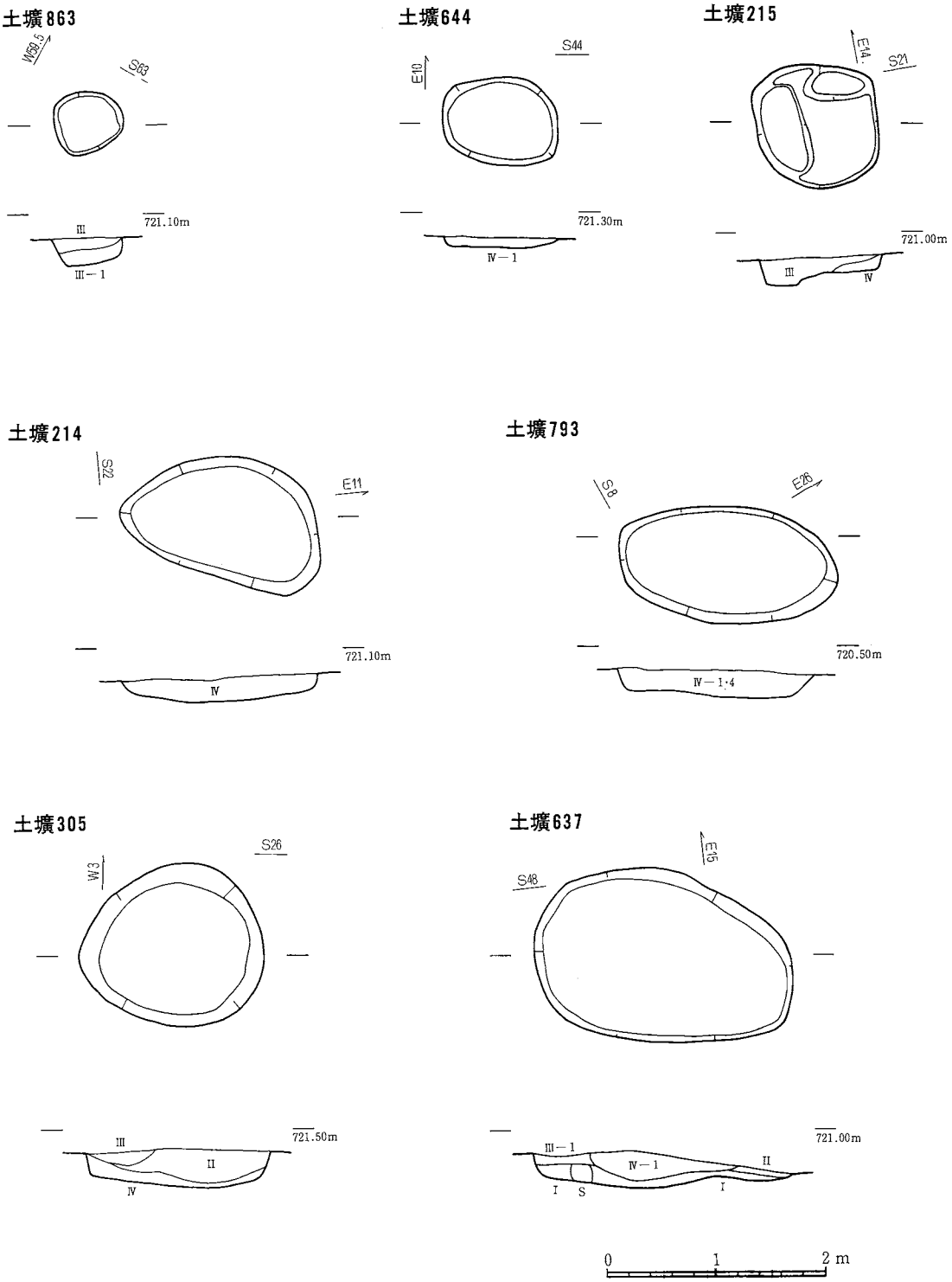


土壙339

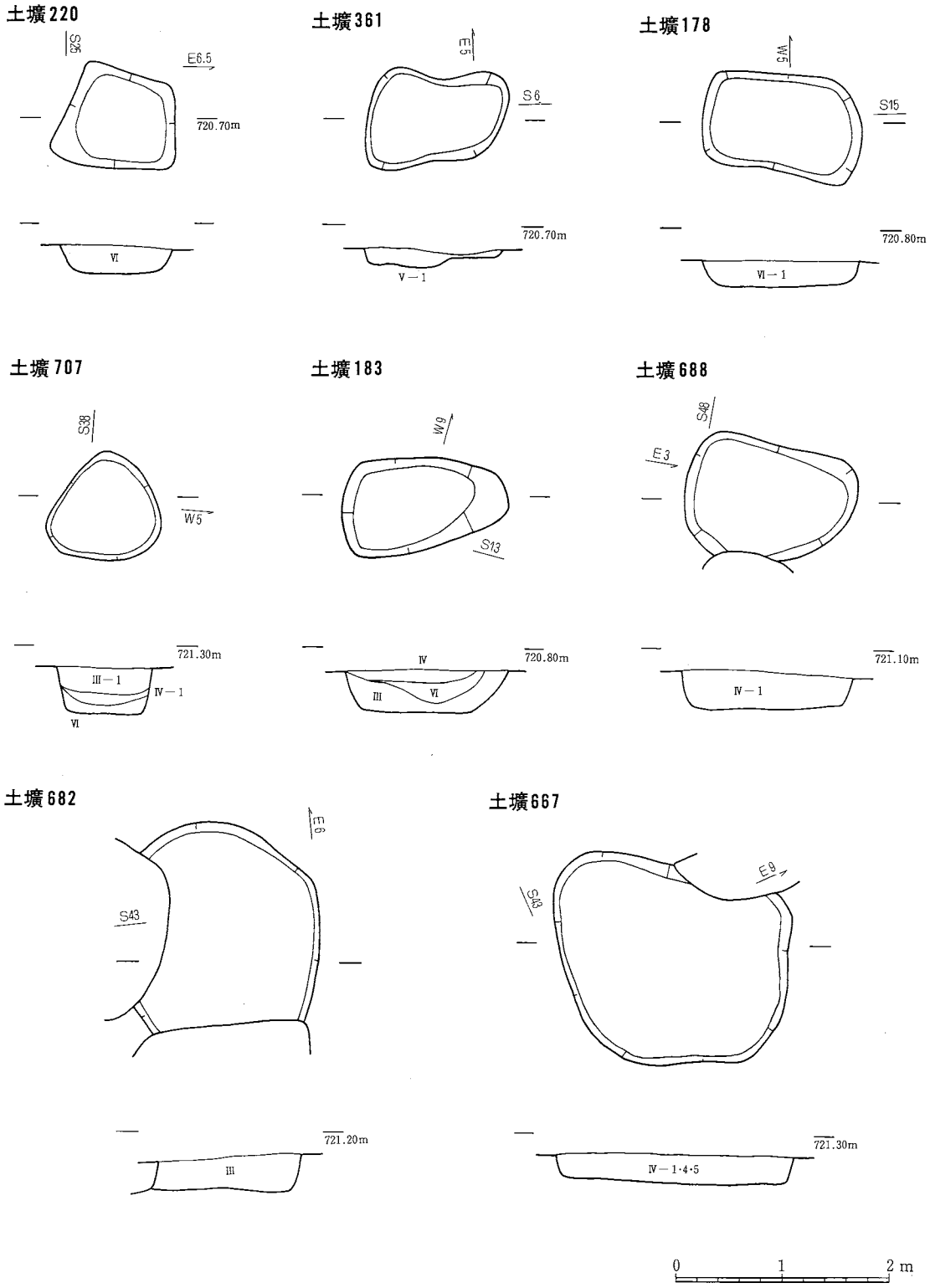




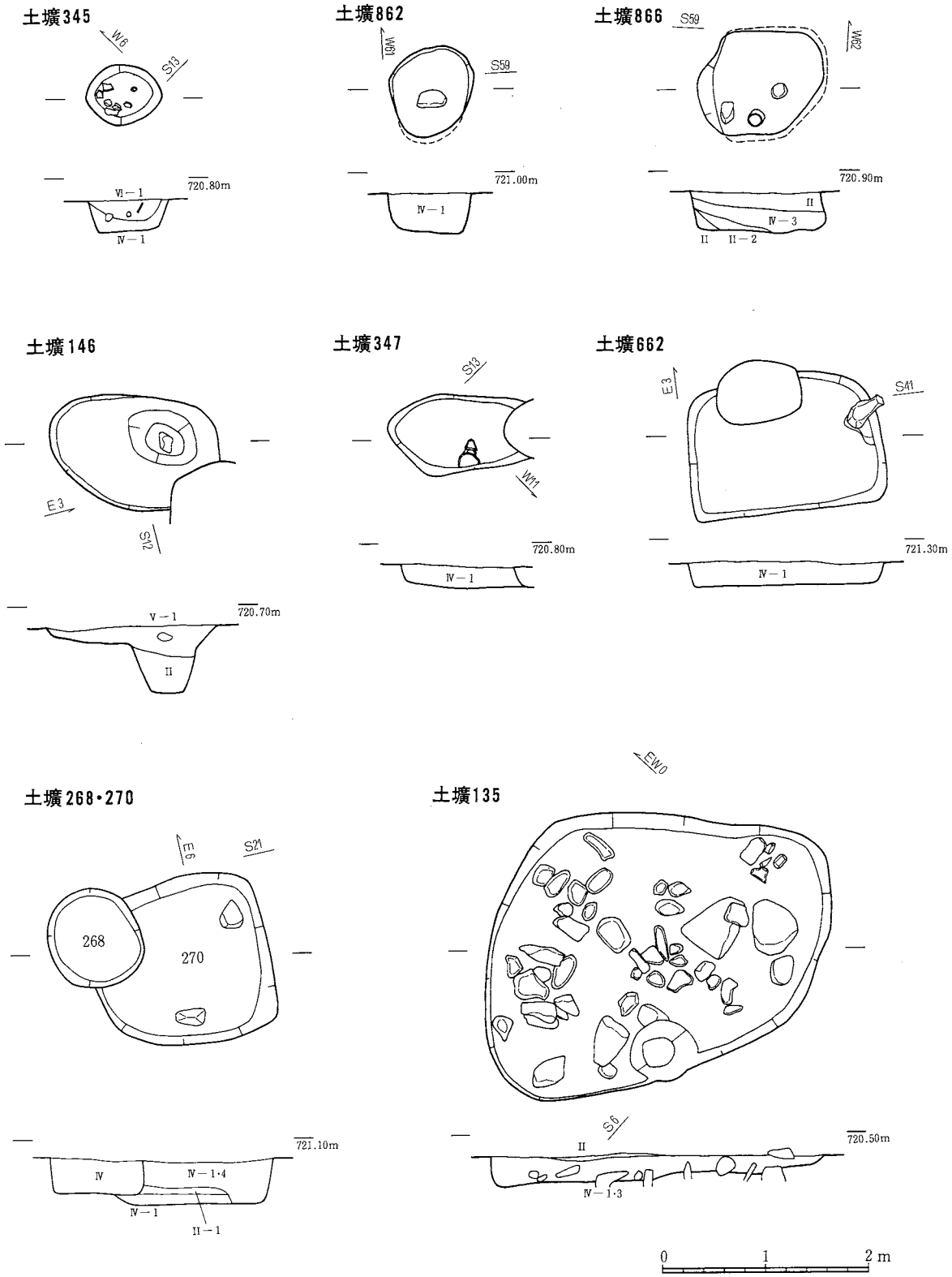
第36図　土壙(7)


土壙863
W59.5
S63
721.10m
Ⅲ
Ⅲ－1
土壙644
S44
E10
721.30m
Ⅳ－1
土壙215
E14
S21
721.00m
Ⅲ
Ⅳ
土壙214
S22
E11
721.10m
Ⅳ
土壙793
S8
E26
720.50m
Ⅳ－1·4
土壙305
S26
W3
721.50m
Ⅲ
Ⅱ
Ⅳ
土壙637
E15
S48
721.00m
Ⅲ－1
Ⅳ－1
Ⅱ
Ⅰ
S
Ⅰ
0
1
2 m

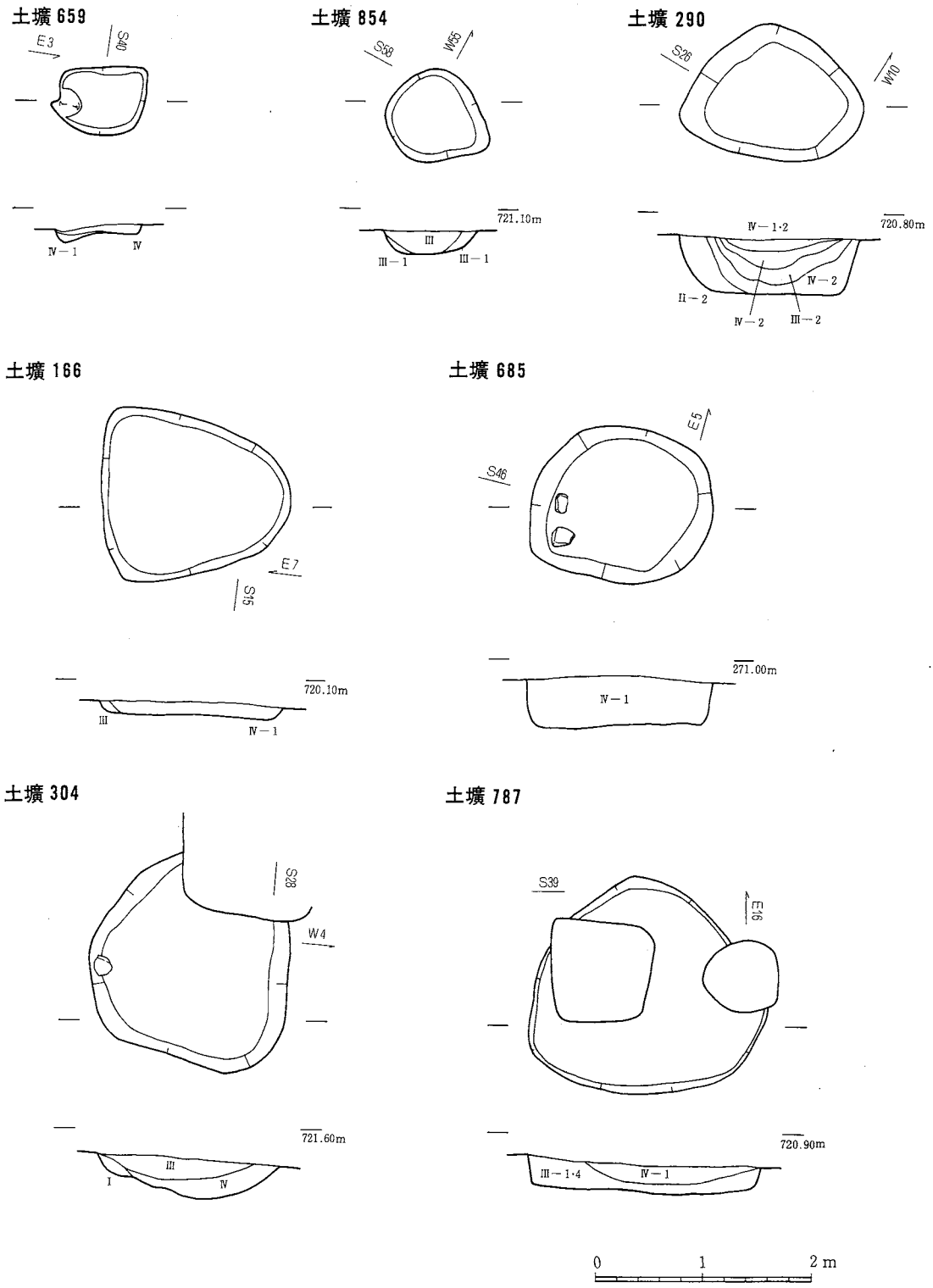
第37図　土壙(8)


土壙220
S26
E6.5
720.70m
VI
土壙361
E5
S6
720.70m
V－1
土壙178
W5
S15
720.80m
VI－1
土壙707
S38
W5
721.30m
III－1
IV－1
VI
土壙183
W9
S13
IV
720.80m
III
VI
土壙688
S48
E3
721.10m
IV－1
土壙682
E6
S43
721.20m
III
土壙667
E9
S43
721.30m
IV－1・4・5
0
1
2 m

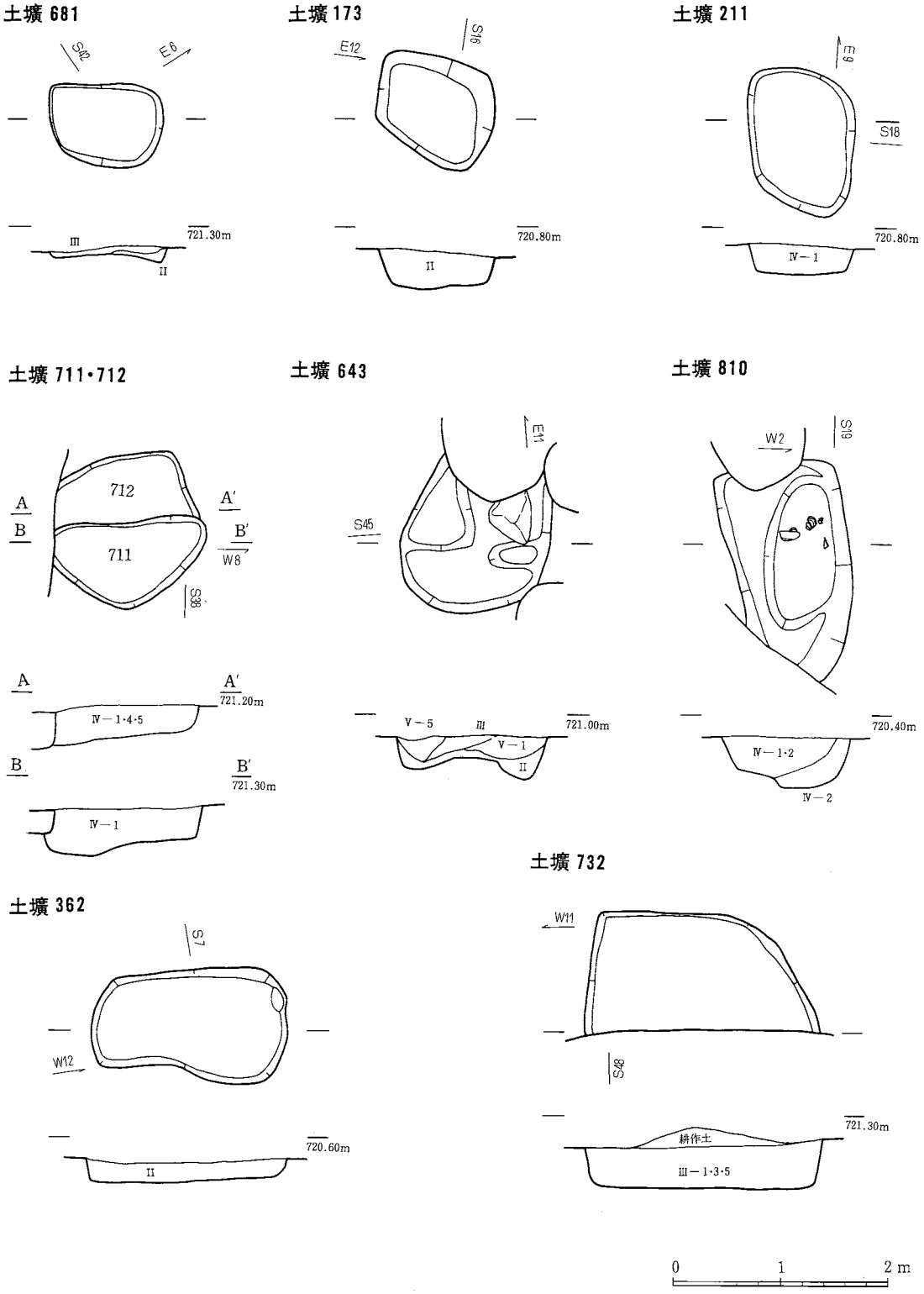
第38図　土壙(9)


土壙345
W6
S13
720.80m
Ⅵ－1
Ⅳ－1
土壙862
W61
S59
721.00m
Ⅳ－1
土壙866
S59
W62
720.90m
Ⅱ
Ⅳ－3
Ⅱ
Ⅱ－2
土壙146
E3
S12
720.70m
Ⅴ－1
Ⅱ
土壙347
S13
W11
720.80m
Ⅳ－1
土壙662
E3
S41
721.30m
Ⅳ－1
土壙268・270
E6
S21
268
270
721.10m
Ⅳ
Ⅳ－1・4
Ⅳ－1
Ⅱ－1
土壙135
EW10
S6
720.50m
Ⅱ
Ⅳ－1・3
0
1
2 m

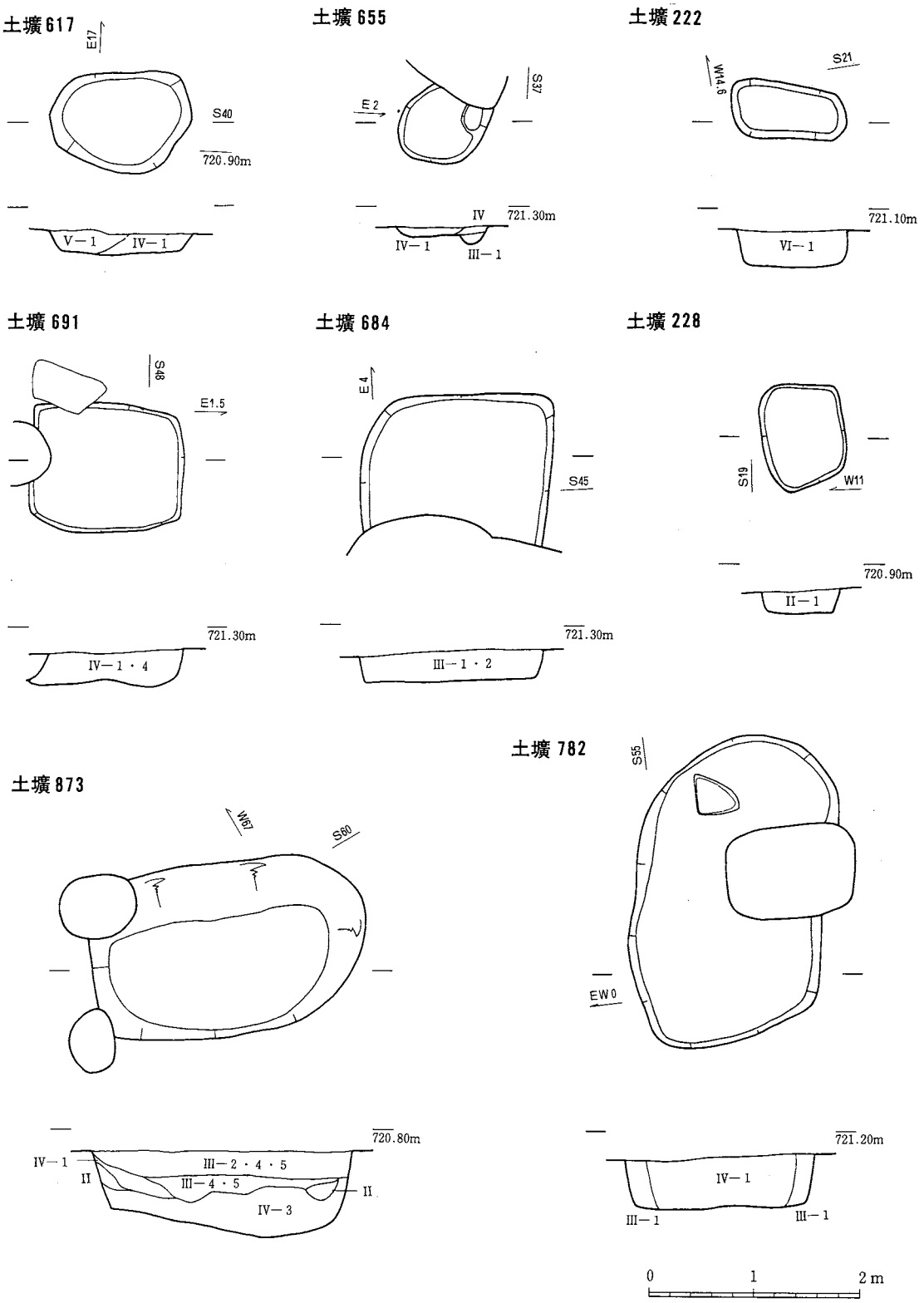
第39図　土壙(10)


土壙 659
E3
S40
Ⅳ－1
Ⅳ
土壙 854
S58
W45
721.10m
Ⅲ
Ⅲ－1
Ⅲ－1
土壙 290
S26
W10
720.80m
Ⅳ－1·2
Ⅳ－2
Ⅱ－2
Ⅳ－2
Ⅲ－2
土壙 166
E7
S15
720.10m
Ⅲ
Ⅳ－1
土壙 685
E5
S46
271.00m
Ⅳ－1
土壙 304
S28
W4
721.60m
Ⅲ
Ⅰ
Ⅳ
土壙 787
S39
E16
720.90m
Ⅲ－1·4
Ⅳ－1
0
1
2 m

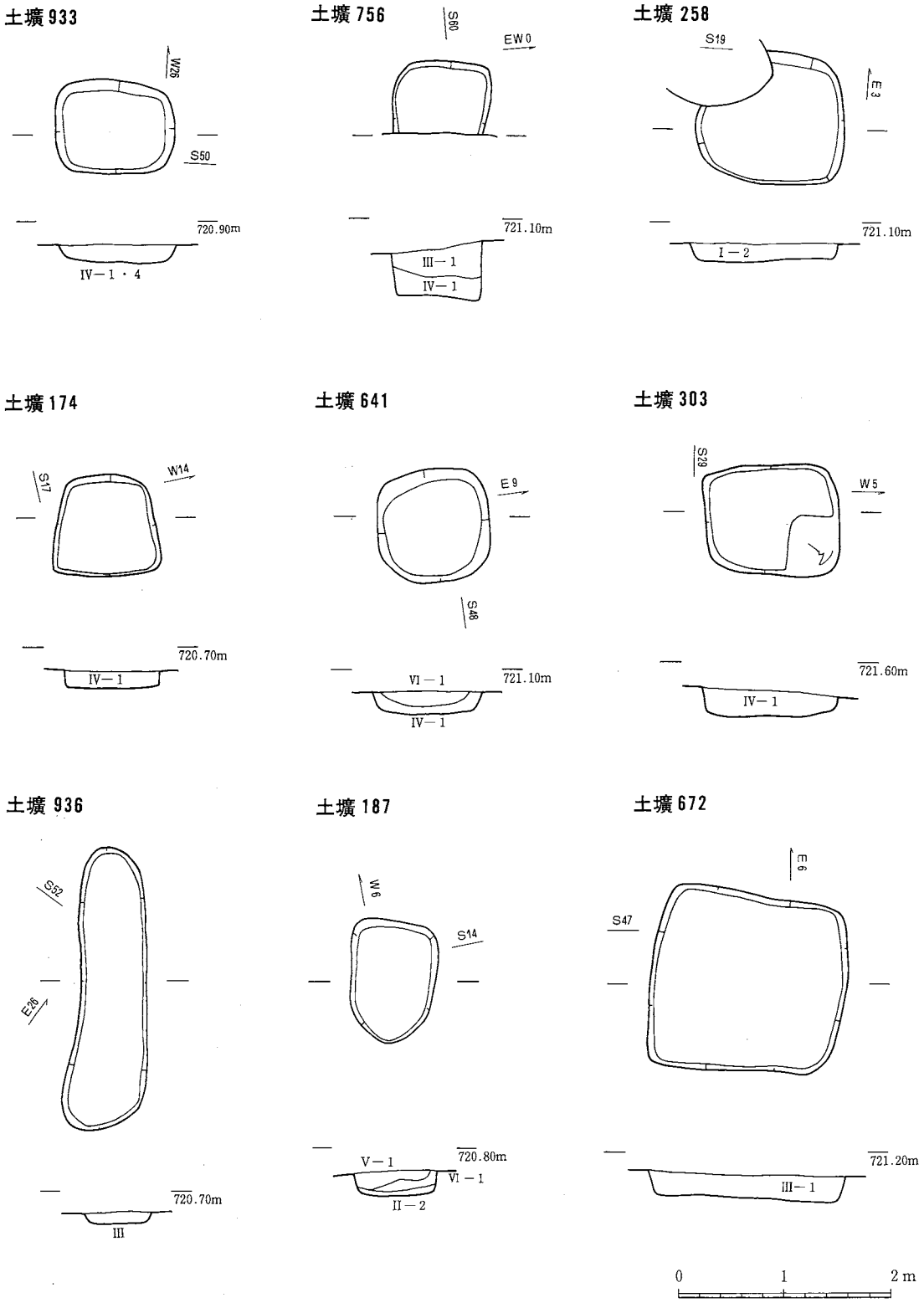
第40図　土壙(11)


土壙 681
S42
E6
721.30m
III
II
土壙 173
E12
S16
720.80m
II
土壙 211
E9
S18
720.80m
IV－1
土壙 711・712
712
711
A
B
A′
B′
W8
S36
A
A′
721.20m
IV－1・4・5
B
B′
721.30m
IV－1
土壙 643
E11
S45
V－5
III
V－1
II
721.00m
土壙 810
W2
S19
720.40m
IV－1・2
IV－2
土壙 732
W11
S48
721.30m
耕作土
III－1・3・5
土壙 362
S7
W12
720.60m
II
0
1
2 m

第41図　土壙(12)

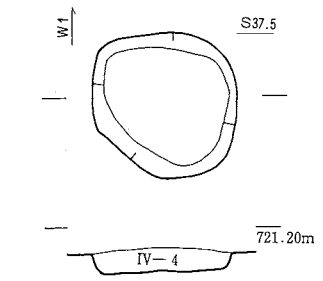

土壙617
E17
S40
720.90m
V－1
IV－1
土壙655
E2
S37
IV
721.30m
IV－1
III－1
土壙222
S21
W14.6
721.10m
VI－1
土壙691
S48
E1.5
721.30m
IV－1・4
土壙684
E4
S45
721.30m
III－1・2
土壙228
S19
W11
720.90m
II－1
土壙873
W67
S60
720.80m
IV－1
II
III－2・4・5
III－4・5
II
IV－3
土壙782
S55
EW0
721.20m
IV－1
III－1
III－1
0
1
2m

第42図　土壙(13)

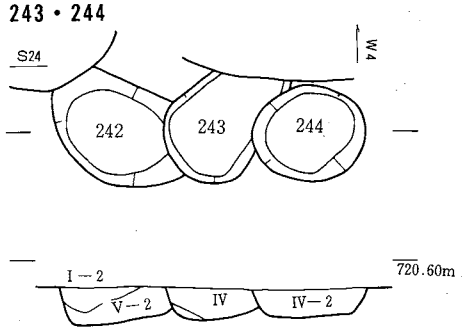

土壙 933
W26
S50
720.90m
IV－1・4
土壙 756
S60
EW0
721.10m
III－1
IV－1
土壙 258
S19
E3
721.10m
I－2
土壙 174
S17
W14
720.70m
IV－1
土壙 641
E9
S48
VI－1
721.10m
IV－1
土壙 303
S29
W5
721.60m
IV－1
土壙 936
S52
E26
720.70m
III
土壙 187
W6
S14
V－1
720.80m
VI－1
II－2
土壙 672
E6
S47
721.20m
III－1
0
1
2 m

第43図　土壙(14)

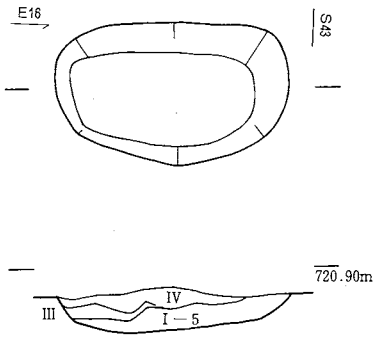
土壙656



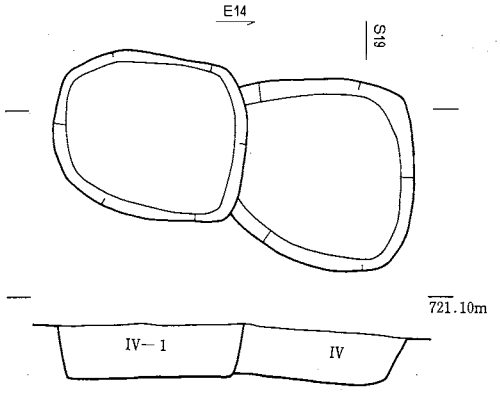
土壙242・243・244



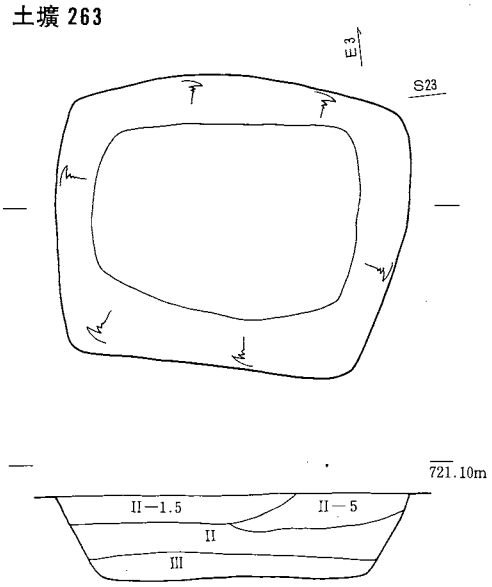
土壙632



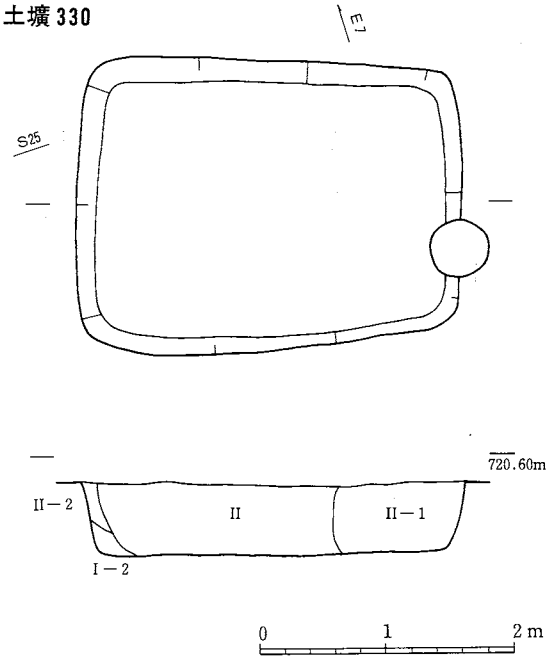
土壙216　土壙198



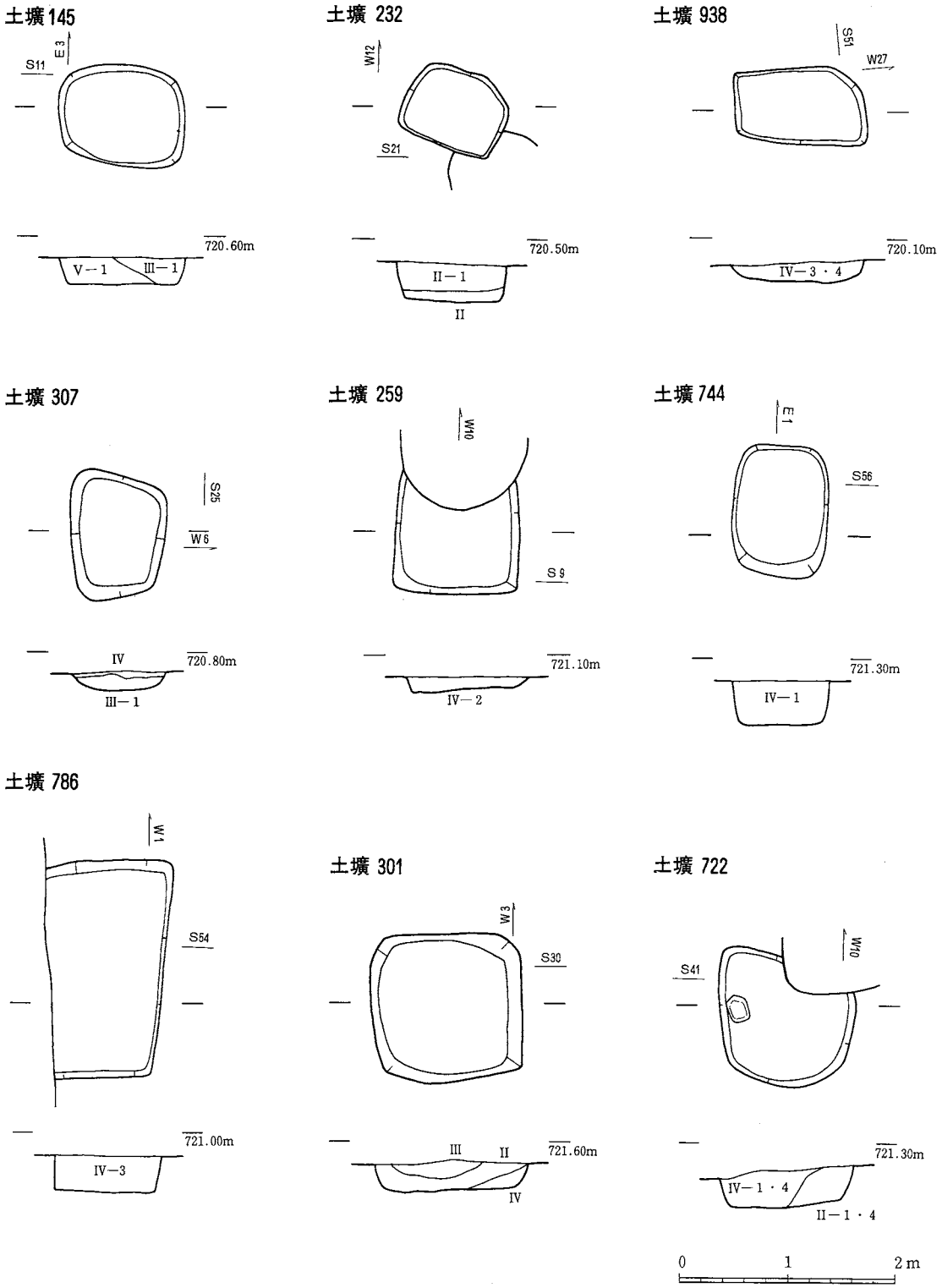
土壙263



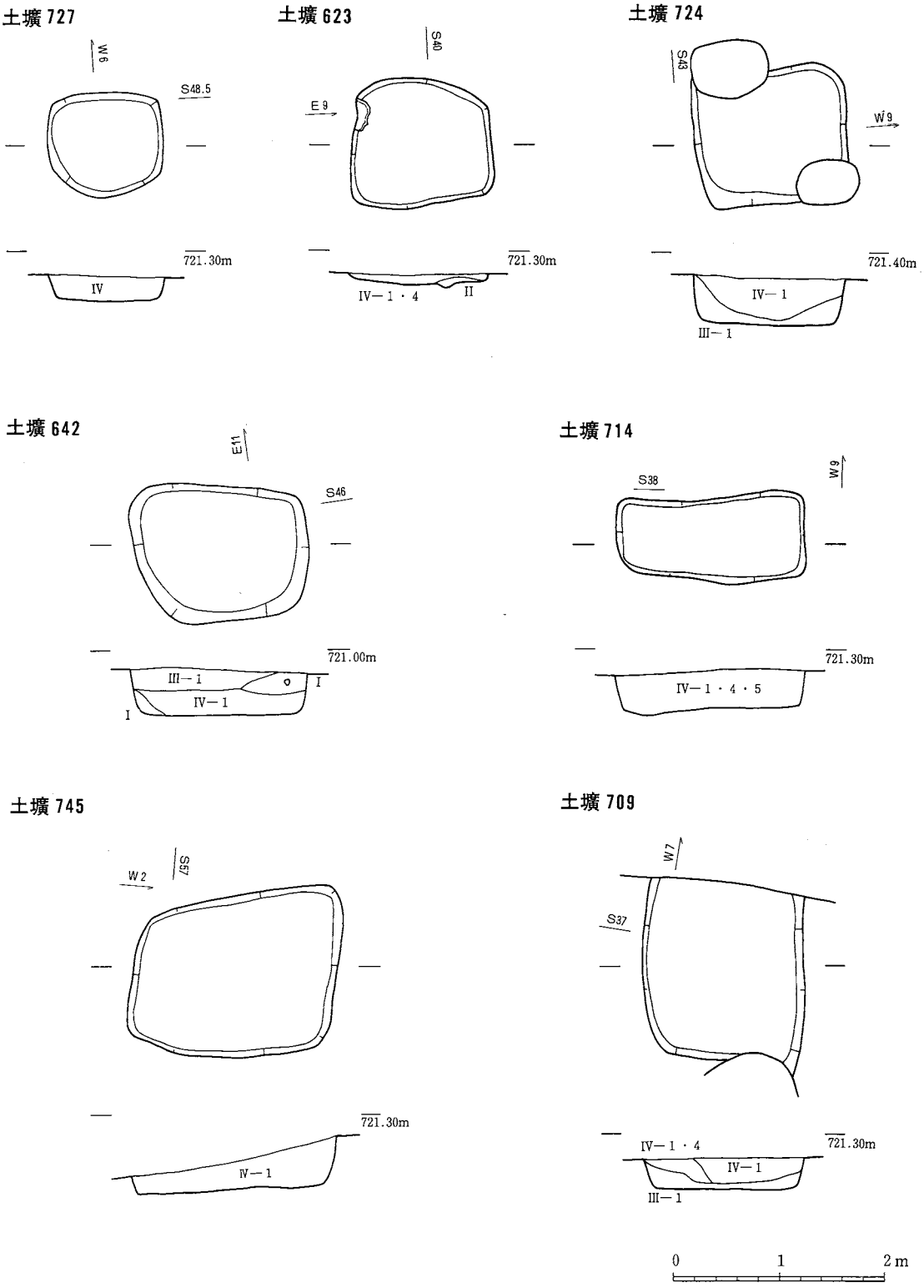
土壙330



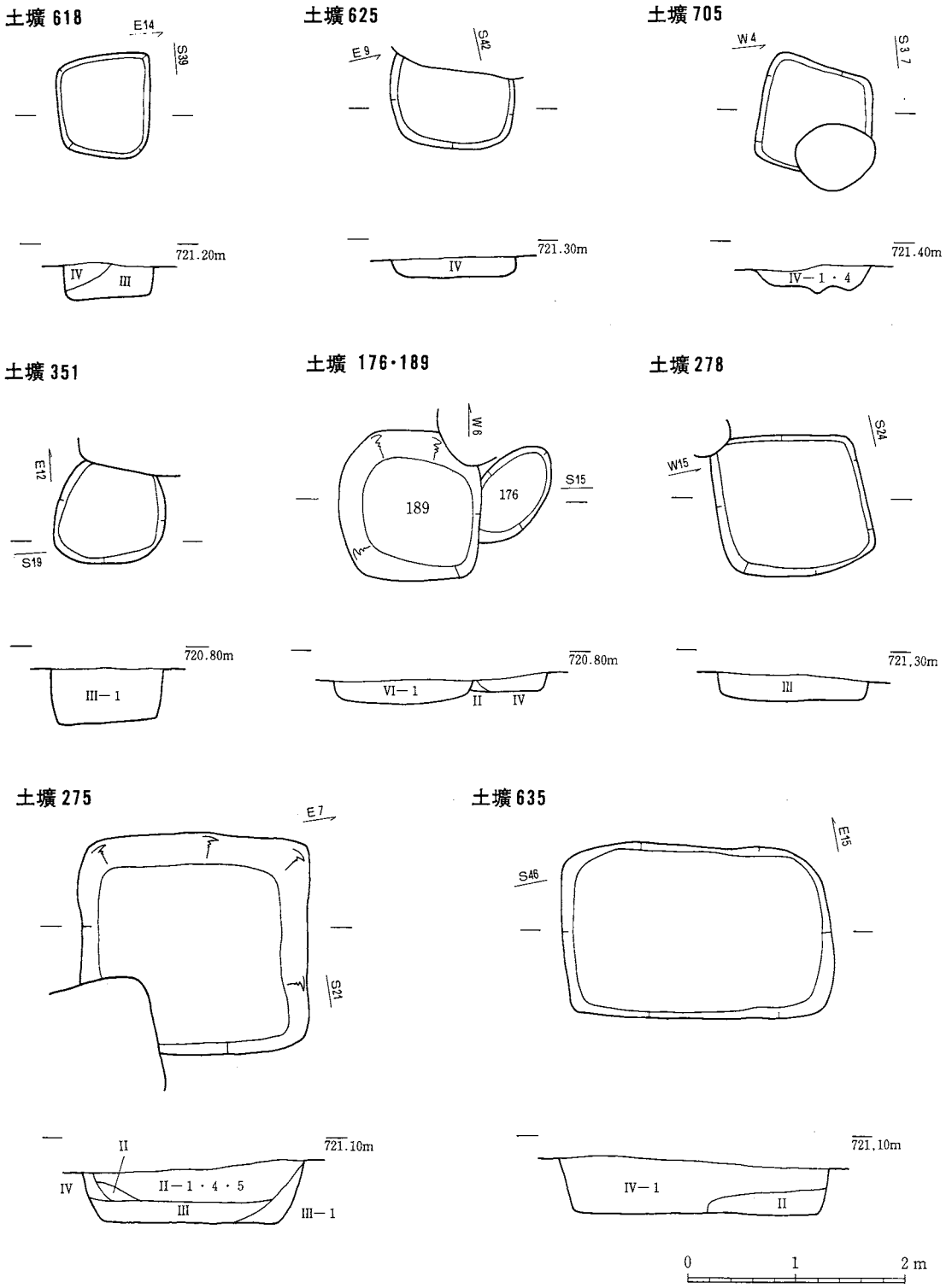
第44図　土壙(15)


土壙145
S11
E3
720.60m
V－1
III－1
土壙 232
W12
S21
720.50m
II－1
II
土壙 938
S51
W27
720.10m
IV－3・4
土壙 307
S25
W8
IV
720.80m
III－1
土壙 259
W10
S9
721.10m
IV－2
土壙 744
E1
S56
721.30m
IV－1
土壙 786
W1
S54
721.00m
IV－3
土壙 301
W3
S30
III
II
721.60m
IV
土壙 722
W10
S41
721.30m
IV－1・4
II－1・4
0
1
2m

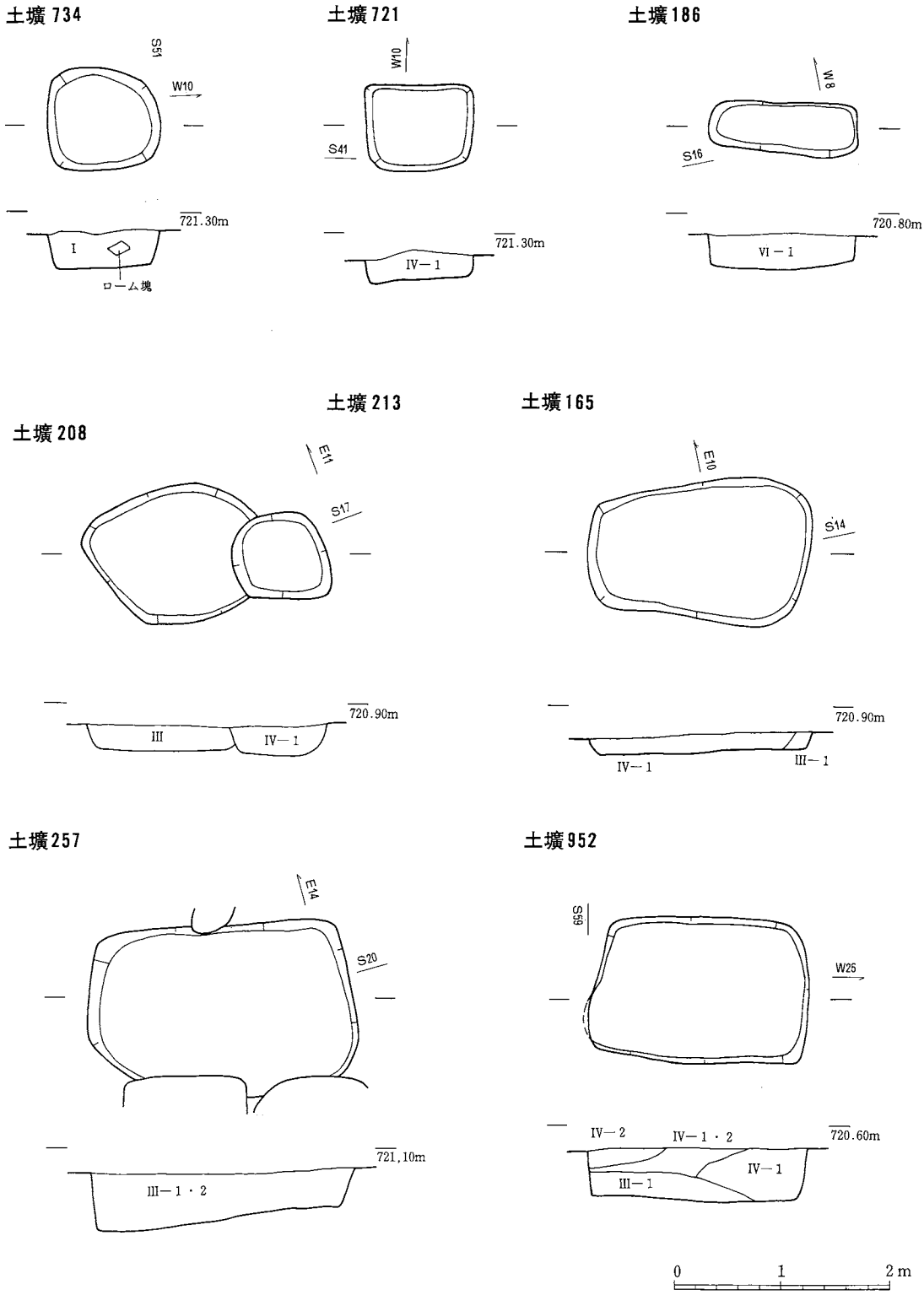
第45図　土壙(16)


土壙 727
W 6
S48.5
721.30m
IV
土壙 623
S40
E 9
721.30m
IV－1・4
II
土壙 724
S43
W 9
721.40m
IV－1
III－1
土壙 642
E11
S46
721.00m
III－1
IV－1
I
土壙 714
S38
W 9
721.30m
IV－1・4・5
土壙 745
S57
W 2
721.30m
IV－1
土壙 709
W 7
S37
IV－1・4
721.30m
IV－1
III－1
0
1
2 m

第46図　土壙(17)

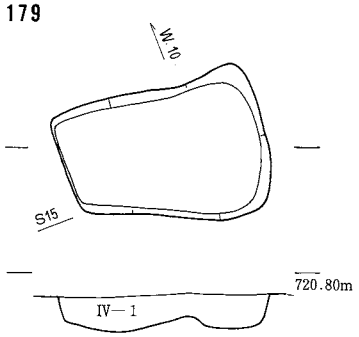

土壙 618
E14
S39
721.20m
IV
III
土壙 625
E9
S42
721.30m
IV
土壙 705
W4
S37
721.40m
IV−1・4
土壙 351
E12
S19
720.80m
III−1
土壙 176・189
W6
189
176
S15
720.80m
VI−1
II
IV
土壙 278
S24
W15
721.30m
III
土壙 275
E7
S21
721.10m
II
IV
II−1・4・5
III
III−1
土壙 635
E15
S46
721.10m
IV−1
II
0
1
2 m

第47図　土壙(18)

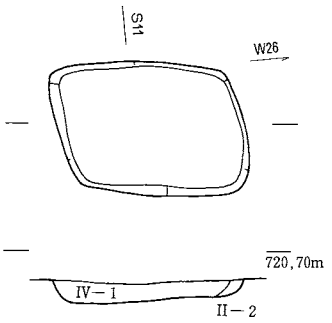

土壙 734
S51
W10
721.30m
I
ローム塊
土壙 721
W10
S41
721.30m
IV－1
土壙 186
W8
S16
720.80m
VI－1
土壙 208
E11
S17
720.90m
III
IV－1
土壙 213
土壙 165
E10
S14
720.90m
IV－1
III－1
土壙 257
E14
S20
721.10m
III－1・2
土壙 952
S59
W25
IV－2
IV－1・2
720.60m
IV－1
III－1
0
1
2 m

第48図　土壙(19)

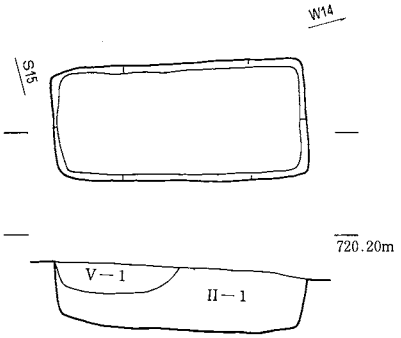
土壙179



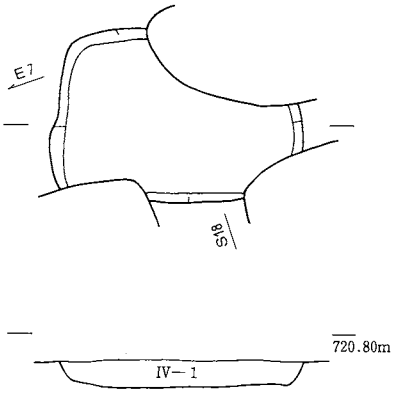
土壙21



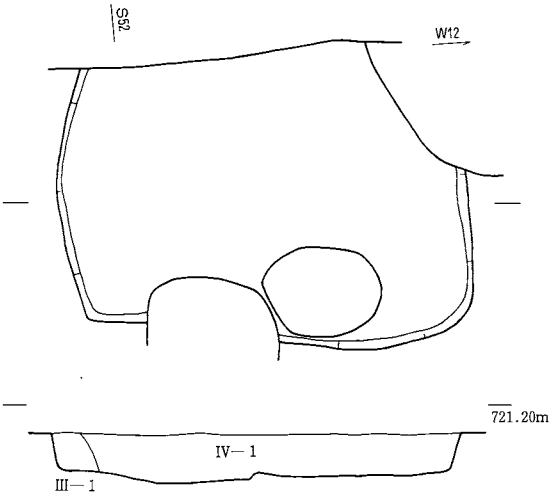
土壙175



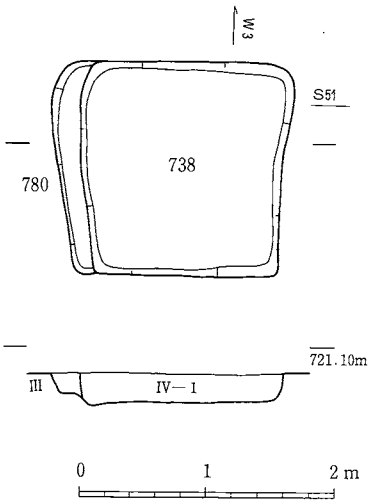
土壙210



土壙785

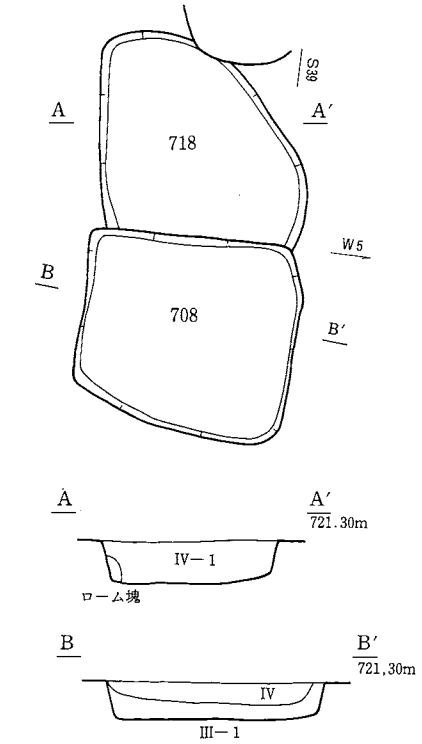


土壙738・780

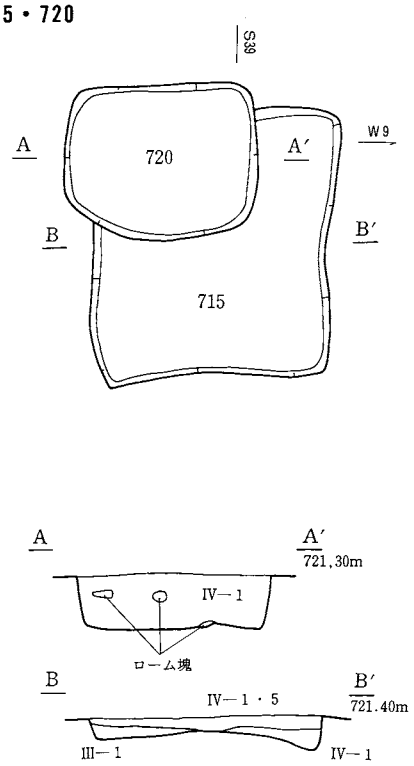


第49図　土壙(20)

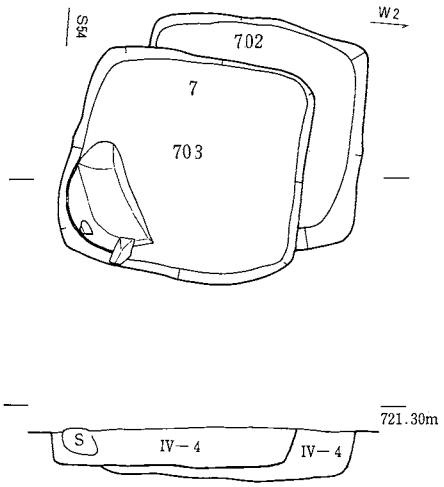
土壙 708・718



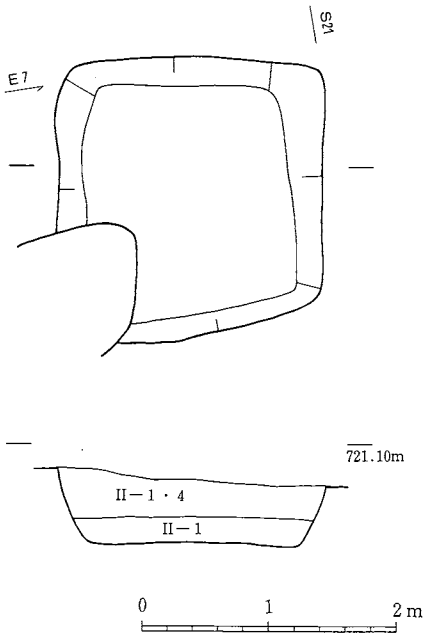
土壙 715・720



土壙 702・703

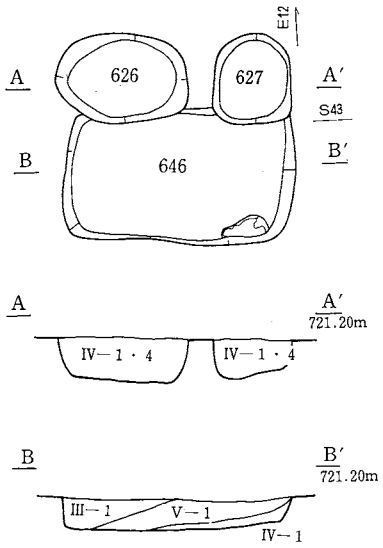


土壙 275

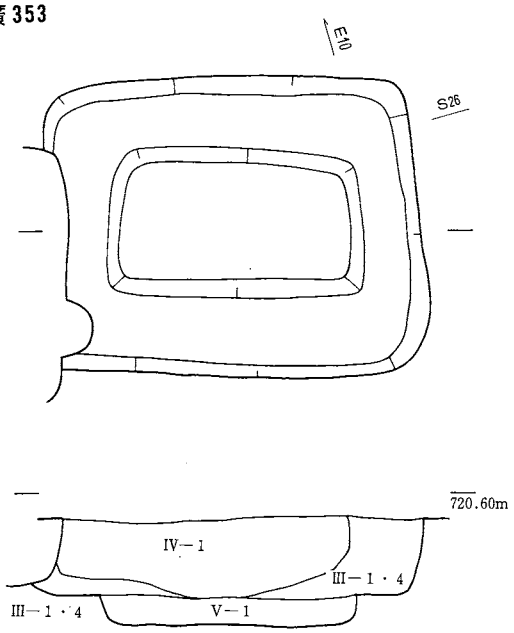


第50図　土壙(21)

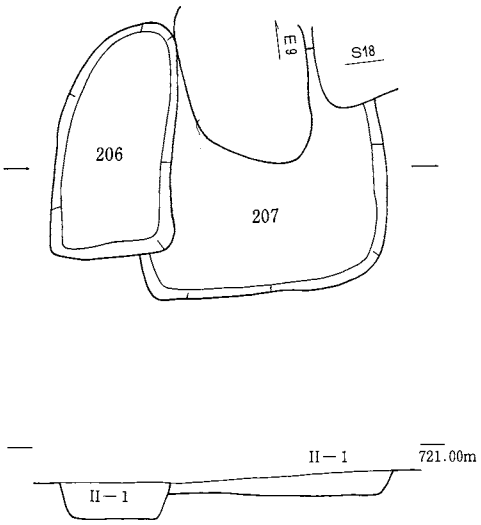
土壙626・627・646



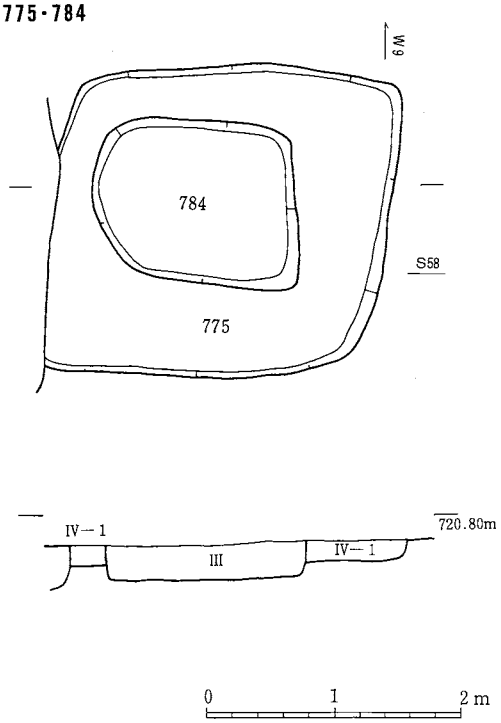
土壙353



土壙206・207

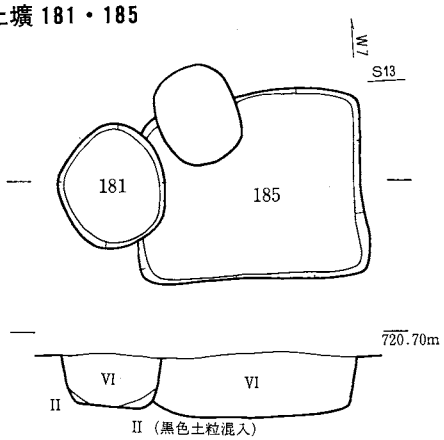


土壙775・784

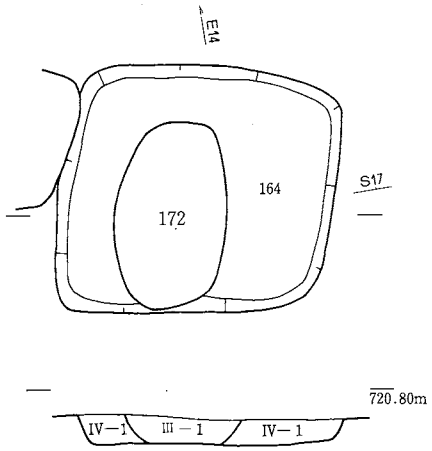


第51図　土壙(22)

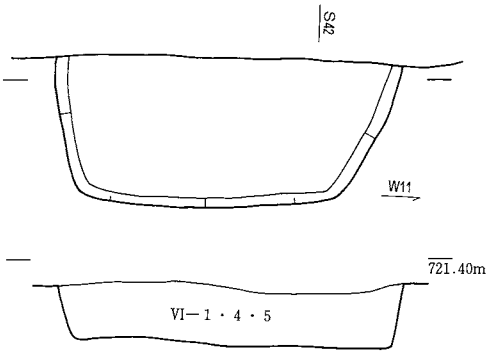
土壙 181・185



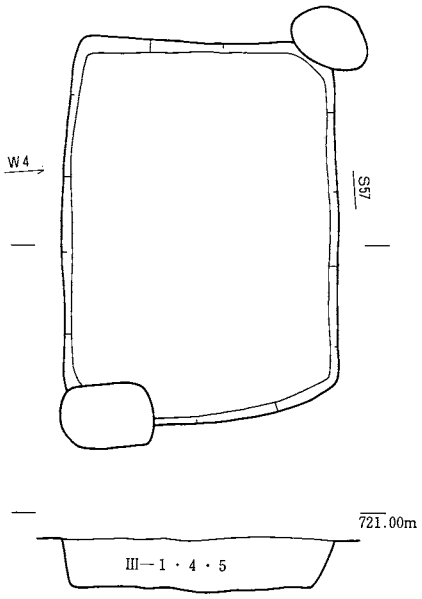
土壙 164・172



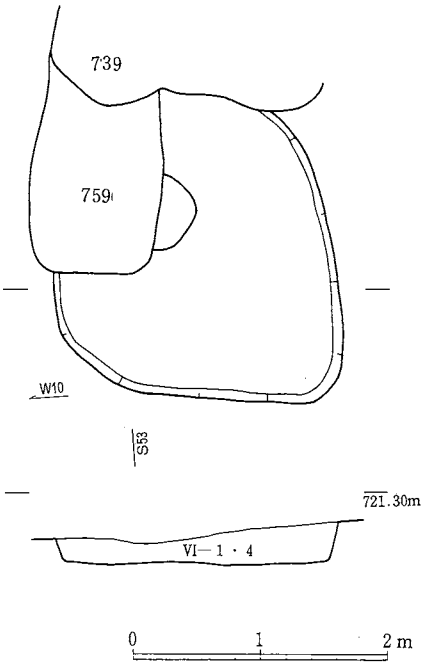
土壙 726



土壙 777



土壙 760



第52図　土壙(23)

表2

向畑II土壙一覧表

番号	掲載図	位置	平面形 規模(cm)	断面形 深さ(cm)	覆土の特徴	切り合い関係 >…は切る <…は切られる	備考
1		S30—W30	隅丸長方形179×108	E20	b		中世以降
2		S30—W30	長方形(234)×124	F20	b		中世以降
3		S30—W30	楕円形118×52	B30	b		中世以降
4		S24—W30	隅丸方形110×99	B14	b		中世以降
5	30	S24—W30	不整方形113×107	B36	a		縄文時代
6		S24—W30	方形116×(112)	B18	b		中世以降
7		S24—W30	円形58×53	B30	b		中世以降
8		S24—W30	円形56×51	B12	a		縄文時代
9		S24—W30	円形60×57	E14	a		縄文時代？
10		S18—W24	円形74×74	A36	a		縄文時代
11		S24—W30	不整方形148×110	B18	b		中世以降
12		S24—W30	方形96×78	B12	b		中世以降
13		S24—W30	不整方形80×64	B18			
14		S24—W24	不整方形110×(58)	D24	a		縄文時代
15		S18—W30	方形154×136	B14	b		中世以降
16		S12—W24	不整方形82×72	10	a		縄文時代
17		S12—W30	長方形(162)×107	B20	b		中世以降
18		S12—W24	不明(70)×(19)	C46	b		中世以降
19		S12—W24	不整方形(105)×86	C20	b		中世以降
20		S 6—W24	不整方形(118)×94	E34	b		中世以降
21	49	S 6—W24	長方形147×108	B18	b		中世以降
22		S 6—W24	不整方形108×72	C14	b	<P14	中世以降
23	36	S 6—W24	楕円形103×64	B21	a		縄文時代
24		S 6—W24	楕円形57×35	6	a		縄文時代
25		NS0—W24	楕円形58×47	9			
26		NS0—W18	方形80×71	A18	a		縄文時代
27		N18—W12	隅丸方形73×57	B48	b	>1住	古墳時代前期
28		N18—W12	隅丸方形69×59	B60	b	>1住	古墳時代前期
29		N21—W 6	不整方形82×(54)	B10	b		中世以降
30		N12—W12	不整楕円形(125)×(33)	B10	a	<1住	縄文時代
31		N12—W12	楕円形246×100	B20	a	>1住	古墳時代前期？
32		N12—W12	楕円形86×40	B22	a		縄文時代？
33		N12—W12	円形52×50	C10	a		縄文時代
34		N12—W18	円形66×58	E14	a		縄文時代
35		N 6—W18	楕円形163×110	41	a		縄文時代
36		N 6—W12	不整方形119×(112)	72	a		縄文時代
37		N 6—W 6	隅丸方形78×72	40			古墳時代土器出土
38							
39		S72—W30	楕円形137×95	E20	a		縄文時代？
40		S78—W30	楕円形143×89	E20	b		中世以降
41		S78—W30	楕円形87×50	E26	b		中世以降
42		S72—W30	隅丸方形98×75	B24	b		中世以降
43		S72—W24	楕円形173×123	B26	a		縄文時代？
44		S78—W24	隅丸方形102×86	B22	b		中世以降

番号	掲載図	位　　置	平面形 規模(cm)	断面形 深さ(cm)	覆土の 特　徴	切り合い関係 ＞…は切る　＜…は切られる	備　考
45		S78—W18	楕円形107×68	B12	b		中世以降
46		S72—W12	隅丸長方形186×129	B22	a		縄文時代？
47	32	S78—W 6	不整楕円形103×80	F42	a	＞土壙48	縄文時代？
48		S78—W 6	楕円形(110)×84	C16	a	＜土壙47	縄文時代？
49		S78—W 6	楕円形117×100	E22	b	＜土壙50	中世以降
50		S78—W 6	円形92×76	B 8	b	＞土壙49	中世以降
51		S78—W18	隅丸方形167×164	21	a		縄文時代
128		S 6—W 6	隅丸方形139×119	B34	b	＞土壙259・200, ＞11住	中世以降
129		S 6—W 6	隅丸方形161×114	E14	a	＞11住	古墳時代前期
130		S 6—W 6	楕円形118×89	B24	b	＞11住	中世以降
131		S 6—W 6	不整円形(130)×130	C10		＞11住	古墳時代前期？
132		S 6—W 6	円形136×121	B10	a	＜P67	縄文時代
133		S 6—EW0	楕円形150×111	C20	a		縄文時代
134	30	S 6—EW 0	長方形102×66	B17			
135	39	NS0—EW0	隅丸方形329×269	B32	a		縄文時代？
136		S 6—EW0	隅丸方形97×80	F 6	a	＞土壙136	縄文時代？
137		S 6—EW0	隅丸方形(120)×98	E16	a	＜土壙137	縄文時代？
138		S 6—EW0	楕円形72×62	13			
139		S 6—EW0	隅丸方形(83)×67	C 6	a	＜土壙343	縄文時代
140	34	S 6—EW0	隅丸方形95×90	C44	a		縄文時代
141	30	S12—EW0	楕円形105×71	B16	b		中世以降
142	33	S 6—EW0	楕円形88×68	C45	b		中世以降
143	32	S 6—EW0	楕円形108×77	B28	a	＞土壙144	縄文時代
144	32	S12—EW0	隅丸方形80×(62)	B62	a	＜土壙143	縄文時代
145	45	S 6—E 6	隅丸方形118×98	B26	a	＞土壙146	縄文時代
146	39	S12—E 6	不整形(165)×112	F66	a	＜土壙145	縄文時代
147	30	S 6—E 6	方形123×100	B38	b		中世以降
148		S 6—E 6	円形85×84	E20	a		縄文時代？
149		S 6—E 6	楕円形75×60	C 8	b		中世以降
150		S 6—E 6	隅丸方形86×65	B 2	a	＜土壙152	縄文時代？
151		S 6—E 6	不整形(90)×76	E22		＜土壙153	縄文時代？
152		S 6—E 6	楕円形50×(36)	C 4	a	＞土壙150	縄文時代？
153		S 6—E 6	楕円形79×50	B12	b	＞土壙151	中世以降
154		S 6—E12	楕円形158×121			＞12住, ＞土壙155・157	
155		S 6—E12	楕円形114×101			＞12住・土壙157＜土壙54	
156		S 6—E12	隅丸方形135×101			＞12住	
157		S 6—E12	楕円形(116)×105			＞12住, ＜土壙154・155	
158		NS0—E12	楕円形107×104	C16	a		縄文時代？
159		NS0—E12	方形60×59	C 6			
160		S 6—E12	円形50×44			＞12住	
161		S 6—E12	隅丸方形156×97	4		＞12住	
162		S 6—E18	長方形230×159	B64	b	＞土壙163	中世以降
163		S 6—E18	隅丸方形108×(94)			＜土壙162	
164	52	S12—E18	方形208×195	7		＜土壙172	

番号	掲載図	位　　置	平面形 規模(cm)	断面形 深さ(cm)	覆土の 特　徴	切り合い関係 ＞…は切る　＜…は切られる	備　考
165	48	S12—E12	隅丸方形234×139	B19	b	＞12住	中世以降
166	40	S12—E12	隅丸方形175×160	B13	a		縄文時代
167		S12—E12	円形75×70	7			縄文時代
168		S12—E12	円形64×57	13			縄文時代
169		S12—E12	楕円形76×70	10			縄文時代
170		S12—E18	円形74×73	C16	a		縄文時代？
171		NS0—E18	楕円形90×74	B24	b		中世以降
172	52	S12—E18	楕円形150×92	B21	a	＞土壙164	縄文時代？
173	41	S12—E18	隅丸方形63×52	B36	a		縄文時代？
174	43	S12—W12	台形100×97	A16	b		中世以降
175	49	S12—W12	長方形200×98	A49	b		中世以降
176	47	S12—EW0	楕円形(95)×60	B18	a	＜土壙189	縄文時代？
177		S12—W 6	隅丸方形119×112	B14	b		中世以降
178	38	S12—W 6	隅丸方形150×93	B32	a		縄文時代？
179	49	S12—W 6	隅丸方形161×112	B28	b	＞土壙184	中世以降
180		S12—W 6	楕円形65×38	C 6	c		深耕の跡？
181	52	S12—W 6	楕円形100×83	B44	a	＞土壙185	縄文時代？
182	33	S12—W 6	楕円形82×66	A46	a	＞土壙185	縄文時代？
183	38	S12—W 6	不整形157×88	B38	a		縄文時代？
184		S12—W 6	隅丸方形(78)×59	E24	b	＜土壙179	中世以降
185	52	S12—W 6	方形183×150	B50	b	＜土壙181・182	中世以降
186	48	S12—W 6	長方形85×47	A42	a		縄文時代？
187	43	S12—EW0	隅丸方形115×100	B28	a		縄文時代？
188		S12—EW0	楕円形85×75	B10	b		中世以降
189	47	S12—W 6	不整形138×132	C30	a	＞土壙176	縄文時代？
190	30	S 6—E 6	楕円形93×79	B16	b		縄文時代
191	33	S 6—E 6	楕円形85×64	F42	a		縄文時代
192		S 6—E 6	不整形81×77	C 8	a		縄文時代
193		S12—W 6	円形88×86	B12	b		中世以降
194		S12—EW0	円形70×62	B16	b		縄文時代
195	35	S12—EW0	楕円形136×101	B25	b		中世以降
196		S12—E 6	隅丸方形118×60	B 6	a		縄文時代
197		S24—E12	楕円形175×99	29		＞土壙327	
198		S18—E18	隅丸方形(181)×149	40		＜土壙216, ＞土壙308	
199		S18—EW0	楕円形100×87	B12		＞13住	
200		S 6—E 6	方形140×(44)	22		＞11住, ＜土壙128・259	
201	36	S12—E 6	楕円形172×132	B25	a	＞19住	古墳時代前期？
202		S18—E 6	楕円形201×150	C10	b		中世以降
203		S12—E 6	円形92×83	B18	a		縄文時代
204		S12—E12	方形132×102	B24	a	＞土壙210・352	縄文時代？
205		S18—E 6	台形201×188	B38	b	＞土壙210・352	中世以降
206	51	S18—E12	隅丸方形192×93	B20	b	＞土壙210	中世以降
207	51	S18—E12	方形(197×196)	B29	b	＜土壙206・211・212	縄文時代
208	48	S12—E12	楕円形(135)×136	B23	b	＞土壙212, ＜土壙213	中世以降

番号	掲載図	位　　置	平面形 規模(cm)	断面形 深さ(cm)	覆土の 特　徴	切り合い関係 ＞…は切る　＜…は切られる	備　考
209		S12—E12	楕円形68×38	10			
210	49	S12—E12	方形202×(120)	B22	b	＜土壙204・205・206, ＞土壙352	中世以降
211	41	S12—E12	隅丸方形133×100	B30	b	＞土壙207	中世以降
212		S12—E12	楕円形113×(100)	26		＞土壙207, ＜土壙208・213	
213	48	S12—E12	隅丸方形91×80	B21	b	＞土壙212・208	中世以降
214	37	S18—E18	楕円形189×111	B22	b	＜土壙218	中世以降
215	37	S18—E18	隅丸方形115×112	B25	b	＞土壙217・219	中世以降
216	45	S18—E18	方形159×134	B38	b	＞土壙198・308	中世以降
217		S18—E18	隅丸方形255×(158)	F48	b	＞土壙308, ＜土壙131・215・218	中世以降
218	35	S18—E18	長方形117×78	A50	b	＞土壙214・217・219	中世以降
219		S18—E18	楕円形(96×65)	42		＜土壙215・218・P101	
220	38	S24—E12	方形109×96	B28	b		中世以降
221		S18—W12	不整形143×57	10		(土壙222に接する)	
222	42	S18—W12	隅丸方形116×75	B36	b	(土壙221に接する)	中世以降
223		S18—W12	隅丸方形105×89	B22	a	＞土壙224	縄文時代
224		S24—W12	楕円形(79)×61	B28	a	＜土壙223	縄文時代
225		S18—W 6	方形83×78	20		＜土壙226	
226		S18—W 6	円形84×75	E28	a	＞土壙225	縄文時代
227		S18—W 6	隅丸方形100×90	B22	b	＞土壙229	中世以降
228	42	S18—W 6	方形104×80	B14		＞土壙229	
229		S18—W 6	楕円形125×(110)	B 8	a	＜土壙228・227	縄文時代？
230	33	S12—W 6	隅丸方形76×64	B17	a		縄文時代
231	32	S18—W 6	楕円形92×82	B 9	b	＜土壙232, ＞土壙233	中世以降
232	45	S18—W 6	隅丸方形101×82	A36	b	＞土壙231	中世以降
233		S18—W 6	方形146×111	B18	b	＜土壙231	中世以降
234	31	S18—W 6	円形64×61	B18	a		縄文時代
235		S18—W 6	円形60×50				縄文時代
236		S18—W 6	隅丸方形50×50	B10	a		縄文時代
237		S12—W 6	楕円形76×67	B12			
238		S18—W 6	不整形104×80	14			
239		S24—W 6	円形74×65	E22	a		縄文時代
240		S24—W 6	楕円形65×53	A26	a		縄文時代？
241	34	S18—W 6	円形144×126	B46	a	＞土壙244・245	縄文時代？
242	44	S24—EW 0	楕円形90×77	B25	a	＞土壙243	縄文時代？
243	44	S24—EW 0	隅丸方形(95)×80	B28	a	＜13住・土壙242, ＞土壙244	縄文時代？
244	44	S24—EW 0	楕円形(125)×80	B30	a	＜土壙241・243	縄文時代
245		S18—W 6	楕円形(64)×57	B16	a	＜土壙241	縄文時代
246		S24—EW 0	円形77×67	5		＞13住・土壙247	中世以降
247		S24—EW 0	楕円形(67)×79			＜土壙246	
248		S24—EW 0	円形56×52				
249	34	S24—EW 0	円形83×69	B23	a	13住に接する	縄文時代？
250	33	S18—EW 0	楕円形73×52	A20	b	＜13住	古墳時代前期？
251	34	S18—E 6	隅丸方形143×138	B21	b	＞土壙253・254	中世以降
252		S18—E 6	楕円形(74)×68	D22	b	＜土壙263	中世以降

番号	掲載図	位　　置	平面形 規模(cm)	断面形 深さ(cm)	覆土の 特　徴	切り合い関係 ＞…は切る　＜…は切られる	備　考
253	34	S18—E 6	楕円形90×(88)	B30	b	＜土壙251・254・260	中世以降
254		S18—E 6	隅丸方形132×(117)	B36	b	＜土壙251, ＞土壙253	中世以降
255		S18—EW0	円形66×60	5		土壙256に接する	
256		S18—E 6	隅丸方形111×104	C18	a	土壙255に接する	縄文時代？
257	48	S18—E 6	楕円形113×77	9		＞土壙258	
258	43	S18—E 6	隅丸方形149×127	B20	b	＜土壙257	中世以降
259	45	S 6—W 6	方形118×(78)	B15	b	＞11住・土壙200, ＜土壙128	中世以降
260	34	S18—E 6	方形145×122	B20	b	＞土壙253・262	中世以降
261		S18—E 6	隅丸方形83×(55)	C30	b	＜土壙263, 土壙252・262に接する	中世以降
262		S18—E 6	楕円形83×(76)	B20	b	＜土壙260・263, 土壙261に接する	縄文時代
263	44	S18—E 6	方形277×231	B68	b	＞土壙252・261・262・P106	中世以降
264		S24—E 6	台形(98)×69	B16	a	＜P106	縄文時代？
265	31	S18—E 6	円形54×46	A14	a	＞土壙266	縄文時代
266	31	S18—E 6	楕円形64×61	22	b	＜土壙265・267	中世以降
267	31	S18—E 6	方形105×97	B24	b	＞土壙266	中世以降
268	39	S18—E 6	円形99×91	A36	b	＞土壙270	中世以降
269		S18—E12	楕円形98×78	D36	b		中世以降
270	39	S18—E 6	方形173×167	B44	b	＜土壙268	中世以降
271		S18—E12	楕円形50×34	5			
272		S18—E12	不整形142×138	F22	b		中世以降
273		S18—E12	方形133×123	B40	b	＞土壙275, 15住に接する	中世以降
274		S18—E12	方形98×97	C22	b	＞土壙277	中世以降
275	50	S18—E12	方形221×213	B62	b	＜土壙273, ＞土壙276	中世以降
276	32	S18—E12	楕円形72×60	B42	b	＜土壙275	中世以降
277	35	S18—E12	楕円形163×106	B14	b	＞15住, ＜土壙274	中世以降
278	47	S24—W12	方形137×135	B27	b	＜P109	縄文時代
279		S18—W12	台形122×72	17		区域外にかかる	
280		S24—W12	台形78×73	B24	a		縄文時代
281		S24—W12	楕円形93×82			＞16住	
282		S30—W12	楕円形63×47	B31		＞土壙283	
283	35	S30—W12	方形183×106	B21	a	＜土壙282	縄文時代？
284		S30—W12	楕円形83×45	3			
285		S30—W12	楕円形85×63	B22	b	＞土壙286	中世以降
286		S30—W12	円形50×(34)	E16	a	＜土壙285・287	縄文時代
287		S30—W12	楕円形50×40	5		＞土壙286	
288	34	S24—W12	円形140×129	B22	a		縄文時代
289		S24—W12	隅丸方形67×56	B12	a	＞18住	縄文時代？
290	40	S24—W 6	隅丸方形165×135	B53	a	＞18住	縄文時代
291		S12—E18	楕円形163×(73)	25		＞土壙351, ＜土壙164・172	
292		S30—W 6	方形(67)×62			＜土壙293	
293		S30—W 6	長方形109×54			＞土壙292・P116	
294	35	S30—W 6	楕円形91×52	B24	a		縄文時代
295		S24—W 6	楕円形94×53	B19	a		縄文時代
296		S30—W 6	隅丸方形150×147				

番号	掲載図	位　　置	平面形 規模(cm)	断面形 深さ(cm)	覆土の 特　徴	切り合い関係 ＞…は切る　＜…は切られる	備　考
297		S30—W 6	楕円形60×42	C 6	c		深耕の跡か
298		S30—EW0	楕円形157×95				
299		S30—EW0	円形67×65	C10	a	＞土壙302	縄文時代
300		S30—EW0	隅丸方形98×87	B10	a	＞土壙302	縄文時代
301	45	S30—EW0	方形143×140	B22	a		縄文時代？
302		S30—EW0	台形153×103	20		＜土壙299・300	縄文時代
303	43	S24—EW0	方形126×105	B26	b	＞土壙304	中世以降
304	40	S24—EW0	隅丸方形187×(144)	C34	b	＜土壙303	中世以降
305	37	S24—EW0	楕円形170×150	C36	a		縄文時代
306		S24—EW0	隅丸方形97×87	B16	a		縄文時代
307	45	S24—W 6	台形124×91	B16	a		縄文時代
308		S18—E18	楕円形(179)×150	B18	a	＜土壙198・216・217	縄文時代？
309		S24—W 6	円形65×61	B26	a		縄文時代
310		S24—EW0	方形141×(67)	C16	b	＜土壙311, ＞土壙312・313	中世以降
311		S24—E 6	隅丸方形142×106	C36	b	＞土壙310・314・315	中世以降
312		S24—EW0	楕円形(80)×70	B22	a	＜土壙310	縄文時代
313		S24—EW0	楕円形(57)×40	E38	a	＜土壙315	縄文時代？
314		S24—E 6	円形75×(40)			＜土壙311	
315		S24—E 6	円形65×62			＜土壙311	
316		S24—E 6	円形73×60	C12	a		縄文時代
317		S24—E 6	円形74×60	C12	b		中世以降
318		S30—E 6	楕円形(61)×38	F14	a	＜P118	縄文時代？
319	31	S24—E 6	楕円形131×107	B29	a	＞土壙320	縄文時代
320	31	S24—E 6	隅丸方形170×120	B32	a	＜土壙319	古墳時代前期
321		S24—E 6	隅丸方形123×89	B14		＞土壙322	
322		S30—E 6	楕円形103×58			＜土壙321	
323		S30—E 6	楕円形99×52			＞土壙324	
324		S30—E 6	楕円形111×84			＜土壙323	
325		S30—E 6	隅丸方形154×120	B20	b	＞土壙326	中世以降
326		S24—E 6	隅丸方形66×(28)			＜土壙325	
327		S24—E 6	台形(172)×156	18	b	＜土壙197, ＞土壙328	中世以降
328		S24—E 6	方形102×(86)	B20	b	＜土壙327	中世以降
329		S24—E 6	円形95×95	C16	b		中世以降
330	44	S24—E12	方形287×231	B54	b	＞土壙353・P107, P126に接する	中世以降
331		S24—E12	楕円形92×53	B 8	a		縄文時代
332		S24—E12	楕円形100×58	C10	a	土壙334と接する	縄文時代
333		S30—E12	円形77×75	10		＞方形周溝墓1	
334		S24—E12	楕円形70×49	7		土壙332と接する	
335		S30—E12	隅丸方形109×81	C18	a		縄文時代
336		S30—E12	円形148×52	4		区域外にかかる	
337		S30—E12	円形69×57	C 6	c	＞方形周溝墓1	深耕の跡か
338	35	NS0—W 6	長方形154×62	B10	a		縄文時代？
339	36	NS0—W 6	隅丸方形178×140	B31	b		中世以降
340		NS0—W 6	台形267×230	E14	a		縄文時代

番号	掲載図	位　　置	平面形 規模(cm)	断面形 深さ(cm)	覆土の 特　徴	切り合い関係 ＞…は切る　＜…は切られる	備　考
341	33	NS0—EW0	楕円形84×60	B46	a		縄文時代
342		S 6—EW 0	楕円形82×53	5			
343		S 6—EW 0	楕円形90×60	23		＞土壙139	
344		S 6—EW 0	円形55×44	4			
345	39	S12—W 6	円形74×60	B44	b		縄文時代土器多量出土
346	34	S12—W 6	円形105×88	B33	a		縄文時代
347	39	S12—W 6	方形(115)×76	B24	b	＜P73	縄文時代
348		S12—W12	楕円形106×42	B12	b		中世以降
349		S18—W12	円形75×63	C26	a		縄文時代
350	31	S18—W12	円形54×48	C24	a		縄文時代
351	47	S18—E18	円形(103×84)	A48	b	＜土壙291・217・131	中世以降
352	35	S12—E12	楕円形105×(74)	C30	b	＜土壙204・205・210	古墳時代前期
353	51	S24—E12	長方形(283)×238	B48	b	＞14住，＜土壙330・P126	近世以降の人骨出土
354	36	S30—E18	楕円形166×93	B26	b	＞14住・土壙359	中世以降
355		S30—E12	楕円形122×69	B16	b		中世以降
356	32	S30—E18	円形111×98	B32	b	＞土壙357・358	中世以降
357	32	S30—E18	隅丸方形114×88	B42	b	＜土壙356，＞土壙358	古墳時代前期？
358	32	S30—E18	長方形157×(93)	B28	b	＜土壙356・357	古墳時代前期？
359	36	S30—E18	円形88×76	B16	b	＜土壙354	古墳時代前期？
360		S24—E12	円形75×55	B22	b		中世以降
361	38	S 6—E 6	隅丸方形131×99	B18	b		縄文時代
362	41	S 6—W12	隅丸方形188×111	B23	a		縄文時代
363		S18—W12	隅丸方形196×120	B32	a		縄文時代
364		S 6—W 6	円形100×89	22			縄文時代
367		N 6—EW0	円形203×159	7			
368		N 6—E 6	円形160×151	5			
369		N 6—E 6	楕円形108×73	24			縄文時代
370		N 6—E 6	台形102×94	13		＜土壙371	
371		N 6—E 6	方形100×97	20		＞土壙370・土壙372・P192	
372		N 6—E 6	円形83×(63)	26		＞土壙371・P192	
373		N 6—E12	長方形211×129	7		＞土壙374・375	
374		N 6—E12	楕円形(163)×113	14		＜土壙373・375，＞21住	
375		N 6—E12	方形(145×82)	8		＜土壙373・374・P199，＞21住	
607	35	S36—E24	楕円形133×108	B26	b		中世以降
608		S42—E24	楕円形102×64	C 2	a		縄文時代
609		S42—E24	楕円形176×116	C12	b		中世以降
610		S42—E24	隅丸方形72×57	F14	a	P315と接する	縄文時代
611		S42—E24	円形115×107	E24	a	＞土壙612	縄文時代
612		S42—E24	円形130×105	C20	a	＜土壙611	縄文時代
613		S48—E24	円形129×118	C18	a		縄文時代？
614		S48—E24	楕円形138×109	F10	a	＞土壙615	縄文時代
615		S48—E24	円形85×(67)	C 6	a	＜土壙614	縄文時代
616		S48—E24	円形72×65	9		区域外にかかる	縄文時代
617	42	S36—E18	隅丸方形135×105	B20	b		中世以降

番号	掲載図	位　　置	平面形 規模(cm)	断面形 深さ(cm)	覆土の 特　徴	切り合い関係 ＞…は切る　＜…は切られる	備　考
618	47	S36—E18	方形108×99	B32	b	＞土壙787・23住	中世以降
619		S42—E18	円形150×120	A22	b	＜土壙630, ＞土壙631	中世以降
620		S36—E18	円形111×92	B 8	a	＞42住・土壙787	縄文時代？
621		S36—E18	台形152×140	B 8	b	＜土壙622・774, ＞42住	中世以降
622		S36—E12	方形140×140	A26	b	＜土壙626・627, ＞土壙621	中世以降
623	46	S36—E12	方形144×124	B13	b	＞土壙624・663	中世以降
624		S36—E12	円形113×95	E18	a	＜土壙623	縄文時代？
625	47	S42—E12	方形118×(70)	B18	b	＜土壙667	中世以降
626	51	S42—E12	楕円形105×73	B38	b	＞土壙622・646	中世以降
627	51	S42—E12	隅丸方形72×62	A34	b	＞土壙622・646	中世以降
628		S42—E18	隅丸方形76×68	C18	a	＜土壙629	縄文時代？
629		S42—E18	方形73×65	E26	a	＞土壙628	縄文時代？
630		S42—E18	楕円形101×61	B 6	a	＞土壙619・631	縄文時代？
631		S42—E18	円形(62)×58	B 6	a	＜土壙630・619	縄文時代
632	45	S42—E18	隅丸方形186×114	C35	b		中世以降
633		S42—E18	楕円形(78)×63	A46	b	＜土壙634	中世以降
634		S42—E18	方形158×115	23		＞土壙633	
635	47	S42—E18	長方形253×169	B53	b	＞土壙636・P310	中世以降
636		S48—E18	方形280×203	B30	b	＜土壙635・637・639・768・P313, ＞土壙640	中世以降
637	37	S48—E18	楕円形244×160	F35	b	＞土壙636・638	中世以降
638		S48—E18	隅丸方形161×(154)	7		＜土壙637・639	
639		S48—E18	隅丸方形258×155	C18	b	＞土壙636・638	中世以降
640		S42—E12	方形230×(195)	C12	a	＜土壙642・636・641・P312	縄文時代？
641	43	S48—E12	方形112×105	B23	b	＞土壙640・P312	中世以降
642	46	S42—E12	隅丸方形170×130	A46	b	＞土壙643・640	中世以降
643	41	S42—E12	不整形148×(140)	F41	a	＞土壙642, ＜土壙645・679・692・644	縄文時代
644	37	S42—E12	楕円形105×81	B 9	b	＞土壙643・645	中世以降
645		S42—E12	円形129×97	F40	a	＜土壙644, ＞土壙643	縄文時代
646	51	S42—E12	長方形183×110	B25	b	＜土壙626・627	中世以降
647		S36—E12	円形68×66	C 8	b	＞P298・土壙648	中世以降
648		S36—E12	方形106×72	E20	b	＜土壙647	中世以降
649	34	S36—E 6	円形139×(120)	C19	b	＜土壙650・651	中世以降
650		S36—E 6	円形90×75	C12	b	＞土壙649・651	中世以降
651		S36—E 6	楕円形(86)×75	B10	b	＜土壙650・652	中世以降
652		S36—E 6	隅丸方形(121)×97	E14	b	＜土壙653, ＞土壙651	中世以降
653		S36—E 6	楕円形86×62	C14	b	＞土壙652	中世以降
654	30	S36—E 6	隅丸方形99×83	B18	b	＞土壙655	中世以降
655	42	S36—E 6	楕円形97×76	F18	b	＜土壙654	中世以降
656	44	S36—EW0	円形130×112	B13	b		中世以降
657	33	S36—EW0	隅丸方形142×111	A44	b		中世以降
658		S36—E 6	隅丸方形164×105	B48	b	＞P293・294・295, ＜土壙660	中世以降
659	40	S36—E 6	方形87×65	B16	b		中世以降
660		S36—E 6	隅丸方形169×114	B14	b	＜P292, ＞土壙658	中世以降
661	35	S36—E 6	円形82×61	B24	b	＞土壙662	中世以降

番号	掲載図	位　　置	平面形 規模(cm)	断面形 深さ(cm)	覆土の 特　徴	切り合い関係 ＞…は切る　＜…は切られる	備　考
662	39	S36—E 6	方形194×136	B13	b	＜土壙661	中世以降
663		S36—E12	方形(118)×98	B30	b	＜土壙623・664・665	中世以降
664		S36—E12	円形65×47	25		＜土壙665, ＞土壙663	
665		S36—E12	円形97×97	B40	b	＞土壙664・663・666	中世以降
666		S36—E12	隅丸方形108×62	B28	b	＜土壙665, ＞土壙667	中世以降
667	38	S36—E12	方形231×193	B27	b	＜土壙666, ＞土壙625・668	中世以降
668		S42—E12	円形100×(55)	C16	b	＜土壙667・678	中世以降
669		S42—EW0	円形62×62	B38	a		縄文時代
670		S42—EW0	円形90×80	A30	b	＞24住	中世以降
671		S42—EW0	隅丸方形92×70	C 4	c		深耕の跡か
672	43	S42—EW0	方形184×171	B25	b		中世以降
673		S48—EW0	円形87×78	B16	b	＞24住	中世以降
674		S48—EW0	方形140×94	B20	b	＞土壙675・767・P281	中世以降
675		S48—EW0	方形(71)×66	B14	b	＜土壙674・P281	中世以降
676		S42—W 6	楕円形170×98	B14	b	＜P275・P271, ＞土壙781	中世以降
677		S42—W 6	円形85×61	E18	a	＞P274, P273と接する	縄文時代
678		S42—E12	円形162×127	E20	b	＞土壙668	中世以降
679		S42—E12	円形137×98	E22	a	＞土壙643	縄文時代？
680		S42—E12	方形163×117	B24	b		中世以降
681	41	S42—E12	方形108×80	B16	b		中世以降
682	38	S42—E 6	隅丸方形207×(178)	B36	b	＜土壙683・684, ＞土壙687	中世以降
683		S42—E 6	楕円形179×123	28	b	＞土壙682・687	中世以降
684	42	S42—E 6	方形190×(144)	A30	b	＞土壙682・687, ＜土壙685・686	中世以降
685	40	S42—E 6	円形188×160	B45	b	＞土壙684・686・687	中世以降
686	30	S42—E 6	方形186×(156)	B44	b	＞土壙684・687, ＜土壙685・689・696	中世以降
687		S42—E 6	方形(336×74)	B50	b	＞土 壙771, ＜土 壙682・683・684・686・685・688・689	中世以降
688	38	S42—E 6	隅丸方形165×118	B40	b	＞土 壙687・771・690・24住, ＜土 壙689, 土壙691と接する	中世以降
689	33	S42—E 6	円形102×96	B42	a	＞土壙688・687・686・690	縄文時代？
690		S48—E 6	方形(249×215)	B40	b	＜土壙689・688・691, ＜土壙695	中世以降
691	42	S48—E 6	方形148×125	B35	b	＞土壙690・24住, ＜P288, 土壙688と接する	中世以降
692		S48—E12	円形121×104	B10	a		縄文時代？
693		S48—E12	円形72×49	C16	a		縄文時代
694		S48—E 6	円形85×59	B 7	a		縄文時代
695		S48—E 6	方形298×(186)	40		＜土壙690・P288, ＞土壙697, 区域外へかかる	
696		S42—E12	円形71×64	B16	a	＞土壙686	縄文時代？
697		S48—E 6	方形(114×107)	B20	b	＜土壙695, 区域外にかかる	中世以降
698		S48—E 6	円形77×55	C 6	b		中世以降
699		S48—EW0	方形90×(74)	E16	b	＜土壙700	中世以降
700		S48—EW0	楕円形210×137	C14	b	＞土壙699・43住, ＜土壙701	中世以降
701		S48—EW0	隅丸方形206×127	B20		＜土壙759, ＞土壙700	
702	50	S48—EW0	方形197×175	39		＜土壙703	
703	50	S48—EW0	方形191×188	B40	b	＞土壙702	中世以降
704	31	S36—EW0	円形75×64	B23	b	＞土壙706	中世以降
705	47	S36—EW0	方形104×103	B25	b	＜土壙705	中世以降

番号	掲載図	位　　置	平面形 規模(cm)	断面形 深さ(cm)	覆土の 特　徴	切り合い関係 ＞…は切る　＜…は切られる	備　考
706		S36—EW0	方形177×130	B48	b	＜土壙707・717, 区域外にかかる	中世以降
707	38	S36—EW0	台形107×98	A45	b	＞土壙706	中世以降
708	50	S36—EW0	方形178×161	B32	b	＞土壙718・717	中世以降
709	46	S36—W 6	長方形(229×168)	B32	b	＜土壙711・710・716, 区域外にかかる	中世以降
710		S36—W 6	円形115×(68)	B10	b	＜土壙711・712, 区域外にかかる	中世以降
711	41	S36—W 6	方形152×82	B42	b	＞土壙712・709・710, ＜土壙715	中世以降
712	41	S36—W 6	方形(121×65)	B34	b	＜土壙711・715, ＞土壙710, P255に接する	中世以降
713		S36—W 6	方形(460×335)	B42	b	＜土壙714・721・722・726, 区域外にかかる	中世以降
714	46	S36—W 6	長方形196×83	B40	b	＞土壙713	中世以降
715	50	S36—W 6	方形215×206	B30	b	＜土壙720, ＞土壙711・712・719	中世以降
716		S36—EW0	円形115×97	B20	b	＞土壙709	中世以降
717		S36—EW0	台形93×(64)	E12	b	＜土壙708, ＞土壙706	中世以降
718	50	S36—EW0	台形170×(168)	B34	b	＜土壙708・719	中世以降
719		S36—W 6	円形117×(72)	B16	b	＜土壙715, ＞土壙718	中世以降
720	50	S36—W 6	方形167×124	A45	b	＞土壙715	中世以降
721	48	S36—W 6	方形103×83	B23	b	＞土壙713・722	中世以降
722	45	S36—W 6	隅丸方形134×119	B39	b	＜土壙721, ＞土壙713	中世以降
723		S54—EW0	方形(329)×214	23		＜土壙745・777・755・P285, 区域外にかかる	
724	46	S42—W 6	方形147×128	B44	b	＜土壙725・P256, ＞P268	中世以降
725	36	S42—W 6	円形75×56	C44	b	＞土壙724	中世以降
726	52	S42—W 6	方形276×(125)	B52	b	＞土壙713, 区域外にかかる	中世以降
727	46	S36—EW0	円形120×104	C30	a	＜P259・P260・P262	縄文時代
728		S36—EW0	楕円形107×80	B20	a		縄文時代
729		S48—EW0	隅丸方形112×102	B25	b		中世以降
730		S48—W 6	円形113×92	F22	a	＜P278	縄文時代
731		S42—W 6	隅丸方形(79)×75	B22	b	＜土壙732	中世以降
732	41	S48—W 6	方形221×(121)	B42	b	＞土壙731・785, 区域外にかかる	中世以降
733	31	S48—W 6	円形99×71	B39	b	＞土壙785	中世以降
734	48	S48—W 6	隅丸方形107×95	B40	b	＞土壙785	中世以降
735		S48—W 6	楕円形134×100	C18	b		中世以降
736		S48—EW0	隅丸方形133×126	10		＞土壙737	
737		S48—EW0	隅丸方形177×(113)			＜土壙736	
738	49	S48—EW0	方形171×170	B27	b	＞土壙780・740	中世以降
739		S48—W 6	台形273×225	B36	b	＞土壙742・759・760, ＜土壙763	中世以降
740		S48—EW0	方形166×(93)	E56	b	＜土壙738・780・765・741, ＞土壙742	中世以降
741	43	S54—EW0	台形223×191	B 4	a	＞土壙740・742	縄文時代？
742		S48—EW0	楕円形(117)×91	B44	b	＜土壙739・741・740	中世以降
743		S54—EW0	円形67×60	C16	b		中世以降
744	45	S54—E 6	方形123×89	B42	b	＞土壙782, 区域外にかかる	中世以降
745	46	S54—EW0	台形190×173	B46	b	＞土壙723	中世以降
746		S54—EW0	方形207×143	B29	b	＞土壙747・779・777	中世以降
747		S54—W 6	方形216×200	B20	b	＜土壙746・749・779・748	中世以降
748		S54—W 6	円形91×73	B16	b	＞土壙747	中世以降
749		S54—W 6	方形108×(106)	A38	b	＞土壙747・750, ＜土壙775	中世以降
750		S54—W 6	方形(143×67)	B30	b	＜土壙749・775	中世以降

番号	掲載図	位　　置	平面形 規模(cm)	断面形 深さ(cm)	覆土の 特　徴	切り合い関係 ＞…は切る　＜…は切られる	備　考
751		S60—W 6	方形(184)×168	B24	b	＜土壙752・P282	中世以降
752		S60—W 6	長方形175×128	B12	b	＜P282, ＞土壙751	中世以降
753		S60—W 6	不整形174×68	B18	b	＜土壙752	中世以降
754		S60—EW0	方形127×99	F14	a	＞土壙778	縄文時代？
755		S58—EW0	円形139×137	B20	a	＞土壙723	縄文時代？
756	43	S60—E 6	方形94×(70)	A56	b	区域外にかかる	中世以降
757		S60—EW0	円形120×92	B28	a	＞25住・26住	縄文時代？
758		S60—W 6	方形(152×95)	59		＜27住	
759		S48—W 6	長方形(163)×105	B30	b	＜土壙739, ＞土壙760・761	中世以降
760	52	S54—W 6	方形245×230	B32	b	＜土壙759・761	中世以降
761		S48—W 6	円形58×(30)	B24	b	＜土壙759, ＞土壙760	中世以降
762		S42—W 6	円形55×(41)	C22		＜P272, ＞土壙781	
763		S54—W 6	円形88×70	B14	b	＞土壙739	中世以降
764		S54—W 6	円形(164×46)	B30	b	＜土壙786	中世以降
765		S48—EW0	円形53×48	11		＞土壙740	
767		S48—EW0	円形(86×49)	C 4		＜土壙674	
768		S48—E18	円形79×67	C18	a	＞土壙636	縄文時代？
769		S48—E24	円形87×70	C12	b		中世以降
770		S42—E18	楕円形98×56	C 6	a		縄文時代
771		S42—E 6	方形(229×39)	27		＜土壙687・688, ＞24住	
772		S36—E18	円形77×70	B22	b	＞土壙787・23住	中世以降
773		S36—E12	楕円形115×70	C12	b	＞土壙787・23住	中世以降
774		S36—E12	円形85×67	B12	b	＞土壙621・23住	中世以降
775	51	S54—W 6	方形(270)×248	A32	b	＞土壙784・27住・28住	中世以降
776		S60—W 6	円形(89)×80	C18		＜25住	
777	52	S54—EW0	方形301×217	B42	a	＜土壙746・P283・P285, ＞土壙723・779・703	縄文時代？
778		S60—EW0	不整方形160×125	F22	b	＜土壙754	中世以降
779		S54—EW0	方形148×(70)	19		＜土壙777・746・P283, ＞土壙747	
780	49	S48—EW0	方形170×(23)	15		＜土壙738, ＞740	
781		S42—W 6	円形200×(96)	F 8		＜土壙676・762・P271・P272, ＞P270	
782	42	S54—E 6	円形(63)×56	B50	b	＜土壙744, 区域外にかかる	中世以降
783		S60—W 6	方形(201)×160	22		＜27住	
784	51	S54—W 6	隅丸方形165×130	18		＜土壙775・28住	
785	49	S48—W 6	方形326×(247)	B40	b	＜土壙733・734・732, 区域外にかかる	中世以降
786	45	S54—W 6	方形206×(127)	A36	b	＞土壙764, 区域外にかかる	中世以降
787	40	S36—W18	不整形223×202	B31	b	＜土壙618・772・620, ＞23住	中世以降
788	36	S36—W18	楕円形100×43	B22	b	＞23住	中世以降
789		S36—W18	円形73×45	C38	b	＞23住	中世以降
792	36	N12—W18	楕円形155×91	B22	a	＞土壙797・814	縄文時代？
793	37	N12—W24	楕円形218×105	C24	b		中世以降
794		N12—W24	円形97×80	B20	a	＜土壙795	縄文時代
795	30	N12—W24	円形94×70	C16	a	＞土壙794・597・P241	縄文時代
796		N12—W24	円形65×64	12	a		縄文時代
797		N12—W18	楕円形94×70	19		＜土壙792	
798		N12—W18	円形65×53	21			縄文時代

番号	掲載図	位　　置	平面形 規模(cm)	断面形 深さ(cm)	覆土の 特　徴	切り合い関係 ＞…は切る　＜…は切られる	備　考
799		N12—W24	円形63×59	C16	a		縄文時代
800	32	N24—W24	円形77×74	B18	a	＜土壙803, 区域外にかかる	縄文時代
801	32	N18—W24	隅丸方形105×97	B27	a		縄文時代
802		N18—W24	楕円形121×70	C14	b	＞土壙816	中世以降
803	32	N24—W24	円形78×75	B21	a	＞土壙800	縄文時代
804	32	N24—W18	円形65×55	C14	a	＜P207	縄文時代
805		N24—W24	円形105×98	C18	a	＞7号墳周溝	古墳時代？
806	30	N24—EW0	円形79×69	E26	a		縄文時代？
808		N30—EW0	方形93×71	C 8	a	＞土壙809	縄文時代？
809		N24—EW0	円形131×103	14		＜土壙808	
810	41	N24—EW0	楕円形148×66	F46	a	＞溝14	古墳時代前期
811		N24—E 6	楕円形(93×50)	B36	a	区域外にかかる	縄文時代？
812	31	N24—EW0	楕円形113×90	B41	a	＞溝14	古墳時代前期
813		N24—W12	円形58×50	C10	a		縄文時代
814		N12—W18	方形289×220	F16		＜土壙792, 区域外にかかる	
815		N 6—W24	円形98×90	24			縄文時代
816		N18—W24	円形97×(84)	E14	a	＜土壙802, ＞P213	縄文時代？
817		N24—W18	円形92×89		a	＜21住	縄文時代？
840		S90—W18	楕円形226×59	C25			
841		S90—W18	円形84×73	B12	c		深耕の跡か
842		S90—W18	円形65×62	C 9	c		深耕の跡か
843		S90—W12	楕円形167×100	E23	c	＞溝22	深耕の跡か
844		S102—W36	隅丸方形100×98	B31	a or b		
845		S114—W30	長方形297×130	E12	c		深耕の跡か
846		S144—W30	楕円形175×113	F12	c		深耕の跡か
847		S108—W24	円形62×62	C 4	c	＜P327	深耕の跡か
848		S96—W36	円形60×55	C15	a		縄文時代？
851		S60—W48	円形65×54	B 5	b		県道にかかる
854	40	S54—W54	円形103×90	B23	a		縄文時代
855		S54—W54	円形81×80	B16	a		縄文時代
856	30	S66—W54	楕円形106×72	F20	a		縄文時代？
857	33	S60—W54	円形99×88	B34	a		縄文時代
858	35	S54—W60	円形130×(93)	D56	a	区域外にかかる	縄文時代
859	31	S60—W54	円形78×71	B20	a		縄文時代
860		S66—W48	円形64×60	A18	a		縄文時代
861		S66—W54	円形51×47	E10	b		縄文時代
862	39	S54—W60	円形98×81	B40	a		縄文時代
863	37	S60—W54	円形65×57	F23	a		縄文時代
864		S60—W54	円形50×44	B54	b		縄文時代
865	35	S60—W60	楕円形109×71	B28	a		縄文時代
866	39	S54—W60	隅丸方形147×115	B42	a		縄文時代
867	33	S60—W60	円形72×60	B24	a		縄文時代
868	33	S60—W60	円形91×90	B30	a		縄文時代
869	31	S60—W60	円形58×58	B28	a		縄文時代？
870		S66—W60	方形187×168	E76	b		中世以降

番号	掲載図	位　　置	平面形 規模(cm)	断面形 深さ(cm)	覆土の 特　徴	切り合い関係 ＞…は切る　＜…は切られる	備　考
871	31	S54—W66	円形70×63	B37	a		縄文時代
872	31	S54—W66	円形73×61	B25	a	＞土壙873	古墳時代前期
873	42	S60—W66	隅丸方形267×167	B78		＜土壙872・874, ＞44住	古墳時代前期
874		S60—W66	円形63×44	38		＞土壙873	古墳時代前期
875		S60—W66	円形70×65	E66	a		縄文時代
876		S60—W66	円形115×100	19			
877		S60—W54	円形65×52	B36		＞P339	縄文時代
878		S66—W72	円形74×60	24			縄文時代
879		S72—W78	円形37×36	10			縄文時代
880		S72—W78	円形78×61	B12	a	＞土壙884	縄文時代？
881		S72—W78	円形86×80	B60	a	＞土壙884・883・887, ＜P335	縄文時代
882		S72—W78	円形84×47	B22	a	＞土壙883, 区域外にかかる	縄文時代
883		S72—W78	台形141×(125)	B16		＜土壙881・887・882, 区域外にかかる	縄文時代
884		S72—W78	不整形76×(66)	15		＜土壙880・881・P335	縄文時代
885	30	S72—W78	台形133×(84)	B22	b	区域外にかかる	縄文時代
887		S72—W78	楕円形93×73	F45		＜土壙881, ＞土壙883	縄文時代
890	33	S60—W18	楕円形(132)×110	B22	b	＜土壙958, 区域外にかかる	中世以降
926		S48—W30	円形77×53				古墳時代前期
932		S48—W24	楕円形103×75	14			縄文時代
933	43	S48—W24	方形114×90	B17	b	＞土壙934	中世以降
934		S48—W24	方形101×(43)	B10	a	＜土壙933	縄文時代？
935		S48—W24	円形105×88	59			縄文時代
936	43	S48—W24	楕円形269×76	B12	a		縄文時代？
937		S48—W24	楕円形79×42	10	a		縄文時代？
938	45	S48—W24	長方形121×74	B20	a		縄文時代？
939		S48—W24	円形89×89	F38	a		縄文時代
940	34	S48—W24	円形111×95	B36	a		縄文時代
941		S48—W24	円形62×54	15			縄文時代
942		S48—W30	円形72×69	12			
943		S48—W18	長方形103×70	18		＞土壙944	
944		S48—W18	方形(164)×120	42		＜土壙943, 区域外にかかる	
945		S54—W18	長方形250×145	41			
946		S48—W30	楕円形100×75	C14	a		古墳時代前期
947		S54—W24	円形72×68	F58		＞47住	
948	33	S54—W24	円形94×76	F53	a	＞土壙950	縄文時代
949		S54—W24	円形60×55	C42	a	＞土壙950	縄文時代
950		S54—W24	隅丸方形140×130	B28	a	＜土壙948・949, ＞土壙951	縄文時代
951		S54—W24	円形51×(30)	F12		＜土壙950	縄文時代
952	48	S54—W24	長方形212×148	A49	a		縄文時代？
953		S54—W18	円形69×63	10		＞土壙954	縄文時代
954		S54—W18	円形68×60	7		＜土壙953	縄文時代
955		S54—W18	隅丸方形154×116	19		＞土壙956	縄文時代
956		S54—W18	方形(168)×(150)	46		＜土壙955, ＞土壙957, 区域外にかかる	縄文時代
957		S54—W18	方形(73×35)	7		＜土壙956, 区域外にかかる	縄文時代
958	30	S54—W18	隅丸方形112×95	A44	a	＜土壙890	縄文時代

5．溝

今回の調査で確認された溝は、８区１基、９区２基、10区２基、12区１基、14区６基の計12基である。調査地南側の９・14区に集中が見られるが、９区の溝４以外は他の溝とは区別されるものである。次に代表的な溝址について簡単に触れたい。

溝２　８区北側Ｓ５～６、W24～26に位置し、東側は調査区域外にかかる。幅は最大120cm、深さは20cmを測り、底面はほぼ平坦であった。断面形は台形を呈し、覆土の褐色土には焼土粒が混入していたが砂粒、小礫等は確認されなかった。遺物は覆土下層に古墳時代前期の土師器片少量が見られた（第76図）。本溝址の所属時期もそこに求めたい。

溝４　９区南端Ｓ81～82、W15～29に位置し、第２・５号住居址を貼り、溝５に貼られる。長さは1414cmで、東西に延び、最大幅で74cmを測る。ほぼ中央で直角に枝分かれして南側に延びてゆくが調査区域外にかかり、全形は知り得ない。底面の傾斜は東西方向には認められないが、南へ延びる部分では自然地形に沿って北から南へと傾斜している。断面形は台形を呈し、暗褐～黒褐色土が堆積していた。覆土には砂、小礫等は混入していなかった。遺物は古墳時代前期に比定される土師器片（第76図）等が少量出土しており、本址の時期もそこに求める。

溝７　10区南端Ｓ30～34、Ｗ１～３に位置する。南北に延びる長さは380cmで、最大幅は74cmを測る。断面は台形を呈し覆土には暗褐色土が堆積していたが水を伴っていた様相は窺えなかった。底面の傾斜は南から北へ傾いているが自然地形は僅かだが南に向かって傾斜を持つ。本址からは遺物の出土はなく所属時期は不明である。

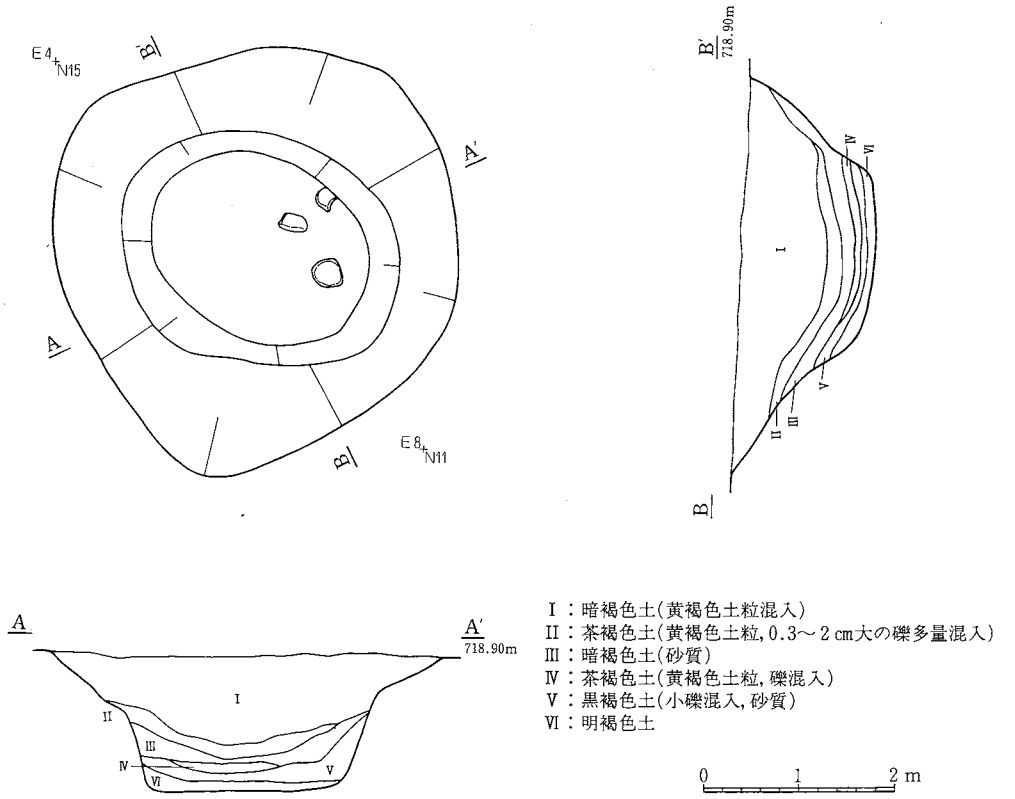
溝13　12区北側Ｎ20～26、W14～16に位置し、南側は区域外にかかっている。長さは510cm、幅は最大で150cmを測る。東壁はほぼ直に掘り込まれているが、西壁は２段掘りになっている。覆土の暗褐色土、黒褐色土は自然堆積の様相を呈し、また水を伴っていた状況は認められなかった。底面には起伏はなく、平坦であった。遺物は少ないが、底面より古墳時代前期に比定される土師器が出土しており本溝址の所属時期もそこに求めたい。

溝19　14区Ｓ94～113、W20～40に位置する。今回の調査では最大の規模をもつ溝址で、長さ2610cm、最大幅283cmを測り、自然地形の傾斜に沿って北東への方向を持つ。昨年度刊行した向畑遺跡Ｉの地形、地質の節で詳しく記述されている様に暗渠排水路と考えられるものである。

以上、代表的なものについて概観してみたが、多様なあり方を示していた。これらの所属時期は古墳時代から近代に亘るものである。その中で溝７は中世以降の土壙集中区内にあり、それらとの切り合い関係もないことから、あるいは何らかの関連も考えられるが推測の域を脱し得ない。

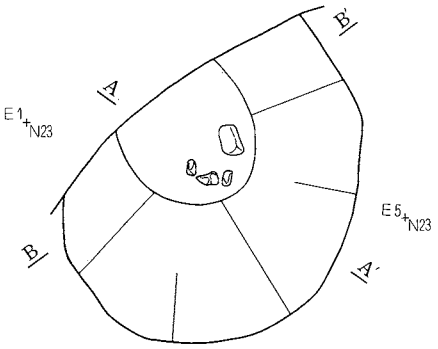
6．竪穴状遺構

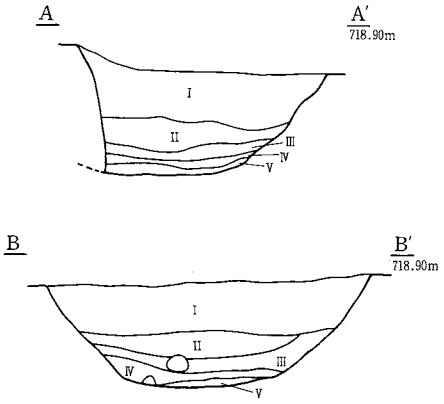
今回の調査で３基確認され、いずれも11区北部にあり、竪２、竪４は調査区域外にかかる。３基とも非常に酷似しており、ここでは竪３をとりあげて報告したい。N10～E16、E４～E９に位置し直径４mの不整円形を呈する。壁高は1.2mとかなり深く、すり鉢状に二段に掘り込まれており、壁、底面ともに二次堆積砂質ロームで、底面に関しては砂質が強く軟質であった。覆土から底面にかけては10～30cm程の大きさの礫がみられた。出土遺物としては、覆土中に古墳時代前期の土器、底面に平安時代の土器片が少々あった。よって竪３は平安時代の遺構と判明できた。竪２、竪３も、この土器片を根拠に平安時代に限られたものと断定したい。



第53図　竪穴状遺構3

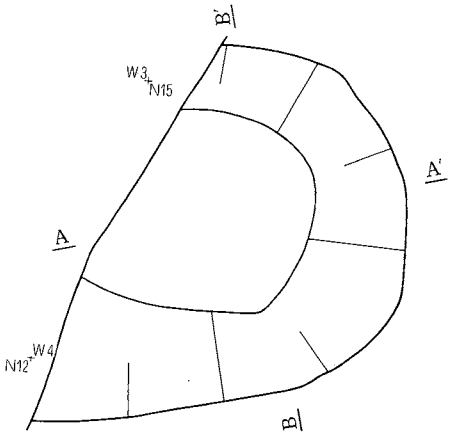
竪穴状遺構 2

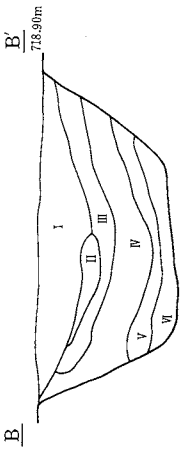


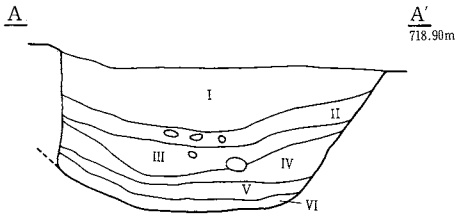


Ⅰ：黄褐色土(ローム粒，礫多量混入)
Ⅱ：黒褐色土(礫少量混入)
Ⅲ：暗褐色土
Ⅳ：黒褐色土
Ⅴ：黒褐色土(ローム粒混入)

竪穴状遺構 4







Ⅰ：暗褐色土(30cm大の礫混入)
Ⅱ：暗褐色土(５～10cm大の礫混入)
Ⅲ：暗黄褐色土
Ⅳ：黒褐色土(３～８cm大の礫混入)
Ⅴ：暗褐色土(炭化物，0.3～0.5cm大の焼土塊混入，粘質)
Ⅵ：明褐色土(炭化物，焼土，１cm大のローム塊混入)

0　1　2 m

第54図　竪穴状遺構 2・4

第3節　遺　物

1　土器・陶磁器

(1)　縄文時代の土器（第55～57図）

今回の調査において出土した縄文土器は、遺構に帰属するものも含め、その大半が小破片であった。従って実測図および拓影により出来るだけ多くを図示するよう努めたが、その数は全体の半数程にとどまっている。以下、時期毎に群別、類別を行う。

第1群　早期末～前期初頭の土器

23点を図示した。遺構に伴うものは見られない。以下の2類に分類される。

第1類（17～19）　胎土に多量の繊維を含み絡縄体圧痕の付されるもので、早期末に位置付けられる。いずれも口縁部の破片で、若干外反気味に開く器形を呈する。17は肥厚する口唇部に直交して、口縁部外面には横位に右巻きの原体を押圧する。18・19は口縁部側面に横走する隆帯を有する。隆帯上には直交して絡縄体を押圧するが、磨滅により原体は不明である。さらに口唇部にも押圧を行っており、19は深い圧痕を残す。これらは胎土に繊維を含む他、石英・長石粒が顕著に観察される。

第2類（21～33）　前期初頭に含まれ、繊維を含んだ胎土、縄文を特徴とする。24は唯一口縁部の破片で、端部は薄くおさめるが波打っている。20～26は外面に縄文の施文が観察される。器面荒れにより原体の判読は難しいが、20はRℓ、21はRL、22はRL（直前段多条）をそれぞれ横位に施文し、また23・24はLRを縦位に回転するようである。この他、27～31は内外又は外面に擦痕が観察される。

第2群　前期中葉の土器

胴部片2点を図示した。両者胎土に砂粒を含むが、繊維の混入は認められない。34はLR（前々段多条）の原体を横位に、35はLR、RL原体を横位に施文し羽状縄文としている。

第3群　中期初頭の土器

本群は出土した縄文土器の7割以上を占めている。実測図16点、拓影図129点を呈示したが、拓影図の大半は縄文時代以外の遺構ないしは検出面の出土である。尚縄文中期初頭に属し、実測図・拓影図を掲載し得た遺構は11住、土壙10・132・226・230・294・295・309・320・345・347・857・859・860・866・885・887である。そのうち11住・土壙10等からは復原可能な個体がまとまって出土している。

呈示資料は全体に小破片が多く、全形が窺い知れるものは少ない。従って全体を一括して、口縁部文様帯のあり方により分類を行った。器形はほぼ深鉢に限られる。

第1類　地文に細線文や縄文を多用する、所謂「細線文系」土器を一括する。本類は量的に第3群の主体を占め、文様帯のあり方により以下に細分される。

A（10・61・79・89・90・94・99・101・102・104・124・146・168）

口縁部の地文に主として細線文が用いられる一群である。器形は1段ないし2段に膨らむキャリパー形の口縁部に、直ないしはやや裾の張る胴部が取り付く（2段に膨らむキャリパー形の場合、下段の膨らみはむしろ胴部といえる）ものと、円筒形を呈するものが存在する。文様帯は口縁部文様帯と胴上部文様帯に分かれ、口縁部文様帯はさらに幅の狭い上段と、下段により構成される。

上段は縦位の細線文（61・99）の他、格子状に細線を付すもの（101・102）、無文のもの（104）、縄文を付すもの（10）が見られる。上下段の区画は普通1～2条の平行沈線によるが、101・102は結節平行沈線で行う。下段は細線文を施した後平行沈線や沈線による施文を行うもの（61・99・104・124）、瓦状押引文（ないしは竹管腹部による刺突文）を充填するもの（10）がみられる。前者には三角印刻文が伴う場合が多いが、本遺跡では出土していない。尚104・124は推定4単位の突起を有している。104は突起上にも細線文を付す。

胴上部文様帯も横位に展開される。口縁部との区画は平行沈線により行い、橋状把手が4単位付されるようである。10は縄文を施す隆帯で区画をしている。区画線下にはY字状文（137）の他、平行沈線による構図（10・89）も見られる。胴部の地文は縦位の帯縄文で、一帯ずつやや間隔をおいて施す。両端に結節をもつ単節縄文が多いが、94・146の様に羽状縄文も存在する。89は細線文を地文としており、また79・168は細線文による格子目文と三角印刻文が施される。

B（1・2・4・7・13・40～42・48～55・58・59・65・67・68・76～78・80～88・91・93・98・100・103・105～120・123・125～136・138～139）

口縁部の地文が縄文となる一群である。器形はAと同様である。文様帯もAと同様口縁部2段、胴上部1段であるが、口縁部下段は41・81・113を除き無文が圧倒的に多く、本類の特徴として挙げられる。上段の縄文は横位に施す。上下段の分割は1～2条の平行沈線ないし単沈線によるが、下ないし上に接して刻目を入れるものが多い（1・2・41・67・84・98・100・105）。明瞭な三角印刻文も少数存在している（40・108）。この他、口唇部に刻目を施すもの（67・68・84・103・106・107）、小突起を付すもの（83・105・112）、爪形文を付すもの（4・120）がある。口縁部下段に少数見られる施文は瓦状押引文（41）、平行沈線による山形、円、菱形等の構図（81・113・126）等で、他に橋状把手や突起を施すものが多く見られる（2・4・103）。

口縁部、胴部の区画は隆帯によるものが多い。隆帯上には縄文（1・42・50・54・105・126）の他、三角印刻文（4）、細線文（53）が施され、また橋状把手（53・54）も見られる。胴部文様帯はAと同様Y字状文をもつもの（3・52・53・76・80）や、他にY字状文の変化したと考えられる弧線文（4・138・139）、平行沈線や単沈線により横帯区画を行い、玉抱き三叉文（1・135・136）、U字形・菱形・円等のモチーフを縦位に連ねたもの（48・73・78）、弧線（54・55）等を描出するものが見られる。105は鍵状に平行沈線を引く。又、6はミニチュア土器であるが、胴部に玉抱き三叉文ないしは円形・菱形のモチーフを横位に連続させている。尚胴部は地文としてA同様縦位の縄文を施すが、縄文の間隔が狭く、接したり重なるものが見られる。

C（14・92・121・142・143）

4片のみ抽出された。全形は不明であるが、器形はキャリパー形、口縁部のやや外反する円筒形が存在する。文様帯は、口縁部上段はBと同様、横位の縄文を施し、口縁部下段は巾広の単沈線による弧線文が横位に展開される。胴部は隆帯又は沈線により4単位に縦分割される。各区画は無文が多いようである。地文は口縁部横位、胴部縦位に行うが、雑なものが多く、施文されないものも見られる。

121は波状口縁となるもので、単沈線により波状部に三角形の区画を行い、玉抱き三叉文を施す。地文は省略されている。143は胴部の懸垂隆帯で、上端がY字状となる。14は懸垂隆帯に沿って単沈線、印刻により三角形の構図を描く。142は懸垂文に沿って刻目を施している。

第2類　主として平行沈線文により加飾される一群で、縄文は基本的に用いられない。量的には第1類より少ない。以下のように細分されるが、細片が多いため分別困難なものが多い。

A（11・43～45・47・56・57・60・62・63・66・69～72・74・75・95・140・141・149～167）

大きく外開する頸部に、くの字形に内折する口縁部が取り付く器形を基本とする。胴部は筒状となる。口縁部の内折部分が省略され、キャリパー状になるものも見られる（43・44・156）。

文様帯は口縁部・頸部・胴部の3段に分けられ、横位の構図を展開する。口縁部文様帯はさらに上（端部）下段に分かれる。上段は爪形文（44・45・150・151・154）を施すものが多く、無文となるもの（43・69・128・156）は少数である。下段は平行沈線により格子目文（45・47・62・149～153）、結節平行沈線文（3・294・295・154）を施す。

頸部文様帯は口縁部および胴部文様帯と平行沈線により分離されるが、隆帯によるものが少数ある（47・151・155）。文様帯内は縦位の平行沈線で満たされるが、密に行うもの（151・157・158）と間隔をおくもの（3・44・57・71・149・156）の2者が存在する。後者は地文に縄文が施される比率が高い。

胴部文様帯は多段になるものと、1～2段のものとがあるが、細片が多く識別できない。各段には平行沈線により格子目文（5・56・137・160～162）、斜線文（163）、瓦状押引文ないし結節平行沈線文（57・66・75・165～167）が施され、最下段には縦位の施文を行うものも見られる（5・11・60・140・141）。縦位施文は平行沈線により山形文、直線文が描かれ、5は胴上位近くまで占めている。

B（96・122）

Aの規格に合致しない2点を挙げる。96は口縁部破片で、キャリパー形の口頸部である。平行沈線により逆U字形の区画をし、格子目文で埋めている。122は頸部に縦位の平行沈線文を充塡するが、口縁部には横位に5条の角状押引文を施している。

第3類　第1類と第2類の特徴を兼ね備える、折衷された一群である。折衷は文様帯の交換、器形の交換、地文の交換によりなされている。今回呈示した資料では、第1類Bと第2類Aの折衷形態が見られる。（3・5・137）

3は器形および口縁部下段～頸部の文様帯は第2類Aの特徴を示すが、地文として縄文を施し、胴上部にY字状文を施文する点は第1類Bの特徴と言える。5は口縁部の屈折が省略されてはいるが、基本的には第2類Aの器形として捉えられる。第2類Aと異なる点は、地文および口頸部の刻目を付した弧線文帯であり、これらは第1類Bの要素である。

その他、地文として縄文を施している第2類土器（11・44・57・60・71・140・141・149・156）も折衷形態とすることが出来よう。

第4類　外来系の要素をもつものである。46は口縁部に突起を有し、端部側面および横走隆帯上に爪形文を施す。胎土に白色粒子を多量に含み、器肉が薄く、硬い焼きである点他と識別される。東海地方の北裏CⅠ式に類似するものと捉えられる。147は縦位の木目状撚糸文が観察され、胎土は在地の特徴を示す。北陸地方との関連を示すものである。5は直前段反撚および前々段反撚の縄を用いるようであり、これらも北陸地方等との関連を考えるべきかも知れない。

第4群　中期後葉の土器

土壙14出土の2個体3片を拓影で示した。いずれも唐草文系土器の深鉢で、169・170は同一個体である。169・170は隆帯により頸部に横帯区画を、胴部には大柄の渦巻文を施文する樽形の深鉢である。区画内は交互刺突で埋め、胴部渦巻文の余白には沈線を充填させる。171は縦位に条線を施した後、沈線により渦巻文を描くものである。

まとめ　ここでは縄文土器の主体である第3群土器について簡単にまとめておく。今回中期初頭土器の分類に当たっては、三上徹也氏の研究成果に従った。[注] 氏の編年観によれば、本遺跡第3群第1類AはⅠ段階、第1類BはⅡa段階、第1類CはⅡb・c段階、第2類土器はAがⅠ・Ⅱ段階となる。氏はこれら縄文系（第1類）および沈線文系（第2類）の並行関係については、文様要素の共通・類似点、梨久保遺跡での共伴関係、折衷土器の3点をもって説明されている。本遺跡では、破片中心の資料ながら11住、土壙10、土壙295からまとまって出土しており、三上氏の編年観と本遺跡資料の適合性について確認しておく。

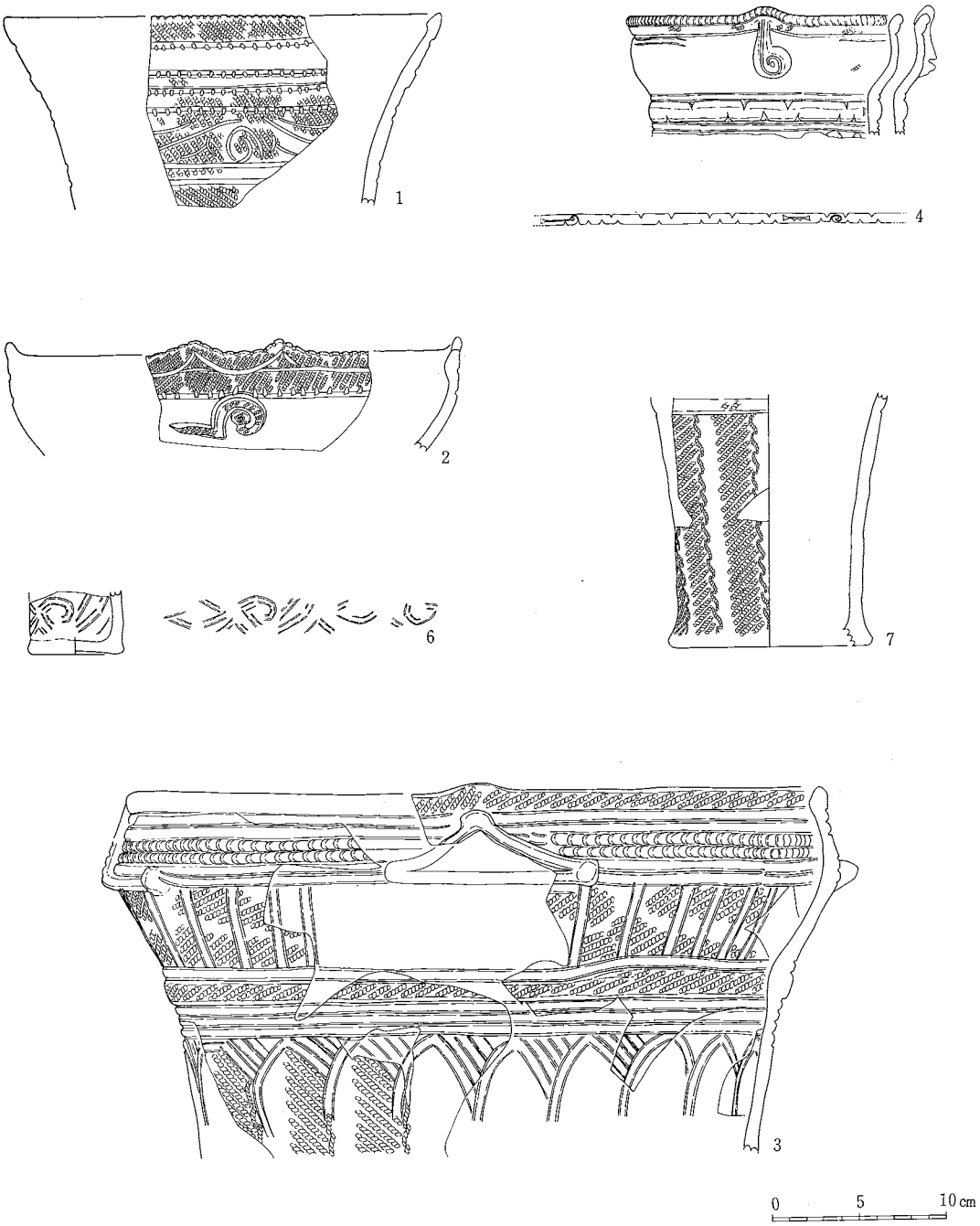
11住1・2等は縄文系2a段階の特徴を備え、3・45は沈線文系Ⅰ～Ⅱa段階の口頸部のあり方を示す。

土壙10　5の胴部は沈線文系Ⅱa段階の特徴を示す。口縁部の弧線文及び刻目のあり方は縄文系Ⅱa段階、共伴する4も同様である。

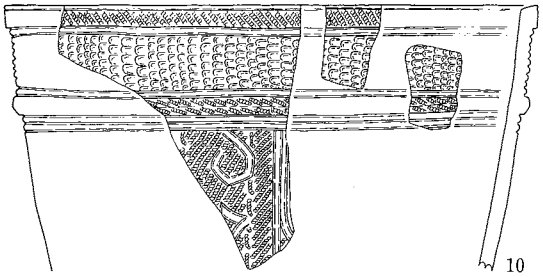
土壙295　縄文系の67はⅡa段階の特徴を良く表し、沈線文系69・71・75はⅡb・cまでは下らない。

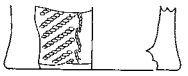
以上の伴出関係は、乏しいながらも、三上氏の捉えたⅠ・Ⅱa段階の並行関係と矛盾しない。Ⅱb・c段階については資料が少なく不明である。向畑遺跡出土土器は、上記の遺構も含め、「梨久保式」Ⅱa段階に主体をおくものとまとめられよう。

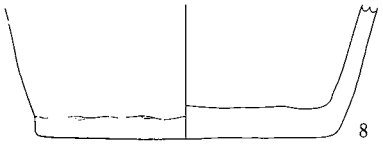
注　三上徹也　1987「梨久保式土器　再考」『長野県埋蔵文化財センター紀要　1』

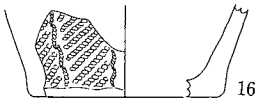


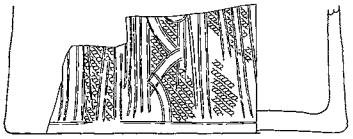
第55図　縄文時代出土土器(1)

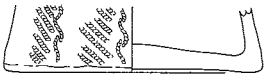


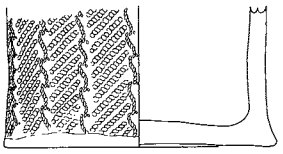


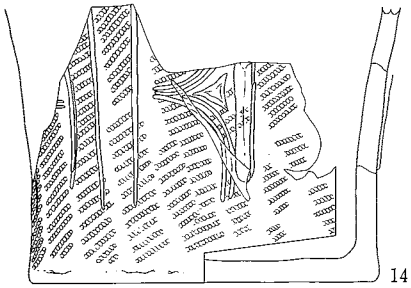


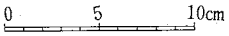




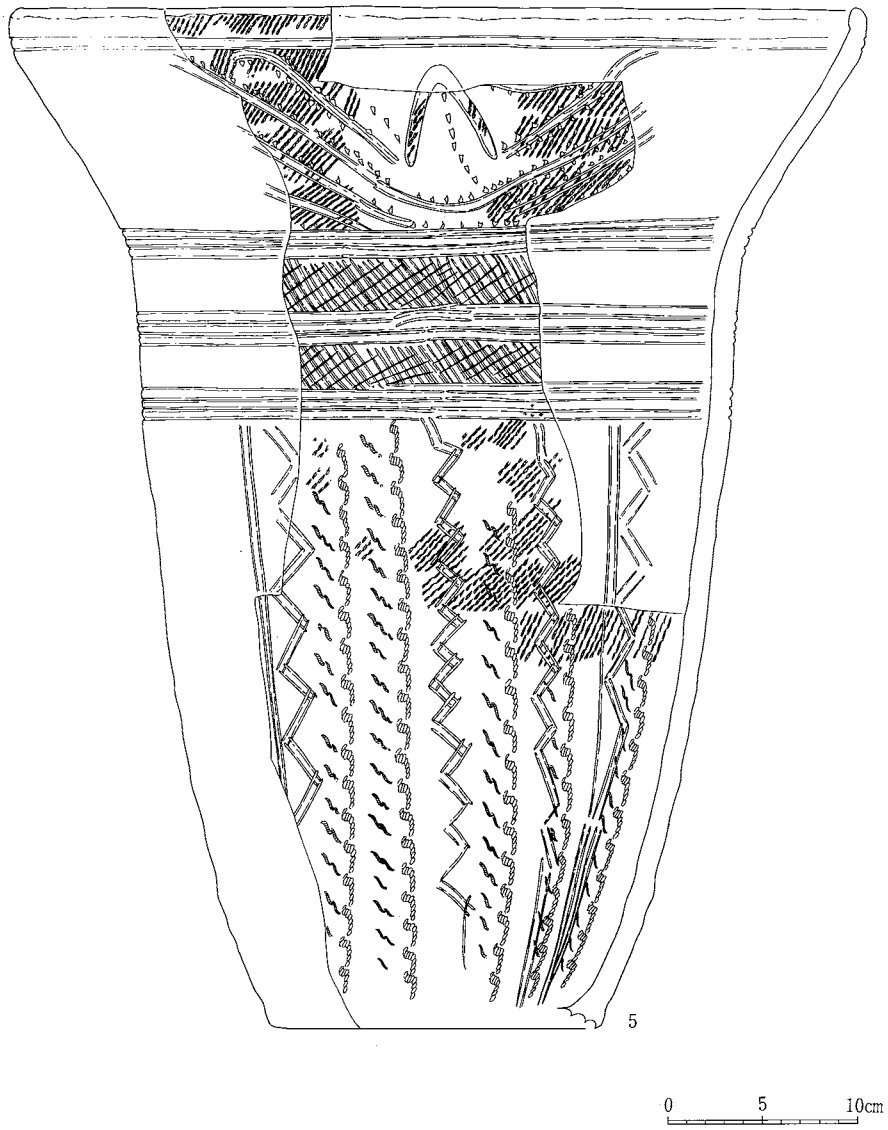




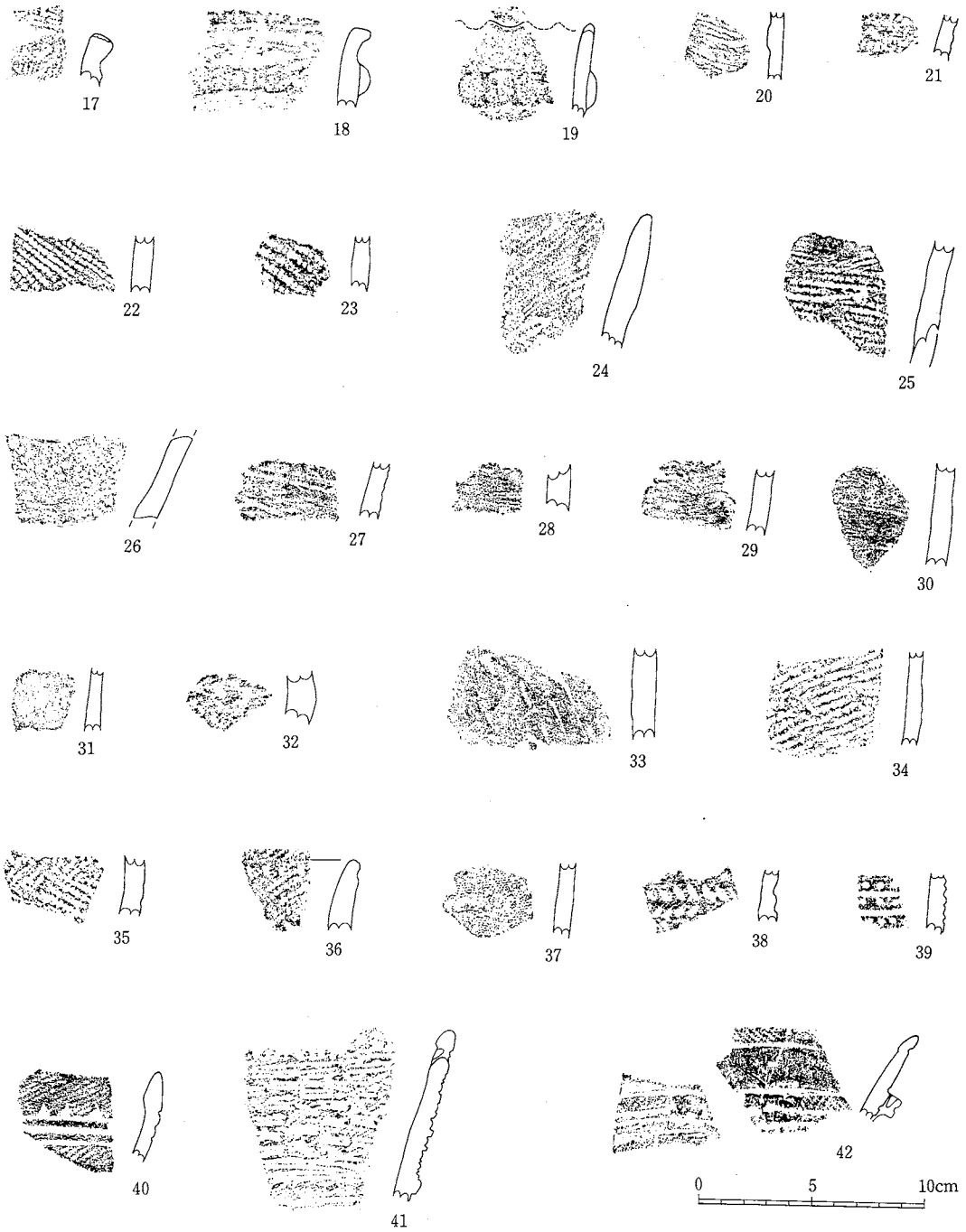




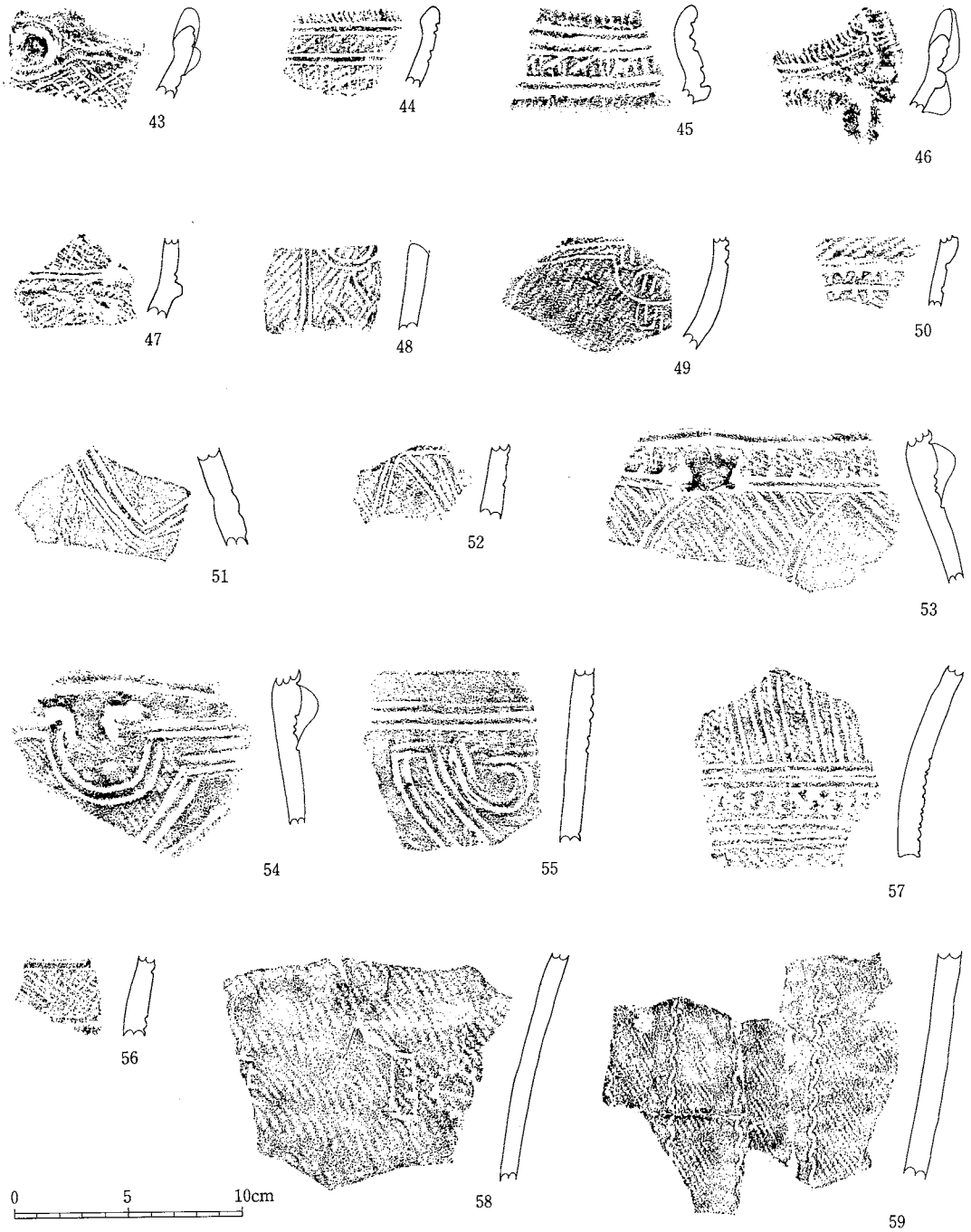
第56図　縄文時代出土土器(2)



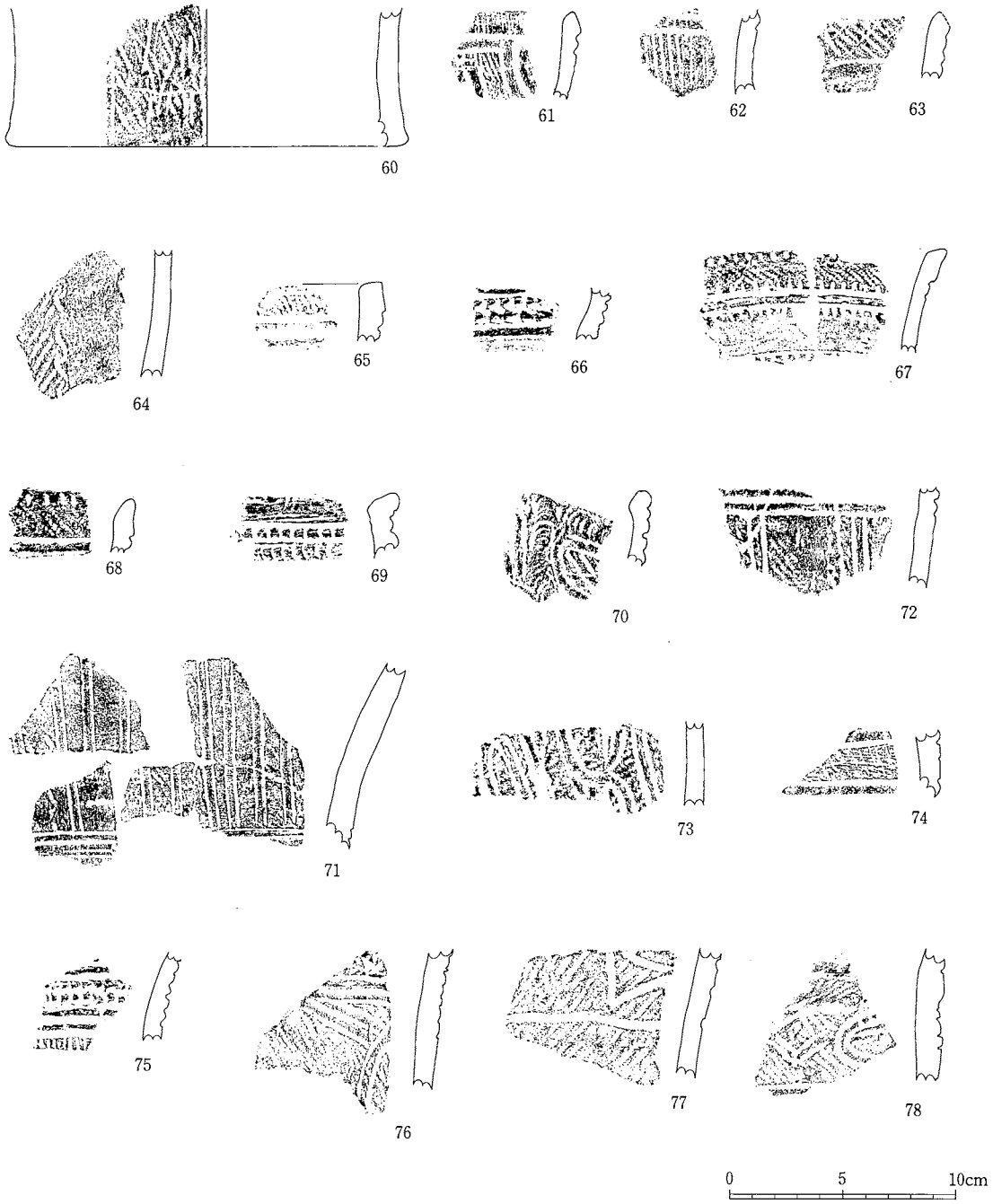
第57図　縄文時代出土土器(3)



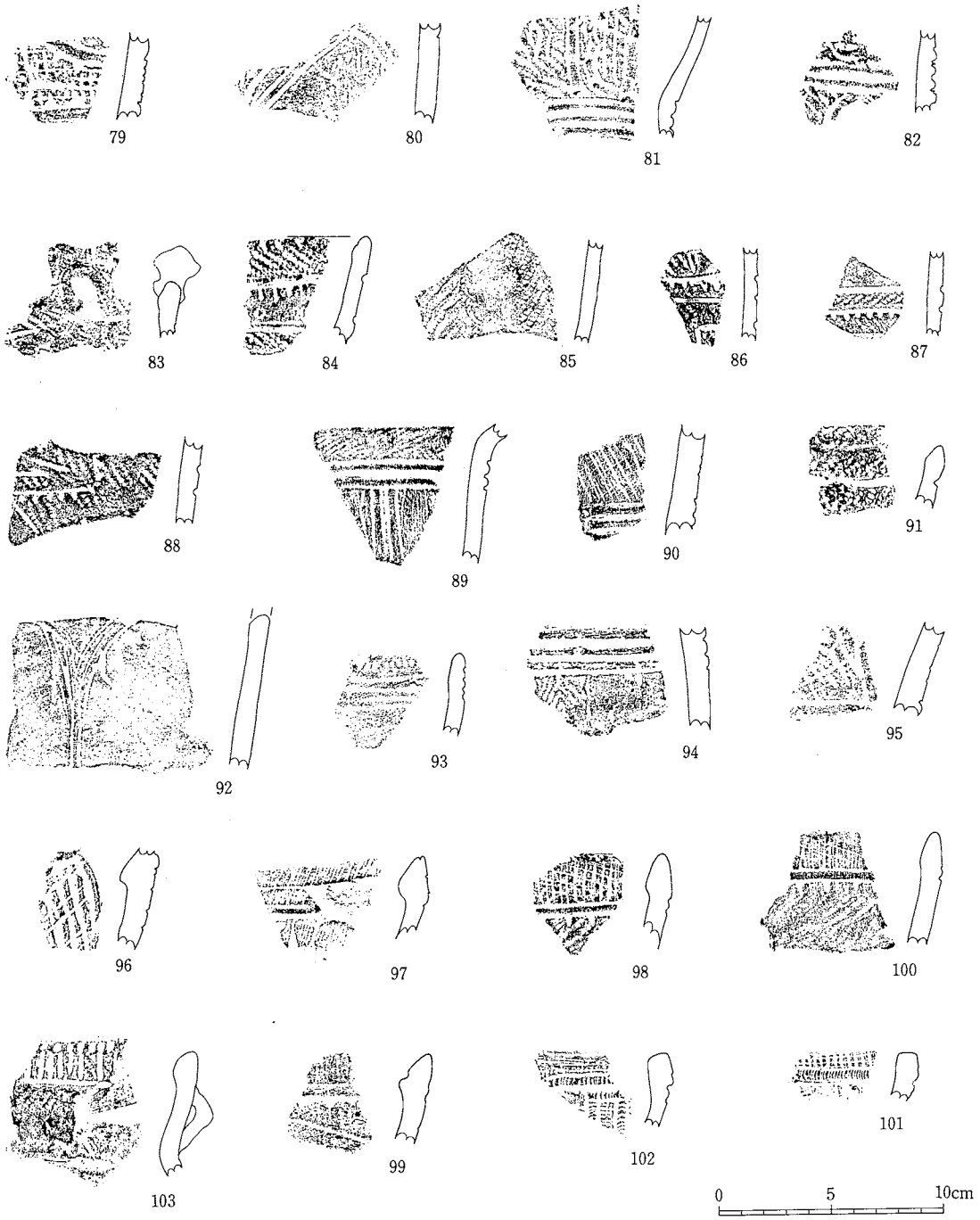
第58図　縄文時代出土土器拓影(1)



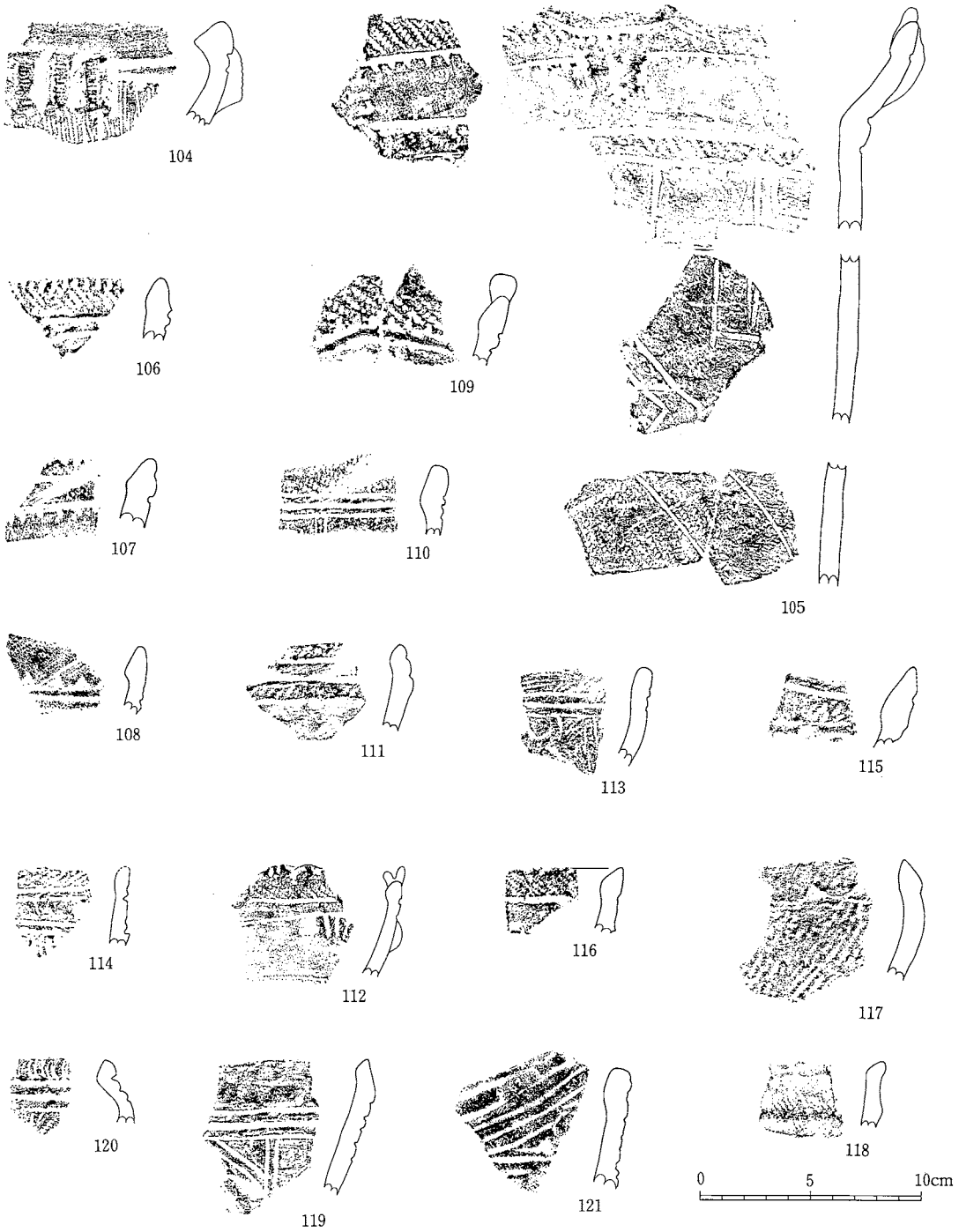
第59図　縄文時代出土土器拓影(2)



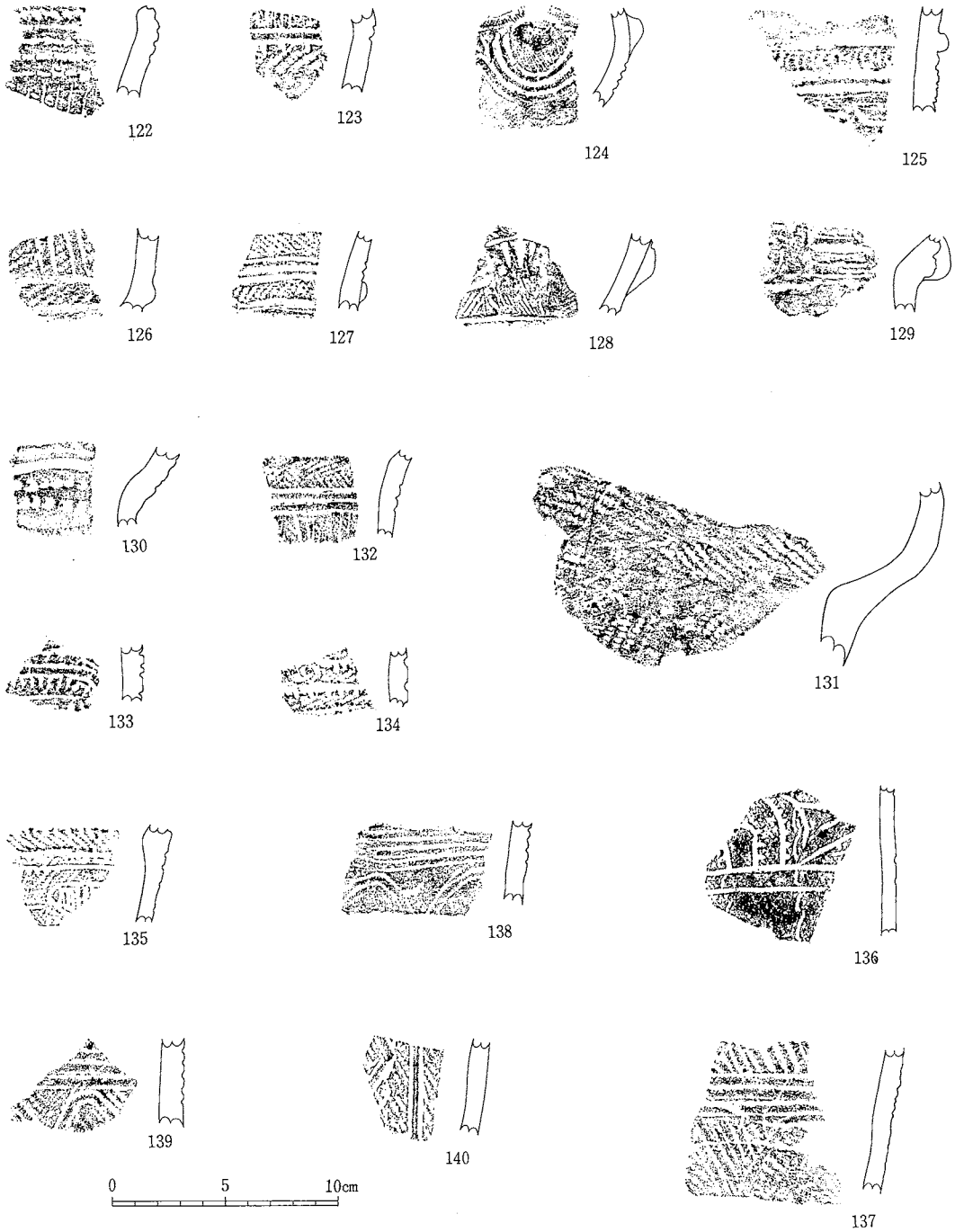
第60図　縄文時代出土土器拓影(3)



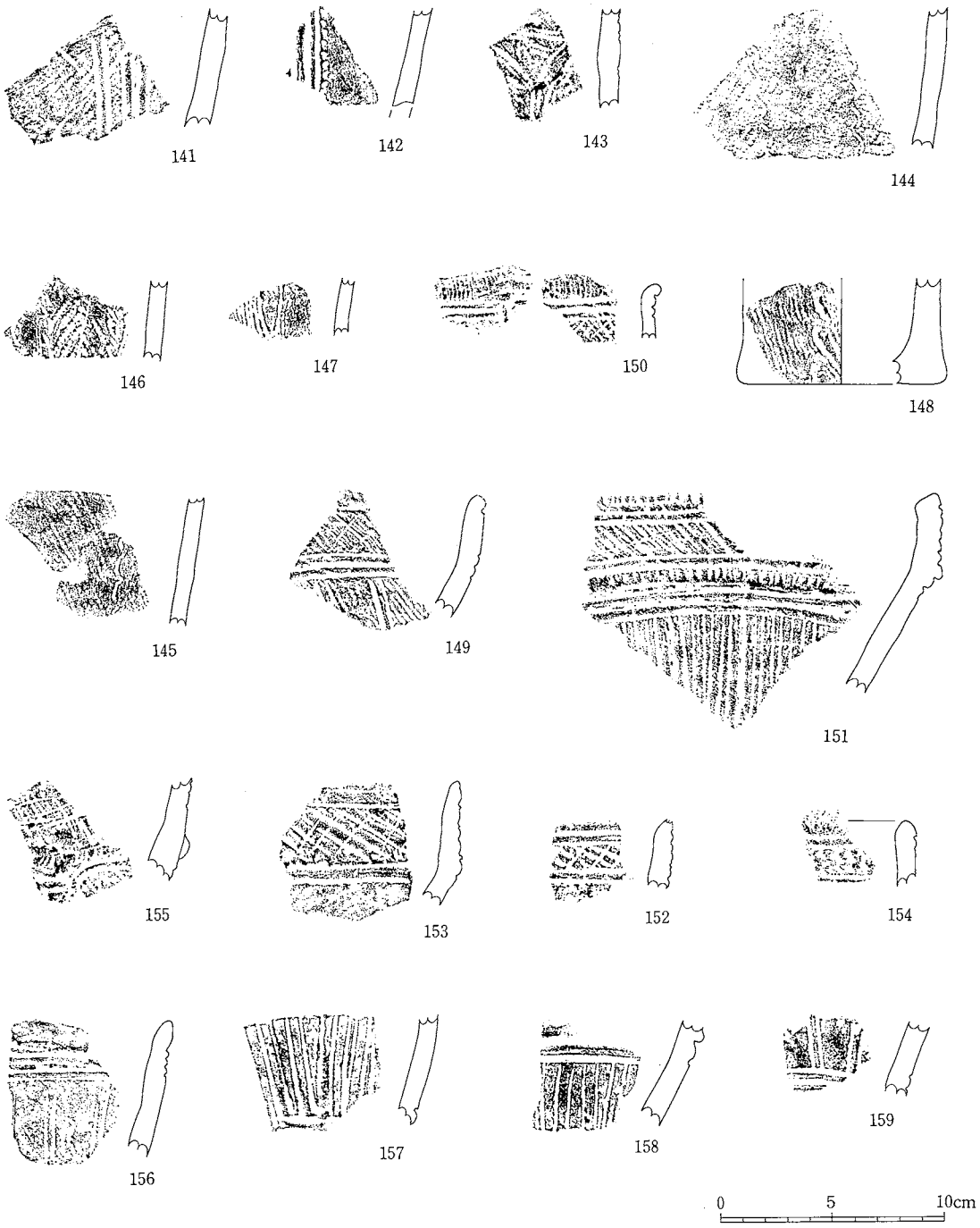
第61図　縄文時代出土土器拓影(4)



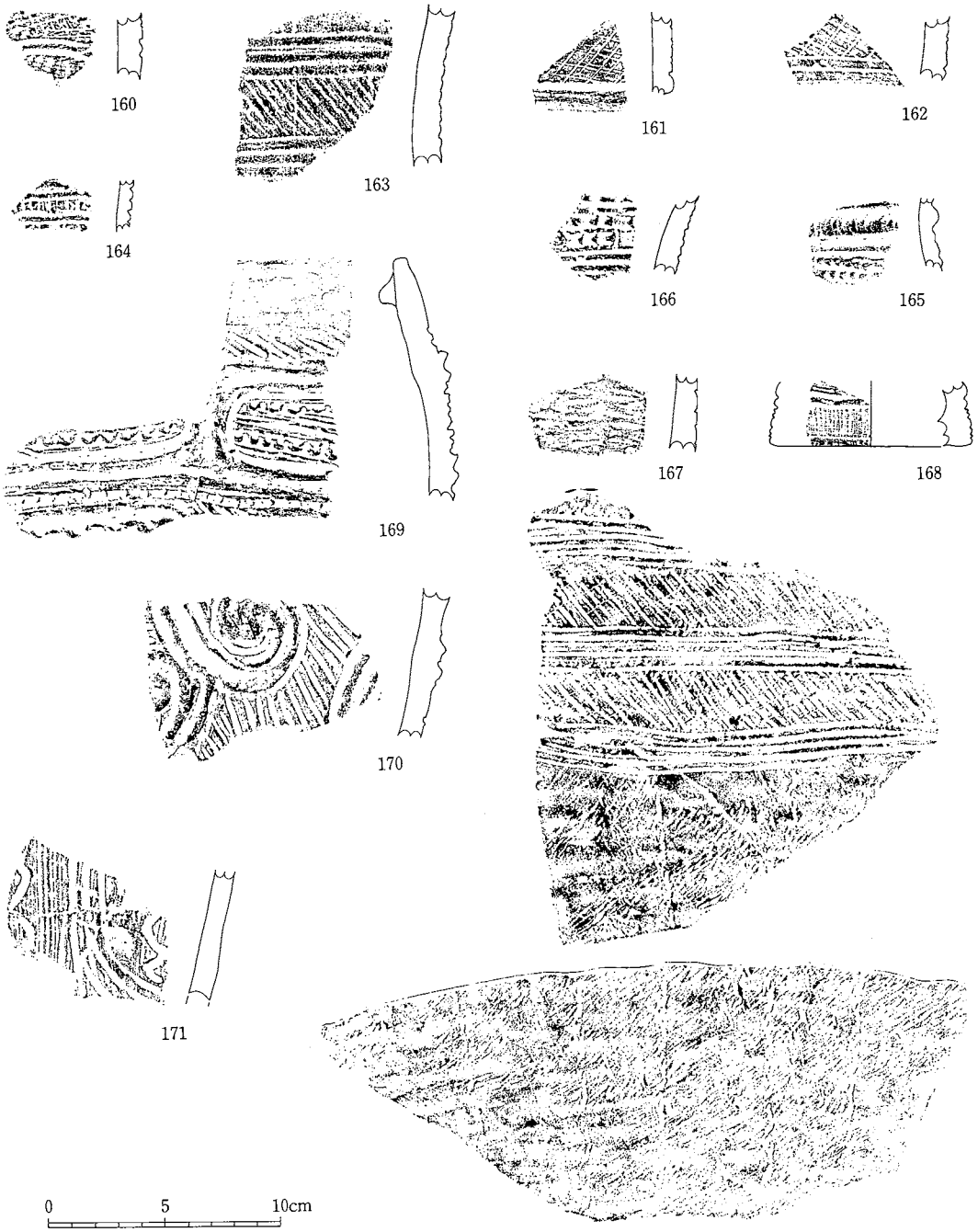
第62図　縄文時代出土土器拓影(5)



第63図　縄文時代出土土器拓影(6)



第64図　縄文時代出土土器拓影(7)



第65図　縄文時代出土土器拓影(8)

(2)古墳時代の土器

本報告で扱う古墳時代の遺構より出土した土器は、第1次報告[註1)]に準ずるものである。第1次報告と同様、各遺構から、少量の弥生土器片と数点の須恵器片が認められた他は、土師器が出土している。さらに、その大半は、前期に属するものと考えられる土器群である。ただ、第15号住居址より出土した土器群は、前期土器群と様相を異にし、次時期のものと考えられる。

器種は、壺、甕、台付甕、高坏、小形高坏、坩、小型丸底土器、器台、鉢、手捏ね土器があげられる。なかでも甕が多く、高坏がこれに次ぐ。

壺、壺形土器は、完形土器が2点であり、口縁、底部破片がほとんどであった。これらは、器形から、口縁径が小さく、胴に明確な肩部をもち、球形の胴となるもの、広口の口縁となり、肩部が緩やかな器形となるもの（18．32）の2つに分類される。さらに、前者は、口縁部の形態から、折り返し口縁をもつもの（15)、有段口縁をもつもの（10．23)、逆ハの字状に開く口縁をもつもの(119)、棒状貼付を施すもの（31）の4つに分類される。広口壺形土器（32）は、在地の櫛描文が施される土器群の器形に類似するものであり、器面全面に磨きが施されることから壺と考えた。本遺跡から数多く出土している輪台状の上げ底をもつ底部破片は、大半が、この形態に属する土器と考えられる（54．143他)。逆ハの字状に開く口縁をもつものは、胴部が球形となり、器面全面に磨きが施される。16は、この形態に属するものと考えられ、この時期の壺形土器を示す器形となるであろう。31は、222、223と同様、東海地方に系譜をもつ土器群と考えられる。粗雑な作りであるが、口縁部に棒状の貼付を3条で1組として、4ヵ所に付している。この他に、第14、15号住において、弘法山古墳より出土したパレススタイル壺の口縁部と類似した破片が出土している。

甕、台付甕は、出土土器の中で最も数量が多く、器形、口縁部形態、器面調整においていくつかに分類が可能であるが、全貌を引き出せる資料は数点に限られる。よって、器形と口縁部形態から分類を行なう。器形よりみると、平底甕と台付甕に分けられる。

平底の甕は、103のごとく、単純口縁をもち、肩部に櫛描波状文を施すものと、184等、数多く破片で出土している叩き甕に分類される。前者は、球形に近い胴部となり、逆ハの字状の口縁部をもつ壺形土器に近い器形となる。調整も、胴下端は削り、他は磨きを施しており、櫛描波状文だけが、在地の系譜をひくものとして残っていると考えられる。後者は、全て口縁郎を欠損しているため、口縁部の形状は不明である。叩きは、全て左下がりとなり、叩き目をハケにより潰す調整が加えられている。これらは、畿内系の土器群の流入を示す資料といえる。

台付甕は、口縁部の形状から、単純口縁のもの、「S」字状の口縁をもつものとに分類される。前者は、頸部が巾をもち、緩やかに外反するもの（12．93．183)、くの字状に開くもの（8．113．43．148)等に分類される。これらは、器面全面にハケで調整を行ない、口縁部または、口唇部がヨコナデされるものが大半である。小形の甕類は、ほぼこの器形に属すると考えられる。後者については、全様を知る資料はないが、口唇部が緩やかに外反し、胴部に斜位のハケを施すものである

(147)。これらは、東海地方に広く分布する土器であり、系譜は、東海地方に求められよう。

この他に器形は明らかでないが、頸部がくの字状に強く外反し、短かい口縁部となり、口唇部をつまみ上げ、面を作り強いナデを施す土器群がある。これには、41. 42. 49. 100. 172が該当し、北陸地方の系譜を引くものと考えられる。

高坏、小形高坏、大半が坏部あるいは脚部のみの出土であり、器種の判別ができない脚部破片も多い。坏部の形態より3種類に分類される。

坏部の底部と口縁部との境界に弱い稜を形成し、口縁部が外上方へ外反するもので、坏部は比較的浅くなる形態。これには、4. 118. 166が該当する。緻密な磨きが加えられているもので、これらには直線的に広がりをもつ脚部が付くと考えられる。

坏部に明瞭な稜をもち、口縁部が外上方へ強く外反するものには、第15号住居址出土土器が該当する。72. 81. 82は、放射状に磨かれ口唇部が尖る形態となる。これらには、柱状部にふくらみをもち裾部がハの字状に開く脚部（75）が接合するものと考えられる。

坏部の底部に稜をもち、直立気味に立ち上がった坏部中段より口縁部が強く開く形態のもの（73. 149）もある。高坏の形態から後述二者は、中期段階の様相といえよう。

小形高坏は脚部底径が坏部口径より大きなもので、坏部に稜をもたず、丸く内弯して立ち上がる形態をもつものである。第1号住居址出土土器がこれに該当する。小形高坏は、畿内庄内式期に分布することが知られており、畿内地方あるいは東海地方の系譜を引くものと考えられる。

坩、小型丸底土器、これらの土器群は完形に近い形で出土したものが多かった。坩形土器は、胴部は球形となり、口縁部は内弯気味に立ち上がるもので、底部は突出せずにやや凹む形態である。13. 14は口縁部が短かく全体的に扁平となる。ハケによる調整が加えられている。88. 132は、口縁が長く、調整は磨きが施されている。

小型丸底土器は、いずれも胴部に比して、大きく開く口縁部をもつので、胴部が球形を呈するものに、21. 38. 55. 56がある。この内、38. 55. 56は、直線的に開く口縁部となり、ハケ調整が残されている。21は器面調整が緻密で口縁部が胴部より短かい形態となる。134は扁平気味の胴部に短かい口縁部をもつ形態、135は、長い口縁部をもつものである。いずれも磨滅により調整は不明である。

鉢、器台、ミニチュア　鉢形土器は、平底の底部が直線的に開く口縁部をもち、逆台形を呈するもの（22）、同形態を取りながらも底部が上げ底状になるもの（36）、半球形の形状となり口縁部が内弯して立ち上がるもの（133）が出土した。

器台は、4個体それぞれ異なる形態のものが確認された。いずれも貫通孔をもつものである。25は大形のもので、粗雑な作りである。109は器受部は不明であるが、短い貫通孔をもち、緩やかに脚部が開くものと考える。158は器受部に稜を有するもので小形器台に属するであろう。44はやや疑問もあるが器台と考えられよう。

ミニチュア土器は平底の容器形を模したもの90．91．127．128と高坏を模したものと考えられる37．86が出土している。

その他の土器としては、137にみる底部を焼成前に穿孔した甕形土器、185にみる孔を有する蓋が出土している。

土器以外の土製品としては、線刻文のある紡錘車（47）、勾玉（30）の出土があり古墳との結びつきを示唆するものである。

まとめ

本遺跡出土の古墳時代の土器は、第15号住居址を除くと、ほぼ4世紀代に属する土器群と考えらよう。土器群に関する詳細な分析、検討は、第1次報告と第3次調査報告から総合的になされるべきところなので、昭和63年度調査の結果をもってまとめとしたい。ここでは、本報告からいえる課題を取り上げることとする。

住居址個々にみるといくつか器種の欠落が指摘されるが[註2)]、これらを時期差以外の要因とし、ほぼ同時期に遺構が存在していたと考えたい。出土土器群から時間的変遷を導き出せる資料は、第15号住居址出土の高坏、小型丸底土器と他群土器との形態変化にみい出せるのみである。器形形態の違いは、在地系土器群と外来系土器群との影響によるものと考えられよう。古墳時代前期、当地域に広範囲域から土器が流入されていることが報告されている[註3)]。本遺跡にも同様のことが認められた。東海、北陸、畿内の各地域に主体をもつ土器群が、弥生時代から継続してきた在地土器と融合したと解釈できる。外来系、在地系土器の判別の慎重さと、詳細な分析が必要となるであろう。

遺構の時期を4世紀代と前述したが、出土土器群の編年的位置ずけが必要となるであろう。当地域ではいままで古墳前期、中期の良好な資料に乏しく、櫛描文土器群からの経緯が明確でなかった。編年的位置ずけを、東海、北陸、畿内系の土器をもってすることは、十分な検討が必要となるであろう。

住居址内よりパレススタイル壺と思われる破片が2点（199．208）出土し、文様構成が弘法山36号古墳のものと近似することがいえる。また第13号住居址内出土の棒状貼付をもった壺（31）は中山36号古墳出土の壺口縁部形態の変化を思わせるものである。出土遺物とともに集落全体の分析を行ない周辺古墳との結びつきが考察されよう。

前期出土遺物と同様、全国的に斉一性をもつ第15号住居址等から出土した中期土器群がある。

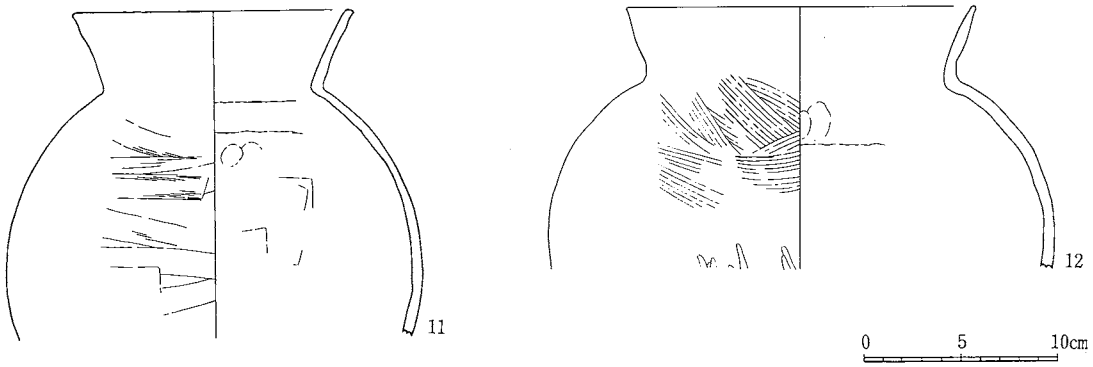
中期初頭の資料は、県内でも稀薄なものであり、住居址出土遺物として資料価値も高い。集落、古墳とともにこれらの検討も必要である。

詳細な分析、検討が十分になされなかったが、今後いくつかの課題をもって結論が導き出されよう。

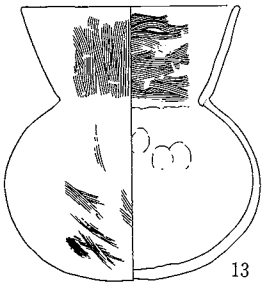
註1）松本市向畑遺跡Ⅰ、1988、松本市教育委員会
註2）同上書
註3）中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書2、1988、長野県教育委員会

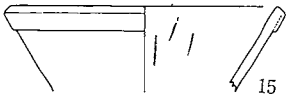
第１号住居址

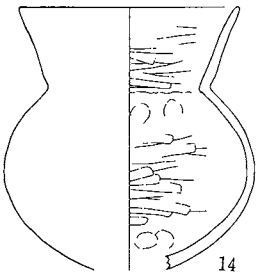
第２号住居址

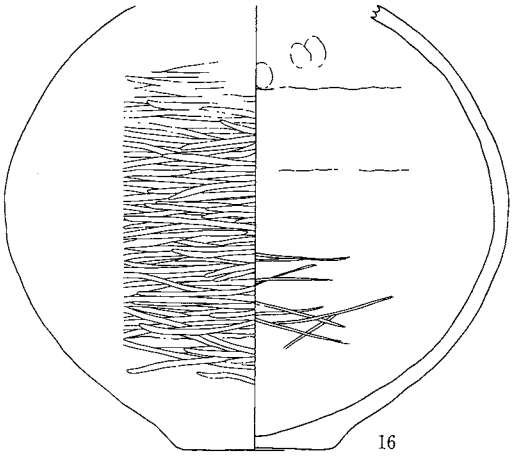


第66図　古墳時代出土土器(1)

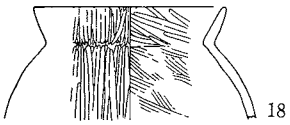


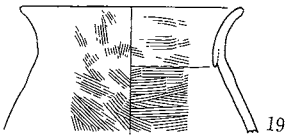


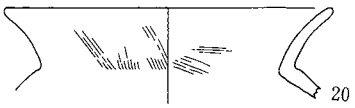




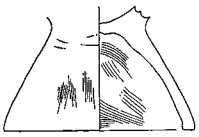
第 3 号住居址

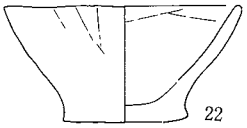


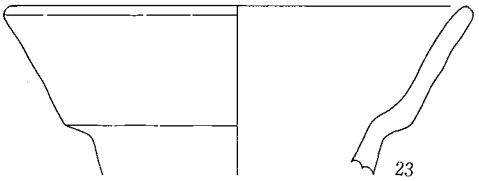


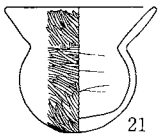


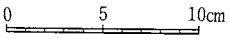
第 4 号住居址





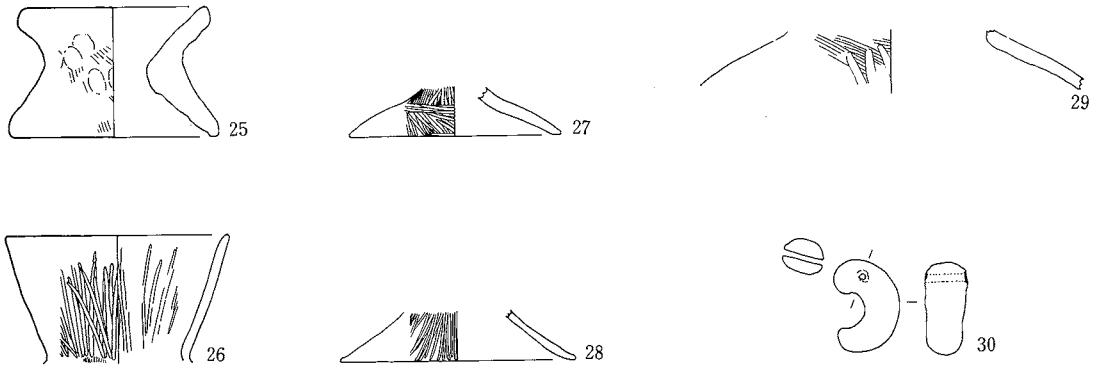




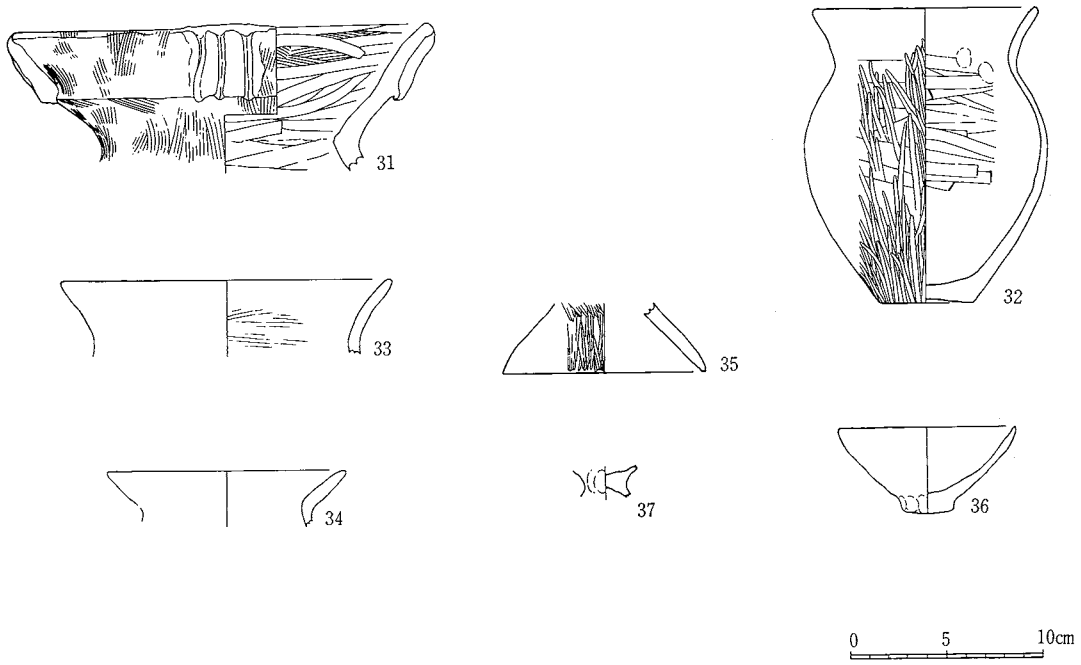


第67図　古墳時代出土土器(2)

第12号住居址

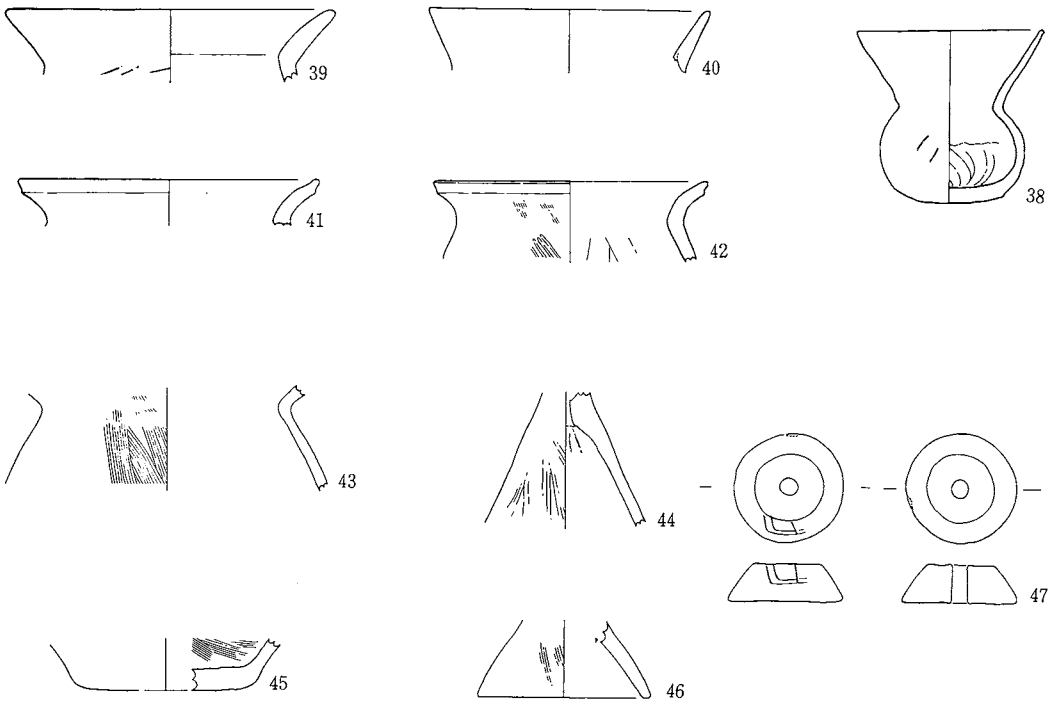


第13号住居址

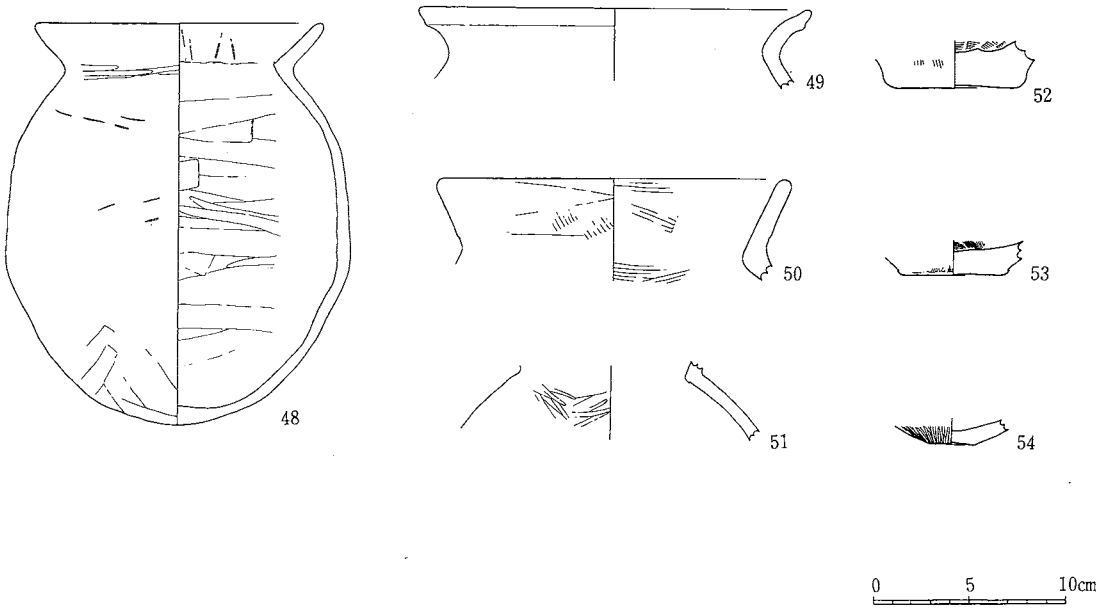


第68図　古墳時代出土土器(3)

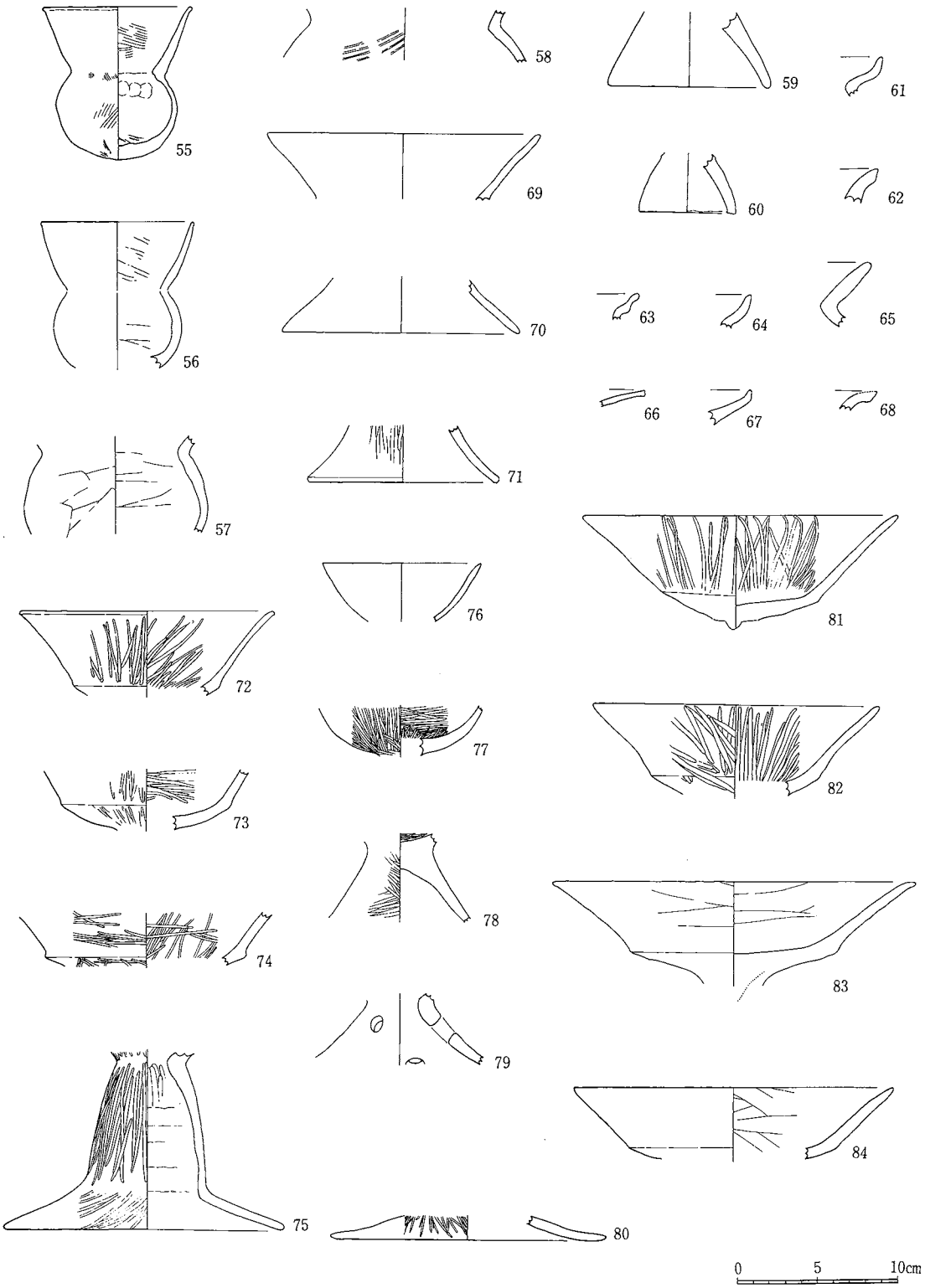
第14号住居址



第15号住居址

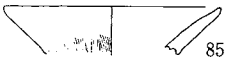


第69図　古墳時代出土土器(4)

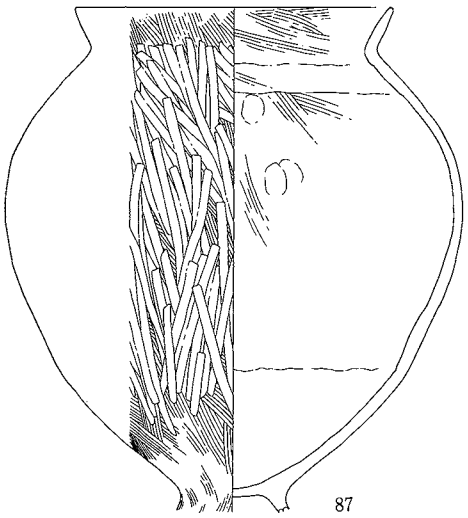


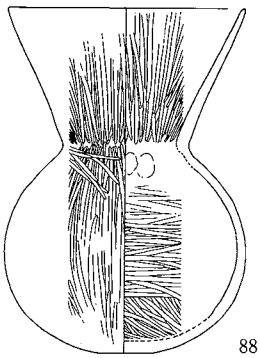
第70図　古墳時代出土土器(5)

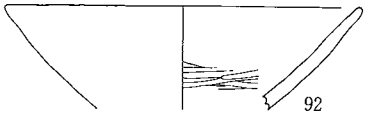
第16号住居址



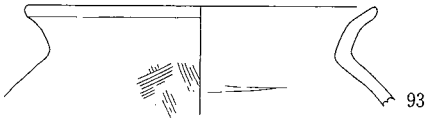
第18号住居址







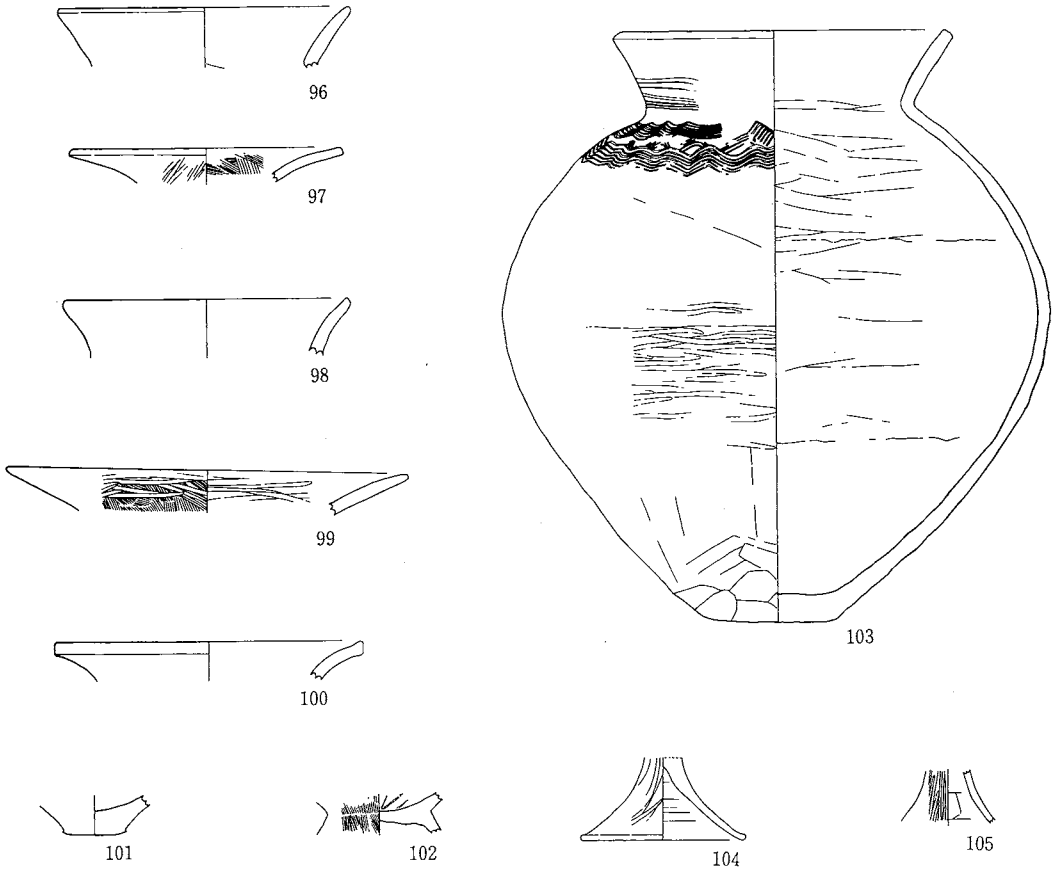
第21号住居址



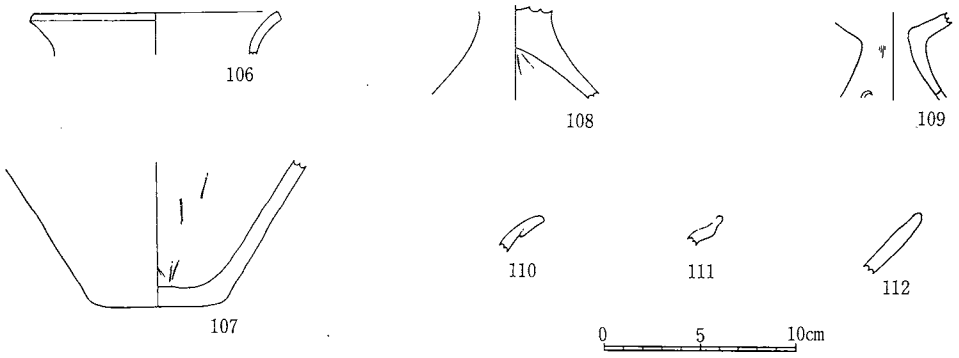
0 5 10cm

第71図　古墳時代出土土器(6)

第22号住居址

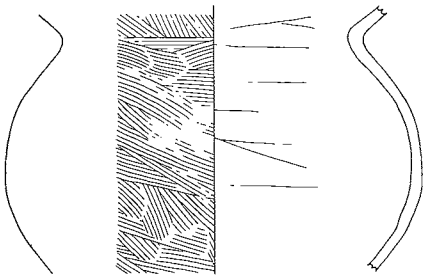


第23号住居址

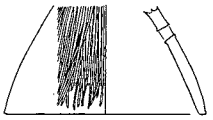


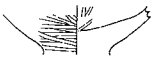
第72図　古墳時代出土土器(7)

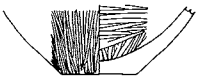
第24号住居址

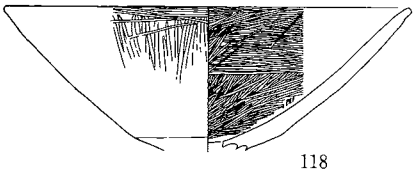

113

114

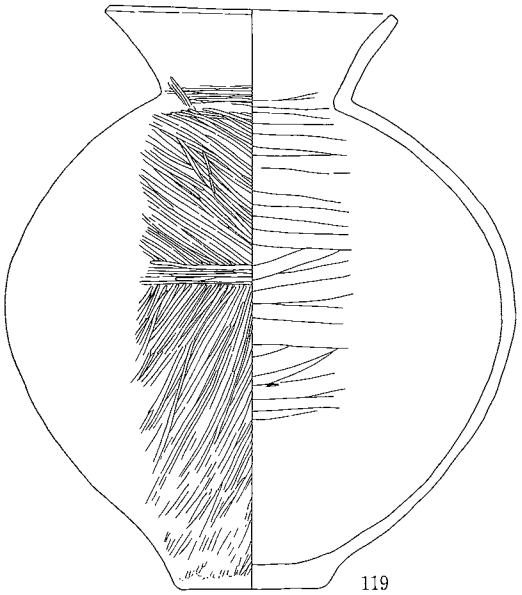

115


116

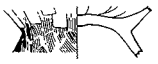

117


118

第29号住居址


119

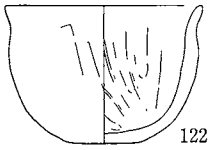
120

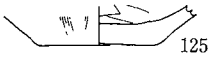

121

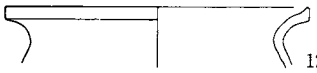
0　5　10cm

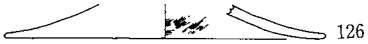
第73図　古墳時出山土土器(8)

第30号住居址



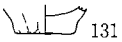




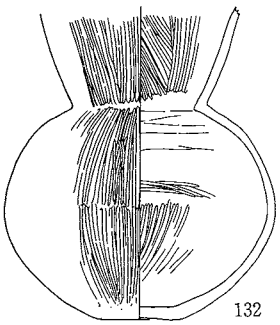


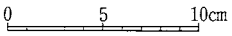
第44号住居址

第47号住居址



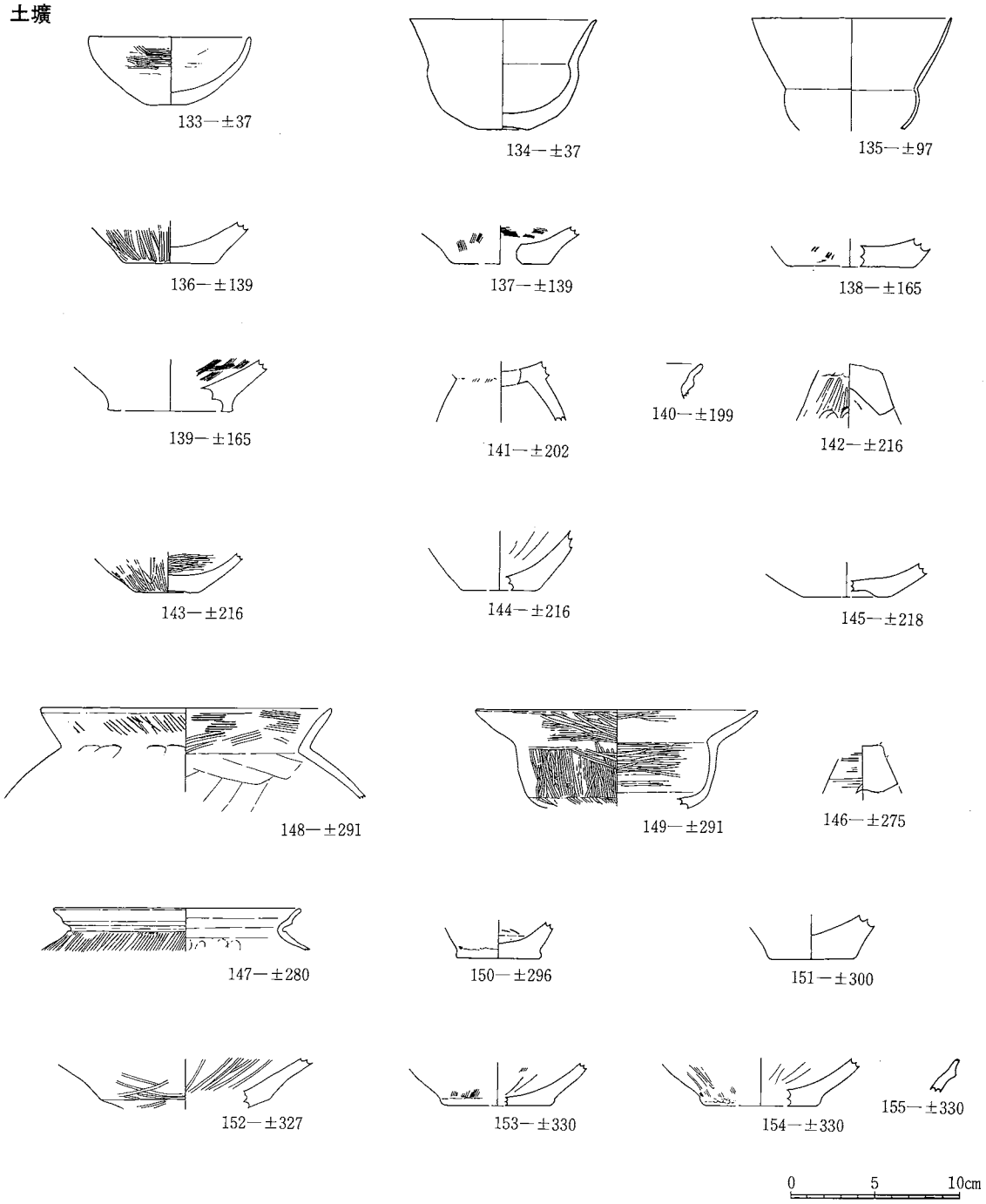
方形周溝墓 1





第74図　古墳時代出土土器(9)

土壙



第75図　古墳時代出土土器(10)

156—±609

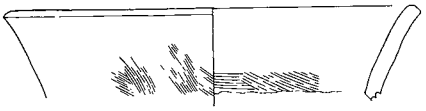
157—±635

158—±642

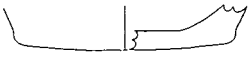
159—±663

160—±722

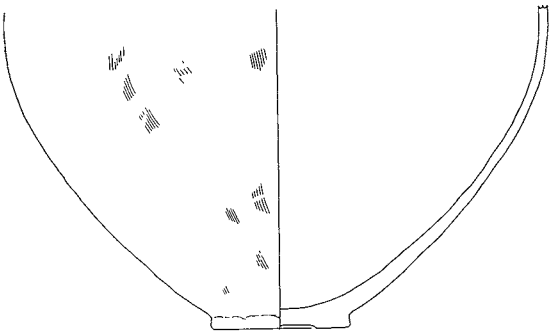
161—±726



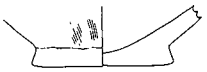
162—±740



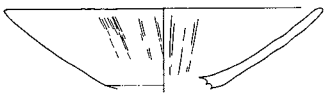
163—±810



164—±812



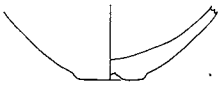
165—±812



166—±812

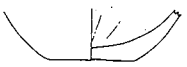
溝

167—溝2

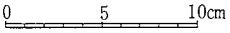


168—溝2

169—溝14

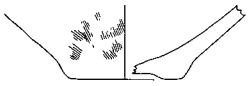


170—溝4

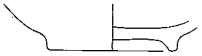


第76図　古墳時代出土土器(11)

竪穴状遺構

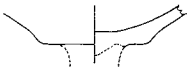

171—竪1

172—竪2


173—竪2

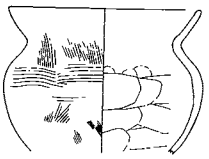
175—竪3

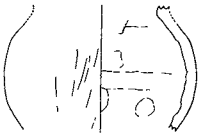
174—竪2


176—竪3

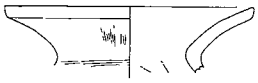
177—竪4

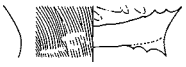
178—竪4

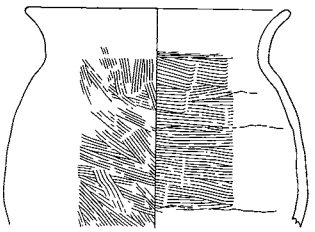

179—竪4

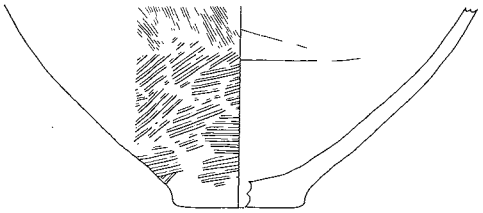

180—竪4

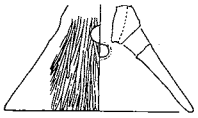
検出面

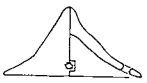

181—検


182—検


183—検


184—検


185—検


186—検

0 5 10cm

第77図　古墳時代出土土器(12)

第78図　古墳時代出土土器(13)

第79図　古墳時代出土土器(14)

古 墳 時 代 土 器 一 覧 表

表 3

番号	器種	残存度	法量	色調焼成	胎土	調整	備考
住居址			器高	色調		外面	
土器			口径	焼成		内面	
図			底径				
1	高坏	坏部⅔ 脚部¼破片	7.6	明橙褐色	白色，赤褐色 灰色細粒多量混入	口唇部ヨコナデ　脚部ミガキ(？)	脚部への穿孔は6孔　上,下段各3孔と考えられる．器面著しく摩滅
1			(8.8)	堅緻		口唇部ヨコナデ	
66			(14.8)				
1	高坏	坏部⅔ 脚部接合破片		橙褐色	白色・石英細粒多量混入		器面著しく摩滅 内面剝離
2			(9.2)	堅緻			
66							
1	高坏	坏部完存		暗褐橙色	白色・雲母・石英細粒多量混	口唇部ヨコナデ	
3			12.0	やや堅緻		口唇部ヨコナデ　坏部ハケのちミガキ	
66							
1	高坏	坏部完存		淡橙褐色	白色・灰色細粒多量混入	口唇部ヨコナデ　口縁部ハケ（縦位）→ミガキ 稜線上位にハケ目残存	稜線を有する，内面やや摩滅，脚部との接合のためか坏部下に径0.5cmの穿孔あり
4			16.2	やや堅緻		口唇部ヨコナデ	
66							
1	高坏	坏部¼破片		明褐橙色	灰色・赤褐色大粒多量混入		器面著しく摩滅 内外面の剝離あり
5			(15.2)	やや堅緻			
66							
1	高坏(？)	坏部⅛		淡褐色	白色・灰色・石英細粒混入、雲母少量混入	ヨコナデ	器面著しく摩滅
6			(14.2)	堅緻			
66							
1	高坏	脚部½破片		淡橙褐色	白色・赤褐色・灰色.石英細粒多量混入		脚部への穿孔は5孔、器面著しく摩滅
7				やや堅緻			
66							
1	高坏	脚部¾破片		淡橙褐色	赤褐色・灰色細粒多量混入	脚端部ヨコナデ	器面著しく摩滅
8				やや軟質		同上	
66			(11.8)				
1	台付甕	脚部⅓破片		淡橙褐色	白色・灰色細粒少量混入	ハケ（縦位）	
9				やや堅緻		ハケ（縦位）	
66							
1	有段口縁壺	頸部¼		茶褐色	白色・灰色細粒少量、雲母微量混入		器面著しく摩滅
10				堅緻			
66							
2	壺	口縁ほぼ完存		暗茶褐色	白色・赤褐色・石英細粒少量混入	口縁部ヨコナデ　胴部ヘラ状工具によるナデ	外面スス付着、口縁内面黒斑
11			14.2	堅緻		同上　胴部指頭おさえ	
66							
2	甕	口縁⅙破片		暗茶褐色	白色・灰色・石英細粒多量混入	口縁部ヨコナデ　胴上部ハケ（斜位→横位）胴下部ヘラ状工具によるナデ	口縁部から胴部にかけてスス付着
12			(18.0)	堅緻		口縁部ヨコナデ　胴部指頭おさえ・ナデ	
66							
2	坩	完存	14.4	黄橙褐色	白色・灰色・石英・長石細粒少量混入	口縁部ハケ（縦位）→口唇部ヨコナデ　胴部ハケ（斜位）	口縁部は内弯気味に開く
13			11.2	堅緻		口縁部ハケ(横位)　胴部指頭おさえ　底部ナデ	
67			2.2				
2	坩	底部欠損		橙褐色	白色・灰色細粒微量混入	ミガキ（？）	外面摩滅・被熱による黒変あり。口縁部は直線的に開く
14			11.4	堅緻		口縁部ヘラ状工具によるナデ　頸部指頭おさえ 胴部ヘラ状工具によるナデ	
67							

番号	器種	残存度	法量	色調焼成	胎土	調整	備考
住居址 土器 図			器高 口径 底径	色調 焼成		外面 内面	
2 15 67	壺	口縁部ほぼ完存	(14.0)	黄白色 やや軟質	白色・灰色・赤褐色・長石細粒混入	口唇部ヨコナデ 口縁部　板状工具によるナデ	外面摩滅、被熱による黒斑あり 二重口縁
2 16 67	壺	胴部½欠損 底部完存	8.0	黄橙褐色 堅緻	白色・灰色・石英・長石細粒少量混入	胴部棒状工具によるミガキ（横位） 胴部指頭おさえ→ナデ　底部ヘラ状工具による線状痕	外面スス付着
2 17 67	甕	底部完存	5.6	黄褐色 堅緻	白石・灰色細粒多量混入	ハケ（縦位）　底部ナデ（？） ナデ	外面スス付着、被熱による黒変
3 18 67	壺		(10.0)	黄橙褐色 堅緻	白色・赤褐色細粒少量、微砂多量混入	口縁部ハケ→棒状工具によるミガキ（縦位） 胴部ミガキ（縦位） 口縁部ミガキ（斜位）　胴部ハケ（斜位）	
3 19 67	甕	口縁⅛破片	(11.8)	茶褐色 堅緻	白色・石英・長石微粒少量混入	口縁部・胴部ハケ（斜位）→口唇部ヨコナデ 口縁部・胴部ハケ（横位）→口唇部ヨコナデ	頸部内面に輪積み痕
3 20 67	甕	口縁⅛破片	(17,2)	橙褐色 やや軟質	白色・灰色粗粒多量混入	口縁部ハケ（縦位）→口唇部ヨコナデ 口縁部ハケ（斜位）	
4 21 67	小形丸底坩	完存	6.5 8.0	橙褐色 堅緻	白色・灰色細粒、長石、雲母粒多量混入	口唇部ヨコナデ　口縁部ハケ（縦位）→ミガキ 胴部ミガキ（斜位） 口縁部板状工具によるナデ（？） 胴部ヘラ状工具によるナデ（ケズリ）	口縁部直線的に開く、胴部半面黒斑あり
4 22 67	鉢	底部中央欠損	6.2 12.2 6.5	茶褐色 やや軟質	白色細粒多量混入	口縁部板状工具によるナデ（縦位） 指頭もしくは板状工具によるナデ	器厚が均一でなく凹凸著しい．粗雑な作り
4 23 67	有段口縁壺	口縁部⅙破片	(24.0)	茶褐色 堅緻	白色・灰色粗粒、長石細粒多量混入	ナデ（？） ナデ（？）	器面著しく摩滅
4 24 67	台付甕	脚部完存	10.0	黄橙褐色 堅緻	白色粗粒、石英細粒少量混入	ハケ（縦位） ハケ（斜位）	
12 25 68	器台	口縁部⅓欠損	6.85 (9.3) 10.7	黄橙色 堅緻	白色・灰色・赤褐色粗粒多量混入	受部下半から脚部ハケ（斜位）→指頭によるナデ	内面著しい摩滅 器厚に凹凸あり
12 26 68	坩	口縁部¼破片	(11.4)	黄橙色 やや軟質	白色粒多量混入	口唇部ヨコナデ 口縁部ハケ（縦位）→ミガキ（縦位） 同上	
12 27 68	高坏	脚部⅛破片	(11.2)	茶褐色 堅緻	白色・石英細粒少量、雲母粒多量混入	脚部ハケ（縦位）→ミガキ（縦位→横位） 端部ナデ ナデ	
12 28 68	高坏	脚部⅛破片	(12.2)	橙褐色 堅緻	長石粒多量混入	脚部ミガキ（縦位）→端部ヨコナデ ヘラ状工具によるナデ	

番号	器種	残存度	法量	色調焼成	胎土	調整	備考
住居址			器高	色調		外面	
土器			口径	焼成		内面	
図			底径				
12	甕	胴部破片		橙褐色	灰色・赤褐色細粒、石英粒多量混入	ハケ（斜位）→ヘラ状工具によるナデ	
29				やや軟質		ナデ	
68							
12	土製勾玉			茶褐色	白色・灰色細粒微量混入		
30							
68				堅緻			
13	壺	口縁頸部破片		黄橙褐色	白色・石英細粒多量混入	粗雑なハケ(縦位)→棒状貼付→ヨコナデ	全体的に粗雑な作り。口唇部は平坦に面取り。棒状貼付文は3単位、4カ所に貼付けられる
31			(22.8)	やや堅緻		ハケ(横位)→ヘラ状工具によるナデ	
68							
13	壺	口縁部½欠損	15.6	暗茶褐色	白色・石英細粒多量混入	口縁部ヨコナデ　胴部ヘラ状工具によるナデ(横位)→棒状工具によるミガキ(縦位)	底部ドーナツ状上げ底。口縁部の器厚大きい
32			(11.6)	堅緻		頸部指頭おさえ　胴部板状工具によるナデ	
68			4.8				
13	甕	口縁⅙破片		茶褐色	白色・石英微粒少量混入	口唇部ヨコナデ	
33			(17.4)	やや軟質		口縁部ハケ（横位）→口唇部ヨコナデ	
68							
13	壺（？）	口縁⅙破片		橙褐色	白色・赤褐色粗粒多量混入		器面著しく摩滅
34			(12.6)	やや軟質			
68							
13	高坏	脚部¼破片		黄橙褐色	白色・石英細粒多量混入	脚部ミガキ→端部ヨコナデ	内面摩滅
35				堅緻		端部ヨコナデ	
68			(10.8)				
13	鉢	口縁部⅕破片底部完存	4.5	橙褐色	白色細粒少量混入	指頭おさえ　ナデ	器厚の凹凸が著しい。やや粗雑な作り
36			(9.2)	やや堅緻		ヘラ状工具によるナデ	
68			2.6				
13	ミニチュア	坏部と脚部接合部破片		黄橙褐色	白色細粒少量混入	指頭おさえ　ナデ	
37				堅緻		坏部指によるナデ　脚部整形痕ナシ	
68							
14	小形丸底坩	ほぼ完存	9.1	橙褐色	白色・石英・雲母細粒微量混入	口縁部ヨコナデ　胴部板状工具指頭によるナデ	口縁部は直線的に開く。外面炭化物付着
38			9.4	堅緻		胴部板状工具によるナデ線状痕→ナデ	
69							
14	甕	口縁部⅐破片		茶褐色	白色粗粒、石英・長石細粒多量混入	胴部ハケ(？)→口縁部ヨコナデ	外面スス付着
39			(16.8)	堅緻		同上	
69							
14	甕	口縁部⅛破片		橙褐色	白色・灰色・石英細粒多量混入	口縁部板状工具によるナデ→口唇部ヨコナデ	
40			(14.4)	やや軟質		同上	
69							
14	甕	口縁部¼破片		黄橙褐色	石英・長石粗粒微量混入	口唇部強いヨコナデ	外面スス付着
41			(15.4)	堅緻		ナデ	
69							
14	甕	口縁部⅙破片		暗茶褐色	白色・灰色・石英・長石細粒少量混入	口唇部強いヨコナデ　口縁部ハケ（斜位）	
42			(14.2)	堅緻		胴部板状工具によるナデ→ヨコナデ	
69							

番号	器種	残存度	法量	色調焼成	胎土	調整	備考
住居址			器高	色調		外面	
土器			口径	焼成		内面	
図			底径				
14	甕	頸・胴部1/6破片		暗茶褐色	白色・灰色・石英・長石細粒少量混入	胴部ハケ（縦位）→頸部ヨコナデ	
43				堅緻		胴部ナデ	
69							
14	器台	脚部		橙褐色	白色細粒微量混入	脚部ミガキ→ナデ	高坏の脚部の可能性もある
44				堅緻		ナデ	
69							
14	甕	底部1/3破片		橙褐色	白色・灰色細粒、石英粒多量混入	ハケ（縦位）→ナデ	脚底部平坦面を作る
45				堅緻		ナデ	
69			(8.2)				
14	台付甕	脚部1/8破片		黄褐色	白色・赤褐色粗粒多量混入	ナデ	
46				堅緻		ハケ	
69			(8.4)				
14	紡錘車	完存	2.0	黄褐色	灰色細粒、石英粒微量混入	ナデ　ヘラ状工具による直線文	径1.0cmの穿孔
47			3.6	堅緻			
69			5.8				
15	甕	胴部1/3欠損	21.2	橙褐色		口縁胴部ナデ→頸部ヘラ状工具によるヨコナデ 底部ヘラ削り	
48			(15.1)	やや堅緻		口縁部ヘラ状工具によるナデ線状痕　胴部板状工具によるナデ	
69							
15	甕	口縁部1/10破片		黄褐橙色	白色・赤褐色粗粒多量混入	口唇部強いヨコナデ	口唇部面を作る 器面著しい摩滅
49			(20.6)				
69				やや堅緻			
15	甕	口縁部1/8破片		黄褐色	白色・石英・長石細粒多量混入	口縁部，板状工具による強いナデ→ハケ（斜位）	
50			(18.0)			ハケ（横位）	
69				堅緻			
15	壺	胴部上半1/4破片		茶褐色	白色・灰色細粒少量混入	頸部ナデ　胴部ミガキ	
51							
69				堅緻		頸部ナデ　胴部板状工具によるナデ	
15	甕	底部完存		黄橙褐色	白色・赤褐色石英・長石細粒多量混入	胴部ハケ（縦位）　底部ナデ	
52						強いハケ	
69			7.4	堅緻			
15	壺（？）	底部完存		橙褐色	白色・赤褐色石英細粒多量混入	ハケ（縦位）	
53						ハケ	
69			5.6	堅緻			
15	壺	底部完存		茶褐色	石英・長石微量混入	底部ミガキ（緻密）	
54						ナデ	
69			2.4	堅緻			
15	小形丸底坩	完存	9.6	茶褐色	赤褐色粗粒、白色細粒少量混入	口縁部ヨコナデ　胴部頸部接合部工具により粗雑なナデ→ヘラ状工具によるナデ	口縁部直線的に開く。全体的に粗雑な作り。外面黒変
55			9.2	堅緻		口縁部ハケ（横位）　胴部指頭おさえ　底部板状工具によるナデ	
70							
15	小形丸底坩	口縁部1/6 胴部1/3		橙褐色	白色・赤褐色細粒少量混入	口縁部ヨコナデ 胴部頸部接合部板状工具によるナデ	
56			(9.4)			口縁部ハケ（斜位）→ヨコナデ 胴部指頭おさえナデ　底部板状工具によるナデ	
70				やや軟質			

番号	器種	残存度	法量	色調焼成	胎土	調整	備考
住居址			器高	色調		外面	
土器			口径				
図			底径	焼成		内面	
15	甕	胴部¼破片		橙褐色	白色・灰色細粒、石英・長石粒多量混入	板状工具によるナデ	内・外面とも黒変箇所あり
57						同上	
70				堅緻			
15	甕	胴頸部 1/10 破片		暗茶褐色	白色・灰色石英・長石細粒多量混入	胴部叩き目　頸部ナデ	
58						ナデ	
70				堅緻			
15	台付甕	脚部¼破片		黄橙褐色	白色・赤褐色粗粒、灰色細粒少量混入	脚端部ヨコナデ	器面著しい摩滅
59						同上	
70			(9.6)	堅緻			
15	台付甕	脚部⅛破片		明褐色	白色粗粒、灰色細粒多量混入	ナデ	脚底部平坦面を作る
60						同上	
70			(6.1)	堅緻			
15	壺	口縁部破片		明黄茶褐色	灰色細粒、石英粒少量混入	口縁部ヨコナデ　体部ハケ	
61						体部ハケ	
70				堅緻			
15	甕	口縁部破片		淡黄橙褐色	白色・石英粒少量混入	口縁部ナデ	
62				橙褐色			
70				やや堅緻			
15	S字甕	口縁部破片		黒褐色	白色・石英粒、雲母少量混入	口縁部ヨコナデ　体部ハケ	
63				淡褐色			
70				堅緻			
15	小形壺	口縁部破片		暗茶褐	白色・灰色粒少量混入	口縁部ヨコナデ	
64				橙褐色			
70				堅緻			
15	甕	口縁部破片		淡黄褐色	白色・石英粒多量混入	口縁部ナデ（？）	
65				淡茶褐色			
70				堅緻		口縁部ハケ　体部ナデ	
15	壺	口縁部破片		明橙褐色	白色細粒少量混入	口唇部ヨコナデ→面取り　口縁部ミガキ(縦位)	
66						口縁部ミガキ（横位）	
70				堅緻			
15	器台	口縁部破片		橙黄褐色	赤褐色細粒少量混入	口唇部ヨコナデ　口縁部ナデ	
67						口縁部ミガキ（放射状）	
70				堅緻			
15	甕	口縁部破片		淡紫褐色	白色・石英粒少量混入		
68				淡茶褐色		口縁部ミガキ	
70				堅緻			
15	高坏	口縁部½破片		橙褐色	白色・赤褐色粗粒少量、灰色細粒微量混入	板状工具によるナデ　口唇部ヨコナデ	
69			(17.1)			同上	
70				堅緻			
15	高坏	脚部破片		橙褐色	白色・灰色細粒、石英粒多量混入	ミガキ（？）	器面著しく摩滅
70							
70			(13.0)	やや軟質			

番号	器種	残存度	法量	色調焼成	胎土	調整	備考
住居址			器高	色調		外面	
土器			口径	焼成		内面	
図			底径				
15	高坏	脚部1/8破片		茶褐色	白色・灰色細粒微量混入	ミガキ（縦位）	
71						ヨコナデ	
70			(11.4)	堅緻			
15	高坏	坏部1/6破片		橙褐色	白色・灰色細粒、石英粒少量混入	口縁部ミガキ（縦位）→ヨコナデ　坏下部ナデ	坏部に稜を有する
72			(15.8)			ミガキ（斜位）	
70				堅緻			
15	高坏	坏部破片		橙褐色	白色・赤褐色粗粒、石英細粒多量混入	稜線部ヨコナデ→棒状工具によるミガキ(縦位) 脚接合部ヨコナデ	坏部に稜を有する
73						棒状工具によるミガキ（横位）	
70				やや軟質			
15	高坏	坏部破片		明褐色	赤褐色・石英細粒微量混入	棒状工具によるミガキ（横位）	坏に稜を有する
74						棒状工具によるミガキ（放射状→横位）	
70				堅緻			
15	高坏	脚部完存		橙褐色	白色・灰色・赤褐色細粒少量混入	棒状工具によるミガキ（縦位）	
75						脚部指頭ナデ　脚端部板状工具によるナデ	
70			16.6	やや堅緻			
15	高坏	口縁部1/6破片		明褐色	白色・赤褐色粒微量混入	口唇部ヨコナデ	器面著しい摩滅
76			(10.0)			同上	
70				やや軟質			
15	高坏	坏部破片		橙褐色	白色・石英・長石細粒微量混入	ミガキ（縦位）	
77						ミガキ（横位→縦位）	
70				堅緻			
15	高坏	坏脚部接合部3/4破片		茶褐色	白色・赤褐色石英・長石細粒多量混入	脚部ミガキ（横位→斜位）　接合部ナデ	
78						坏部ヘラ状工具によるミガキ　脚部ナデ	
70				堅緻			
15	高坏	脚部破片		明褐色	白色・赤褐色細粒微量混入		脚部穿孔は上・下段各3カ所の6カ所に残る。器面著しく摩滅
79							
70				やや堅緻			
15	高坏	底部3/4破片		黄橙褐色	白色・灰色細粒少量混入	ミガキ	
80						ヨコナデ	
70			(17.5)	やや堅緻			
15	高坏	坏部完存		橙褐色	赤褐色粗粒多量、白色・灰色細粒少量混入	棒状工具によるミガキ(縦位)→口唇部ヨコナデ	坏部に弱い稜を有する。口縁部平面形状楕円形となる
81			19.7			棒状工具によるミガキ(放射状)→口唇部ヨコナデ	
70				やや堅緻			
15	高坏	坏部1/4破片		橙褐色	白色・赤褐色粗粒、石英粒少量混入	棒状工具によるミガキ	坏部に稜を有する
82			(18.0)			棒状工具にミガキ(放射状)	
70				堅緻			
15	高坏	坏部完存		橙褐色	白色・灰色細粒微量混入	板状工具・指によるナデ→ミガキ(?) 口唇部ヨコナデ	口唇部黒変箇所有り
83			22.8			板状工具によるナデ	
70				やや軟質			
15	高坏	口縁部1/10破片		黄橙褐色	白色・赤褐色粗粒、雲母粒少量混入	板状工具・指によるナデ	
84			(20.1)			同上	
70				堅緻			

番号	器種	残存度	法量	色調焼成	胎土	調整	備考
住居址			器高	色調		外面	
土器			口径	焼成		内面	
図			底径				
16	甕（？）	口縁部⅙破片		黄褐色	灰色粗粒，石英・長石・雲母粒子多量混入	ハケ（縦位）→ヨコナデ	内面黒変
85			(11.4)			ヨコナデ	
71				堅緻			
16	ミニチュア	脚部完存		灰褐色	白色細粒混入		全体的に粗雑な作り
86							
71			2.8	堅緻			
18	台付甕	脚部欠損 口縁胴部完存		暗褐色	白色・灰色・石英・長石細粒多量混入	口縁部ハケ(縦位)→胴部ハケ(斜位)→ヘラ状工具によるナデ(縦位)	口縁部「く」の字状に外反。外面肩部中心に全体的にススス付着
87			16.4			口縁部ハケ(斜位) 胴部板状工具によるナデ　頸部指頭おさえ	
71				堅緻			
18	坩	口縁部½欠損 胴底部完存	18.25	黄褐色	白色・灰色・石英・長石細粒多量混入	口縁部棒状工具によるミガキ(縦位) 胴部棒状工具によるミガキ(縦位)	口縁部直線的に開く。底部やや平底となる
88			(12.4)			底部ヘラ状工具によるミガキ→胴部ヘラ状工具によるミガキ　口縁部棒状工具によるミガキ(縦位)	
71			3.0	堅緻			
18	小形壺(？)	底部完存		茶褐色	白色・赤褐色細粒少量混入	ミガキ	
89							
71			3.7	堅緻		ヘラ状工具によるミガキ	
18	ミニチュア	口縁部½欠損	2.5	灰色	白色細粒少量混入	指頭おさえ　肩部線状痕	器形にゆがみにあり 手捏
90			2.1			指頭おさえ	
71			2.4	やや堅緻			
18	ミニチュア	底部完存		明褐色	白色粗粒多量混入	胴部指頭おさえナデ 底部ヘラ状工具によるナデ	
91						ヘラ状工具による線状痕(巻状)	
71			3.6	やや軟質			
18	高坏	口縁部½破片		黄橙褐色	白色・灰色・石英細粒多量混入	口唇部ヨコナデ	器面著しく摩滅
92			(18.4)			ミガキ(？)　口唇部ヨコナデ	
71				堅緻			
21	甕	口縁部⅙		明褐色	白色・雲母・石英細粒多量混入	胴部ハケ(斜位)→ヨコナデ　口唇部ナデ	
93			(18.4)			板状工具によるケズリ状ナデ	
71				堅緻			
21	甕	口縁部破片		褐色	白色細粒、雲母少量混入	口唇部縄文　口縁部櫛描波状文	弥生中期土器片
94							
71				堅緻			
21	壺	口縁破片		暗茶褐色	白色・石英細粒、雲母混入	口縁部ミガキ→口唇部ヨコナデ	口唇部に面をつくる
95						ヨコナデ	
71				堅緻			
22	壺	口縁部⅓破片		灰褐色	白色・灰色細粒微量混入	ヨコナデ	外面一部黒変
96			(15.2)			板状工具によるナデ	
72				堅緻			
22	壺	口縁部⅙破片		橙褐色	白色・灰色細粒、石英粒微量混入	ミガキ　口唇部ヨコナデ	
97			(14.0)			ハケ(斜位)→口唇部ヨコナデ	
72				堅緻			
22	壺	口縁部⅙破片		茶褐色	白色・赤褐色長石細粒微量混入	ヨコナデ	
98			(14.7)			指ナデ	
72				堅緻			

番号	器種	残存度	法量	色調焼成	胎土	調整	備考
住居址			器高	色調		外面	
土器			口径	焼成		内面	
図			底径				
22	甕	口縁部⅛破片		明褐色	白色・灰色・赤褐色・石英細粒多量混入	口縁部ハケ(縦位)→ミガキ(横位)	器厚の凹凸著しい
99			(21.2)				
72				堅緻		ミガキ	
22	甕	口縁部⅛破片		明褐色	白色・灰色・石英細粒多量混入	口縁部ヨコナデ	口唇部面を作る 外面一部黒斑
100			(15.8)				
72				堅緻		同上	
22	壺	底部完存		茶褐色	白色・灰色・石英・長石細粒多量混入		外面摩滅
101							
72			3.2	堅緻		板状工具によるナデ 線状痕	
22	台付甕	胴脚部接合部破片		灰褐色	白色・灰色・石英・長石細粒多量混入	ハケ	
102							
72				堅緻		胴部板状工具によるナデ線状痕 脚部指ナデ	
22	甕	ほぼ完存	31.25	橙褐色	白色・灰色・細粒少量混入	口縁部ヨコナデ→櫛描文一部残る 胴上部板状工具によるナデ→櫛描波状文 胴下部ミガキ(横位) 底部ヘラ削り	底部被熱により剥離一部黒変。口唇部面を作る
103			17.0				
72			6.5	堅緻		板状工具によるナデ→口縁部ヨコナデ	
22	高坏	脚部完存 底部½欠損		明褐色	白色・赤褐色細粒少量混入	ミガキ	外面摩滅
104							
72			(8.4)	堅緻		板状工具によるナデ	
22	高坏	脚部破片		橙褐色	白色・灰色・石英細粒微量混入	ミガキ(密)	
105							
72				やや軟質		ケズリ	
23	壺	口縁部⅛破片		橙褐色	白色・灰色・石英細粒多量混入		器面著しく摩滅 口唇部面を作る
106			(12.8)				
72				堅緻			
23	甕	底部⅓破片		茶褐色	白色・灰色・石英・長石細粒多量混入		底部木葉痕 外面著しく摩滅
107							
72			(6.4)	堅緻		板状工具によるナデ	
23	高坏	脚部		暗橙褐色	白色・灰色・石英粗粒細粒多量混入		外面著しく摩滅
108							
72				堅緻		板状工具による線状痕残る	
23	器台			黄橙褐色	白色・赤褐色粗粒少量混入	ハケ(縦位)	器面摩滅。脚部穿孔1カ所確認
109							
72				やや軟質			
23	S字甕	口縁部破片		茶褐色	白色・灰色細粒多量混入	ヨコナデ	器面摩滅
110							
72				堅緻			
23	甕	口縁部破片		褐色	石英・長石細粒多量混入	口縁部ハケ(縦位)→口唇部ヨコナデ	
111							
72				堅緻		同上	
23	壺	口縁部破片		暗茶褐色	石英・長石細粒多量混入	口唇部指頭おさえ→ナデ	折り返し口縁
112							
72				堅緻			

番号	器種	残存度	法量	色調焼成	胎土	調整	備考
住居址			器高	色調		外面	
土器			口径	焼成		内面	
図			底径				
24	甕	胴部		茶褐色	白色細粒多量混入	頸部ハケ(縦位)→胴部ハケ(斜位)	外面被熱により剥離一部黒変
113						胴部・板状工具によるナデ	埋甕
73				堅緻			
24	高坏	口縁部¼破片		橙褐色	赤褐色粗粒、白色細粒少量混入	口縁部ミガキ→口唇部ナデ	
114			(10.8)			口縁部ミガキ	
73				堅緻			
24	高坏(?)	脚部¼破片		明褐色	白色粗粒、赤褐色細粒多量混入	ミガキ(縦位)	脚部穿孔1カ所確認
115						ナデ	
73			(10.4)	堅緻			
24	高坏	坏部¼破片		暗褐色	白色・灰色細粒多量混入	坏部ミガキ(横位)	
116						坏部ミガキ(縦位)	
73				堅緻			
24	甕	底部完存		淡黄灰褐色・橙黄褐色	白色細粒多量混入	ミガキ(縦位)　底部ナデ	外面黒斑
117						胴部ミガキ(横位)　底部ミガキ(縦位)	
73			3.9	やや堅緻			
24	高坏	坏部完存		茶褐色	白色細粒少量混入	口縁部ミガキ(縦位)→口唇部ミガキ(横位)	口縁端部やや凹状となる。坏底部に小穿孔あり
118			21.2			坏部ミガキ(縦位)→口縁部ミガキ(横位)	
73				堅緻			
29	壺	胴部⅓欠損	30.5	橙褐色	白色・灰色・石英細粒少量混入	口縁部ヨコナデ　胴部ミガキ(斜位)→胴部中央頸部ミガキ(横位)	口唇部に面を作る
119			14.9			口縁部ヨコナデ　胴部板状工具によるナデ	
73			7.4	堅緻			
29	小形甕	口縁部⅓		黄橙褐色	白色・灰色細粒少量混入	口縁部ヨコナデ　胴部細いハケ(縦位)	
120			(5.7)			口縁部ヨコナデ	
73				堅緻			
29	台付甕	胴・脚部接合部		橙褐色	白色・灰色細粒、金雲母多量混入	脚部ハケ(縦位)　胴部ハケ→ケズリ状ナデ	器厚が薄くS字甕の脚部の可能性あり
121						ナデ	
73				堅緻			
30	小形甕	口縁部1/10 底部完存	7.3	暗橙褐色	白色細粒、石英粒多量混入	口縁部ヨコナデ　胴部板状工具によるナデ	
122			(10.2)			ヨコナデ→棒状工具によるミガキ状のナデ	
74			3.4	堅緻			
30	甕	口縁部1/10破片		橙褐色	白色・灰色・石英細粒多量混入	口唇部ヨコナデ	口縁部外反し口唇部に面を作る　器面著しく摩滅
123			(15.8)			ヨコナデ	
74				やや軟質			
30	甕	口縁部⅛破片		暗褐色	白色・灰色細粒、石英・長石粒多量混入	ヨコナデ(?)	器面著しく摩滅
124			(19.8)				
74				堅緻			
30	甕	底部		黄橙褐色	白色・石英細粒多量混入	ハケ(縦位)	器面著しく摩滅
125						板状工具によるナデ	
74			6.0	堅緻			
30	高坏	脚部⅙破片		橙褐色	白色・赤褐色細粒少量、金雲母微量混入	ミガキ(?)	外面摩滅
126						細かいハケ(斜位)	
74			(17.0)	やや堅緻			

番号	器種	残存度	法量	色調焼成	胎土	調整	備考
住居址			器高	色調		外面	
土器			口径	焼成		内面	
図			底径				
44	ミニチュア	完存	3.35	褐色	白色・灰色細粒少量混入	手捏　口唇部指でつまみ出す	内外面に黒斑あり
127			4.1				
74			3.0	堅緻			
44	ミニチュア	口縁脚部¾欠損 胴部以下完存	3.15	黒褐色 黄褐色	白色細粒、石英粒少量混入	手捏	器形は不整形で器面の凹凸著しい
128			3.6			胴部棒状工具によるナデ	
74			2.9	堅緻			
44	台付甕	胴脚部接合部破片		暗褐色	白色・灰色細粒、石英粒少量混入	ナデ	
129						胴部ヘラ状工具による線状痕　脚部ハケ	
74				堅緻			
47	壺	口縁部¼		橙褐色	白色・石英・長石細粒少量混入	口縁部ハケ(縦位)→口唇部ヨコナデ	外面一部にスス付着
130			(14.8)			口縁部ハケ(斜位)→棒状工具によるミガキ→口唇部ヨコナデ	
74				堅緻			
47	ミニチュア	底部完		黄橙褐色	白色・赤褐色細粒少量混入	ナデ　底部ナデ	
131						ナデ	
74			3.15	堅緻			
方形周溝墓	坩	胴部½ 口縁部⅓	15.9	明褐灰色 暗灰褐色	白色・石英細粒少量混入	口縁部ミガキ(縦位)　体部ミガキ(縦位)	
132						口縁部ミガキ(縦位)　体部ミガキ(横位,縦位)	
74			4.0	堅緻			
±37	鉢	口縁胴部⅓欠損 底部完存	4.1	橙褐色	白色細粒、石英粒混入	口唇部ヨコナデ　胴部ミガキ(横位)	外面一部スス付着
133			9.7			ヘラ状工具によるナデ	
75			2.5	堅緻			
±37	小形丸底坩	口縁部½欠損 底部完存	6.6	黄褐色	白色・灰色・石英細粒多量混入	口唇部ナデ	底部上げ底。器面著しく摩滅。口縁部直線的に開く。内面黒変
134			11.2			同上	
75			3.0	堅緻			
±97	小形丸底坩	口縁部胴部½		橙褐色	白色・石英粗粒混入		器面著しく摩滅 内外面剝離あり
135			11.9				
75				やや軟質			
±139	壺	底部¼破片		黄褐色	白色・石英・長石細粒多量混入	胴部棒状工具によるミガキ　底部棒板状工具によるナデ	
136						ナデ	
75			(5.2)	堅緻			
±139	甕	底部½破片		暗褐色	白色・灰色・長石細粒多量混入	ハケ　底部ナデ	底部中央穿孔
137						ハケ	
75			(6.0)	堅緻			
±165	甕	底部⅓破片		橙褐色	白色・赤褐色細粒多量混入	ナデ	
138						ナデ	
75			(7.6)	堅緻			
±165	壺	底部¼破片		黒褐色	白色・灰色粗粒、褐色細粒混入	ミガキ	外面黒変
139						ハケ→板状工具によるナデ	
75			(7.6)	堅緻			
±199	S字甕	口縁部破片		明褐色	雲母細粒混入	ヨコナデ	
140						ヨコナデ	
75				堅緻			

番号	器種	残存度	法量	色調焼成	胎土	調整	備考
住居址			器高	色調		外面	
土器			口径	焼成		内面	
図			底径				
±202	台付甕	脚部⅓破片		暗褐色	白色細粒、チャート・石英粒多量混入	胴接合部ハケ	器面著しく摩滅
141							
75				堅緻			
±216	高坏	脚上部坏部との接合部		橙褐色	白色・赤褐色粒多量混入	坏部との接合部ハケ状工具の線状痕　ミガキ	脚部穿孔3カ所不規則に穿孔
142						ナデ	
75				堅緻			
±216	壺	胴部欠損底部完存		暗褐色黒褐色	白色・長石粒多量混入	胴部ヘラ状工具によるミガキ　底部ナデ	底部ドーナツ状上げ底内面黒変
143						棒状工具によるミガキ	
75			8				
±216	壺（？）	底部⅓破片		橙褐色	白色・灰色細粒多量混入	底部ナデ	器面著しく摩滅
144							
75			(4.7)	やや堅緻			
±218	甕	底部½破片		黄橙褐色	白色・赤褐色長石細粒多量混入		底部ドーナツ状上げ底。器面著しく摩滅
145							
75			(5.2)	やや堅緻			
±275	高坏	脚上部		橙褐色	白色細粒少量混入	ハケ状工具による横線	脚部穿孔4カ所内面摩滅
146							
75				堅緻			
±280	S字甕	口縁部¼破片		暗褐色黄橙褐色	白色細粒、金雲母微量混入	口唇部ヨコナデ　頸部棒状工具による沈線　胴部ハケ(斜位)→ナデ	外面スス付着口唇部外弯気味に開く
147			(15.0)			口唇部ヨコナデ　胴部指頭おさえナデ	
75				堅緻			
±291	甕	口縁部⅙破片		暗褐色	灰色細粒少量混入	口唇部ヨコナデ　口縁部ハケ(斜位)　胴部板状工具によるナデ	
148			(17.6)			口縁部ハケ(横位)　胴部ヘラ工具によるケズリ	
75				堅緻			
±291	高坏	坏部⅓破片		黄褐色	白色細粒微量混入	口唇部ヨコナデ　口縁部ミガキ(横位)　坏部ミガキ(縦位)	外面一部黒変口縁内弯気味に開く。坏部に稜をもつ
149			(17.2)			ミガキ(横位)	
75				堅緻			
±296	甕（？）	底部½破片		明褐色	白色・褐色・長石細粒多量混入	底部ナデ	
150						線状痕	
75			(5.0)	やや堅緻			
±300	壺	底部¼破片		黒褐色	白色・長石細粒混入		器面著しく摩滅
151							
75			(4.8)	堅緻			
±327	高坏	坏部破片		橙褐色	白色・茶褐色粗粒混入	ヨコナデ→ミガキ（暗文）	
152						ヨコナデ→ミガキ	
75				堅緻			
±330	甕	底部¼破片		明褐色	白色粗粒多量混入	棒状工具によるミガキ(縦位)	
153						ハケ状工具による線状痕	
75			(6.6)	堅緻			
±330	甕	底部¼破片		明褐色	白色・褐色細粒多量混入	底部接合部ハケ→ナデ	底部木葉痕
154						線状痕	
75			(6.7)	堅緻			

番号	器種	残存度	法量	色調焼成	胎土	調整	備考
住居址			器高	色調		外面	
土器			口径	焼成		内面	
図			底径				
±330	S字甕	口縁部破片		明褐色	石英・雲母少量混入	口唇部刻み　口縁部ヨコナデ	
155				堅緻		口縁部ヨコナデ	
75							
±609	台付甕	脚胴部接合部		褐色	白色・赤褐色石英細粒多量混入		器面著しく摩滅
156				堅緻		ヘラ状工具の線状痕	
76							
±635	甕	口縁部¼破片		暗茶褐色	白色・灰色・赤褐色細粒、石英粒少量混入	口縁部ハケ(縦位)→口唇部ヨコナデ	外面スス付着
157			(12.6)	堅緻		棒状工具によるミガキ	
76							
±642	小形器台	坏部⅓破片		橙褐色	白色・石英細粒少量混入	ミガキ→ナデ	
158			(9.7)	堅緻		坏部放射状のミガキ　口唇部ヨコナデ	
76							
±663	埦	口縁⅛破片		橙褐色	白色・灰色・石英細粒少量混入	ミガキ(横位)	内面黒色処理
159			(12.8)	堅緻		ミガキ(縦位・斜位)	
76							
±722	須恵器坏	胴部破片		暗灰色	白色・砂粒混入	胴部ナデ　底部回転ヘラ削り	外面の一部に自然釉が付着
160				堅緻			
76							
±726	壺	底部		明褐色	白色・灰色・赤褐色細粒少量混入	ミガキ	外面一部黒変
161				堅緻		底部ハケ→ヘラ状工具によるナデ	底部上げ底状となる
76			3.2				
±740	甕	口縁部⅛破片		橙褐色	白色・赤褐色石英細粒多量混入	口縁部ハケ(縦位)→口唇部ヨコナデ	口唇部平坦面を作る。口縁「く」の字状に開く
162			(21.0)	堅緻		口縁部ハケ(横位)→口唇部ヨコナデ	
76							
±810	甕	底部⅔破片		黄橙褐色	白色・赤褐色細粒、石英・雲母粒多量混入	ナデ(?)	器面著しく摩滅
163				堅緻			
76			(11.8)				
±812	甕	胴部下半底部完存		橙褐色	白色・褐色粗粒多量混入	胴部ハケ(斜位)	器面著しく摩滅器面の剥離著しい。底部ドーナツ状上げ底
164				やや軟質			
76			7.4				
±812	甕(?)	底部⅓		黄橙褐色	白色・赤褐色石英細粒多量混入	ハケ(縦位)	器面摩滅
165				堅緻		ナデ	
76			(7.6)				
±812	高坏	坏部⅓破片		暗褐色	白色・赤褐色石英細粒少量混入	ミガキ	外面一部黒変内面摩滅稜をもつ
166			(16.8)	堅緻			
76							
溝2	高坏	脚部⅓破片		淡暗茶褐色	白灰色細粒少量混入	端部ヨコナデ	器面著しく摩滅
167				やや軟質			
76			13.8				
溝2	鉢	底部完存		明橙褐色	白色・石英粒子少量混入		器面著しく摩滅
168				やや軟質			
76			3.4				

番号	器種	残存度	法量	色調焼成	胎土	調整	備考
住居址			器高	色調		外面	
土器			口径	焼成		内面	
図			底径				
溝14	壺	口縁部1/6破片		明茶褐色	白色細粒多量混入		器面著しく摩滅
169			(12.4)	堅緻			
76							
溝4	小形甕	底部完存		暗褐色	白色細粒多量混入	ナデ	器面著しく摩滅
170						ナデ	
76			4.8	やや軟質			
竪1	甕	底部1/2破片		橙褐色	白色・灰色・赤褐色粗粒、石英細粒多量混入	ハケ(縦位)	底部ドーナツ状上底。外面一部黒変。内面摩滅
171							
77			(6.0)	やや軟質			
竪2	甕	口縁部1/8破片		褐色	白色・灰色・赤褐色・石英細粒少量混入	口縁部ハケ(縦位)→口唇部ヨコナデ	口唇部面をつくり
172			(16.6)			ヨコナデ	
77				堅緻			
竪2	黒色土器	底部完存		褐色	白色・灰色・赤褐色細粒、石英粒多量混入	胴部ロクロナデ　底部回転糸切痕→付け高台	
173						黒色処理ミガキ	
77			6.8	やや堅緻			
竪2	S字甕	口縁部破片		黄橙褐色	白色・赤褐色細粒、雲母粒少量混入	ヨコナデ	器面著しく摩滅
174							
77				やや堅緻			
竪3	壺	底部2/3破片		明褐色	白色・赤褐色細粒、石英粒多量混入	ナデ(?)	器面著しく摩滅
175							
77			(3.0)	堅緻			
竪3	高坏	坏部下半		黄橙褐色	白色・灰色・赤褐色細粒、石英粒多量混入	ミガキ(?)	器面著しく摩滅
176							
77				やや堅緻			
竪4	甕	底部完存		黄橙褐色	白色・赤褐色石英細粒少量混入	ハケ(縦位)	底部ドーナツ状上げ底
177						ハケ	内面黒変
77			3.8	やや軟質			
竪4	甕	口縁部1/10破片		暗褐色	白色・赤褐色石英細粒少量混入	胴部ハケ(斜位)→口縁部ヨコナデ	
178			(18.6)			胴部ヘラ状工具によるナデ一部ミガキ状となる	
77				堅緻			
竪4	甕	口縁，胴部1/4破片		明褐色	灰色・赤褐色細粒、石英・雲母粒少量混入	頸部ハケ(縦位)→胴部ハケ(横位)　口縁部ヨコナデ	器厚全体に薄い口唇部平坦面を作る
179			(10.2)			頸部指頭おさえ→胴部ヘラ削り　口縁部ヨコナデ	
77				堅緻			
竪4	甕	胴部1/4破片		褐色	白色・石英細粒少量混入	胴部ハケ	器面著しく摩滅 器厚の凹凸著しい
180						胴部指頭おさえ　ナデ	
77				堅緻			
検出面	壺	口縁部1/6破片		明橙黄褐色	白色・石英・赤褐色粒子少量混入	口唇部ヨコナデ　口縁部ハケ	器面著しく摩滅
181			(13.0)				
77				やや軟質			
検出面	台付甕	接合部破片		淡黄褐色	白色・灰色・石英細粒多量混入	ハケ	
182						ヘラナデ	
77				やや堅緻			

番号	器種	残存度	法量	色調焼成	胎土	調整	備考
住居址			器高	色調		外面	
土器			口径	焼成		内面	
図			底径				
検出面	甕	口縁部1/10破片		暗黄褐色	白色・灰色細粒少量混入	口縁部ヨコナデ　胴部ハケ	器面摩滅
183			(14.0)			口縁部ヨコナデ　胴部ハケ	
77							
検出面	甕	底部1/3破片		橙褐色 暗褐色	白色・灰色細粒多量混入	下部タタキ→上部ハケ	
184						ナデ(?)	
77			(6.8)	やや堅緻			
検出面	器台	脚部1/4破片		暗橙褐色 暗褐色	白色細粒少量混入	ミガキ　端部ナデ(横方向)	4カ所穿孔あり
185						ナデ	
77			(10.0)	やや堅緻			
検出面	蓋	頂部1/2 底部完存	(3.6)	淡黄褐色	白色・石英細粒多量混入		器面著しく摩滅
186							
77				軟質			
1	甕	胴部（拓本）		橙褐色	白色細粒混入	叩き目	
187						ナデ	
78				やや堅緻			
1	甕	胴部（拓本）		暗褐色	白色細粒混入	叩き目	内面著しく摩滅
188							
78				やや堅緻			
1	甕	胴部（拓本）		茶褐色	白色細粒混入	叩き目	
189						ナデ	
78				堅緻			
1	甕	胴肩部(拓本)		茶褐色	白色細粒少量混入	櫛描波状文	
190						ナデ	
78				やや堅緻			
1	甕	胴部（拓本）		灰褐色	白色細粒少量混入	叩き目	
191						ナデ	
78				やや軟質			
1	甕	口縁～胴接合部（拓本）		灰褐色	白色・褐色細粒少量混入	頸部からの接合部ナデ　胴部叩き目	
192						ナデ	
78				堅緻			
2	甕	口縁部(拓本)		橙褐色	白色細粒混入	櫛描波状文　口唇部ナデ	
193						ヨコナデ	
78				堅緻			
11	甕	口縁部(拓本)		褐色	白色・赤褐色石英細粒少量混入	櫛描波状文	
194						ヨコナデ	
78				堅緻			
12	甕	口縁部(拓本)		橙褐色	白色・石英微粒少量混入	櫛描波状文	
195						ミガキ	
78				堅緻			
14	甕	口縁部破片		明灰褐色 暗灰褐色	砂粒少量混入	櫛描波状文	炭化物付着
196						横ナデ	
78				堅緻			

番号	器種	残存度	法量	色調焼成	胎土	調整	備考
住居址			器高	色調		外面	
土器			口径	焼成		内面	
図			底径				
14	甕	口縁部(拓本)		褐色	白色細粒少量混入	櫛描波状文→簾状文	
197							
78				堅緻		ヨコナデ　頸部ハケ→ナデ	
14	甕	口縁部(拓本)		暗褐色	白色・褐色細粒少量混入	櫛描波状文	器面摩滅
198							
78				やや堅緻		口唇部ヨコナデ	
14	壺	口縁部(拓本)		橙褐色			パレススタイル土器口縁部
199							
78				堅緻		櫛刺突文羽状	
14	甕	胴肩部(拓本)		明褐色	白色・灰色細粒多量混入	櫛描波状文　下半部ハケ	
200							
78				堅緻			
14	甕	胴部（拓本）		灰褐色	白色・褐色細粒多量混入	叩き目	
201							
78				堅緻		ハケ	
14	甕	口縁部(拓本)		褐色	白色細粒混入	櫛描波状文　口唇部ヨコナデ	外面スス付着
202							
78				堅緻		ミガキ→口唇部ヨコナデ	
14	甕	胴部（拓本）		明褐色	白色・灰色石英細粒多量混入	叩き目	
203							
78				堅緻		ハケ	
14	甕	胴部（拓本）		灰褐色	石英粒多量、白色・灰色細粒少量混入	叩き目	内面スス付着
204							
78				堅緻		ナデ	
14	甕	胴部（拓本）		灰褐色	白色・灰色・褐色細粒少量混入	櫛描波状文	
205							
78				堅緻		ハケ	
15	甕	胴部（拓本）		黄橙褐色	白色微粒、石英粒少量混入	叩き目	
206							
78				堅緻		ナデ	
15	甕	胴部（拓本）		橙褐色	白色・赤褐色石英細粒少量混入	叩き目	
207							
78				堅緻		工具によるナデ	
15	壺	口縁部(拓本)		橙褐色		ハケ	パレススタイル土器口縁部
208							
78				堅緻		櫛刺突文羽状に２段確認	
21	S字甕	口縁部(拓本)		淡桃白色	白色・灰色細粒、透明石英・雲母多量混入	櫛描直線文	
209							
78				堅緻		ナデ	
21	甕	胴部（拓本）		灰褐色	白色・灰色細粒微量混入	叩き目	
210							
78				堅緻		ヨコナデ	

番号	器種	残存度	法量	色調焼成	胎土	調整	備考
住居址			器高	色調		外面	
土器			口径	焼成		内面	
図			底径				
21	甕	胴部（拓本）		明褐色	白色・灰色・褐色粒子少量混入	叩き目	
211				堅緻		ヨコナデ	
78							
23	甕	胴部（拓本）		灰褐色	白色細粒微量混入	叩き目	
212				堅緻		ナデ	
78							
24	甕	胴部（拓本）		明褐色	白色・灰色細粒少量混入	叩き目	
213				堅緻		ヨコナデ	
78							
24	甕	胴部（拓本）		暗灰褐色	白色・褐色細粒少量混入	櫛描波状文	
214				堅緻		ヨコナデ	
78							
30	甕	頸部（拓本）		灰褐色	白色・灰色細粒少量混入	櫛描波状文	外面やや摩滅
215				やや軟質		ヨコナデ	
78							
47	甕	胴部（拓本）		暗褐色	白色・赤褐色石英細粒少量混入	叩き目	
216				堅緻		ヨコナデ	
78							
47	甕	頸部（拓本）		明褐色	白色・石英細粒少量混入	櫛描波状文	
217				堅緻		ヨコナデ	
78							
47	甕	胴部（拓本）		明褐色	白色・灰色・石英細粒少量混入	櫛描波状文	
218				堅緻		ヨコナデ	
78							
±37	甕	胴部（拓本）		褐色	白色・灰色粗粒混入	叩き目	
219				堅緻		ナデ	
79							
±139	甕	胴部（拓本）		暗灰色	白色・灰色粒混入	叩き目→カキ目（叩きを潰す）	
220				堅緻		ナデ	
79							
±151	甕	胴部（拓本）		灰褐色	白色・灰色粗粒混入	叩き目	
221				堅緻		ナデ	
79							
±175	壺	胴部（拓本）		橙褐色	白色・灰色細粒少量混入	ボタン状貼付	器面著しく摩滅
222				やや軟質			
79							
±179	壺	胴部（拓本）		橙褐色	白色細粒少量混入	ナデ　ボタン状貼付	
223				堅緻		ミガキ(？)	
79							
±223	甕	胴部（拓本）		暗褐色	白色・赤褐色細粒多量混入	叩き目	底部付近
224				堅緻		ナデ	
79							

番号	器種	残存度	法量	色調焼成	胎土	調整	備考
住居址			器高	色調		外面	
土器			口径	焼成		内面	
図			底径				
±275	甕	胴部（拓本）		暗赤茶褐色	白色・赤褐色細粒少量混入	叩き目	底部付近
225						ナデ	
79				堅緻			
±339	甕	口縁部(拓本)		褐色	灰色・赤褐色石英細粒微量混入	櫛描波状文	
226						ミガキ	
79				堅緻			
±752	甕	胴部（拓本）		明褐色	白色・石英・長石細粒混入	櫛描波状文	
227						ナデ	
79				堅緻			
±810	甕	胴部（拓本）		暗褐色	白色・灰色・赤褐色細粒少量混入	叩き目→カキ目（叩きを潰す）	
228						ハケ	
79				堅緻			
±810	甕	胴部（拓本）		橙褐色	白色細粒、石英粒多量混入	叩き目	内面摩滅
229							
79				堅緻			
±857	甕	胴部（拓本）		茶褐色	白色・赤褐色細粒少量混入	叩き目	底部付近内面摩滅
230							
79				堅緻			
溝14	甕	胴部（拓本）		黄橙褐色	白色・石英細粒少量混入	叩き目	
231						ナデ	
76				堅緻			
溝14	甕	胴部（拓本）		明褐色	白色細粒微量混入	叩き目	内面摩滅
232							
76				堅緻			
竪2	甕	胴部（拓本）		黄橙褐色	白色・灰色細粒少量混入	叩き目→ハケ（叩き目を潰す）	
233						ナデ	
79				やや堅緻			
竪2	甕	胴部（拓本）		黄橙褐色	赤褐色・石英細粒少量混入	叩き目	
234						ナデ	
79				やや軟質			
竪3	甕	胴部（拓本）		黄褐色	白色・灰色細粒少量混入	叩き目	
235						ナデ	
79				やや軟質			
竪3	甕	胴部（拓本）		黄褐色	白色・灰色・赤褐色細粒、石英粒少量混入	叩き目	
236						ヨコナデ	
79				堅緻			
竪3	甕	胴部（拓本）		黄褐色	白色・赤褐色石英細粒少量混入	叩き目	内面摩滅
237							
79				堅緻			
検出面	甕	頸部（拓本）		橙褐色	白色細粒微量混入	櫛描波状文　櫛描直線文	
238						ハケ	
79				堅緻			

(3)陶磁器

中近世の土器・陶磁器は土師質土器１点を含めて24点である。そのうち測図可能なものを９点図示したが、遺物の量は少ない。１は土師質の皿で口縁部は小さく立ち上がり、内側に調整痕がある。中世後半のものか。土壙775出土である。２・３は東海系の捏鉢である。２は直線的に立ち上がり、口縁は上端部に浅い凹線をもって肥厚している。胎土にはかなり砂粒を含み、内面下部は磨耗している。３は底部で高台は横ナデにより貼り付けられている。内面は強く磨耗している。この他図示しなかったが捏鉢胴部破片が１点ある。これらは13Ｃ後半から14Ｃ前半のものと思われる。出土遺構は２は土壙339、３は７区検出面である。４は無釉の壺底部であるが、内外ともに明るい褐色を呈している。内面はヨコナデ、外面は斜めに工具をはしらせている。土壙368出土。５は焼締の壺らしいが底部には糸切痕があり、底部外側は削りにより調整している。内面には灰釉が付いているが、外面は無釉である。土壙785出土。ほかに常滑壺片２点が出ている。これらは中世後半のものと思われる。６は折縁深皿である。口縁部は直に立ち上がり、強く外側に折れる。灰釉は薄黄緑色で内外上半に厚くかかる。胎土は灰白色で焼成はよい。瀬戸美濃系の15Ｃ頃のものである。土壙657出土。７は鉄釉の皿で釉が内外上部にしかかかっていない。口縁部はくの字状に開いている。瀬戸美濃系と思われるが時期は不明。土壙179出土。図以外のものでは瀬戸系の瓶子破片、灰釉の碗の破片、鉄釉の徳利破片などがある。

８・９は磁器である。８は黒ゴスで草状の文様が描かれ、高台内には字が書かれている碗である。12区検出面出土。９は杯で内面に金文字で『五（十)』と『星』が書かれているらしい。松本五十連隊の杯ではないか。13区検出面出土。８・９とも大正・昭和のものと思われる。

２．石器・石製品

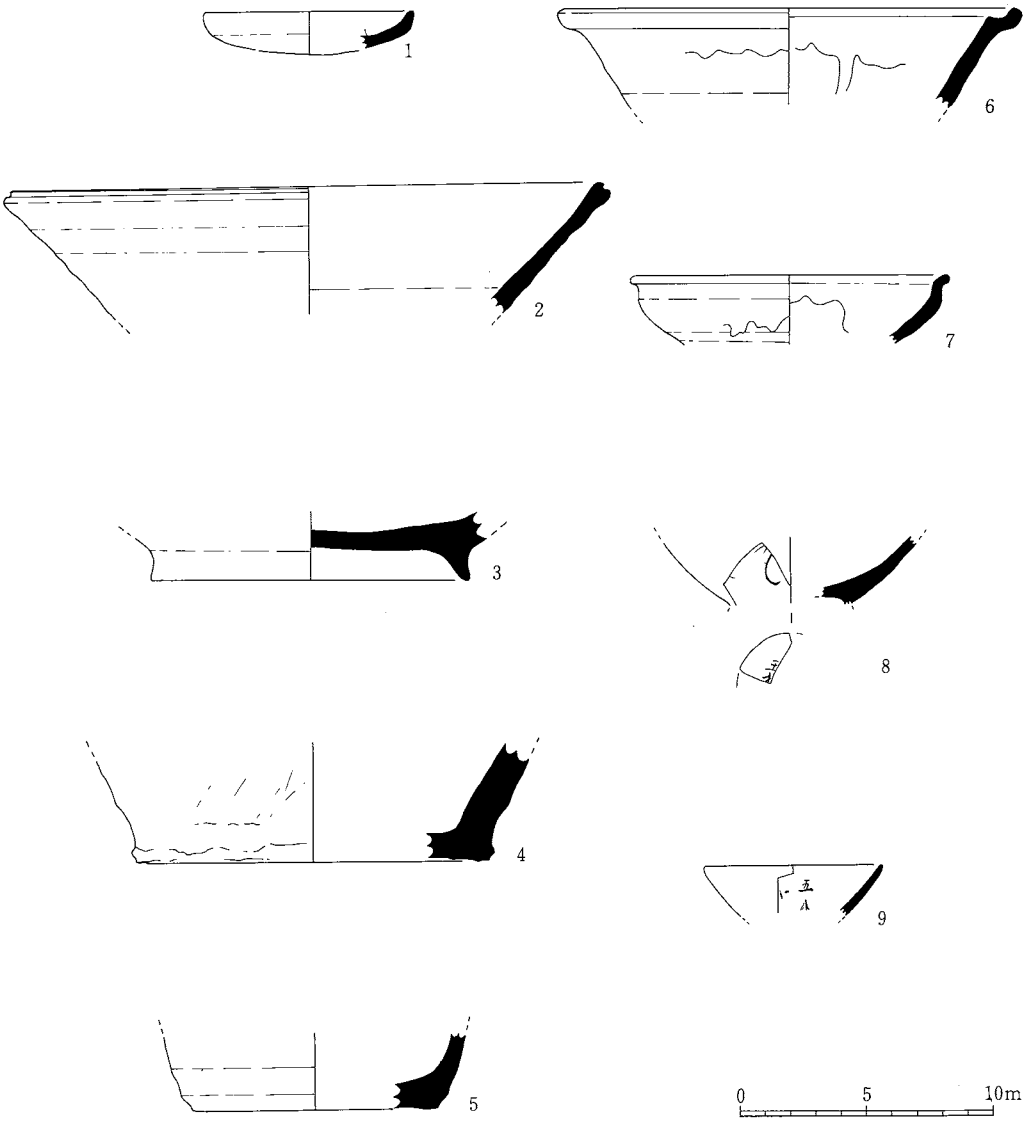
今回報告する石器は1987（昭和62）年の発掘調査のうち、県営ほ場整備事業予定地内出土の石器である。石器は定形的な石器のほか、２次加工のある剥片・使用痕のある剥片・剥片・砕片が多数出土している。このうち今回は定形的な石器に限って報告する。向畑遺跡では1988（昭和63）年にも継続して発掘調査が行われ、来年度に報告書が刊行される予定なので、向畑遺跡の石器群全体についてはそれに譲りたい。

整理にあたっては実測できるものはすべて図化し、掲載することにした。また、すべての石器について出土地点・法量・石質・欠損状況などを一覧表に登載している。

今回の調査では縄文時代の石器、古墳時代の砥石、それから石製品として硯１点が出土している。このうち特徴的なものとして、前回同様に縄文時代早期後半に多くみられる特殊磨石１点が出土している。また、石鏃のなかに有茎鏃３点があり、そのうち１点はいわゆる飛行機鏃である。このことから付近には後・晩期の遺構の存在が推測される。

１）石鏃（１～17)

17点出土している。石鏃は基部の形態と茎の有無から分類できる。本遺跡では凹基・無茎鏃、凹



第80図　陶磁器

基・有茎鏃、円基鏃、平基鏃が出土している。凹基・有茎鏃は3点（1・4・15）出土している。有茎鏃はこの地域では縄文時代後期後半以降に出現する。また、4については両側縁に張り出しをもつ、晩期に特徴的な飛行機鏃の一種である。調査地周辺に該期の遺構があるかもしれない。なお、1は片側に整形の剥離がみられないこと、主要剥離面側から茎部を作り出すための剥離が粗いことから未製品と考えられる。円基鏃（2）はシンメトリーだが、先端が尖らないこと、整形剥離が粗くて横断面が厚いことから未製品の可能性がある。平基鏃は2点（12・16）出土している。このうち12は左右非対称、整形剥離が粗く横断面が厚いことから未製品と考えている。

凹基・無茎鏃は11点出土している。このうち、9は整形剥離が粗いことから未製品と考えている。11は先端からの加撃で上半を失っている。破損面に不純物が見えていることから、これが原因で破損してしまったと考えられる。

石材については、1がチャート製で、他は黒曜石である。

2）石錐（18～21）

調整剥離によって先端部を作り出している石器で、石鏃以外のものを石錐として扱った。4点出土している。18は棒状を呈するチャート製である。19～21はつまみ部をもつ黒曜石製のものである。19は片側辺に剥離を加えて錐部を作り出す途中の未製品と考えている。19～21にはポジティブなバルブ・バルバースカーを一部に残していることから、剥片のバルブのふくらみを利用してつまみを作り出していることがうかがえる。また、いずれも片側縁の片面にのみ剥離を加えて錐部を作り出している点が共通している。

3）石匙（22・23）

横形・直刃タイプが2点出土している。22はつまみに接続する側縁部につぶれがある。着柄または紐等を縛った際にできた痕跡と考えられる。黒曜石製。23は縦長剥片を素材にする石匙である。つまみは剥離方向に対して直角に取り付けられている。刃部は両面加工である。しかし、背面側が斜度の急な剥離であるのに対し、腹面側は浅い剥離 であるため、断面でみると片刃状を呈している。

4）ピエス・エスキーユ（24～30）

7点出土している。すべて黒曜石である。このうち25・27・28は上・下端につぶれが生じている。いずれも上からの加撃によると思われるが、平坦な打面は伴っていない。また、加撃の結果生じた剥離面はネガティブである。なお、28の片側縁には2次加工が行われている。24・30は截断面をもつもので、30の上端にはつぶれが観察される。

5）スクレイパー（31～38）

8点出土している。石材・素材の剥片・刃部の形態等にバラエティーがある。31はチャートの横長剥片を素材にしている。2側辺に両面加工の刃部をもつが、石匙の製作途上で失敗したものかもしれない。32は剥片の薄い縁辺を利用して刃部としている。整形のための剥離は両側に行われてい

るが、背に当たる部分は背面のみ剝離が集中している。33は打面・ポジティブなバルブをもつ剝片の末端に両面加工により刃部を作り出している。背面側は急斜度の剝離なので、断面では片刃を呈している。35は横長剝片を素材にしている。打面側の厚い側辺に両面から粗い剝離が行われている。36は黒曜石の縦長剝片を素材にしている。背面の片側辺に急斜度の剝離を行って刃部としている。37はチャートの縦長剝片を素材にしている。片側辺に両側から浅い剝離を行っているが、背面側の調整のほうが丁寧な剝離を行っている。38は横長剝片を素材にしている。刃部加工は片側辺に両面から行われている。

6）打製石斧（39～53）

15点出土している。平面・刃部の形態から分類することができる。内訳は平面形態では撥形10・短冊形3・不明2点、刃部の形態では円刃7・偏刃2・不明6点である。また、ほとんどの石器には使用痕が観察されている。使用痕には着柄痕と考えられる側縁部のつぶれ、実際の使用でできる刃部の摩耗があった。欠損状況を見ると完形品はなく、頭～胴部を残すものが多い。頭部だけのものは5点（43・48・49・51・52）あるが、刃部のみ・下半部が残っているものはない。

次に特徴的なものについて述べる。40は頭頂部からの加撃で頭～胴部の一部が縦長剝片状に剝離しているため、刃部に比べて胴部が薄くなっている。この剝離された面にも側縁調整のための剝離が行われている。着柄のために頭～胴部の厚さを減じる例はないので特殊なものである。45は側縁～刃部にかけて丁寧な剝離を行って整形している。ところが、刃部の末端には平坦面（おそらくは礫の表皮―自然面）があり、V字状の刃部を呈していない。使用には不向きなので未製品かと思われたが平坦面と体部が作り出す稜のところが摩耗している。また、側縁部にはつぶれが見られる。このことから、実際に使用されていたことが考えられる。

7）磨製石斧（54・55）

5点出土している。いずれも小片で頭～胴部の一部と考えられるが、石斧の形状・刃部は全くわからない。ほとんどのものが使用の際に破損してしまったものと考えられる。

8）敲・磨・凹石（56～63）

9点出土し、実測可能な8点を図示している。一般に敲石・磨石・凹石と呼ばれるものは、それぞれ単独で敲打痕・磨面・凹部をもつものは少ない。多くは複数の使用痕をもっている。そのため、個々の名称は付けず、敲・磨・凹石として扱った。これらの石器は自然礫をそのまま、あるいは積極的に加工することなく使用されるので認定が難しい。使用頻度が多い石器は礫の表面が平滑になったり、色調が変わったり、非使用部分との境に稜が生じてくるので識別は可能である。しかし、使用頻度の少ないものについては自然礫との区別が難しい。したがって、今回の調査では9点が出土しているが、実際はもっと多いのかも知れない。

実測図については、磨面を―・―・―（平面）・◁―　―▷（断面）、敲打痕は―・―・（平面）・←――→（断面）で表現している。個々の石器の使用痕・寸法等については一覧表を参照されたい。以

下、特徴的なものに付いて述べる。

60は偏平な円礫を素材にしている。そして、この側縁部は円周に沿って敲打されている。また、両面の平坦部には磨面がみられる。さらに、片面の中央には敲打痕も残されている。ただし、この敲打痕は、側縁部の敲打痕とは異なり、台石としてつかわれたものと考えている。61は特殊磨石である。(1)本石器では機能磨面2面のほかに、上・下端に敲打痕、胴部両面には凹部を伴っている。一般に特殊磨石の機能磨面と呼ばれているものはザラザラとしていて、機能磨面と調整磨面との境に小剝離痕が観察されるものが多い。これらのことから機能磨面は磨（す）る以外に敲（たた）くことに近い動作が行われていたことが考えられている。61では機能磨面と敲打痕の2種類の使用痕があるが、敲打痕のほうが機能磨面よりもザラつきが粗く、両者は明確に区別される。この2つの使用痕が1つの目的の中で使い分けられていたのか、それぞれ別の用途があったのかは今後の検討課題である。

なお、被熱により赤色化・表面の剝落がみられるものが5点ある。このうち、57・62は破損部分にも被熱による赤色化がみられた。

9）砥石（64～68）

7点出土し、実測可能な5点を図示している。65～67は大きさ・重量から置き砥石と考えられる。65は被熱により赤色化と煤の付着がみられるが、底面と研磨面にはほとんど及んでいない。66は砥石を置きやすくするために、礫を割って底部としている。67は砥面が4面もあるが、手で保持するには重すぎるので置き砥石と考えられる。64・68は手持ちの砥石である。ともに、よく使い込まれている。このほかに、研磨痕をもつ小破片が2点出土している。

10）硯（69）

ピット123から1点出土している。製作時の研磨痕や使用時の墨痕はよく残っている。特に、研磨痕については、側面部分に長軸に直交する非常に粗い研磨痕と長軸に平行する仕上げの細かい研磨痕が観察される。硯面は花弁様の輪郭に作られている。また、上面には沈線で硯面を長方形に囲んで、さらに文様を四隅に彫り込んでいる。

註1　特殊磨石の各部の名称については、

八木光則「いわゆる『特殊磨石』について―中部地方における縄文早期の石器研究への問題提起―」『信濃』第28巻第4号1976を参考にした。

なお、実測図では機能磨面をスクリーントーンで表現している。

表4　石器一覧表

石　鏃

No.	図No.	分類	注記	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質	欠損状況	備考
1	1	凹基・有茎	1住No.3	(3.77)	1.87	0.35	(2.12)	チャート	先端部欠	未製品
2	2	円基・無茎	1住覆土	1.72	1.86	0.54	1.75	黒曜石	完形	未製品か
3	3	凹基・無茎	2住北西	(1.29)	(1.38)	0.29	(0.45)	黒曜石	上半・片脚端欠	
4	4	凹基・有茎	2住北東	(2.64)	1.43	0.49	(1.49)	黒曜石	茎部欠	飛行機鏃
5	5	凹基・無茎	2住検出面	1.95	(1.15)	0.32	(0.44)	黒曜石	片脚欠	
6	6	凹基・無茎	11住No.42	2.23	(1.37)	0.31	(0.51)	黒曜石	片脚縁辺欠	
7	7	凹基・無茎	11住北西	(2.32)	(1.33)	0.42	(0.82)	黒曜石	両脚欠	
8	8	凹基・無茎	11住北西	(1.52)	(1.23)	0.32	(0.52)	黒曜石	先端・両脚欠	
9	9	凹基・無茎	土壙12	1.88	2.06	0.62	1.66	黒曜石	完形	未製品
10	10	凹基・無茎	土壙21	(1.26)	(1.39)	0.25	(0.39)	黒曜石	上半・片脚欠	
11	11	凹基・無茎	土壙26	(1.91)	1.81	0.49	(1.24)	黒曜石	上半欠	未製品か
12	12	平基・無茎	土壙216	1.99	1.48	0.47	1.26	黒曜石	完形	未製品か
13	13	凹基・無茎	土壙216	1.39	1.07	0.38	0.42	黒曜石	完形	
14	14	凹基・無茎	9区検出面	(1.83)	1.52	0.29	(0.69)	黒曜石	両脚欠	
15	15	凹基・有茎	9区検出面	1.93	(1.34)	0.50	(0.65)	黒曜石	片脚欠	
16	16	平基・無茎	10区検出面	2.02	(1.09)	0.40	(0.93)	黒曜石	片脚端欠	
17	17	凹基・無茎	13区検出面	2.01	1.08	0.27	0.46	黒曜石	完形	

石　錐

No.	図No.	分類	注記	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質	欠損状況	備考
1	18	棒状	5住No.1	3.03	1.23	0.54	1.99	チャート	完形	
2	19	つまみ	11住No.45	(3.01)	1.49	0.49	(1.55)	黒曜石	錐部端欠	
3	20	つまみ	11住No.45	1.56	1.14	0.36	0.35	黒曜石	完形	
4	21	つまみ	11住床面	2.26	1.12	0.41	0.73	黒曜石	完形	

石　匙

No.	図No.	分類	注記	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質	欠損状況	備考
1	22	横形・直刃	11住覆土	(2.23)	(2.16)	(0.57)	(1.98)	黒曜石	両端欠	側縁部つぶれ
2	23	横形・直刃	7区検出面	3.55	4.39	0.87	12.58	チャート	完形	

ピエス・エスキーユ

No.	図No.	注　記	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石　質	欠損状況	備　考
1	24	土壙14	2.35	1.22	0.82	1.94	黒曜石	完形	
2	25	土壙251	2.21	1.37	0.76	1.96	黒曜石	完形	
3	26	土壙339	2.21	1.35	0.65	1.63	黒曜石	完形	
4	27	土壙866	1.63	1.49	0.69	1.56	黒曜石	完形	
5	28	ピット11	3.42	2.12	0.73	4.59	黒曜石	完形	
6	29	1区検出面	2.41	1.55	0.66	2.09	黒曜石	完形	2次加工あり
7	30	9区検出面	2.81	1.45	0.68	2.19	黒曜石	完形	

スクレイパー

No.	図No.	注　記	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石　質	欠損状況	備　考
1	31	1住覆土	(2.16)	(2.77)	(0.33)	(2.05)	チャート	片側辺欠	
2	32	11住No.44	5.18	7.26	0.99	49.65	砂　岩	完形	
3	33	土壙128	3.13	3.23	0.75	9.12	チャート		
4	34	土壙177	(4.86)	(5.53)	(1.27)	(37.92)	砂質泥岩	両側辺欠	
5	35	土壙584	3.88	7.77	0.75	25.85	砂質泥岩	完形	
6	36	土壙871	4.86	2.03	0.82	6.45	黒曜石	完形	
7	37	9区検出面	3.56	5.62	0.82	22.89	チャート	完形	片側に抉りあり
8	38	9区検出面	(3.71)	(4.42)	(0.53)	(12.29)	砂質泥岩	両側辺欠	

打製石斧

No.	図No.	分　類	注　記	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石　質	欠損状況	備　考
1	39	撥・円刃	2住	(9.35)	7.40	1.85	(186.98)	硬砂岩	上半欠	
2	40	撥・円刃	11住No.35	(11.24)	(4.24)	(2.04)	96.81	緑色凝灰岩	頭～胴部欠	側縁・刃縁部つぶれ
3	41	短冊・円刃	11住	(9.34)	3.64	1.42	(56.44)	緑色凝灰岩	上端欠	側縁部つぶれ、胴部稜線摩耗
4	42	短冊・不明	11住	(8.32)	(4.28)	(1.73)	(99.10)	千枚岩	下半欠	側縁部つぶれ
5	43	撥？・不明	14住	(6.55)	(4.16)	(0.87)	(29.83)	砂質泥岩	上端・下半欠	
6	44	短冊・偏刃	14住	(12.71)	3.74	1.30	(79.30)	砂岩(ホルンヘルス)	頭部欠	側縁部つぶれ・刃部摩耗
7	45	撥・円刃？	土壙132	(9.36)	(4.13)	1.14	(72.54)	硬砂岩	頭部欠	側縁・刃部摩耗
8	46	撥・円刃	土壙203	(9.22)	(4.63)	(2.00)	(105.50)	硬砂岩	刃部欠	側縁部つぶれ、刃部摩耗
9	47	撥・偏刃	土壙320	(7.95)	4.33	1.42	(55.91)	硬砂岩	頭部欠	刃部摩耗
10	48	不　明	土壙584	(8.35)	(3.87)	(1.48)	(48.74)	硬砂岩	胴～刃部欠	
11	49	撥・不明	7区検出面	(10.69)	(9.37)	(2.41)	(37.80)	安山岩	胴～刃部欠	側縁部つぶれ
12	50	撥・円刃	7区検出面	(14.40)	7.25	2.89	(278.12)	砂岩(ホルンヘルス)	刃部端欠	側縁部つぶれ、胴部摩耗
13	51	不明・円刃	9区検出面	(7.08)	(5.49)	(1.67)	(91.49)	硬砂岩	上半・刃端部欠	側縁部つぶれ
14	52	撥・不明	9区検出面	(7.69)	(4.43)	(2.12)	(87.39)	硬砂岩	下半欠	側縁部つぶれ
15	53	撥・不明	15区検出面	(9.14)	(4.61)	(1.79)	(95.83)	硬砂岩	刃部欠	側縁部つぶれ

磨製石斧

No.	図No.	注記	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質	欠損状況	備考
1		13住	(2.83)	(3.20)	(0.41)	(3.21)	砂質泥岩	一部残	
2	54	14住南東	(4.45)	(5.10)	(1.99)	(14.78)	砂質泥岩	一部残	
3		15住	(5.59)	(3.94)	(0.91)	(23.01)	砂岩(細粒)	一部残	
4		土壙755	(5.97)	(3.77)	(0.93)	(14.78)	砂岩	一部残	
5	55	16区検出面	(7.30)	(2.53)	(1.34)	(33.92)	砂質泥岩	一部残	

凹・敲・磨石

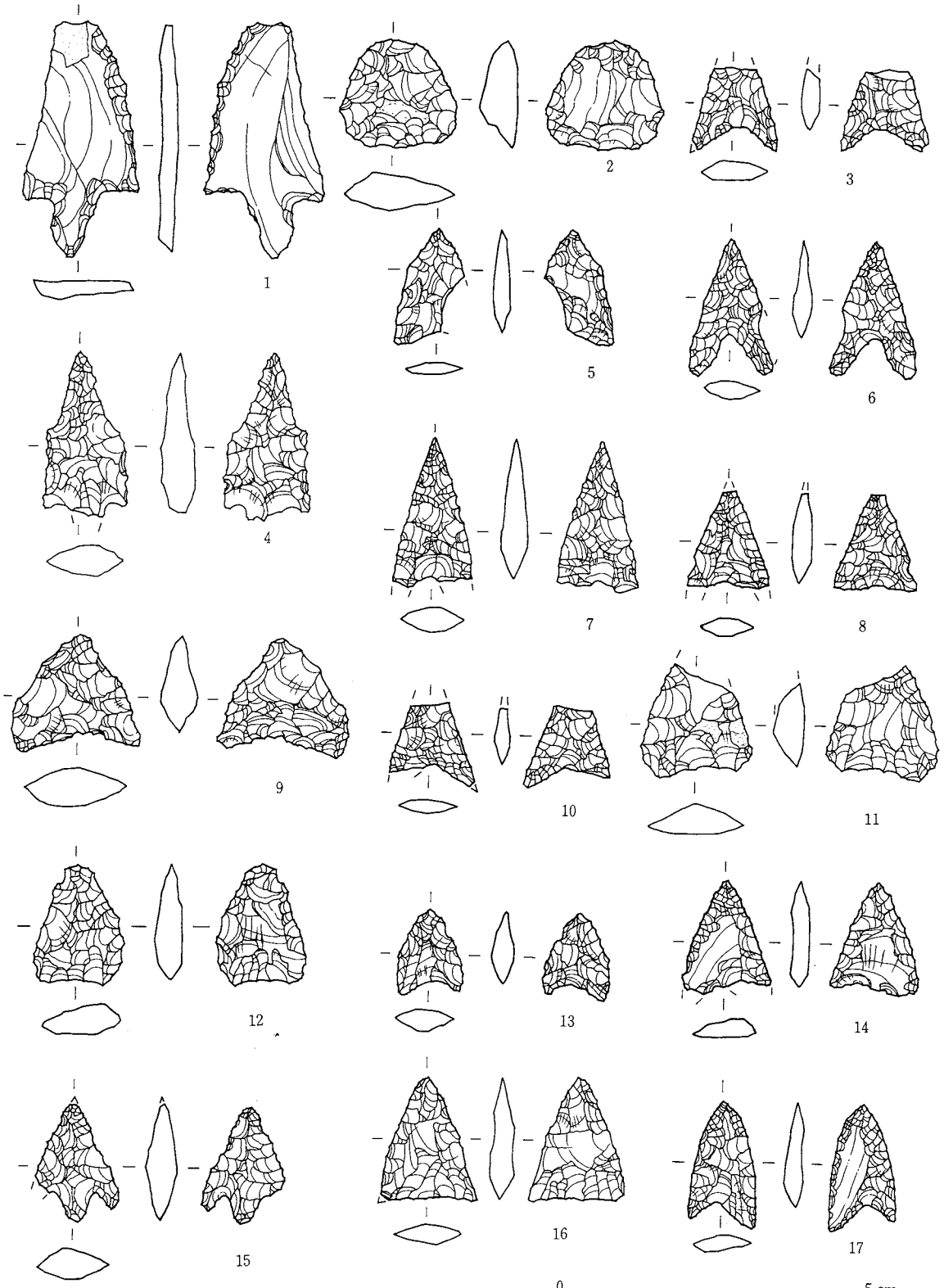
No.	図No.	凹部	敲打痕	磨面	注記	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質	欠損状況	備考
1				○	11住検出面	(3.54)	(4.43)	(1.93)	(34.61)	安山岩	一部残	被熱、石棒
2	56		○	○	11住No.43	(9.49)	(7.31)	(4.30)	(354.50)	安山岩	1/2欠	被熱
3	57			○	土壙205	(12.53)	(10.66)	2.89	(464.80)	石英閃緑岩	1/2欠	被熱
4	58		○	○	土壙205	(9.33)	(4.84)	(3.18)	(169.23)	硬砂岩	1/2欠	
5	59			○	土壙275	6.85	6.60	2.17	139.05	砂岩	完形	
6	60		○	○	ピット80No.1	13.01	9.75	4.32	849	砂岩	完形	
7	61	○(2+1)	○	○	ピット134	13.85	7.33	5.49	926	石英閃緑岩	完形	被熱、特殊磨石
8	62	○(2+2)	○	○	10区排土	(9.67)	(6.01)	(4.25)	(314.80)	安山岩	1/2欠	被熱
9	63			○	10区排土	11.63	8.44	2.33	282.82	砂岩	完形	

砥石

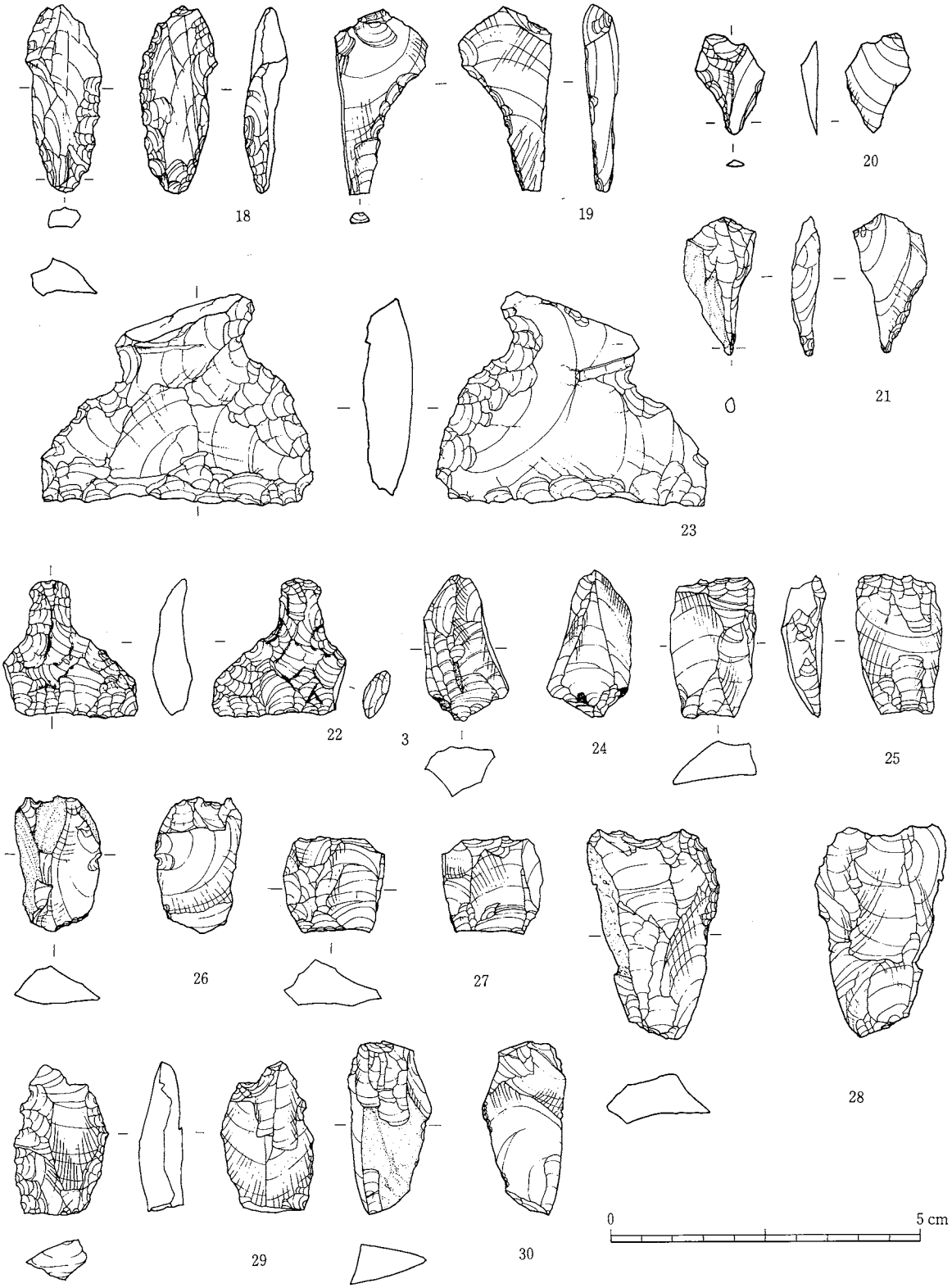
No.	図No.	注記	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質	欠損状況	備考
1	64	14住	5.90	1.06	1.57	28.13	泥岩	完形	砥面4
2		14住北西床面	(6.30)	(4.88)	(1.02)	(31.55)	砂岩	一部残	(砥面1)
3	65	24住	(34.20)	(20.10)	(8.35)	(7250)	石英閃緑岩	側面欠	砥面1、置き砥
4	66	30住ピット14	32.30	9.65	8.15	3680	硬砂岩	完形	砥面1、置き砥
5	67	土壙810	(24.95)	(12.05)	(6.85)	(3250)	硬砂岩	下部欠	砥面4、置き砥か
6	68	11区検出面	(5.01)	2.11	1.93	(44.91)	凝灰岩	両端欠	(砥面4)
7		13区検出面	(4.79)	(3.66)	(1.02)	(9.25)	砂岩	一部残	(砥面1)

硯

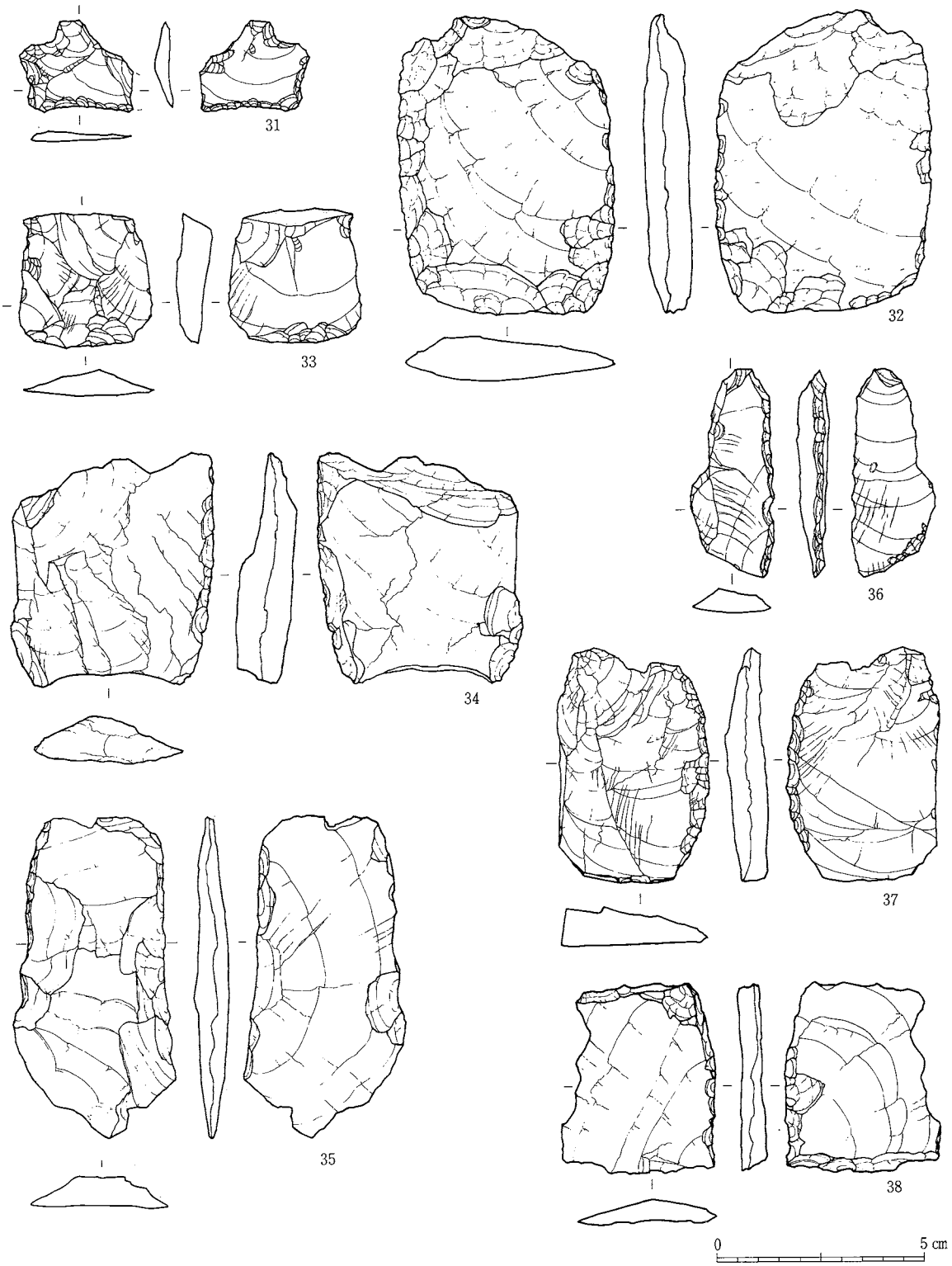
No.	図No.	注記	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質	欠損状況	備考
1	69	ピット123	9.92	4.51	1.61	24.86	粘板岩	完形	



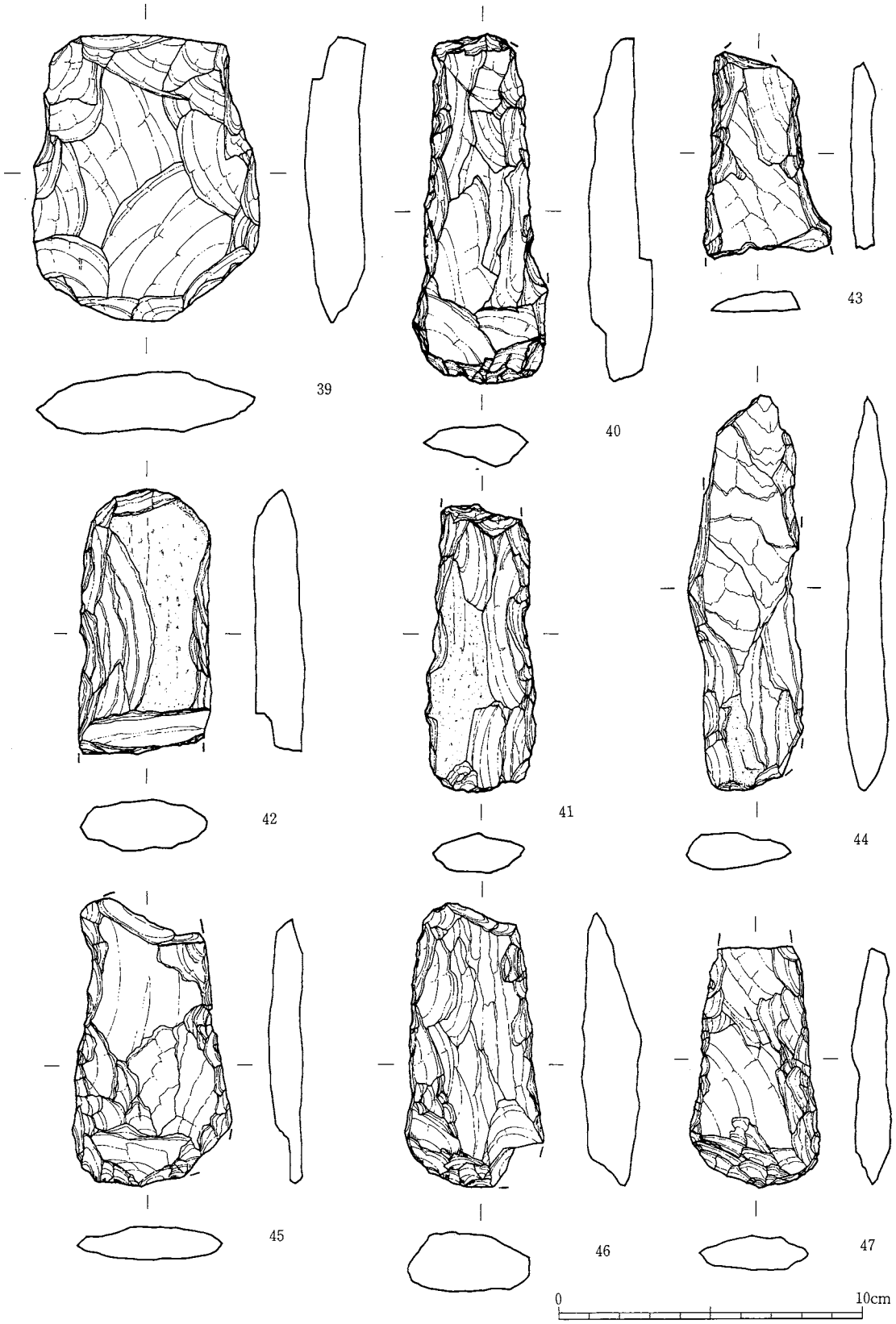
第81図　石器(1)



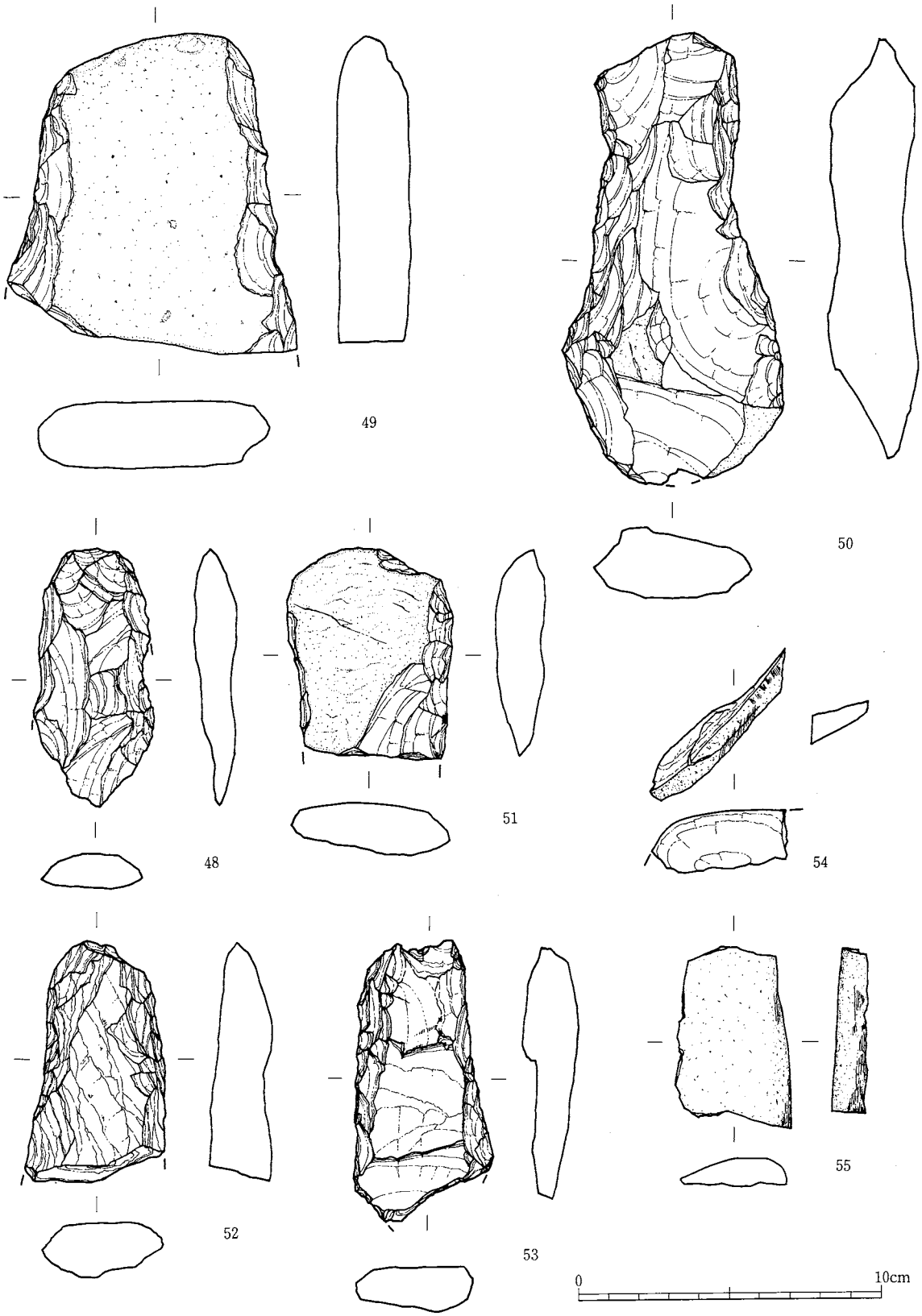
第82図　石器(2)



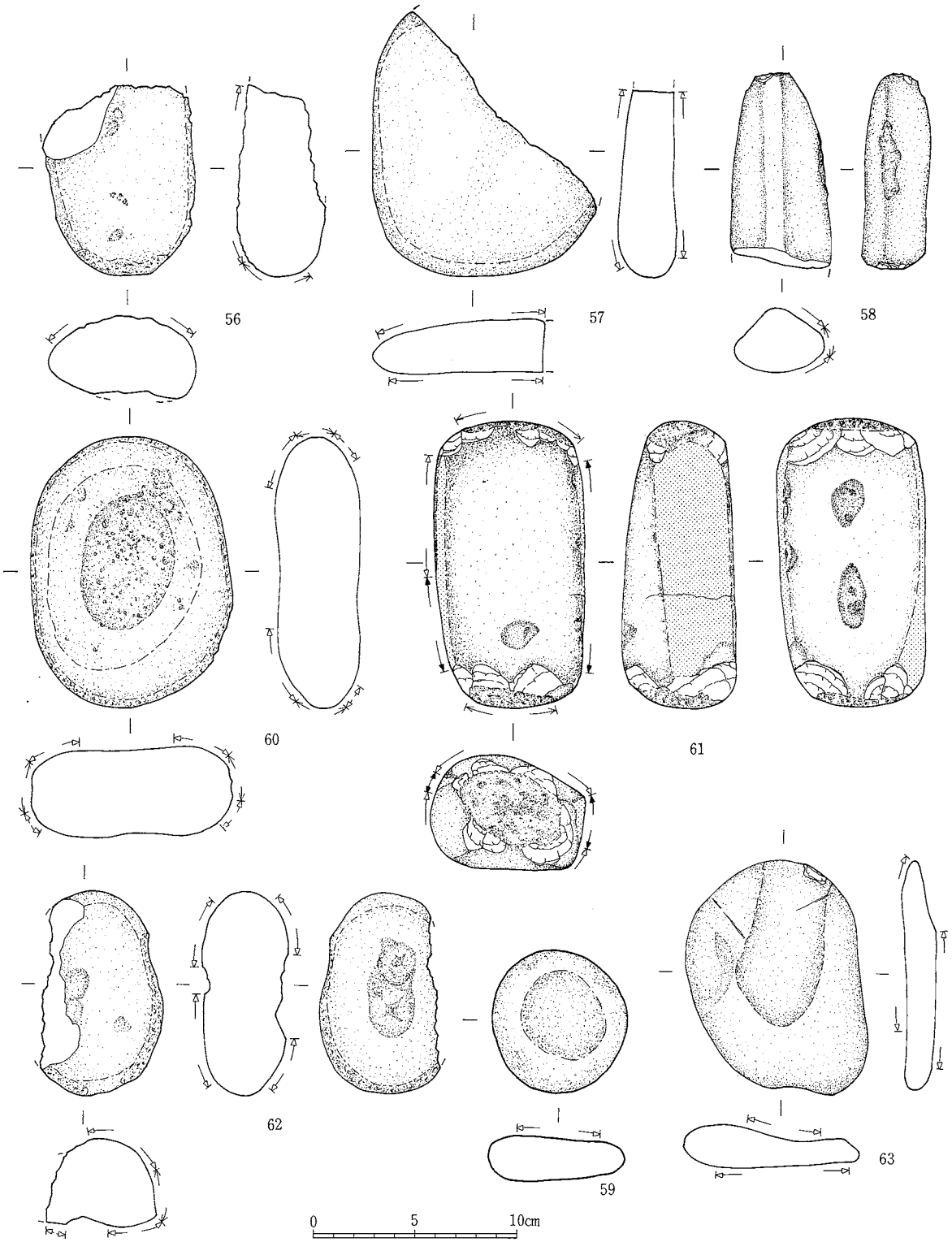
第83図　石器(3)



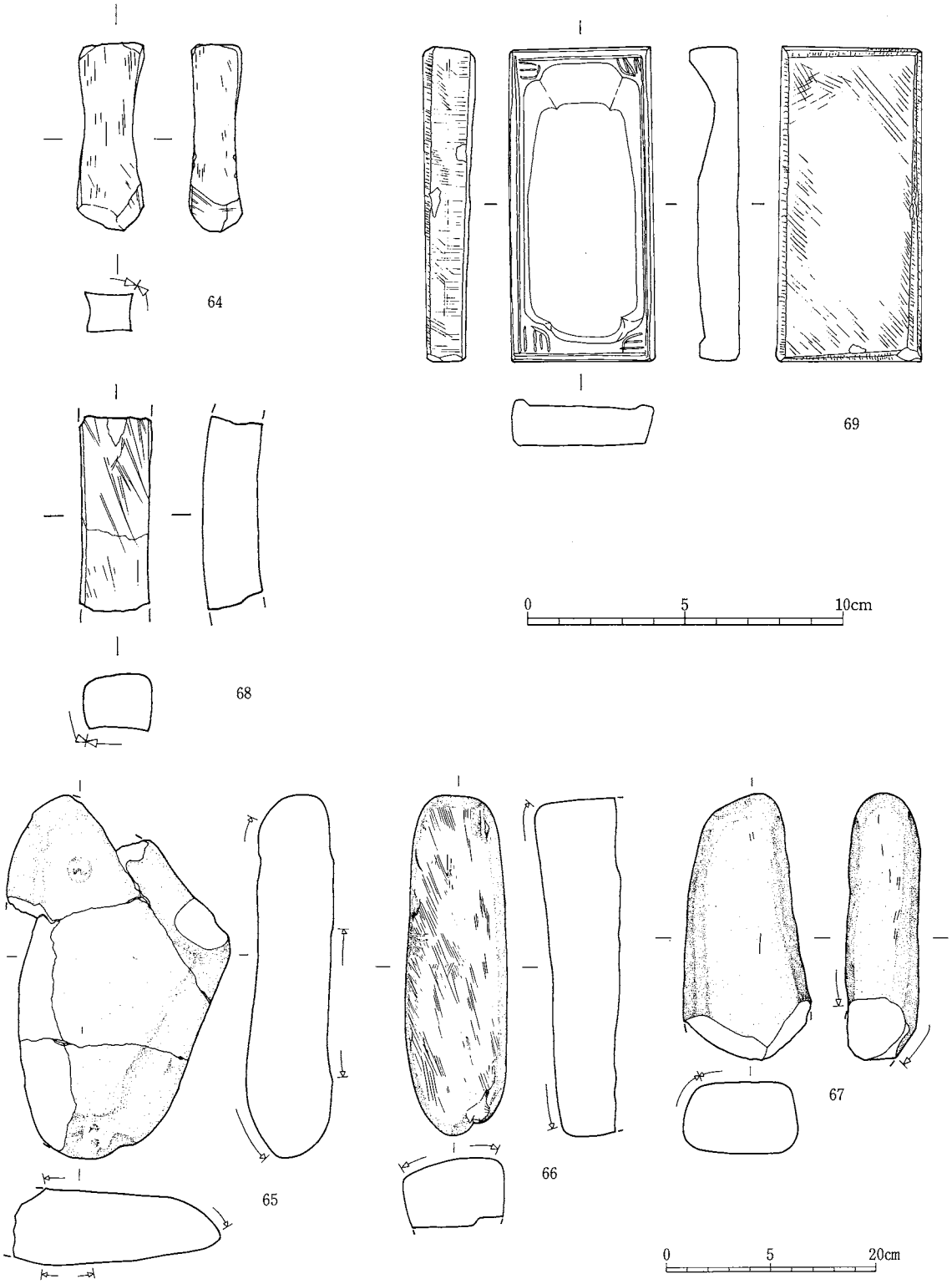
第84図　石器(4)



第85図　石器(5)



第86図　石器(6)



第87図　石器(7)

3　鉄器・銭貨

検出された鉄器・古銭は19点で殆どが土壙より単独出土している。1は長さ42.5cmの大きな鉄鉗で、古墳時代の第14号住居址より出土したものである。ただこの住居址のすぐ南には方形周溝墓があり、あるいはその遺構のものが混在したということも考えられる。鉄鉗は明らかに鍛造時に用いられたものであるが、鉄鉗以外鍛造に関するものの出土がない。鉄鉗は長野県内では飯田市竜丘古墳群(1)と佐久市の周防畑遺跡（H 2号住居址、平安時代）(2)からの2例が見られる。この2例の鉄鉗の大きさは37～38cmで本址の方がやや大きい。刃部と柄部のバランスを見ると、竜丘例に似ているが、刃と柄との比率は本址例が1：2であるのに対して、竜丘例では1：1.6である。刃部の先端は摑みやすく幅広に作られ、柄部分は四角であるが、先端に行くにしたがって丸くなる。現状では刃部が中心部より大きく反りかえって曲がっている。2～6は釘状のものであるが、確実に釘と言えるものは4・5である。4は頭が丸く現代の釘と似た形であり、5は角釘で頭も四角い。6は上部2cmあまりまで中空のもので煙管の吸い口状をしているが、用途不明である。7は鏃の先端部で古墳時代のものと言えよう。8も同様の鏃とも見えるが、断面は扁平である。9は穴の開いた薄い板状のものであるが、形状・用途不明である。10は扁平な鉄板で鉄鋌状ともいえるが、一端は丸みをもって、やや反っている。他方の端も切損時に曲ったものか角が反っている。用途については不明である。

古銭は9枚出土しているが、1枚は劣化が激しく図示できない。11～14は図示出来なかった1枚と共に六道銭として用いられたもので、土壙623より出土している。図No.の順に銭名を並べると、政和通宝、元祐通宝、至元通宝、政和通宝、図示できなかった1点は元豊通宝らしい。何れも火がかかっている。15は元○通宝で土壙640出土。16は元豊通宝で土壙642出土。17も元豊通宝で土壙667出土。18は熙寧通宝で土壙708出土である。土壙については墓址と見ているので、これらの鉄器・古銭は埋葬時に死者とともに葬られたものと考えられる。釘類については木棺等木製品に使われていたものであろう。土壙の多さに比して、遺物の少ないことが特記される。

註(1)　土屋長久『周防畑遺跡』長野県佐久市緊急発掘調査報告書　1980　佐久市教育委員会

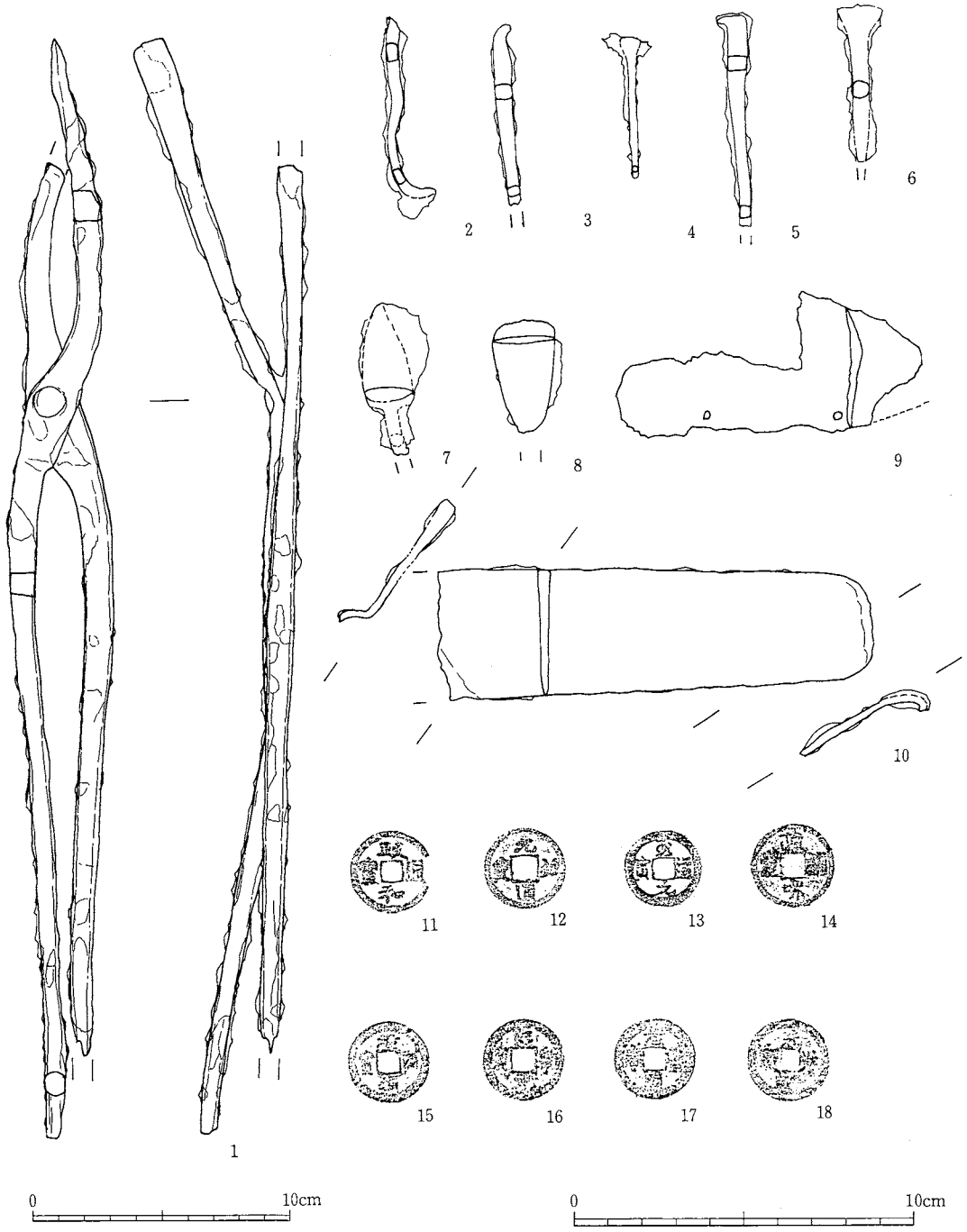
(2)　岩崎卓也・松尾昌彦『長野県史・考古資料編・第一巻（四）遺物・遺構』1988　長野県史刊行会

なお、これらの資料については宮下健司氏から教示をうけた。

鉄器・古銭

表 5

図No.	出土遺構	種別	寸法(cm) 長さ	巾	厚さ	重量(g)	備考
1	14号住居址	鉄鉗	42.5	41	1.4	345	一方両端欠失
2	10区	釘状鉄器	(5.9)	< 0.6 >	< 0.4 >	(5.0)	
3	土壙251	〃	(5.3)	< 0.5 >	< 0.5 >	(3.3)	
4	土壙621	釘	(4.1)	< 0.25>	< 0.2 >	2.0	
5	土壙703	〃	(6.2)	< 0.6 >	< 0.45>	6.8	
6	土壙263	不明	4.5	0.5	0.5	6.1	
7	竪穴3	鉄鏃	(4.5)	<身1.3 ><茎0.4 >	< 0.4 >	7.2	
8	16号住居址	〃	(3.2)	< 1.9 >	< 0.15>	4.4	
9	土壙716	不明	8.9			10.0	形状については全く不明
10	土壙357	鉄板	(12.7)	< 3.8 >	< 0.4 >	(51.7)	
11	土壙623	古銭					政和通宝
12	〃	〃					元祐通宝
13	〃	〃					至元通宝
14	〃	〃					政和通宝
	〃	〃					元豊通宝か
15	土壙640	〃					元○通宝
16	土壙642	〃					元豊通宝
17	土壙667	〃					〃
18	土壙708	〃					熙寧元宝



第88図　鉄器・銭貨

4　土壙353出土の人骨について

埋葬状態：出土した人骨は頭部・胸郭部分などが全く欠失し、骨盤から下肢を主に残存する。最下方に骨盤が位置し、骨頭を同一レベルとする大腿骨・脛骨（左）が膝関節で強く屈曲され、土中で直立した形をとっている。右の下肢はやや散乱するが、脛骨下部に足骨が左右混在して一括されることから、両下肢は同じ状態で揃えられたものと判断される。手骨はこれらの骨の側方に集中するが、上腕骨はかなり東方に離れた位置で出土し、しかも同一骨の断片がさらに四散した個所で発見されている。また2本の歯がこれらの骨のやや南寄りでレベルも浮上した遊離歯として出土している。頭蓋骨や脊椎骨・肋骨など個数の多い骨の残存が全く認められないことは、或る時期にかなり画然とした切り取りや撹乱が行なわれた可能性もあり、判断し難いところである。残された各骨の位置で見る限り、坐位屈葬の埋葬位が推定される。

各骨の形状：すべての骨は骨表面の剝落が生じ、海綿質の露出が崩壊を早めている。

歯―下顎左第3大臼歯(智歯)、歯冠が残り、冠内に歯根の一部が付着している。咬頭にわずかな咬耗を認める。他は上顎第3大臼歯と見なされるものであるが歯冠のみで一部を欠いている。上腕骨―左、骨体の下半分で滑車の一部を欠く。手骨―舟状骨・有頭骨・大菱形骨などと第1中手骨（いずれも右）に若干の指骨が残る。寛骨―右、寛骨臼とその周縁部分。左もほぼ同様であるがやや大きな断片である。寛骨臼は広く、坐骨結節は強度に発達し粗糙性に富む。大坐骨切痕の鋭く深い形態は極めて男性的な特徴を示す。仙骨―破砕された細片で一括されている。大腿骨―右、骨頭・骨幹・遠位関節部と離断するが、ほぼ原型を保つ。左、大転子や内・外側上顆を欠くが、全体の形状を残している。骨体は伸直で頑丈な形態である。しかし、粗線や殿筋粗面の発達は中等度で、外側顆上線も弱い。骨体中央横断示数は103.5でピラステルの形成はかなり弱度、同上部横断示数73.5は超広型に属し、前後の扁平性が著しく強い傾向を示す。脛骨―右、左ともに脛骨粗面を欠くがほぼ完存する。比較的頑丈な形態である。前縁は直状であるが鋭くなく、各縁も鈍で、ヒラメ筋線の発達は極めて弱度である。栄養孔部横断示数67.7で中脛であり、同中央横断示数70.0は正脛に属する。腓骨―右、骨体中央部分のみ。左、腓骨頭の一部を欠くが完存する。足骨―距骨（右、左）。踵骨（左）。舟状骨、楔状骨（内・中・外側）、立方骨はすべて左。第1中足骨（右、左）、その他若干の指骨が残存する。

結語：本人骨は両側下肢を主に残し、膝を屈曲・直立させた姿勢を保つが、上半身の部分の骨が悉く失なわれ、墓壙内での本来の埋葬状態は明確でない。残された骨の形質や第3大臼歯の咬耗の程度から壮年期以降の年齢が推測される。長骨の頑丈さや、大坐骨切痕の形態からは明らかに男性とみられる。しかし、筋附着部位の発達は極めて弱度で、下腿筋群はさほど発達していなかったものと考えられる。

大腿骨の形質のなかで骨体横断示数をみると、上部横断示数（右）が73.5で著しい扁平性を示す。

中世（鎌倉材木座）では78、江戸時代（湯島無縁坂）78、現代日本人（中部地方）で83とされ、この形質が消失していく過程で、本例の場合は同部の矢状径がほぼ通常なのに比して、横径の値がかなり大きいのが要因である。なお、この形質は縄文時代人では扁平性と柱状形成が相伴なうという特徴が顕著で、以後、柱状性が消失する結果となるが、本例の中央横断示数103.5は弱度で柱状形成は殆んど失なわれている。脛骨の骨体横断示数は栄養孔部で67.7、同中央部で70.0を示し、前者で中脛、後者で中脛と正脛の中間の値を示し、扁平脛骨の範囲には入らない。一般的に扁平脛骨は扁平大腿骨に伴なう傾向があるとされるが、本例の場合は大腿骨の扁平性のみ残るのが特徴的である。しかし、他の項目では、おおむね現代日本人より大きな数値を示すが、形態の頑丈さによる結果とみられる。大腿骨（右）からPearsonの公式による推定身長は160.3cmとなる。

本人骨の残存程度はかなり良好で、細かな骨まで保存され、その形質は現代日本人に通じる特徴もみられ、断定できないが、近世以降の比較的新しい時期の埋葬人骨である可能性が高い。

信州大学医学部第二解剖学教室

西沢寿晃

参考文献

高橋譲　現代日本人大腿骨の人類学的研究（英文）、人類学雑誌83：3　1975

同上　現代日本人脛骨の人類学的研究（英文）、信州医学雑誌14：2　1969

香原志勢　四肢骨特に大腿骨の形質、鎌倉材木座発見の中世遺跡とその人骨、1956

森本岩太郎　江戸時代人の骨、季刊考古学13、1985

表-1　大腿骨計測値と比較資料

大　腿　骨	※	※※
	土　壙 353(mm)	中世(鎌倉) 平均値(mm)	現代人(中部) 平均値(mm)
最　大　長〔1〕	420	417.1	409.6
中央矢状径〔6〕	30	27.3	27.8
中　央　横　径〔7〕	29	26.5	26.6
中　央　周〔8〕	93	84.5	85.3
上　横　径〔9〕	34	31.3	30.5
上　矢　状　径〔10〕	25	24.2	25.2
中央横断示数〔6/7〕	103.5	104.9	104.8
上横断示数〔10/9〕	73.5	77.9	83.0

表-2　脛骨計測値と比較資料

脛　骨	※※
	土　壙 353(mm)	現代人(中部) 平均値(mm)
全　長〔1〕	344	325.7
中　央　矢　状　径〔8〕	30	29.0
営巻孔部矢状径〔8a〕	31	33.2
中　央　横　径〔9〕	21	21.3
営巻孔部横径〔9a〕	21	24.0
骨　体　周　径〔10〕	80	78.7
営巻孔部周径〔10a〕	85	89.0
中央横断示数〔9/8〕	70.0	73.6
営巻孔部横断示数〔9a/8a〕	67.7	72.9

※　香原志勢（1956）

※※　高橋　譲（1969、1975）

第4章　結　語

向畑遺跡は丘状の台地上に位置しており、向畑古墳群の一部でもある。今回の圃場整備事業に伴う第1次調査の総面積は5200m²であり、県道建設工事に伴う発掘調査を加えると総面積は8100m²に及び両調査で確認された遺構は竪穴住居址48、竪穴状遺構6、古墳2、方形周溝墓1、土壙941墓、溝18、特殊遺構1になる。時代的に見ると縄文時代中期、古墳時代前期・中期、平安時代、中近世に亘っている。以下主な遺構を簡単に記述していく。

1．竪穴住居址　縄文時代中期の11号住、古墳時代中期の15号住、住居址でない可能性が高い39号住を除いた他の45軒は古墳時代前期に属するものである。全体図（付図）を見ると調査地全体に平均的に分布しており台地上の平坦地に広く形成された様相を呈している。古墳時代前期の住居址で炉を伴うものは16軒、そのうち地床炉13軒、埋甕炉4軒で、縁石埋甕炉は2軒で確認された。位置的には柱穴間が11軒、中央にあるものが5軒である。埋甕はすべて柱穴間に位置している。主柱穴間を確認できたものはほとんどが4本柱で、隅丸長方形を呈する37号住のみが6本柱であった。特徴的な施設が認められたものでは、30号住にベッド状の段があるがその性格はわからない。床面・施設等から、改築の痕跡が認められるものには、13．17．40号住の3軒がある。焼失住居と断定できたものは40号住1軒であるが、12．44号住もそうであったかも知れない。本遺跡北、ほら貝山の北西端にある弘法山古墳を作った人達の生活基盤がまだつきとめられていないので、本遺跡の発掘成果が何かの手掛かりとなって、解明の糸口になればと思っている。今回の調査に引き続き、63年度に実施された第2次調査の整理が終了した時点で考えたい。

2．古墳　向畑古墳群はカニ堀沢に沿って延びる丘陵状に東西に連なり、西側は坪の内古墳群に続き、尾根の先端で南に回っていると見ていたが今回の2基の発見により東端も南に向かっていることが判った。

また第2次調査では新たに5基が発見され、このうち1基は丘陵から離れた南斜面に確認された。従来考えられていた丘陵上ばかりでなく台地の斜面にまで分布が及んでいたことになる。遺物より向畑6．7号古墳は5C後～6C初めのものと思われるが、造営者の生活基盤はまだつきとめられておらず、今後の課題である。

3．土壙　向畑遺跡を代表する遺構であり、縄文時代中期、古墳時代前期、中～近世に亘る。中近世の墓址が殆どであるが、配石、封土等は確認されなかった。前項で詳述した様にいくつかの集中域と、その中に墓道と思われる空地を検出出来たことは大きな成果であった。尚第2次調査でも今回の調査区域西側約10,000m²を調査し、やはり中近世の墓址を含む多数の土壙を検出している。

発掘調査にあたっては松本建設事務所、中山土地改良区、中山公民館等関係者の方々にご協力頂いた。また松本市文化財審議委員桐原健氏、東京大学史料編纂所千々和到氏、長野県史編纂委員井原今朝雄氏他多くの方々にご教示頂いた。記して謝意を表します。

付 編

松本平の縄文中期初頭土器

1982年、島田哲男氏は井戸尻編年に基き、松本市牛の川・雨堀遺跡の出土土器を分析、松本平Ⅰ期～XⅢ期の変遷を設定された。そのうち縄文中期初頭については、松本平Ⅰ期（九兵衛尾根Ⅰ式）、Ⅱ期（九兵衛尾根Ⅱ式）に分けられたが、当時良好な資料に恵まれなかったため、Ⅰ期は空白期、Ⅱ期は前半の様相が不明となっており、資料増加が待たれていた。

その後、1987年林山腰遺跡・向畑遺跡・前田木下遺跡、1988年向畑遺跡Ⅱと中期初頭の遺構・遺物の調査が相次ぎ、松本平Ⅰ・Ⅱ期の空白を埋め得る良好な資料が整ってきたと言える。また近年、当該期の土器研究も飛躍的に進歩し、従来混乱を招いていた既存型式が整理され、その系統、変遷が明らかになりつつある。

ここでは、近年最も整理がなされている三上徹也氏の研究成果に基き、雨堀・林山腰・向畑・前田木下遺跡の資料を主に用いて、松本平の中期初頭土器について考えたい。変遷は大きく4段階となり、第1段階は三上徹也氏のⅠ段階（今村啓爾氏の五領ヶ台Ⅰ式）、第2～4段階はⅡa～Ⅱc（五領ヶ台Ⅱ式、神谷原・大石式）に相当する。尚第1段階については、未だ資料が少なく、表採品も含んでいる点をおことわりしておく。

(1)第1段階（第89図1～9）

林山腰土壙51出土資料他が挙げられる。器形・文様帯のあり方により縄文系・沈線文系の2者に分類される。これは各段階とも同様で、後者は踊場系とされた一群である。

縄文系土器（5・3・8・9）

①器形　深鉢、鉢が存在する。深鉢は3に代表される2段ないし1段くびれるキャリパー形と、9の様な円筒形がある。前者の胴部は裾でやや張り出すものがある（5）。2段にくびれるキャリパー形は、文様帯のあり方により、下段のくびれが口頸部とも胴部とも受けとれるが、ここでは胴部としておく。尚キャリパー形には4単位の波状口縁をもつものも存在する。鉢は林山腰で1点知られる（8）。口縁部が直立ないしやや内湾し、小径の平底をなすものである。

②文様　口縁部の細線文、胴部の縦位帯縄文が特徴的である。文様帯は基本的に口縁部2段、胴部1段に分かれ、横位に展開される。口縁部上段は縦位に細線文が施され（3・8）、時に格子目となる事もある。8は口唇に爪形文を施している。9は横位に縄文を施文し、新しい様相と考えられる。下段は細線文と三角印刻文の組合せや、山形押引文、瓦状押引文ないし半截竹管先端による刺突文（3・9）が充塡される。下段～胴部にかけて、橋状把手が4単位付加されるのも特徴である（3）。胴部は地文として、両端ないしは片端に結節をもつ縄文を縦位に回転する。縄文帯の間隔は十分にとり、羽状縄文も存在する。施文は胴上部に行われ、口縁部と同様細線文や平行沈線・三角印刻文の組み合せによる区画文や、「Y」字状文（8）が多く見られる。5は底部付近まで、平行沈線による区画が見られ、細線文による格子目文上に三角刻文や逆「U」字形の構図が描かれる。

沈線文系土器（1・2・4・6・7）

①器形　全形の判明する資料はない。大きく外開する頸部に、「く」の字形に内屈する口縁部が取り付くものである。胴部の形態は6の様にストレートなものである。

②文様　いわゆる「集合沈線文」を特徴とする。文様帯は口縁部、頸部、胴部に3分される。各文様帯内へは、半截竹管状工具により縦位、斜位、格子目、羽状、山形、瓦状押引等の平行沈線が充塡される。口縁部文様帯は格子目（1）、斜位沈線（4）、瓦状押引文の他、羽状沈線も見られる（2）。口縁部には突起が1単位付加され（4）、口唇部に爪形文を施すもの（7）も多い。1の格子目文は斜位沈線上にソーメン状の粘土紐を貼付して描出し、古い手法と言える。推定4単位の橋状把手を有する点は、縄文系の要素と考えられる。頸部文様帯は斜位（2）ないし縦位（1・4・7）の平行沈線文が施される。縦位の場合密に行うものと間隔をおくもの（1・4・7）があり、後者は地文に縄文を施すものが多い（1・7）。胴部文様帯は3分帯の構成となるものが多く、上2分帯には格子目文、山形文が多く描かれる。最下段は縦位の構成となり、縦位沈線、山形文、羽状文等が施文されるようである。6は雑な施文だが、胴部全体が縦位の構成と考えた方が良さそうな土器である。

以上、本段階の土器は出土例が未だ少なく、松本平での様相は判然としない。本段階内での新旧は、ソーメン状粘土紐貼付の見られる1がより古い段階、口縁部に帯縄文の施される9を新しい段階に位置づけることができよう。沈線文系・縄文系の共伴関係は、林山腰遺跡土壙51で捉えられる他は、一括資料が見られない。

(2)第2段階（第89図10～19、第90図20～37）

林山腰遺跡土壙21等遺構内一括資料が多く出土している。

縄文系土器（10～12・18・20・22・24～35・37）

①器形　前段階同様キャリパー形と円筒形の深鉢が見られる。前者は2段にくびれるもの（18）が減り、後者はその量を増す。波状口縁(19・25)も存在する。底部の張り出すものは少ない様である。

②文様　口縁部の帯縄文が特徴的である。文様帯のあり方は前段階と同様である。

口縁部文様帯は上段に細線文に代わって横位縄文が施されるが、爪形文（10・37）、無文（18）もある。又、口唇部に刻目を入れるものも多い（11・12・18～20・31）上下段の区画は平行沈線、単沈線で行われ、後者には刻目が施される場合が多い。（11・12・18・21・28・32）がこれは三角印刻文の変化と考えられる。下段の文様帯は基本的に無文となる。橋状把手や貼付突起がしばしば見られる（10・11・16・20・25・26・27・28・35・37）。一方施文されるものも少数あり（22・35）、胴部と同様の文様が展開されるようである。35は地文に細線文を用いている。胴部との境には隆帯が横走するものが多く見られ（10・12・20・22・25・27・28・31・33・35）、突起を4単位貼付する（18・19・21・22）。胴部文様帯は「Y」字状文及びその変化と考えられる弧線文（10・14・18・22・33）の他、横帯区画内に玉抱き三叉文（27・28）、鍵形・菱形・「B」字文等の構図を描くもの（12・35・

37）も存在する。無文となるものも多い（20・24・31・32）。地文の縄文は隙間なく施されるようになる。尚33は4単位の懸垂隆帯を有しており、新しい要素として捉えられる。

以上の他、全く施文されない一群も少数存在する（29・30・34）。

沈線文系土器（13～17・19・36）

良好な資料がなく、図示したものの多くは縄文系・沈線文系の両要素をもつ土器である。

①器形　基本的には前段階と同様で、「く」の字形に屈折する口頸部及びストレートな胴部形態を呈する(14)。13は屈折部を省略した形態と言えるが、他はキャリパー形を呈し縄文系の器形と言えよう。

②文様　文様帯のあり方は第1段階と比べ大きな変化はない。口縁部文様帯は格子目文・斜線文・瓦状押引文ないし結節平行沈線文（14）が見られる。口唇部の爪形文もある（23・36）。頸部は縦位ないし斜位の平行沈線が施される（14・15・16・23・36）。頸～胴部の区画は隆帯で行っている（14・16・36）。胴部文様帯は下段の縦位施文が拡大され（13・36）、36では懸垂隆帯が付される。一方上位1段のみ施文され下段が省略されるものも多い（16・19・21）。区画内は格子目文（13）・縦位平行沈線文（16・19・21・36）が充填される。

本段階内での新旧は、10の三角印刻文、13の胴部文様帯区画が3段である事等、向畑遺跡土壙10出土資料に古い様相が窺え、逆に林山腰遺跡出土資料、特に土壙21の一括資料中、33・36に胴部縦位懸垂隆帯が存在、新しい様相を示すものと捉えられよう。

(3)第3段階（第91図38～48、第92図49～54）

雨堀遺跡II次土器一括廃棄資料が挙げられる。沈線文系土器及び浅鉢は続く第4段階との細分が出来ない。従って本段階で述べることとする。

縄文系土器（38～43・49～53）

①器形　深鉢はキャリパー形と円筒形が認められるが、両者に胴部の膨らむものが存在する(39・41～43)。浅鉢は直線的に強く開くもので、内面の肥厚部に施文される。

②文様　口縁部の単沈線による弧線文が特徴である。口縁部文様帯は上段の幅が狭くなり、横位縄文は下段へも施文される。42は縦位に撚糸文を施している。下段の弧線文は2段階の胴部弧線文の転移と考えられ単沈線3条を一束とし、上向きに施文される。弧線の谷には玉抱き三叉文が例外なく施される。上下段を区画する横位沈線は、刺突を施すものが減り、弧線文との間に交互に行う連続「コ」の字文となる（40・41・43）。38は下向きの弧線文が描かれるもので、前段階27・28からの変化が考えられよう。円筒形土器は口縁部文様帯が省略傾向にある（39・41）。胴部の文様帯は隆帯ないし沈線の4単位の懸垂文が一般化する（38～40）。懸垂隆帯の上端には、「Y」字状文の変化したと考えられる「V」字状の貼付（40）ないし「Y」字状に施されるものが存在する。区画内は頸部の横走隆帯に沿って2～3条の沈線文が施される程度のものと、41の様に弧線文が施文されるものがある。

この他、無文の土器群（49～51）が前段階同様存在する。浅鉢は口縁部内面肥厚部分に3条前後の幅広の結節沈線文が施文され、連続「コ」の字文や三叉文が時に付加される。波状口縁も存在する。

沈線文系土器（44～48）

資料が少なく、第4段階との細分もできない。前田木下遺跡2住出土資料を呈示する。

①器形　深鉢は前段階の形態を基本的に継承するが、口縁部の内折は幅が狭くなり、頸部も同様に短くなる。胴部はストレートなものと、上位の張るもの（45・48）が存在する。尚47は口頸部が省略され、本段階以後多く見られるものである。

②文様　文様帯のあり方は口縁部・頸部・胴部の3段に分別される。口縁部は上下に爪形文を施す太い隆帯を有し、狭い区画内に連続「コ」の字文を行う。施文されないもの（48）や、内折部分が省略される形態も存在する。又、隆帯による4単位の突起が付されるのも特徴的である。

頸部は縦位の平行沈線文、格子目文（48）が施文される。44は逆「V」字形の区画内に格子目文を行っている。胴部文様帯は縄文系同様、4単位の懸垂文が顕著となる(46～48)。これらは隆帯で行うもの（47・48）と数条の平行沈線によるものがあり、後者には連続「コ」の字文が伴う（46)。47は隆帯上端が「Y」字状になり、地文、突起とともに縄文系との関連を思わせる。区画内には横位の文様帯が描かれるが、これは前段階の13・16等が懸垂文により分断された形となる。1～2段の区画を行うものと多段に行うものがあるが、上段には斜線文（47）や格子目文（45)、横位平行沈線文（45）が多い様である。45・48の様に逆「U」字形ないし「コ」の字形の区画を行うものも顕著である。又横位平行沈線文には連続「コ」の字文が付加されるものも多く存在している。

第3段階の資料は、縄文系・沈線文系の二者がまとまって出土した例がない。雨堀遺跡IIは前者が主体で、後者は少量伴っている。前田木下遺跡ではその逆である。

(4)第4段階（第91図44～48・第92図49～65)

雨堀遺跡I次B1住、同II次一括土器廃棄資料を呈示し得る。

縄文系土器（55～65)

①器形　深鉢・浅鉢がある。深鉢はキャリパー形の口縁部が狭くなり、円筒形は口縁部が外反する。56・57は特に顕著である。両者に波状口縁が見られる（56・57・64)。浅鉢は前段階同様で、54は外傾する口唇に角押文が施文されている。

②文様　キャリパー形土器は口縁部の弧線文が隆帯により描出されるが、良好な資料を呈示し得ない。一方新しい手法として、口縁部に「T」字状文や角押文を用いるものが存在する（58・60・64・65)。これらの頸部には狭い楕円区画文が見られ（55・58・60・64)、懸垂隆帯がクランク状になるものが現れる（58)。円筒形も同様で、38の弧線文の変化と考えられる63は隆帯化・重三角区画文化している。59・62は楕円区画文・「Y」字状の懸垂隆帯が見られる。口縁部文様帯は縄文が顕著（56・59・63）だが、62は角押文による斜位沈線、57は部分的に押引を施す単沈線により玉抱き三叉文を描く。これらの土器には金雲母を多く含むものが見られる点も特徴的であろう。

沈線文系土器　前段階で呈示した。雨堀Ⅰ次Ｂ１住では口縁部の内折が省略されたものが破片で出土している。

本段階も、沈線文系、縄文系の良好な伴出資料を欠く。しかし縄文系が主体的ではあるが、確実に沈線文系も伴っている。資料の一括性としては雨堀Ⅰ次Ｂ１住が良好だが弧線文ないし重三角区画文の系列が欠除している。

以上各段階を概観してきたが、最後にまとめとして松本平の地域性について問題点を列記する。

①第１段階　資料不足ではあるが、塩尻市竜神平、女夫山ノ神遺跡資料も含め検討すると、沈線文系の頚部縦位平行沈線文が間隔をおき、縄文地文となるものが顕著である点（１・４・７）。

②第２段階　ａ沈線文系が少なく、多くが縄文系との折衷で存在すること。ｂ「Ｂ」字文等が縄文系に顕著である事。

③第３・４段階　第２段階に増して沈線文系が極めて少ない。但し前田木下遺跡は例外的だが、一部の調査のため全容は不明である。

④各段階を通じ、在地の系統の中に撚糸文や反撚、付加条等の原体を地文にもつものが他地域より多い事。

以上の諸点のうち、①・②ｂ・④については、当地域が地理的に北陸に近く、北陸地方の朝日下層式・新保式の影響が強いという点で理解されるのではないだろうか。ちなみに①・②ｂについては、朝日下層式や新保式に多く見られるようである。

②ａ・③については、八ケ岳山麓の大石遺跡等とは全く逆であるが、同じ八ケ岳山麓および諏訪湖盆地の頭殿沢遺跡や船霊社遺跡は大石遺跡程顕著ではない。遺跡毎の差異が激しいが、続く平出３類Ａの分布域の北限が松本平である点を考えれば沈線文系の減少も理解されるのではないだろうか。今少し各遺跡での実態を見る必要があろう。これらの点を除けば、松本平での中期初頭土器の変遷過程は、諏訪湖盆地や八ケ岳山麓と基本的には同じ流れをたどると言えそうである。

まとめとしては簡略に過ぎるが、紙幅の都合もありしめくくりとしたい。　（竹原　学）

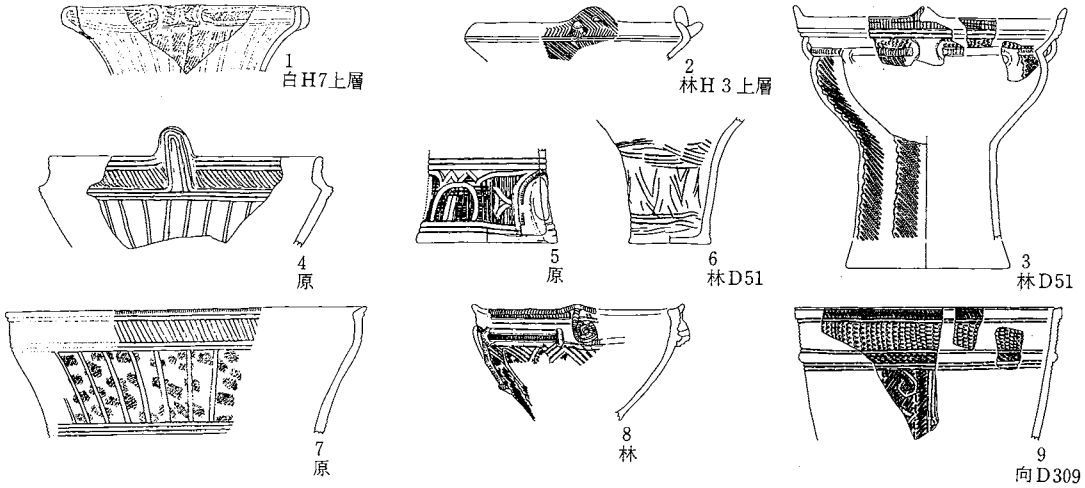
主要参考文献

今村啓爾他1972　『宮の原貝塚』　武蔵野美術大学考古学研究会
島田哲男　1982　「縄文時代中期における松本平」『松本市内田雨堀遺跡―第２次―』　松本市教育委員会
三上徹也　1988　「梨久保式土器　再考」『長野県埋蔵文化財センター紀要　1』　長野県埋蔵文化財センター
南　久和　1985　『北陸の縄文時代中期の編年―南久和著作集第１集』　転形書房
山口　明　1980　「縄文時代中期初頭土器群における型式の実態」『縄文土器の交流とその背景』　静岡県考古学会シンポジューム４
山本典幸　1988　「五領ヶ台式土器様式」『縄文土器大観　第３巻　中期Ⅱ』　小学館
真脇遺跡発掘調査団　1986　『真脇遺跡』
長野県教育委員会　1976　「大石遺跡」『長野県中央道埋文報告　昭和50年度』
同　1980　「船霊社遺跡」『　同上　昭和52・53年度』
同　1981　「頭殿沢遺跡」『　同上　昭和51・53年度』
同　他　1988　「竜神平遺跡」『中央道長野線埋文調査報告書　２』
松本深志高校地歴部　1978　「女夫山ノ神遺跡発掘調査報告」『あゼ道　27』　他

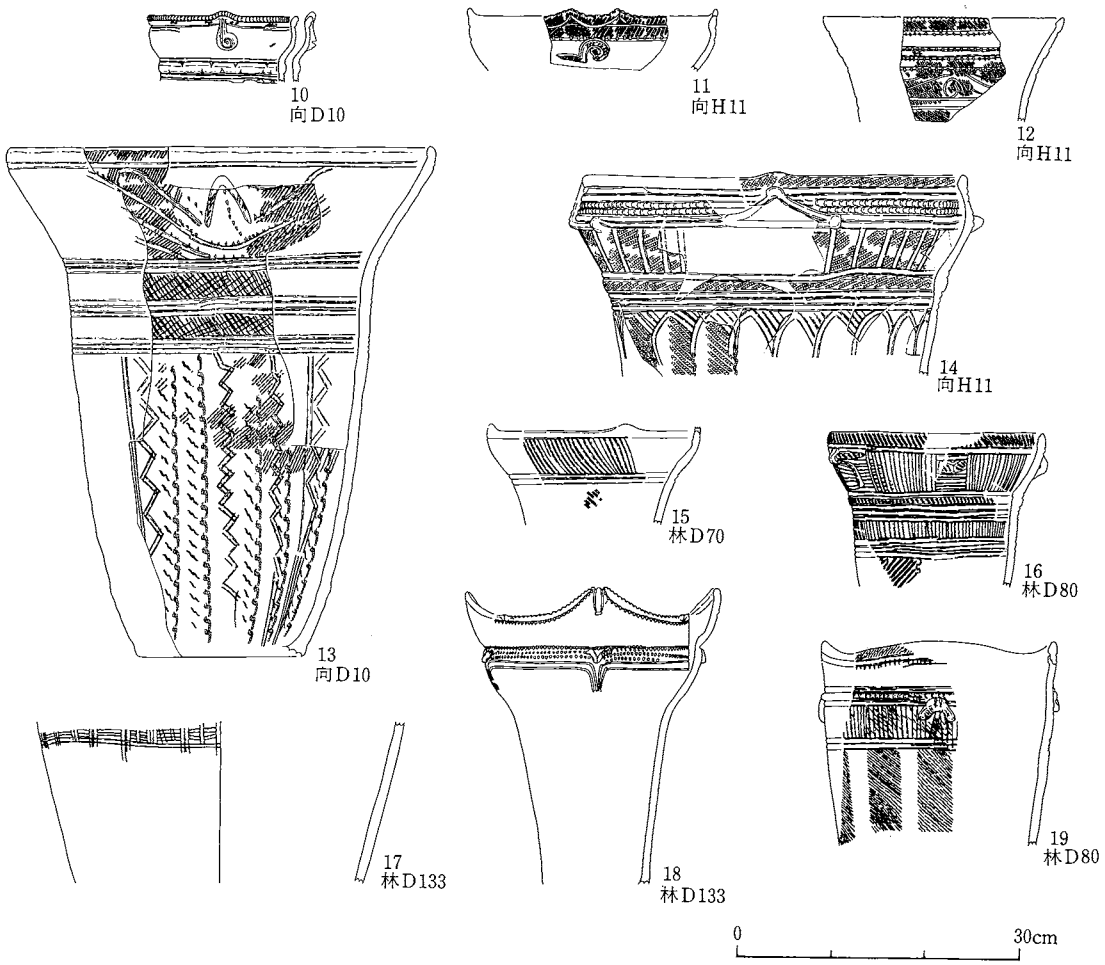
資料出典

松本市文化財調査報告No.20（雨堀遺跡Ⅰ次）1981・23（雨堀遺跡Ⅱ次）1982・27（原度前遺跡）1983・34（白神場遺跡）1985・61（林山櫻遺跡）1988・62（前田木下遺跡Ⅱ）1988

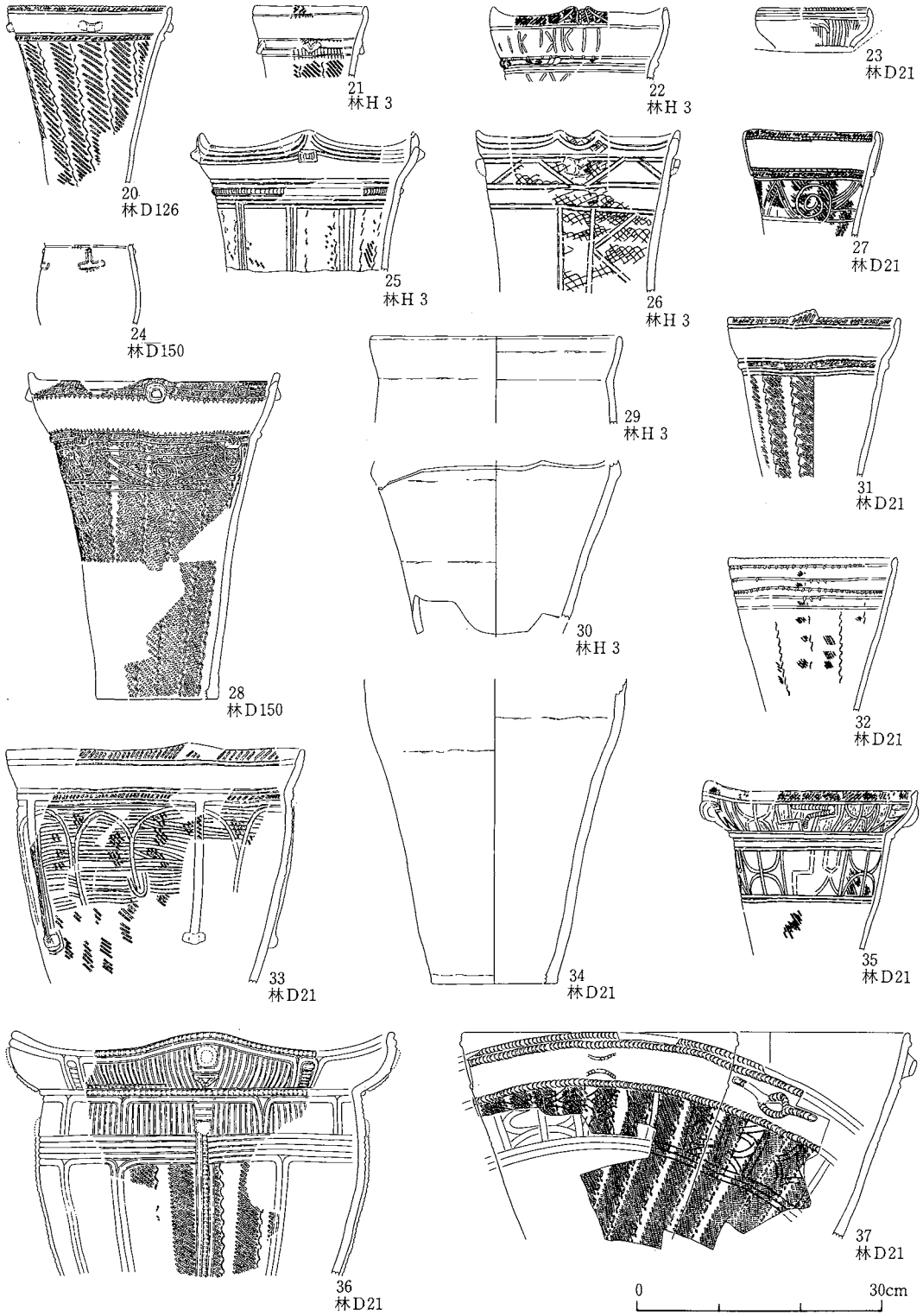
第１段階



第２段階

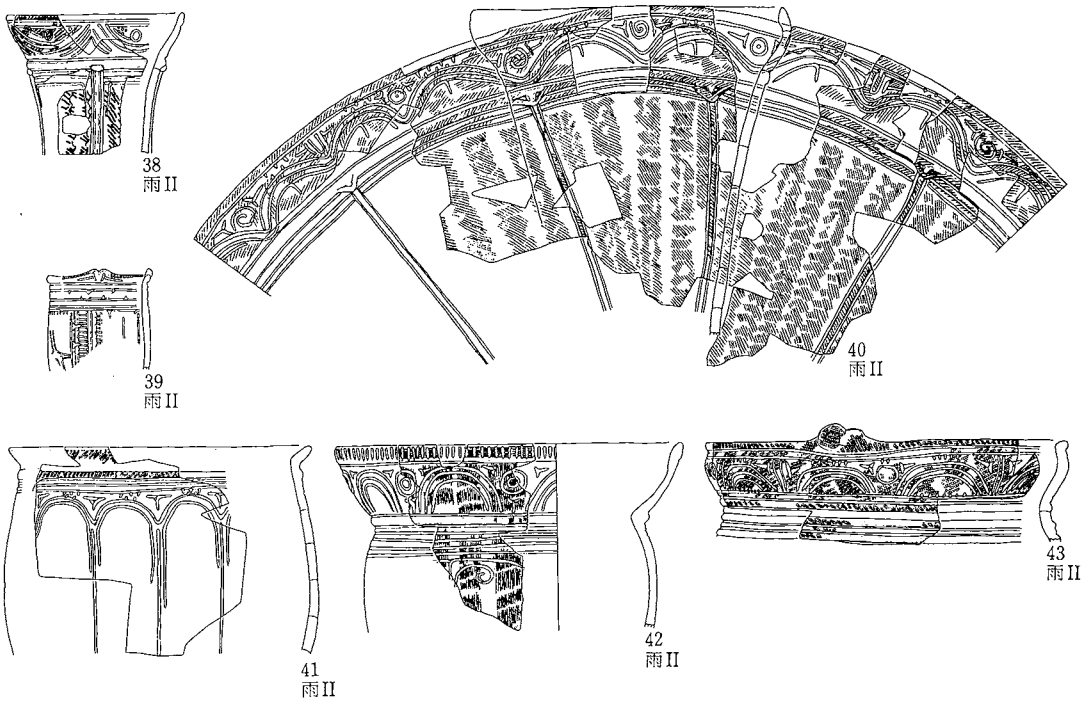


第89図　縄文時代中期初頭土器集成(1)

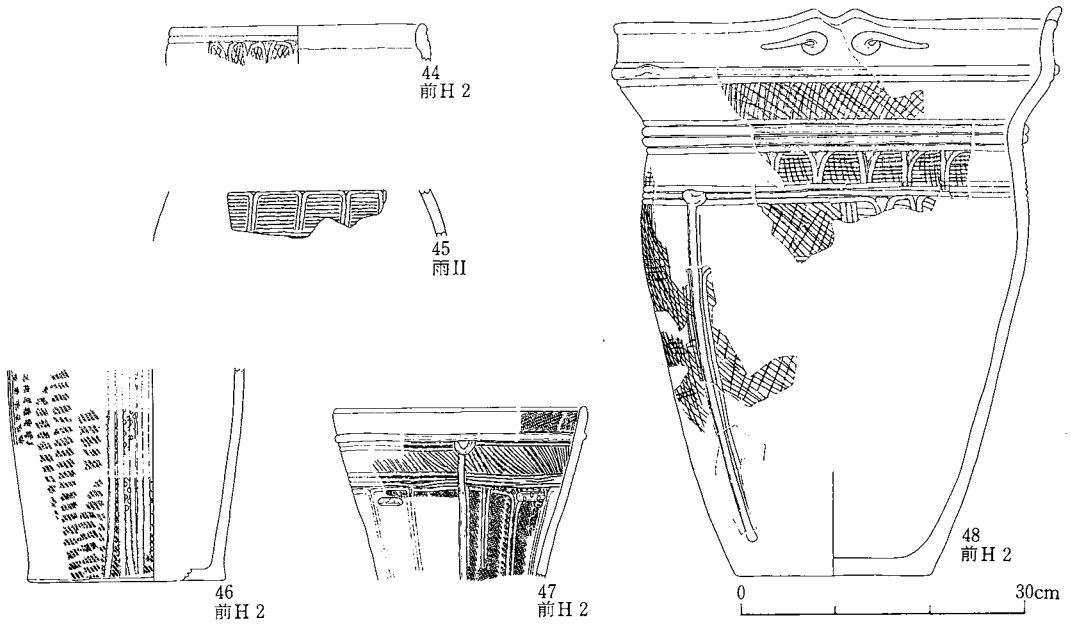


第90図　縄文時代中期初頭土器集成(2)

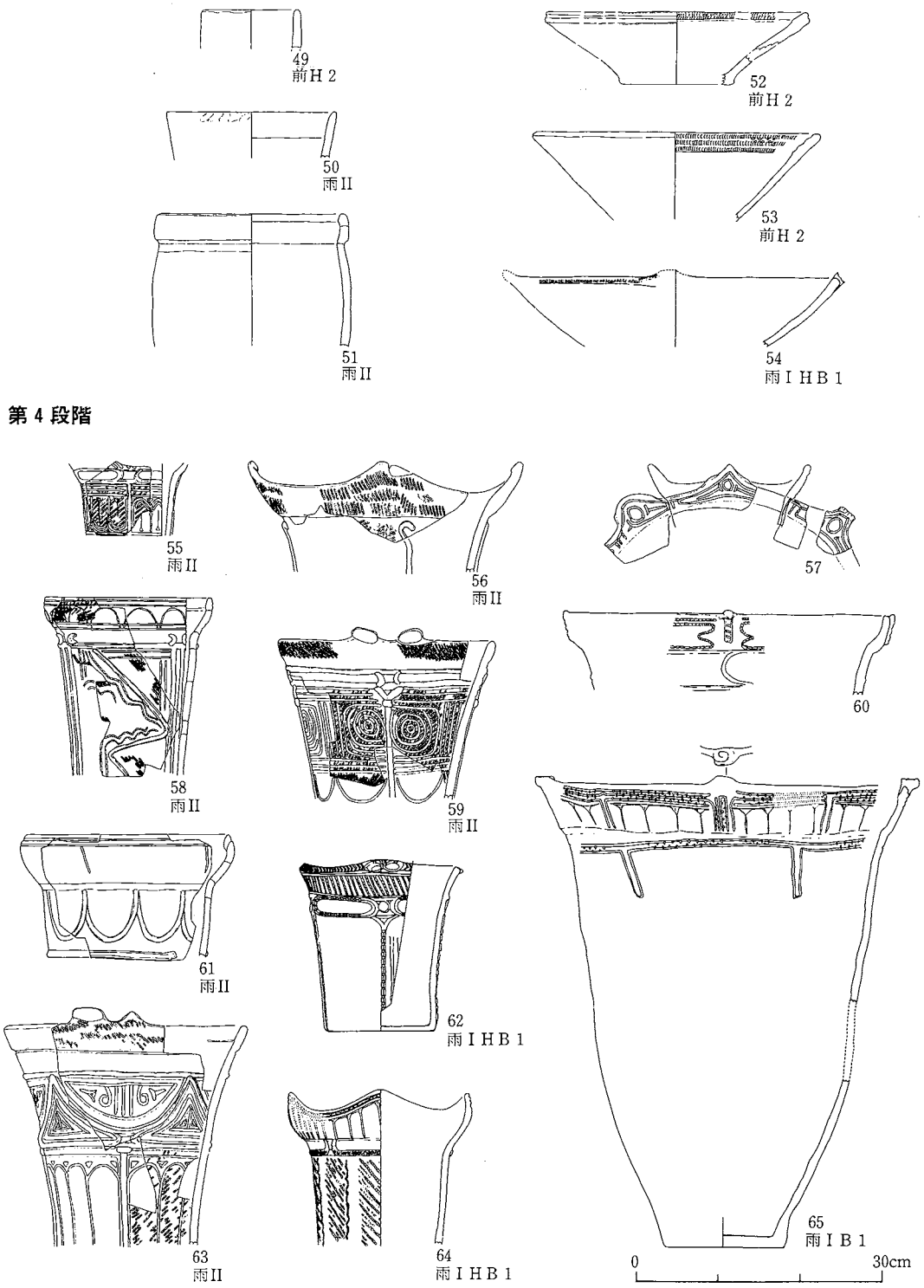
第３段階



第３・４段階



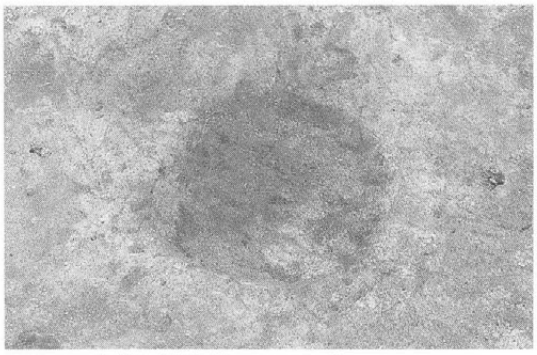
第91図　縄文時代中期初頭土器集成(3)



第92図　縄文時代中期初頭土器集成(4)

図　　版

第１号住居址　地床炉をもつ

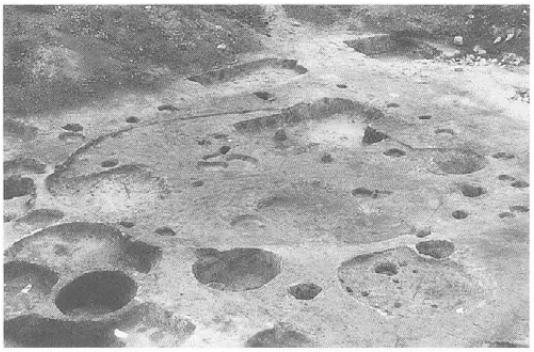


同地床炉（100×60㎝）

第2･5号住居址　手前が２号住居址

第３号住居址　地床炉をもつ

第４号住居址　床面に凹凸がある



第11号住居址　縄文時代中期

第13号住居址　貼り床を施している

第15号住居址

第１図版

第16号住居址

第17号住居址

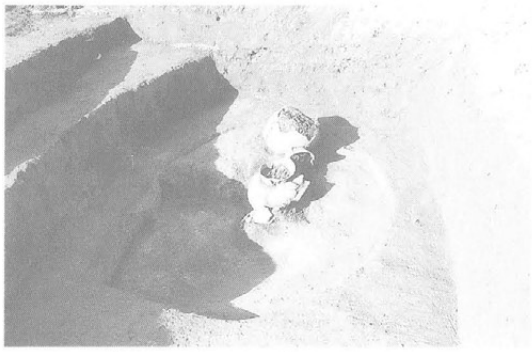
第18号住居址　間仕切りの溝がある

第19号住居址　不整形を呈している

第20号住居址

第21号住居址

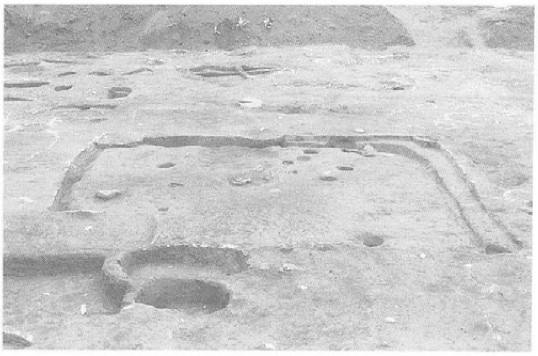
第22・29号住居址



第29号住居址　遺物出土状況

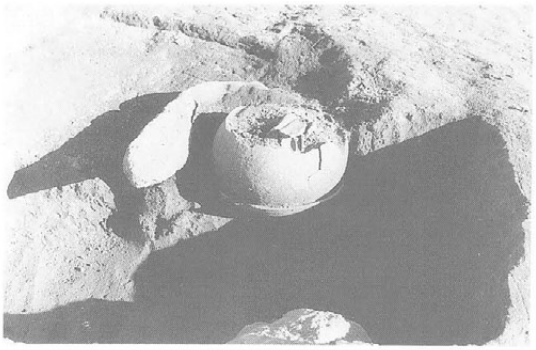
第 2 図版

第23号住居址　調査区域外へのびる



第24号住居址　4本の主柱穴がある

第24号住居址　縁石埋甕炉

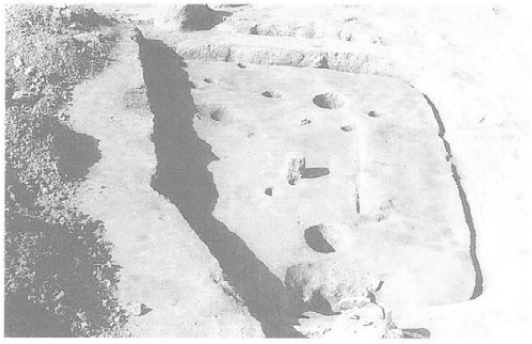


同 埋設状態　壺と高坏の坏部

第26号住居址　4本の主柱穴がある

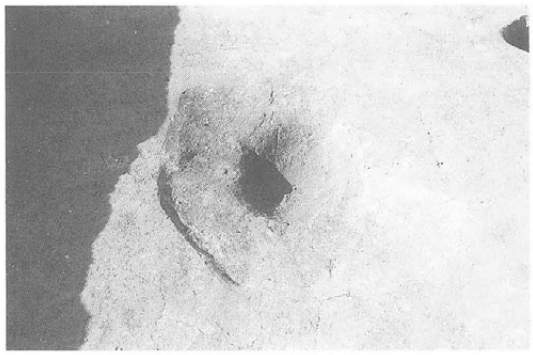
第27号住居址　周溝が巡る

第28号住居址　周溝が見える



第30号住居址　ベッド状の高まりがある

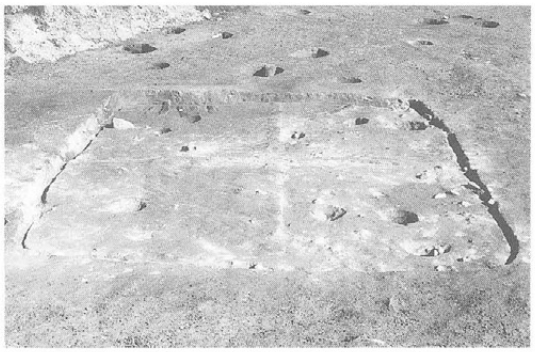
第 3 図版



第30号住居址　地床炉

第42号住居址　放射状に拡がる炭化材

第40・42号住居址　古墳周溝に切られる

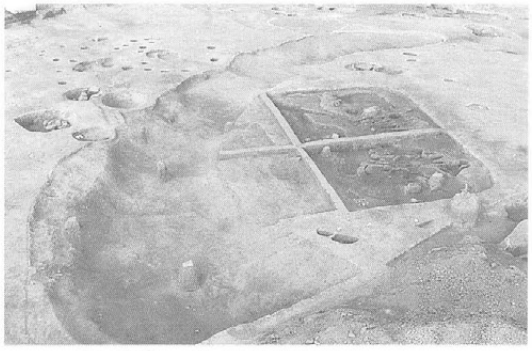


第44号住居址　炭化材が見られた

第45号住居址　2段堀りの貯蔵穴がある

同 埋甕炉　周囲が窪んでいる

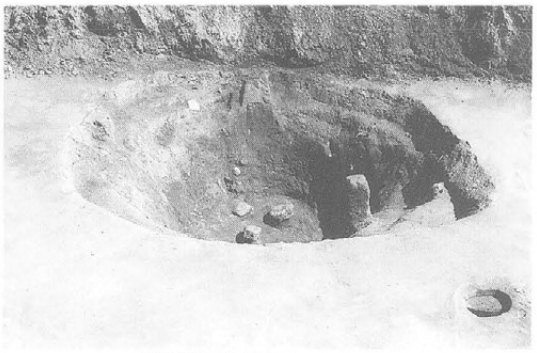
向畑７号古墳　墳丘は削平により消失



同 周溝　40・42号住を切る

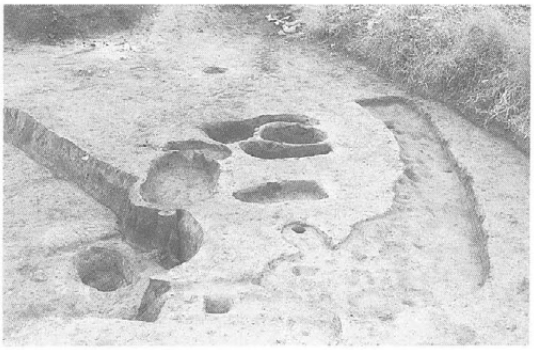
第４図版

竪穴状遺構 2

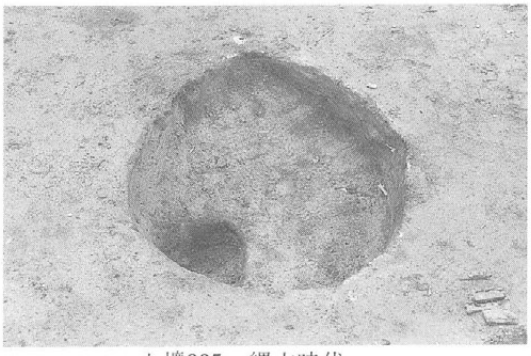


竪穴状遺構 3

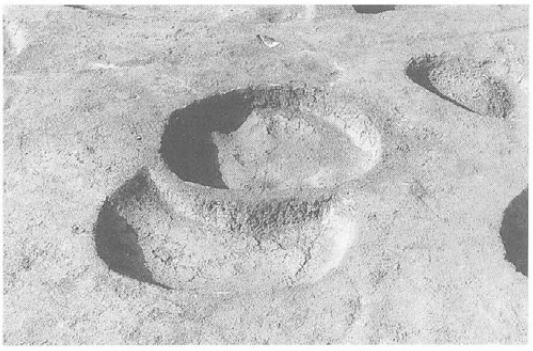
竪穴状遺構 4



方形周溝墓 1

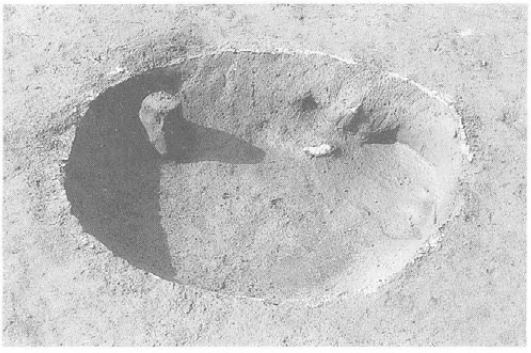


土壙335　縄文時代



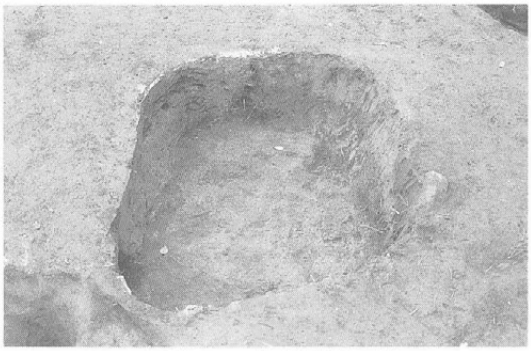
土壙794・795　縄文時代

土壙727　縄文時代

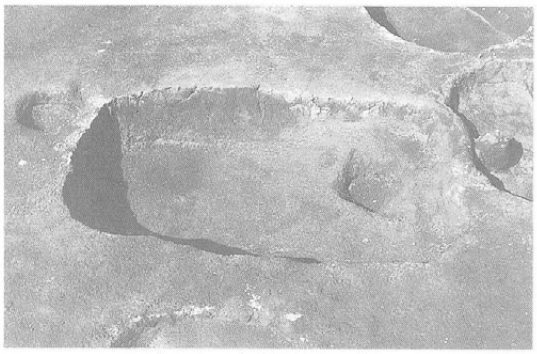


土壙305　縄文時代

第 5 図版



土壙642　中世以降の墓



土壙179　中世以降の墓

土壙301　中世以降の墓

土壙734　中世以降の墓

土壙278　中世以降の墓

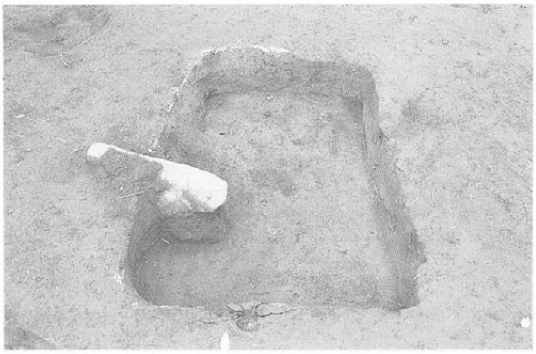
土壙782　中世以降の墓

土壙634　中世以降の墓

土壙635　中世以降の墓

第 6 図版

土壙177　中世以降の墓



土壙680　中世以降の墓

土壙672　中世以降の墓

土壙738　中世以降の墓

13区　墓道(土壙間の空地)

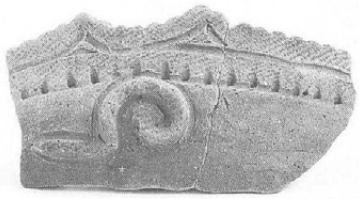
10区　土壙群

10区　土壙群

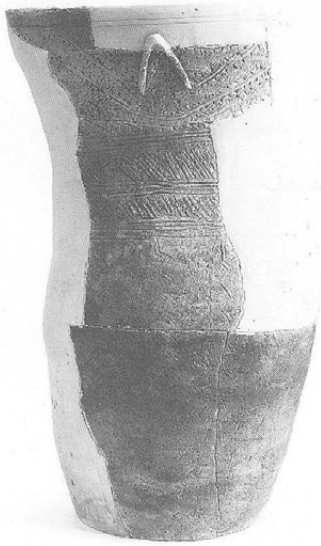
10区　土壙群

第7図版

3



4

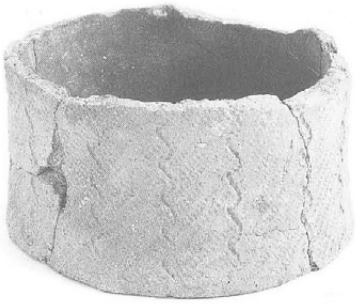


5

8

6

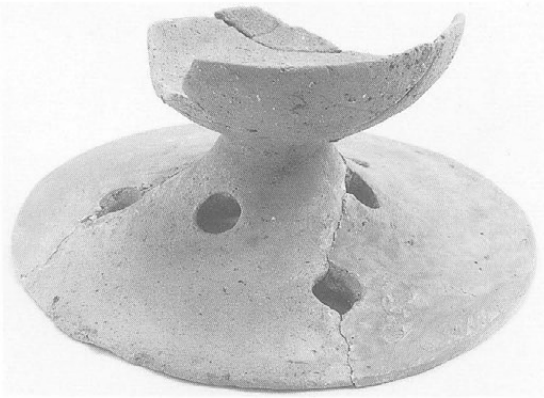
14



13

第 8 図版

2



7

3

4

11

13

第 9 図版

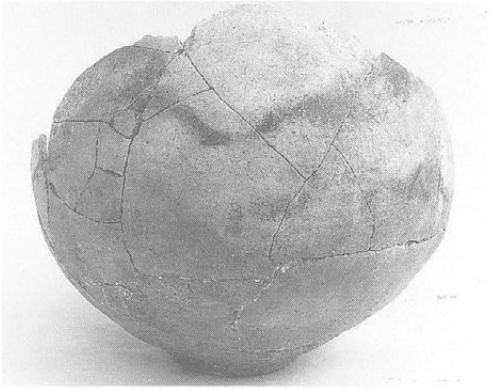
14

15

25

30

31

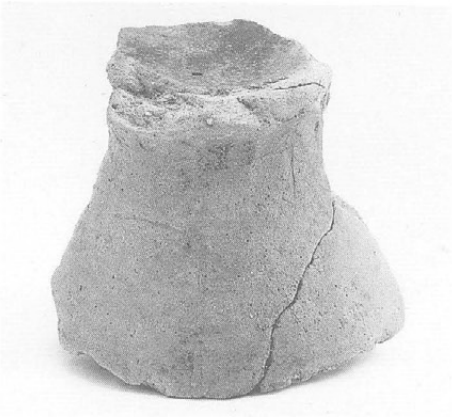


7

第10図版

38

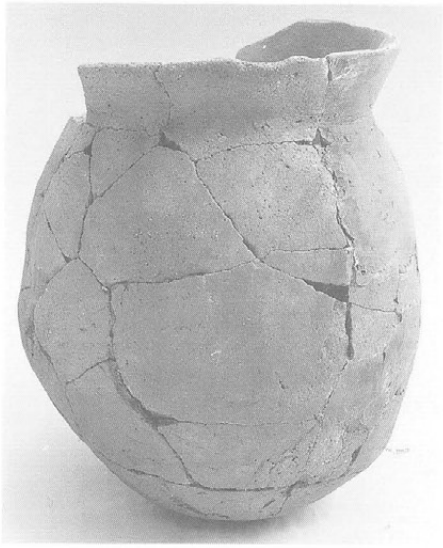
55



78

75

32



48

第11図版

76

90

83

88

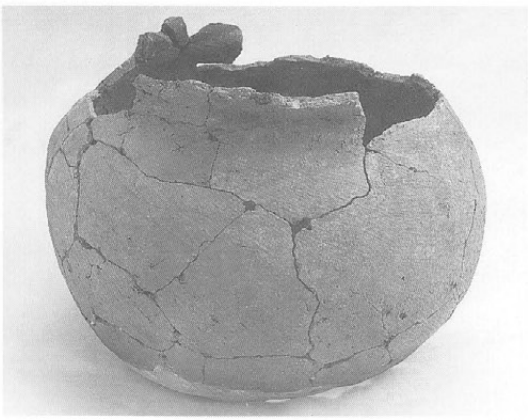
118

132

第12図版

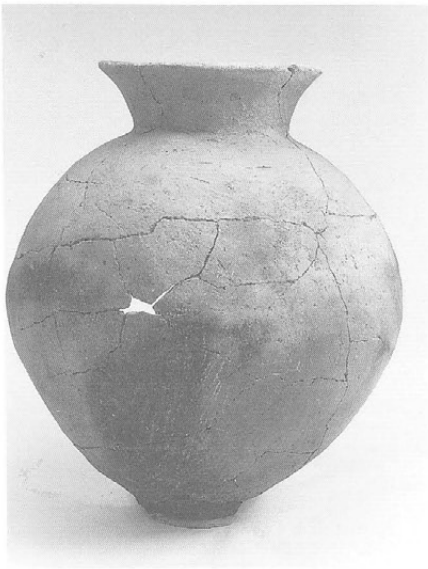
89

91

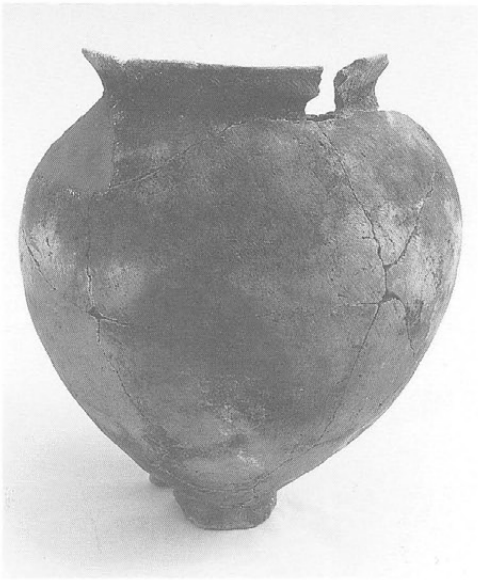


113

103

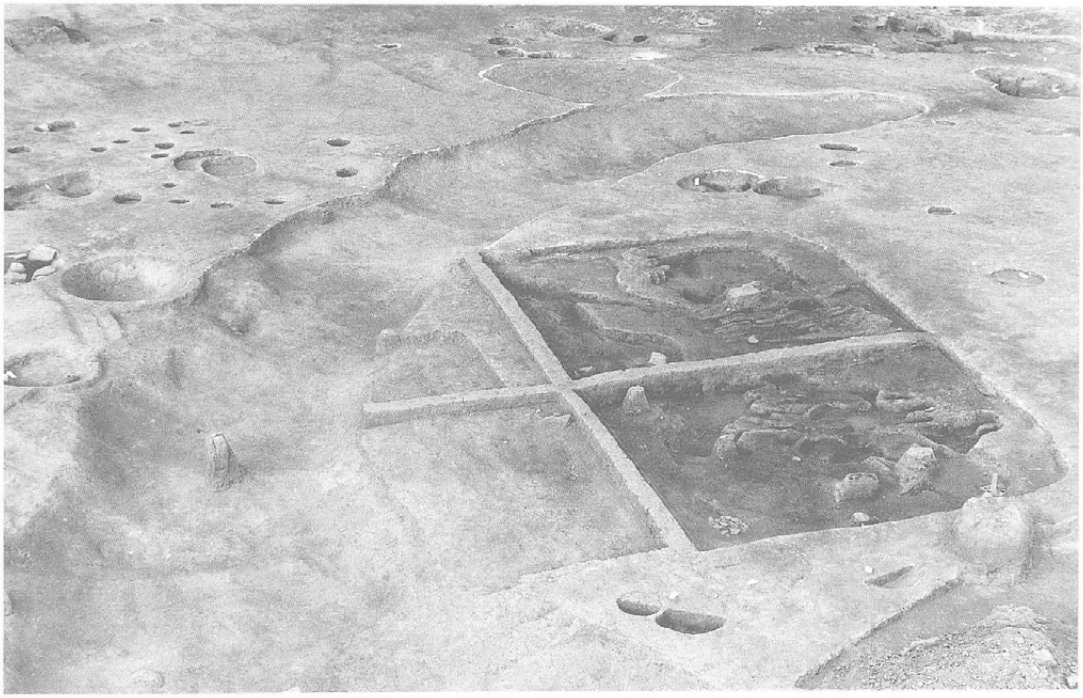


119



87

第13図版



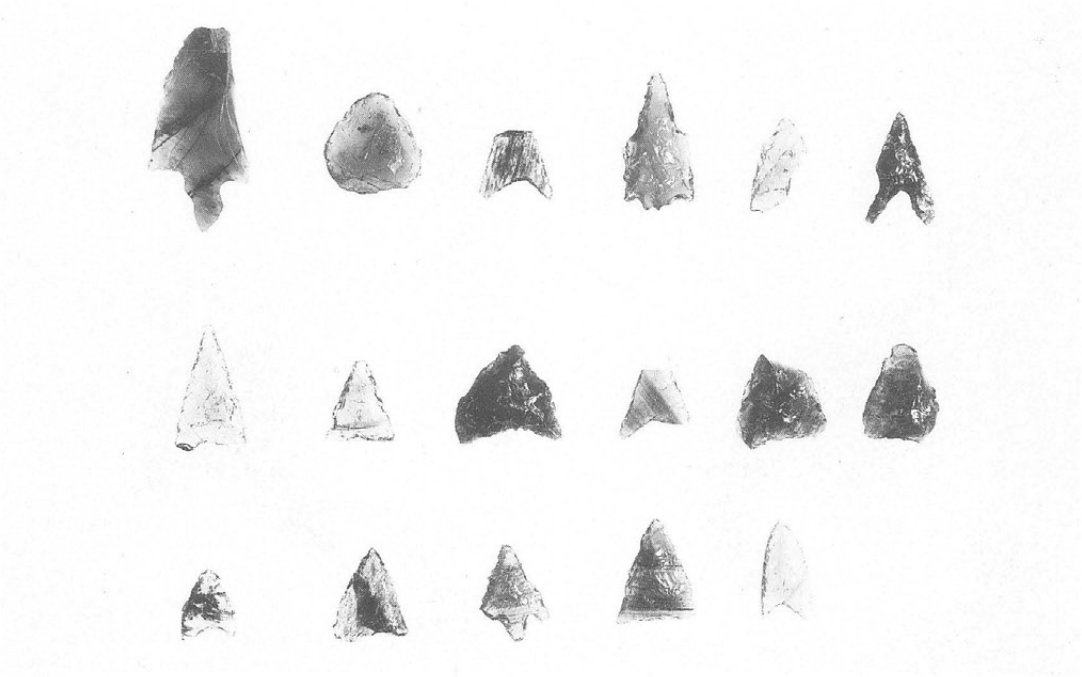
7号古墳

7号古墳周溝供献土器

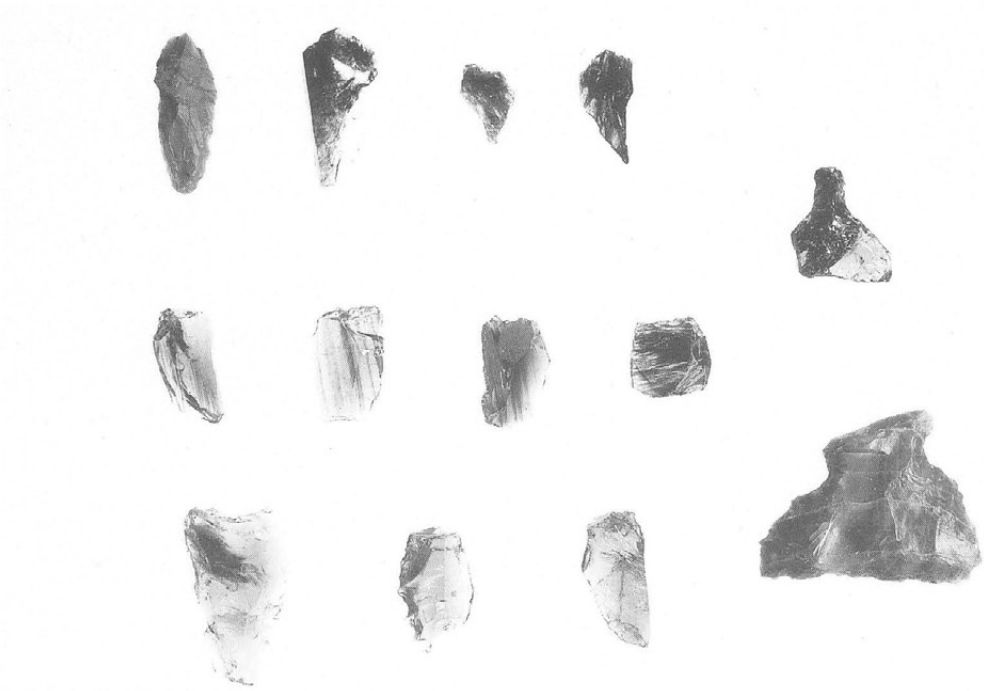
第14図版

7号古墳周溝供献土器

第15図版

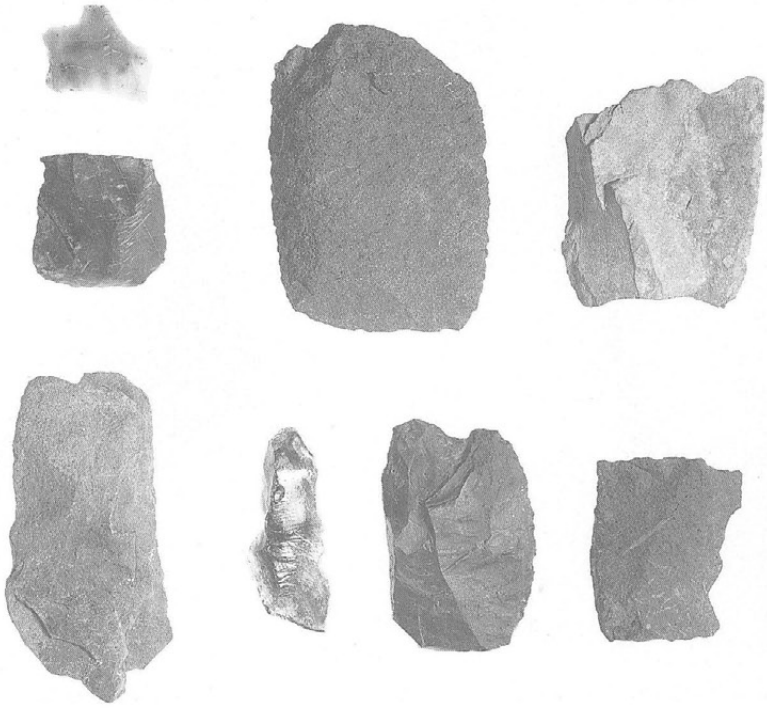


石鏃(1～17)

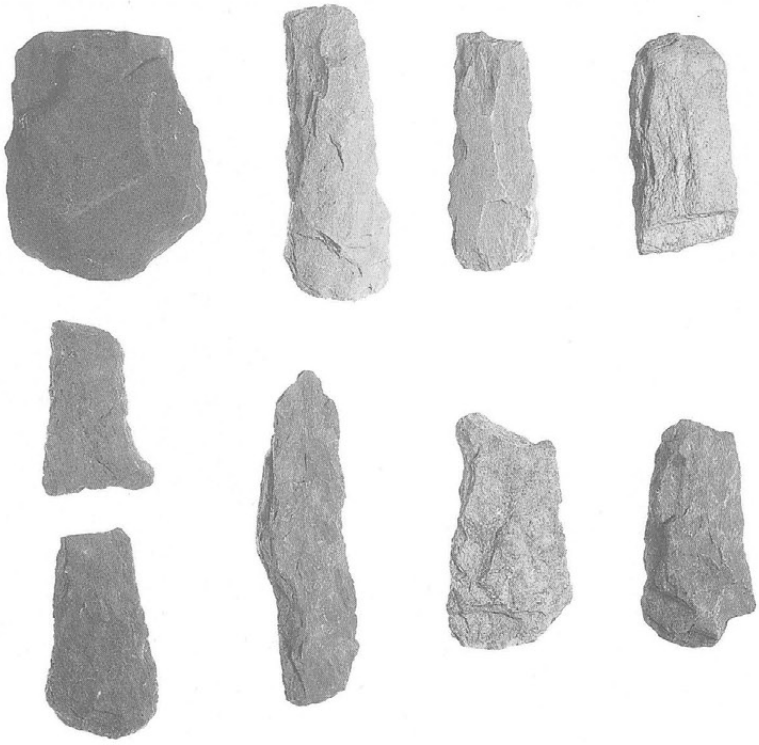


上段 石錐(18～21)・右側 石匙(22・23)
中・下段 ピエス・エスキーユ(24～30)

第16図版

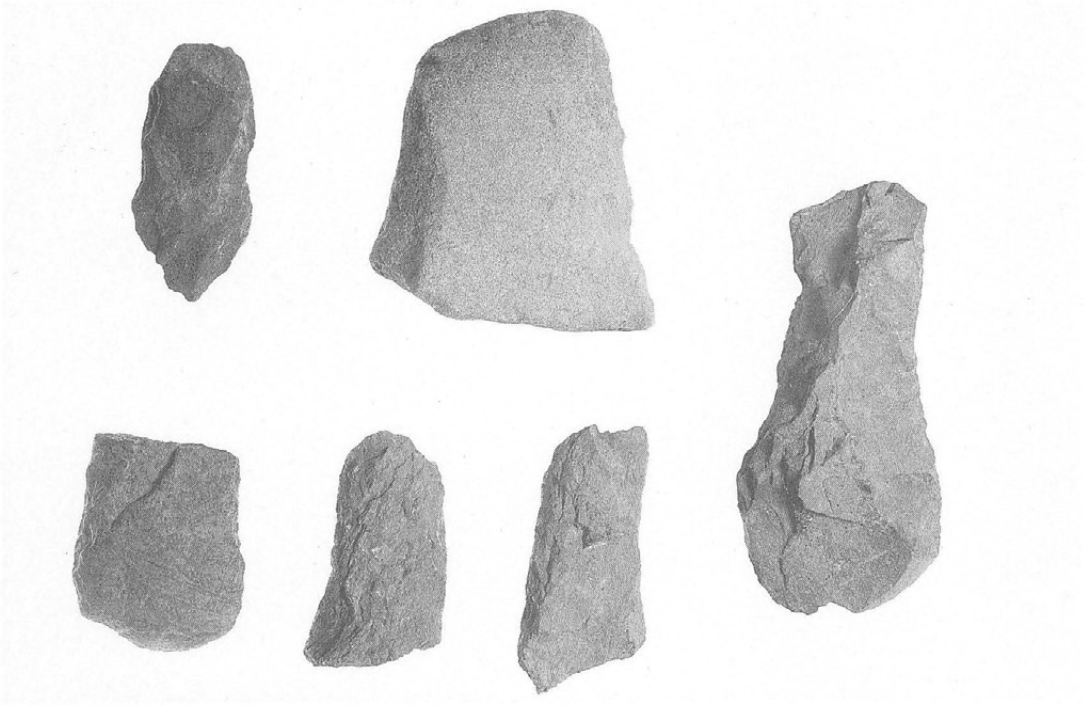


スクレイパー(31～38)

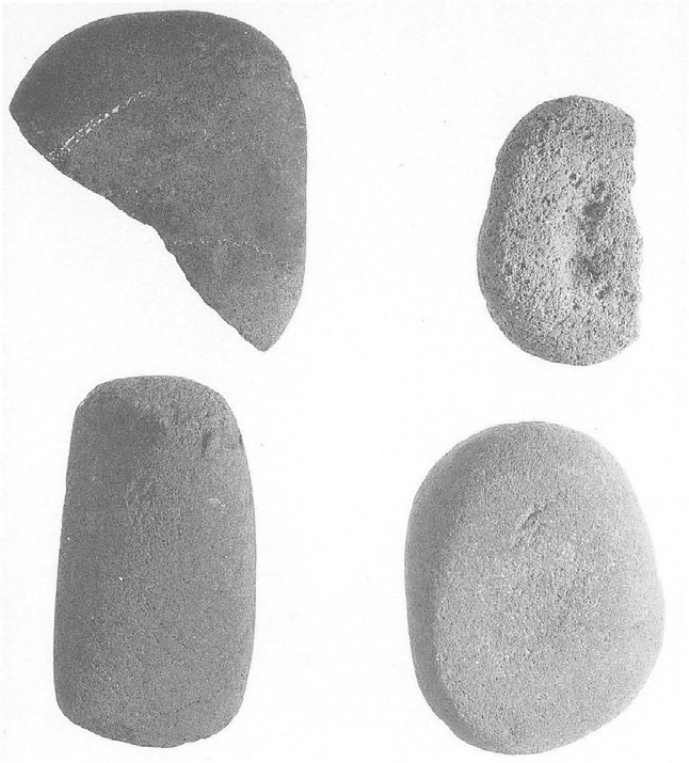


打製石斧(39～47)

第17図版

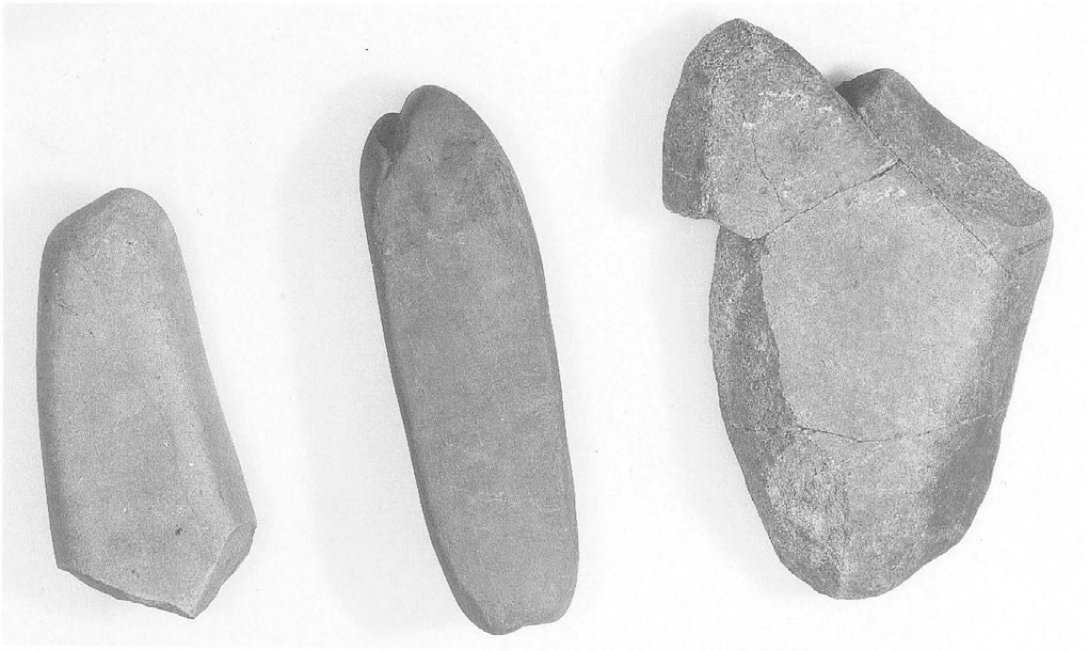


打製石斧(48～53)

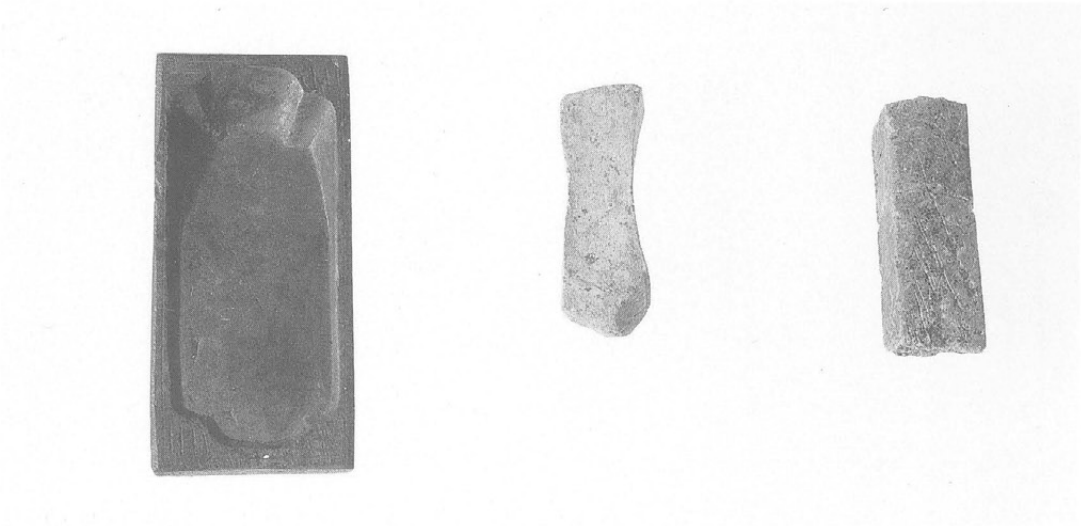


敲・磨 凹石 (上左：57，上右：62，下左(特殊磨石)：61，下右：60)

第18図版

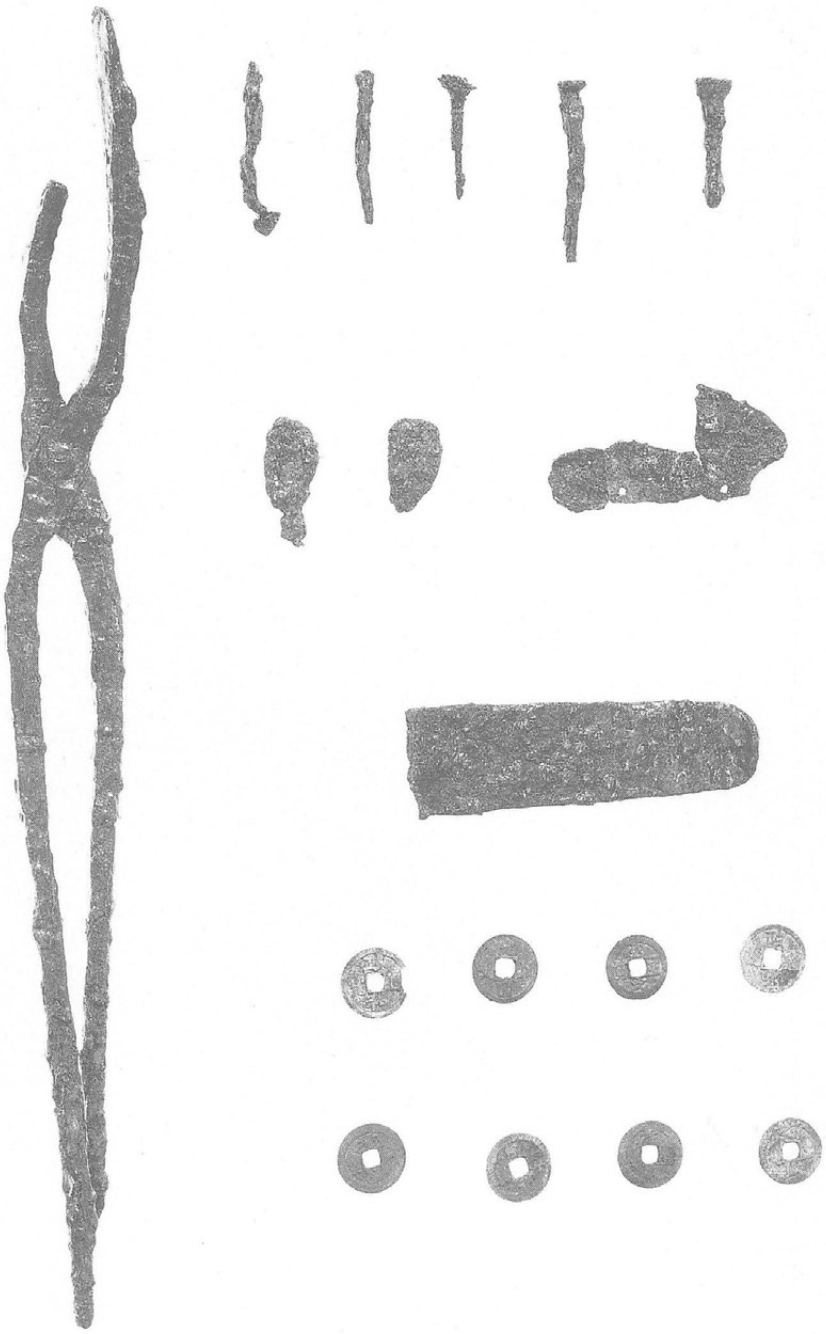


置き砥石(67・66・65)



硯(69) ・砥石(64・68)

第19図版



左端：鉄鉗
上段：釘及釘状鉄器
中段：鉄鏃，鉄鏃？，不明
下段：鋌鉄状鉄製品
最下段：銭貨

第20図版

松本市文化財調査報告No.81

松本市向畑遺跡 II

平成元年 3 月20日　印刷
平成元年 3 月30日　発行

発行　松 本 市 教 育 委 員 会
印刷　精 美 堂 印 刷 株 式 会 社

付図　向畑遺跡全体図（$\frac{1}{300}$）